昭和六年十一月十五日印刷
昭和六年十一月二十日發行

國譯一切經密教部三

編輯兼發行者　岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者　渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所　日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所　大東出版社
東京市芝區芝公園地七號地十番
振替東京一九四七一番
電話芝（二一）三〇一四一〇六番番

製本所　兩角製本所

索　　引

（頁數は通頁を表す）

—密教部三索引終—

他二合娑野　沒駄薩底也二合嚩達摩薩底也二合嚩　僧伽　薩底也二合嚩娑嚩二合迦嚩　吽吽　吠那尾泥　娑嚩二合賀引

難堪忍大護をもつて、　左旋して大界を解け　還た三昧耶を呈して　頂上に之を散開せよ　心に聖天を送つて　五輪を地に投じて禮し　當に聖衆に啓白すべし　現在の諸の如來　救世の諸菩薩　大乘教を斷せずして、　殊勝の位に到れる者　唯願くば聖天衆決定して我を證知し玉へ　各〻當に所安に隨ひ　後に復哀赴を垂れ玉ふべし。

眞言に曰く。

[一五二]唵　訖哩二合妬嚩二合薩嚩薩怛嚩二合囉他二合悉地捺多引野他引努誐引蘗車持嘌二合沒駄尾灑鹽布曩囉誐摩曩野覩唵鉢娜麼二合薩怛嚩二合穆無等本誓の所の爲に、之を留止せず。請し奉る所の諸尊、各〻所住に還り玉へ。

前の如く三密にて護し、　懺悔隨喜等をなし、　菩提心を思惟して、　而も薩埵の身に住せよ聖力に加持せられ　行と願と相應するが故に　明を持して本教を傳へ　三昧耶を越すること無く　行は學處に順せば　[一五三]悉地は當に現前すべし。　我れ大日の教に依て　瑜祇行を開示し　殊勝の福を修證して　普く諸の有情を利せん。

大毘盧遮那成佛神變加持經蓮華胎藏菩提幢標幟普通眞言藏成就瑜伽　（畢）

【一五二】Oṁ kṛto vaḥ sarva-sattvāya siddhânta yathā-dugā gacchadhvam buddha-viṣayam puna rāga mana-yatu oṁ padma-sattva muḥ.

【一五三】悉地(siddhi)。成就。

て自ら誤る勿れ。若し法則に順ぜざれば、則ち徒に功夫を費すも、虚しく光景を棄てて成する所無けん。徒に罪咎を招きて、益する所なきなり。

疑はしき所の不淨者は　皆[一四三]嚂字を觀じて燒け、　[一四四]辦事を以て身を加持し　十力明をもつて方に食せよ。

[一四五]曩莫薩嚩沒馱日冒地薩怛嚩二合喃唵麼蘭捺泥帝孺忙栗甯娑嚩二合賀

淨意をもつて念誦を作せ　功行の數未だ終らずして、　中間に間あらしむべからず、　或は語り或は出るを須ひ、　或は放逸に由て、　置て數をして終らざらしむれば、　便ち成就を闕く　若し語るを要せば當に　嚂字は舌端にありて觀ずべし　或は部母の明を習せよ　縱ひ語すれども間とはならず、　珠を持して心の上に當てよ、　餘は[一四六]蘇悉地の如し、　一一の諸眞言は　心意の念誦を作せ　出入の息を二と爲し、　當に第一と相應せよ、　[一四七]阿字を支分に布し　持して[一四八]三洛叉を滿せよ、　普賢と及び文殊と　執金剛と聖天と　現前して而も摩頂せん。

行者は稽首禮して　速に[一四九]閼伽水と　意生の香と華鬘とを奉れ　便ち身の淸淨を得べし。念誦の分限畢りなば、　殊を持して本處に安じ、方に三摩地に入れよ、　食頃して定より出で、　復根本印を結び　眞言七遍し已つて、　次に虚空眼を陳べ　香華等を奉獻し、　悅意の妙[一五〇]伽陀と　閼伽と及び發願とをなせ、　救世の加持を說て、　法眼道をして一切處に遍じて久住ならしめよ　當に金剛掌を合して　明に隨て遍く身に觸るべし。十萬を落叉(lakṣa)と爲し、百萬を一倶胝(koṭi)と爲し、一倶胝を阿庾多(ayuta)と爲し、百阿庾多を一那由他(nayuta)と爲す。廣くは華嚴經の如し。

加持句の眞言に曰く、

[一五一]曩莫三曼多沒馱引喃引薩囉他勝勝怛陵二合怛陵　顆顆　達隣　達隣　娑他二合婆野娑

【一四三】嚂字 ɾaṃ
【一四四】辦事。不動明王の呪を指す。
【一四五】Namaḥ sarva-buddha-bodhi-sattvānāṃ.
【一四六】蘇悉地經、滿足眞言法品第二十三參看。
【一四七】阿字 अ
【一四八】三洛叉(lakṣa)とは、三十萬。
【一四九】閼伽水(argha)。
【一五〇】伽陀(gāthā)。頌。
【一五一】Namaḥ samanta-buddhānāṃ sarvathā śiṃ śiṃ traṃ traṃ guṃ guṃ dharaṃ dharaṃ sthāpaya sthāpaya buddha-satya vā dharma-satya vā saṃgha-satya vā hūṃ hūṃ veda vede svāhā.

諸人の眞言に曰く、摩努使也(Manusya)

[一四一] 曩莫三曼多沒馱引喃引壹車鉢曬麼努麼曳迷娑嚩二合賀引

普世明妃の眞言に曰く、普印なり

[一四二] 曩莫三曼多沒馱引喃引路種子迦路迦世間なり、即ち是れ暗瞑なり、羯囉野作なり薩嚩禰嚩一切の天なり曩誐龍なり藥乞叉二合健達嚩阿素囉誐嚕曩金翅なり緊曩囉樂聲摩護羅誐大龍蛇衆儞等諸部の攝なり訶哩二合捺野儞也二合、心なり羯囉灑二合、作明なり野は部等の心を攝するなり尾質怛囉二合櫱底種種の趣なり娑嚩二合賀引

十七　行者の意得

秘蜜主よ是の如くの上首の諸如來の印は、如來の信解より生ず、此等の上首に如上所說の諸印あり、乃至荼吉尼を後と爲す。若し廣く部類眷屬を窮むれば、其の數無邊なり。廣本十萬偈の所說の如し、並に此の本は其の上首を擧ぐ、綱繩を提するが如し。

即ち同じく菩薩の標幟にして、其の數無量なり。又秘密主、乃至身分の擧動住止は、應に知るべし、皆是れ密印なり。舌相の轉する所の衆多の言說は、應に知るべし、皆是れ眞言なり。若し阿闍梨が明に諭伽を解し、深く秘密の趣きに達し、能く菩提心を淨むれば、心は淨なるを以ての故に、秘密の法に通達す。故にあらゆる所作は、皆な衆生を利益し調伏せんが爲なり。施爲する所に隨て、佛の威儀に順せざるなし。一切身分の擧動施爲は、是に密印ならざるなく、有ゆる言語は、皆是れ眞言なり。是の故に、秘密主よ眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩は、已に菩提心を發して、應に如來地に住して、曼荼羅を畫くべし。阿闍梨は、須らく密印眞言等の法を躰解し、一一に法則に違はざれ、久しく瑜伽觀行を修して、身口意の業を淨め、平等の三密法門の行を體解すれば、即ち是れ諸佛菩薩に同なり。理事違はず、善く次第を知れ。又錯失せざれば、當に知るべし。必ず大利虛しからざるなり。若し此れに異ならば、諸佛菩薩を謗するに同じく、三昧耶を越す。決定して惡趣に墮せん。一切如來の立つる所の本誓は、普く一切衆生の爲に知見を開き、悉く我が如くならしめんと欲ふが爲に、方便して、此の法印を立て玉ふ。尙ほし世間の大王の嚴勅教令の過越す可らず、越を爲す者は、必ず重責を得るが如し。必ず經典に順じて、審に經法を求めよ。又明師を訪ふ

【一四一】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ iccha praṁ manumaye me svāhā.

【一四二】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ loka loka karaya sarva-deva-nāga-yakṣa-gandharva-asura-garuḍa-kin::ara-mahora=gâdi hṛdayânyākarṣaya vicitra-gati svā hā.

摩利支の眞言に曰く、

一三四 曩莫三莫多沒馱引喃引摩利支娑嚩二合賀引

七曜・十二宮神・九執の眞言に曰く、

定慧の手相合して、空を微しく屈して、風輪を離せ、此の一趣は是れ人にあらず、鬼にあらず、能く人を恐怖することと爲す。執曜若しくは近宿と名く、即ち合して九執と取るを定と爲す。

一三五 曩莫三曼多沒馱引喃引蘖囉二合醯行なり、垢因なり。濕嚩二合哩也二合、自在なり。鉢囉二合鉢多得なり孺底明なり、諸曜なり。麼野性なり、明性の中に於て、自在を得る、彼を呼んで得自在と名く。娑嚩二合賀引

梵天の眞言に曰く、

一三六 曩莫三曼多沒馱引喃引鉢囉二合種子惹一切衆生鉢多曳空なり娑嚩二合賀引

乾闥婆王の眞言に曰く、

清淨平等の聲なり、言詞美妙の音を演出して、所有の聞者を歡喜せしむ。

曩莫三曼多沒馱引喃引尾成馱清淨の義なり薩嚩二合囉音の義嚩引係儞出の義、言く清淨の音を出すなり。皆是れ世間の三昧なり。娑嚩二合賀引

諸の阿修羅王の眞言に曰く、羅字は離垢不可得なり。

一三七 曩莫三曼多沒馱引喃引阿素囉邏延行なり囉鵮囉鵮特啇二合耽沒囉二合鉢囉二合娑嚩二合賀引

摩睺羅伽の眞言に曰く、摩護羅誐(Moho-raga)と名く。

一三八 曩莫三曼多沒馱引喃引蘖囉藍尾囉隣娑嚩二合賀引

一三九 諸緊那羅（しよきんなら）の眞言に曰く、

一四〇 曩莫三曼多沒馱引喃引賀迦娑喃尾賀薩喃枳那囉喃娑嚩二合賀引

【一三四】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ marici svāhā.

【一三五】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ graheśvarya prāpta jyotirmaya svāhā.

【一三六】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ prajāpataye svāhā.

【一三七】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ asura-layaṁ (?) layaṁ layaṁ

【一三八】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ garalaṁ vi=ralin svāhā.

【一三九】 緊那羅(Kiṁnara)。疑人。

【一四〇】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ hakasānāṁ vihasānāṁ kiṁnarāṇāṁ svāhā.

羊牛密の夫婦と　彗と流星と霹靂と　日天子の眷屬とあり　帝釋の印は內縛にして、二風を申べて針の如くす（空を竪つ）　日天は福智を仰けて　水を入れて空にて側を持し　火輪と相並べんと欲し、　二地輪を舒べて合す。　社耶と毘耶とは（多の印なり）　般若と三昧との手の　風・地の節を相背けて、　水・火自ら相持す　空と並べて心に置く　九執は二羽を合して　空輪を並べ申べ　梵天は紅蓮を持す（月に準ず）　三昧の空にて水を持せよ　明妃は風を火に加へ　空にて水の中節を持せよ、　[三〇]乾闥婆の密印は、　內縛にして水輪に申ぶ　[三一]修羅は智手を以て　風を空輪の上に絞へんには、（定平は妙音天の如くす。諸天若し事業を作さんには、印を單作にて作るも亦得るなり。）

帝釋天王の眞言に曰く、

或は云ふ內縛にして、空・地を合せて竪つるとは、恐くば錯りならん。此の福帝釋天は、因中に廣く百の無遮大會を設けたる、大施主なり。釋の字は靜寂、捨は無垢なり。本性無生の淨心地と用て、淨法界を莊嚴することを表はす。

[三二]曩莫三曼多沒駄引 喃引 鑠（種子）吃囉二合 也（增進なり）娑嚩二合 賀引

持國天王の眞言に曰く、

右を拳にし、空を竪て、風は鉤の如くにして、相著けず、左は此れに準じて腕を相交ふ。

[三三]曩莫三曼多沒駄引 喃引 唵地噤二合 多羅瑟吒 囉二合 囉囉鉢囉二合 末駄那二合 娑嚩二合 賀（種種天衣の嚴飾を左の手に垂れ下げて、刀を把り、右手の掌に寶あり。上に出す。）

日天の眞言に曰く、

世間にて日は衆生を利すと謂ふ。阿字の不生を佛日に喩へ、三昧の日出ずれば、諸暗を破し。菩提心は自然に開けん。此の眞如實相に乘ずる日は、大光ありて、遍照法界の尊なり。

曩莫三曼多沒駄引 喃引 阿儞怛也二合 野娑嚩二合 賀

【三〇】乾闥婆(Gandharva)。尋香鬼。

【三一】修羅、具には阿修羅(Asura)非天。

【三二】Namaḥ samanta-buddhānām cakrāya svāhā.

【三三】Namaḥ samanta-buddhānām dhṛtarāṣṭra ra ra pramadṛa(?) svāhā.

[二二一] 曩莫三曼多沒駄引 喃引 藥訖叉二合、食なり。 尾儞也二合、大なり、反明なり。 達哩 句は、云く藥叉持明なり。尾は是れ縛なり。縛を敢食するなり。 娑嚩二合賀引

諸の毘舍遮の眞言に曰く、

極苦の餓鬼は常に飢渴す。熱惱に迫られる悪因緣なり。第一義諦は遷變を離れ、大悲を以て苦の衆生を捨てず。

[二二二] 曩莫三曼多沒駄引 喃引 毘舍遮蘖底第一義の趣は不可得なり。 娑嚩二合賀引

諸毘舍支の眞言に曰く、毘舍紫儞(引)(Piśācini)

[二二三] 曩莫三曼多沒駄引 喃引 毘旨毘旨 跛は是れ第一義、遮は是れ生死を離るる義なり。第一義を知るが故に、 娑嚩二合賀引

6、伊舍那(東北隅)

東北には [二二四]伊舍那と 眷屬の部多等あり 戟の印は三昧を拳にして、 火を竪て風を屈して、 背にせよ。

伊舍那天の眞言に曰く、 魔醯首羅(Maheśvara)の化身なり。

[二二五] 曩莫三曼多沒駄引 喃引 嚕心と爲す 捺羅二合、授與す 野本名を眞言と爲す 娑嚩二合賀引

諸 [二二六]歩路の眞言に曰く、

[二二七] 曩莫三曼多沒駄引 喃引 喁縊喁伊曼娑多怨歩路喃娑嚩二合賀引

7、帝釋、日天(東方門內)

東門の帝釋天は 妙高山に安住す 寶冠に瓔珞を被り 手に獨股杵を持し、 天衆自ら圍繞し、 左に日天衆を置き 八馬の車輅の中にあり、 二妃は左右にあり、 [二二八]逝耶と毘逝耶となり、 [二二九]摩利支は前にあり 識處と空處天と 無所と非想天と 堅牢神と后と 器手天と天后と 常醉と喜面天と 左右に二の門守と 並に二の守門の女と 持國と 大梵天と 四禪と五淨居と 次に木者と作者と 烏頭と服と米濕と 增益と不染等と

【二二一】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ yakṣa-vidyā-dharine svāhā.

【二二二】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ piśāca-gati svāhā.

【二二三】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ pici pici svāhā.

【二二四】 伊舍那(Īśāna, Tib. dBaṅ-bDag)。自在天、東北隅にあり。

【二二五】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ rudrāya svāhā.

【二二六】 歩路(Bhūta,)。

【二二七】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ guṁ i guṁ i manusataj○(?) bhūtānāṁ svāhā.

【二二八】 逝耶(Jaya)。

【二二九】 摩利支(Marici)。

天と　八大藥叉衆と持明仙と仙女と　百藥の愛才等と　賢鉤の本方の曜と　並に[一二三]阿濕毘儞と　[一二四]多羅と滿者と百と　十二屬の天女と　螃蟹と師子との衆と　大戰鬼と太白と　[一二五]毘那夜迦等と　[一二六]摩訶迦羅天とあり、　多聞は虛心合にして、　雙の地を掌に入れて交へ　空を風の側に竪つて屈し　一寸ばかり相著けず、　左に藥叉あり內縛して　水を竪てて二風を屈せよ、　一切の藥叉女は　空を入れて地の甲を持せよ、　散じ合して三昧耶のごとくせよ。　門の東に[一二七]毘舍遮あり、　內縛にして火輪を圓にせよ、　前印の火甲を背けよ　即ち[一二八]毘舍支と名く　又大藥叉の印は、　內縛して水を並べて、　二風を屈せよ。

多聞天王の眞言に曰く、

八藥叉(yākṣaśas)とは摩尼跋陀羅(Maṇi-bhadra)は寶賢、布嚕那跋陀羅(Pūrṇa-bhadra)は滿賢、半只迦(Pāñcika)散支(Sañci?)、沙多祁哩(Satakrī?)醯摩縛多(Himavata?)毘灑迦(Viśaka)阿吒嚩迦(Āṭavaka)。半遮羅(Pāñcala)。

[一二九]曩莫三曼多沒馱引喃引　味室羅二合摩拏野娑嚩二合賀引

諸藥叉の眞言に曰く、

虛心合掌にして、火と空とを相叉ひ、二風を鉤の形の如くにして、水を合せ竪てよ。能く食噉して遺すこと無く、迅速なるを藥叉と名け、常に衆生を食して厭足なし。是の世尊の救世の願は、常に衆生の垢障を食して、法界胎藏の中に住せしむ。

[一三〇]曩莫三曼多沒馱引喃引　藥乞叉二合（藥は、是れ乘の義句、叉は是れ啖食の義なり。）　濕嚩二合羅（自在なり、一切の煩惱を食するに於て、而も自在なるが故に、名と爲すなり。）　娑嚩二合賀引

諸藥叉女の眞言に曰く、

二羽の地、空を掌に入れ、空にて地の甲を捻じ、風・火・水・相捻じ散ずれば倚ほし三昧耶の如し。

【一二三】阿濕毘儞(Aśvinī)。

【一二四】多羅(Tā ā)。

【一二五】毘那夜迦(Vinayaka)。

【一二六】摩訶迦羅(Mahā-kāla)。大黑。

【一二七】毘舍遮(Piśāca, Tib. śa-ga)。食肉鬼。

【一二八】毘舍支(Piśācī)。

【一二九】Namaḥ samanta-buddhānām vaiśramaṇāya svāhā.

【一三〇】Namaḥ samanta-buddhānām yakṣeśvarāya svāhā.

[101]曩莫三滿多沒馱引 喃引 戰種子なり 捺囉二合、不死なり 野娑嚩二合 賀引

二十八宿の眞言に曰く、

[102]曩莫三滿多沒馱引 喃引 唵阿瑟吒二合 尾孕二合 設底喃諾乞察二合 怛囉二合 毘藥二合 儞曩顊曳摘計吽 惹娑嚩二合 賀引

[103]魔醯首羅天王の眞言に曰く、

二羽を外に相叉へて左にて、右を押し、直く地・風・空を竪てて召を生じ、本天及び一切の賢聖を供養す。

[104]曩㚲三曼多沒馱引 喃引 唵摩係引 濕嚩二合 囉野娑嚩二合 賀引

烏摩妃の眞言に曰く、

[105]曩莫三曼多沒馱引 喃引 烏摩儞弭娑嚩二合 賀引

遮文荼に眞言に曰く、

亦伏魔の印と名く、此の印を用へよ。定の手を仰けて、劫波羅を口に置け。

[106]曩莫三滿多沒馱引 喃引 唵護嚕護嚕左門拏娑嚩二合 引 賀引

風天の眞言に曰く、

縛(引)を阿字に入るるを以て、本來無縛なり。眞の解脫なり。無言三昧は畢竟空なり。空の中に旋轉して、礙あることなし、迷情の堅執を盡して餘なし、往返神通にして自在を得、速に有情を度せん。

[107]曩莫三曼多沒馱引 喃引 嚩引、種子あり 野吠名けて眞言と爲す 娑嚩二合 引 賀引

5、多聞天王、夜叉衆(北方門內)

北方の門內に　難陀と　[108]烏波龍と　[109]倶肥羅と並に女とを置け　次に西には　[110]舍乞羅と

帝釋衆の眷屬と　明女歌樂天と　摩睺羅樂天と　[111]摩睺羅伽衆と　成就持明仙と　持

梵と並に天衆と　他化と兜率天と　光音と大光音とあり　門の東に　[112]毘沙門と吉祥功德

【101】Namaḥ samanta-buddhānām candrāya svāhā.

【102】Namaḥ samanta-buddhānām oṁ aṣṭa-viṁ=śatināṁ nakṣatrabhyaḥ nirjudaniye (?) taḥ ki hūṁ jaḥ svāhā.

【103】魔醯首羅(Maheśvara)。

【104】Namaḥ samanta-buddhānām oṁ mahe=śvarāya svāhā.

【105】Namaḥ samanta-buddhānām umajini (?) svāhā.

【106】Namaḥ samanta-buddhānām oṁ horu horu cāmuṇḍa svāhā.

【107】Namaḥ samanta-buddhānām vāyave svāhā.

【108】烏婆難陀(Upananda)。

【109】倶肥羅 Kuvera, Tib. Lus-nan-po)。富神。

【110】舍乞羅(Śakra, Tib. Brgya-Byin)。帝釋天。

【111】摩睺羅伽(Mahoraga, Tib. Ltoḥphye-Chen-Po)。大腹行。

【112】毘沙門(Vaiśravaṇa, Rnam-Thos-hyi-bu)。多聞天。

前は是れ龍王、此は是れ龍なり、此の眞言を通用す。龍は雲障を瞰食す。萬像明に現じて大虚廓然たり。又無盡の雲を起して普く法雨を雨らす。或は索印を用ふ、右手なり。

九六 曩莫三曼多沒馱引 喃引 銘種子 伽雲なり 捨儞喫瞰なり 曳娑嚩二合 賀

地神の眞言に曰く

法寶の生ずる所依の處なり語言の道を出過して、能く道場の地をして堅固ならしめにして傾動せざらしむ。佛の心地を生長して、内に眞如の境を證するをもつて、鉢哩（二合）躰微（Pṛthivi）といふ

九七 曩莫三曼多沒馱引 喃引 鉢哩二合 體吠曳二合、地神の名を便ち眞言と爲す、第三字は種子なり。 娑嚩二合 賀 定慧密に頭を相踪へ、その掌内を空にして瓶を奉する形にせよ。

妙音天の眞言に曰く、

卽ち乾闥婆（Gandharva）の類を攝す。左を仰げて臍の上に安じ、琵琶の如くせよ、右は散じて風、空相捻じて運動せよ、淸淨法身は深く淸淨の妙法音に入りて、解脫の聲を演出す。言詞柔美にして衆生の心を悅ばしめ、隨順して法を說く有情を度す。

九八 曩莫三曼多沒馱引 喃引 薩囉娑嚩二合 帶曳二合 卽ち美音の名なり。 娑嚩二合 賀引

那羅延天の眞言に曰く、

九九 曩莫三滿多沒馱引 喃引 尾瑟拏二合 吠娑嚩二合 賀引

后の眞言に曰く、

一〇〇 曩莫三滿多沒馱引 喃引 尾瑟拏二合 弭娑嚩二合 引 賀引

月天の眞言に曰く、

瑜伽は圓滿にして、淨圓實なり、躰性遍く淸淨にして、普く世間を照らし、能く極熱惱を除き、淸淨の法藥を施し、甘露の十六分の十五を有情に施し、一分を還出す。職は謂く無生滅なり、淨月を三昧に喩ふ。

【九六】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ megha-śani-ye svāhā.

【九七】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ pṛthivyaí svāhā.

【九八】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ sarasvatyai svāhā.

【九九】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ viṣṇave svāhā.

【100】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ viṣṇave svāhā.

才と　[89]塞建嚢と　月妃と戰捺羅と　皷天と歌天女と　歌天と樂天衆と　風天と並に眷屬と　天使と並に妃等とを安布すべし。　水天は羂索を執り、　諸龍は散じて掌を覆せ二空の互に相絞へ　二龍は左右の掌、　更に互に相加へ　地神は寶瓶を持し　辯才は卽ち妙音なり　慧の風は空を持し、　運動すること樂を奏するが如くせよ、　彼の天は費拏の印　[90]那羅延は輪を持す　定の掌を以て舒べ散じ　后の契は空にて風を持す　圓滿たること輪勢の如くせよ　塞建嚢童子は　三首にして孔雀に乘り　[91]商羯羅は戟印たり定の空を自の地に加へよ、（微しく屈して三指を散し、空が地の甲を捻するを加と爲し、對し合するを持と曰ふ。）　后の印は空にて地を持す妃の密は三輪を開けよ（前に竪つ）　遮文茶は內縛にして　合を合じて頂上に安ぜよ、　月天は三昧手にて（或は空にて火の初節を捻じ、應に白月が華中に在りて觀ずべし。）　白蓮華を持す　宿の密は火と空とを交ゆ　[92]縛庾風天は幢なり　智拳の地と水とを竪てよ（空は內に在り）　皆脊屬圍遶す。

廣日天王の眞言に曰く、

二拳を背けて相合せ、空にて火輪の甲を押へ、風と交へて、索の如くす。左に鉤を執り、右手に赤索を把れ。

[93]曩莫三曼多沒馱引喃引唵尾嚕博乞叉二合那伽地波路曳娑嚩二合賀

水天の眞言に曰く、

大海中の龍王なり、諸龍王も、此の眞言に同じ、左手を大海に作れ、大龍王は一切の智水にして、大法の雨に自在を得るを名けて天と爲す。

[94]曩莫三曼多沒馱引喃引阿（種子なり）播（水なり）鉢多（空なり）曳娑嚩二合賀引

難陀拔難陀の眞言に曰く、（兄弟の二龍王なり）

[95]曩莫三曼多沒馱引喃引難徒鉢難娜曳娑嚩二合賀引

諸龍の眞言に曰く、

【九〇】 那羅延（Nārāyaṇa）。

【九一】 商羯羅（Śaṅkara）。骨鎖天。

【九二】 縛庾（Vāyu）。風天。

【九三】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ oṁ virupā=kṣanagādhipataye svāhā.

【九四】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ apāṁ pataye svāhā.

【九五】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ nandopanan=dāye svāhā.

[七三]奉教官の眞言に曰く、

曩莫三曼多沒駄引 喃引只怛囉二合虞鉢多二合野娑嚩二合引 賀引

[七四]拏吉尼の眞言に曰く、離因の無垢の空三昧なり。

曩莫三曼多沒駄引 喃引 頡唎二合訶この字は離因無垢なり。上に三昧の傍點あり。亦忿怒なり。訶は是れ因の義、有點は忿怒なり。 娑嚩二合引 訶引

3、羅刹部（南西隅）

[七五]泥哩底の方の主を　號して大羅刹と名く　刀を執る恐怖の形慧力なり　是れ諸の　[七六]羅刹娑なり　蓮合にして水を月に入るる　風を竪てて空と火とを交へよ　及び羅刹等あり。

羅刹主の眞言に曰く、左手の空は地水の甲を捻じ火風を並べ竪つ。

[七七]曩莫三曼多沒駄引 喃引 囉引 吃察二合娑食なり、娑は是れ竪の義、囉は是れ小垢なり、傍に點あるは、是れ菩提なり、亦是れ能食なり、阿聲は即是れ行なり、吃察は是れ小空を地法界三昧なり。跋路天なり。曳住なり、其の德を指すなり。彼をして聞かしめ已て、歡喜して、衆願を滿するなり。娑嚩二合賀引

[七八]羅刹斯の眞言に曰く、

[七九]曩莫三滿多沒駄引 喃引 囉乞刹二合娑識尼弭娑嚩二合引 賀引

[八〇]羅刹衆の眞言に曰く、

曩莫三曼 多 沒駄引喃引囉乞叉二合細毘藥三合娑嚩二合賀引

4、龍衆（西方門內）

西門內の左右に　忿怒無能勝と　[八一]阿毘目佉と對す　[八二]難徒と　[八三]跋難徒と　及以び諸の地神とあり　龍王　[八四]嚩嚕拏は　天形にして女人狀　龍光ありて龜を座と爲す　龍衆自ら圍遶す　執耀衆と　尊辰と　店と對生と大光と　寂・蝎・弓・秤との宮と　月耀と及び女天と　男天　[八五]摩奴赦と　[八六]遮文と　[八七]鳩摩利と　釋・梵の二女天と　自在と　[八八]烏摩妃と　辯あり　門の北に當に　廣目天と龍衆と　龍王と妃と眷屬と　那羅と毘紐と妃と

【七三】Namaḥ samanta-buddhānāṃ citra-guptāya svāhā.

【七四】Namaḥ samanta-buddhānāṃ hriḥ haḥ svāhā.

【七五】泥哩底(Nirṛti)。西南隅。

【七六】羅刹娑(Rākṣaśas)。

【七七】Namaḥ samanta-buddhānāṃ rākṣasas-adhipatye svāhā.

【七八】羅刹斯(Rākṣasī)。

【七九】Namaḥ samanta-buddhānāṃ rakṣasa gaṇime svāhā.

【八〇】Namaḥ samanta-buddhānāṃ rakṣasebhyaḥ svāhā.

【八一】阿毘目佉 (Abhimukha)。相向。

【八二】難徒(Nanda)。

【八三】跋難徒(Upananda)。

【八四】嚩嚕拏(Varuṇa)。

【八五】摩奴赦(Manuṣya)。

【八六】遮文(Cāmuṇḍa)。

【八七】鳩摩利(Kumārī)。

【八八】烏摩(Umā)。

【八九】塞建陀(Skandha)。

二羽の背を相合し、火輪を鉤して索の如くす。地風空を屈して鉤の如くせよ。右の手に刀を持し、右に矟を把り、根を地に着くるなり。

六七 曩莫三曼多沒馱引 喃引 唵尾嚕荼迦藥乞叉二合地跛曳娑嚩二合引 賀引

閻魔王の眞言に曰く、

無縛三昧に住して、能く衆生の縛を解く、非法を以て治せず。罪福に錯謬なし、離言にして戯論を絶し、如に乘する法王の位にして、生死の中に自在なり。

六八 曩莫三曼多沒馱引 喃引 嚩嚩堅住なり娑嚩二合多野娑嚩二合賀引

死王の眞言に曰く、

六九 曩莫三曼多沒馱引 喃引 沒哩二合種子底野三合吠此れ死の義、殺の義なり。根本を斷するを殺と名く。意は一切衆生の煩惱を斷じて、法に於て自在なり。 娑嚩二合賀引

焰魔七母の眞言に曰く、

七姉妹あり、遮悶（Cāmuṇḍa）拏嬌摩哩（Kaumārī）等なり。

七〇 曩莫三曼多沒馱引 喃引 忙種子底哩二合毘藥二合娑嚩二合引 賀引

暗夜神の眞言に曰く、

焰摩の侍后なり、鬼魅所行の處、有情は恐怖多し、此の神は夜中に於て、加護し安樂を與へ、衆生虚妄の業は、迷失して稠林に隨す。如來は中夜に於て、成佛して照明となる。

七一 曩莫三曼多沒馱引 喃引 迦攞黑なり囉底哩二合曳夜 娑嚩二合賀引

焰摩后の眞言に曰く、

七二 曩莫三曼多沒馱引 喃引 蔑哩二合怛野二合吠娑嚩二合引 賀引

【六七】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ oṁ viruḍhaka-yakṣādhipataye svāhā.

【六八】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ vaivasvataya svāhā.

【六九】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ mṛtyave svāhā.

【七〇】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ mātṛbhyaḥ svāhā.

【七一】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ kāla-rātriye svāhā.

【七二】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ mṛtyave svāhā.

申ぶ　空は地水の上を押す　焔魔の妃后は鐸なり　慧手は五輪を垂れて　猶ほ健吒[57]の相の如くす
茶吉尼[58]は定の掌　爾賀嚩[59]は之れに觸れよ。

火天の眞言に曰く、

定の印掌を心に當て、火空相捻じて、三角形の如くす。慧は四輪を竪てて、空を掌中に横へ、風を屈して三召せよ。

[60] 曩莫三曼多沒馱引 喃引 阿擬曩二合 曳娑嚩二合 賀引

火天后の眞言に曰く、

[61] 曩莫三曼多沒馱引 喃引 阿起𧹞曳娑嚩二合 賀引

嚩斯仙の眞言に曰く、

[62] 曩莫三曼多沒馱引 喃引 嚩斯瑟吒二合 哩鑠二合 娑嚩引二合 賀引

阿跌哩仙の眞言に曰く、

[63] 曩莫三滿多沒馱引 喃引 惡帝囉二合 也摩賀哩鑠二合 娑嚩引二合 賀印

尾哩瞿仙の眞言に曰く、

[64] 歸命比哩倶多𤚥二合 摩訶哩鑠二合 娑嚩引二合 賀引

瞿答摩仙の眞言に曰く、

[65] 曩莫三曼多沒馱引 喃引 婆哩二合 輸怛摩二合 摩訶哩鑠二合 娑嚩引二合 賀引

蘖栗伽仙の眞言に曰く、

[66] 曩莫三曼多沒馱引 喃引 倶怛摩二合 摩訶哩鑠二合 蘖哩伽二合 娑嚩引二合 賀引

增長天王の眞言に曰く、

【五七】健吒(Ghaṇṭa)。鈴。
【五八】茶吉尼(Ḍākinī)。
【五九】爾賀嚩(Jihva)、舌。
【六〇】Namaḥ samanta-buddhānāṁ agnāye svāhā.
【六一】Namaḥ samanta-buddhānāṁ agniye svāhā.
【六二】Namaḥ samanta-buddhānāṁ vasiṣṭha riṣaṁ svāhā.
【六三】Namaḥ samanta-buddhānāṁ atrya-mahā-riṣaṁ svāhā.
【六四】Namaḥ bhṛgutātma (?) mahārṣaṁ svāhā.
【六五】Namaḥ samanta-buddhānāṁ gautama(?)-mahārṣaṁ svāhā.
【六六】Namaḥ samanta-buddhānāṁ gotama-mahārṣaṁ gṛga svāhā.

満意天子の眞言に曰く、

空にて風側を捻じ、前に當て華を献する勢にせよ。　満意梵衆は生ず、我等は皆な梵天より生じて怨衆を見ず、如來の所生も亦是の如し。

【三五】曩莫三曼多沒駄引喃引唵哿聹耻毘藥二合娑嚩二合引賀引　我等は皆な佛心に依つて生ず、如來に終始あるを見ず、名けて出世の大慈父と爲す。

遍音天子の眞言に曰く、

慧手の掌を側めて、三輪を屈し、此の音聲をして、普く遍知せしめ、法界の諸天は極めて歡喜す。

【三六】曩莫三曼多沒駄引喃引唵哿婆薩嚩二合隷弊沙嚩二合引賀引

2、火天部（東南隅）

行者は東の隅に於て　火仙の像を作れ　熾焔の中に住し　三點灰を標と爲す　身色は
皆深赤なり　心に三角印を置け　慧には珠、定には瓶を操る　掌印にして定に杖を持し
靑羊を以て座と爲し　妃后は左右に侍す　【三七】婆藪仙と仙の妃と　【三八】阿詣羅と　【三九】瞿曇と
【四〇】阿底哩仙と　及び【四一】毗哩瞿仙となり　次に自在女と　【四二】毗紐と　【四三】夜摩女と　賢と　【四四】摩羯
との二魚と　【四五】羅睺と　【四六】阿伽羅と大主と　【四七】訶悉多とをけ　次に摩伽と　七曜衆と間錯と
自記と　【四八】質多羅と　果得と　【四九】尾舍佉と　藥叉持明衆とを置け　次に增長天王あり
南門には　【五〇】難陀龍と　【五一】烏波大龍王と　並に二つの　【五二】修羅王と　門に近く黒暗天とあり
次に　【五三】焔魔羅王は　手に【五四】檀拏の印を持し　水牛を以て座と爲し、　震雷玄雲の色あり
七母と並に黒夜と　死后と妃と圍遶す。　奉教と鬼衆の女と　鬼衆と拏吉尼と　成
就大仙衆と　摩尼阿修羅と　及び阿修羅衆と　金翅王と並に女と　九頭龍の印に準ず　【五五】鳩槃茶と
及び女とあり　火天は空を掌に在け　【五六】嚩思等の仙印は　空にて水の二節を持し　次第
に開きて敷遍せしむ　先づ頭指を開け　焔魔は定慧を合す　地風を雙べて月に入る　七母は三昧
を拳にし　空を抽き竪てて鎚の印とす　月心に於て　暗夜は三昧を拳にして　風火を並べて皆

【三五】Namaḥ samanta-buddhānāṁ oṁ haneṭi-bhyaḥ svāhā.
【三六】Namaḥ samanta-buddhānāṁ oṁ apasva-rebhyaḥ svāhā.
【三七】婆藪(Vasu)。
【三八】阿詣羅(Aṅgira)。
【三九】瞿曇(Gautama)。
【四〇】阿底哩(Atri)。
【四一】毗哩瞿(Bhṛguta)。
【四二】毗紐(Viṣṇu)。
【四三】夜摩(Yama)。
【四四】摩羯(Makara)。
【四五】羅睺(Rāhu)。
【四六】阿伽羅(Agara ?)。
【四七】訶悉多(Hasita ?)。
【四八】質多羅(Citra)。
【四九】尾舍佉(Viśākha)。
【五〇】難陀(Nanda)。
【五一】烏波難陀(Upananda)。
【五二】修羅、具には阿修羅(Asura)。
【五三】焔魔羅闍(Yāmarāja)。
【五四】檀拏(daṇḍa)。
【五五】鳩槃茶(Kumbhaṇḍa)。
【五六】嚩思斯多(Vasiṣṭ a)。

女形なり、因に於て自在を得れば、二十五有は自ら生ぜざるなり。常に三有に於て動せず、如來は寶處三昧に住して、種種隨類の身に化す。

[三一] 曩莫三曼多沒駄引喃引阿跛羅爾帝無能勝の義なり惹衍底勝の別名、即ち戰勝の勝にして、能く他を伏するなり。怛捉帝摧破にして、境に勝つなり娑嚩二合引賀引

十六、歸順の外道諸天（外金剛部）

1、淨居衆（東北隅）

次に東北方に於て　淨居衆を布列せよ、　自在は思惟手にせよ頭に側めて手を就く　普華は風火を差らす火を胸の前側に入るるなり　光鬘は空を掌にをく　滿意は空風を華のごとくせよ、　遍音は空を水に加へよ　火風を以て耳を掩へ兩耳

自在天子の眞言に曰く、

清淨の法より生ず、世天の業より生ずるに同ずべきにあらず。淨心にて思惟し、勝妙の手は垢を離る、妙端嚴微妙にして衆生心を適悅せしむ。

[三二] 曩莫三曼多沒駄引喃引唵播囉儞怛麼二合囉底毘藥二合娑嚩二合引賀引

普華の眞言に曰く、

右の手を散じて、風にて火の背を捻じ、空は火の側文を持し、地水稍ゝ屈し、印を胸の前にをけ。

[三三] 曩莫三曼多沒駄引喃引摩弩囉摩達摩糝婆嚩尾婆嚩迦託那迦託那糝糝忙縒泥娑嚩二合引賀引

光鬘天子の眞言に曰く、

右の空を掌に入れて、諸輪を散ず。

[三四] 曩莫三曼多沒駄引喃引惹覩鄔姹二合寫難娑嚩二合引賀引

【三一】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ aparajite jayanti taḍite svāhā.

【三二】 Namaḥ samanta-buddhānām oṁ paraditmaratibhyaḥ(?) svāhā.

【三三】 Namaḥ samanta-buddhānām manorama-dharma-saṁbhava-vibhava-kathāna kathāna saṁ saṁ maśate svāhā.

【三四】 Namaḥ samanta-buddhānām jatu uṭasyānām svāhā.

發生佛頂の眞言に曰く、

二三 曩莫三曼多沒駄喃引 輪嚕吽三合 鄔瑟尼二合灑娑嚩二合引 賀引

無量聲佛頂の眞言に曰く、

虛合にして、二風にて火の背を絞へ、空を火の中節に捻し、前の商佉の相の如くせよ。

二四 曩莫三曼多沒駄引 喃引 吽惹欲鄔瑟尼二合灑娑嚩二合 賀引

次に聲聞衆を置け、梵夾を標幟と爲せ左に在り

彼の眞言に曰く、

二五 曩莫三曼多沒駄引喃引係賭因なり 鉢羅二合底也二合野緣なり 尾蘗多離なり 羯磨事業なり 涅惹多生なり 吽引

復緣覺衆を置け　內縛にして火輪を竪てよ　圓滿錫杖の相なり。

眞言に曰く、

緣覺の相と佛相と、何の別ありや、佛相は圓滿なり、緣覺の身相は瘦なり。

二六 曩莫三曼多沒駄引喃引嚩言語道斷なり。極無言說を證するなり。

釋迦牟尼の前に　無能勝と及び妃とををけ　明王は　二七 智に蓮を持す右手なり、風をもつて空を捻じ、火を屈して、掌に入るるなり、　定の掌を外に向けて舒べよ頭よりも高く　而して黑蓮の上に在る　妃の密は　勝大口なり。二空を並べて口の形の如くす。黑色にして刀を持す。內縛にして

二八 阿阿跛羅引爾多(Aparājita)の眞言に曰く無能勝不可壞なり。環德にして化す。吽字は是れ釋迦如來の忿怒師子震吼の聲なり。

二九 曩莫三曼多沒駄引 喃引 吽吽 地法界の種子 嘫二合、是れ塵の義 三〇 地嘫二合 唧嘫二合、諸障は生せざるなり 娑嚩二合引 賀引

無能勝妃の眞言に曰く、

【二三】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ śruṁ uṣṇiṣa svāhā.

【二四】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ hūṁ jayoṣ-ṇiṣa svāhā.

【二五】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ hetu-pratyaya-vigata-karma-nirjāta hūṁ.

【二六】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ vaḥ svāhā.

【二七】 智。右手。

【二八】 阿跛羅爾多(Aparājitā) 無能勝眞言。

【二九】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ hūṁ hūṁ dhriṁ dhriṁ jiriṁ svāhā.

【三〇】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ dhriṁ dhriṁ riṁ riṁ jiṁ jiṁ svāhā.

くす勝頂は前の力印にせよ金色なり　最勝の印は金輪なり浅黄なり　光聚は如來頂なり白色　捨除は内にして拳を成じ内縛白色風輪を屈して鉤の如くせよ　復毫相の北に於て　三佛頂を安布せよ

廣大發生頂は　前の蓮華印に同じ　極廣廣生頂は　五智金剛印なり　無邊の音聲頂赤色は　即ち前の商佉の印なり

白傘蓋佛頂の眞言に曰く

一七 曩莫三曼多沒駄喃引藍悉怛多鉢怛囉二合鄔瑟尼二合灑娑嚩二合引賀引

畢竟無生にして、常に清淨なり。法相は不可得にして、白淨なり。慈悲周遍して、卽ち法界の諸衆生を覆ふ。

勝佛頂の眞言に曰く大慧刀の印

一八 曩莫三曼多沒駄喃引苫惹欲鄔瑟尼二合灑娑嚩二合引賀引

最勝佛頂の眞言に曰く、

娑字は是れ法華の義、三昧の聲の故に、甕藥を具す。如來の極壽量なり。

一九 曩莫三曼多沒駄喃引施只種子尾惹欲鄔瑟尼二合灑娑嚩二合引賀引

光聚佛頂の眞言に曰く、

如如無垢は、是れ卽ち火輪なり。如來衆は、能く暗を除きて、悉皆無なり。

二〇 曩莫三曼多沒駄喃引怛陵二合帝儒囉施鄔瑟抳二合灑娑嚩二合賀引

除障佛頂の眞言に曰く、

二一 曩莫三曼多沒駄喃引訶啉二合尾枳囉拏半祖鄔瑟尼二合灑娑嚩二合引賀引

廣生佛頂の眞言に曰く、

二二 曩莫三曼多沒駄喃引吒嚕吽二合鄔瑟尼二合灑娑嚩二合引賀引

【一七】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ laṁ sitātapatroṣṇiṣa svāhā.

【一八】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ śaṁ jayoṣṇiṣa svāhā.

【一九】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ, śi śi vijayoṣṇiṣa svāhā.

【二〇】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ triṁ tejorāśi uṣṇiṣa svāhā.

【二一】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ hruṁ vikiraṇa-pañcoṣṇiṣa svāhā.

【二二】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ truṁ hūṁ uṣṇiṣa svāhā.

次に世尊の右に於て　遍知眼を顯示せよ、　熈怡の相に微笑あり　遍體に圓淨の光あり
憙見無比の身　これを能寂母と名く。

[一三]眞言に曰く、

則ち佛母の加持を得て、眼根清淨なり、眼印は二羽を虛中にして合し、風を屈して、火の背に相著けず、空輪を並べ建つれば、五眼成ず。

[一四]曩莫三曼多沒駄喃引 怛（鉢と爲す）他引 誐多（如來なり） 作乞芻（二合、眼なり） 尾野（二合）嚩路引 迦野（觀の義なり） 娑嚩（二合）賀引

次に毫相明を寫せ　鉢頭摩華に住し　圓照にして商佉の色あり　如意寶を執持して
衆の希願を滿足し玉へり　慧の拳を眉間に置け（風指を申べて空を內掌にをけ）

毫相の眞言に曰く、

不生の行は淨行なり、卽ち仁中の人たる最勝尊に同じ。

[一五]曩莫三曼多沒駄喃引 嚩囉泥（與願なり、衆生の願を與ふ。） 能く一切嚩囉鉢囉（二合）鉢帝（願得なり、人の寶あれば、能く人に施與するが如く、猶ほ我れ此の願を成就することに依て、能く自在に施與して、悉く有情をして充足せしめん。）吽娑嚩（二合）賀引

一切の諸佛頂には、　慧手の指峯を聚めて　頂に置け密印を成ず。

謂く十方佛利土の微塵數の諸佛の頂なり。頂は是れ尊勝の義なり、卽ち如來頂相圓を得るなり。

彼の眞言に曰く、

[一六]曩莫糝曼多沒駄喃引 鑁（種子）鑁鑁（縛の義なり、阿字に入れば卽ち無縛なり。無縛とは言語道斷の義なり。上に點あるは大空なり。三說するは極めて清淨を成就せしむる義なり。）
吽吽吽（三固を離れて三空を得るなり） 泮吒（不生なり）娑嚩（二合）引賀引

救世釋師子の　次に南に五佛頂あり　白傘は慧の風を豎て（眞金なり）　定掌を覆ふこと蓋の如

【一三】能寂母眞言。

【一四】Namaḥ samanta-buddhānāṃ tathāgata-cakṣu-Vyavalokāya svāhā.

【一五】Namaḥ samanta-buddhānāṃ varade vara-prāpte hūṃ svāhā.

【一六】Namaḥ samanta-buddhānāṃ vaṃ vaṃ vaṃ hūṃ hūṃ hūṃ phaṭ svāhā.

十五、歷史上の眞言行菩薩（釋迦院）

持眞言行者は　次に第三院に往け　東方初門の中に　釋迦師子の壇ををけ　謂く　大[1]因陀羅は　妙善にして眞金色なり　四方相均等にして　前の如く金剛印ををけ　上に波頭摩を現はし　周匝に皆黃暉あり　金剛印を圍遶し、紫金光聚の身に　相を具すること三十二　袈裟衣を被服し、白蓮華臺に坐し　教を流布せしめんが爲に　彼に住して而して説法し、智手は吉祥印　空が水を持するにして　寶處三昧に入り　虛空と觀自在と　無能勝と及び妃とあり　次に北に如來寶と　如來毫相尊と　大轉輪と光聚と　無邊音聲佛と　如來悲と愍と慈とあり　左に　[2]白傘蓋佛と　勝佛と最勝佛と　高佛と摧碎佛と　如來語と舌と笑と　寶上の　[3]爍乞底と　栴檀香の辟支と　多摩羅香等と　[4]目連と　[5]須菩提と　迦葉と　[6]舍利弗と　如來の喜と悲と捨と　傘上の如來牙と　輪輻と辟支佛と　寶輻　[7]辟支佛と　[8]拘絺羅と　[9]阿難と　[10]迦旃と　[11]憂波離と　智と供養雲海とあり。

釋迦牟尼佛の眞言に曰く、

捨(引)根也(二合引)母儞(Sākhya-muni)と名く、三昧光中に此の眞言を現はし、寶處三昧に入り、眷屬も同しく入れり、乃至諸天等は、皆是れ如來所化の身なり。

[12]曩莫糝曼多沒馱喃(引)婆(種子)薩(眞言なり、堅の義)嚩吃哩(二合)捨(一切煩惱)涅素娜曩(摧伏なり、堀なり、利钁の如く直下して底に徹せしむるなり)薩嚩達磨(一切法)嚩始多鉢囉(二合)鉢多(二合、得なり、謂く諸法に於て而も自在を得るなり)誐誐曩(虛空なり)三摩(引、等)三摩(無等なり、諸法に於て、自在を得、此の法を以て煩惱を掘るなり。)娑嚩(二合引)賀(引)

---

[1] 大因陀羅は、方壇にして地大を表す。

[2] 白傘蓋佛頂(Sitātapatroṣṇiṣa)。

[3] 爍乞底(Śakti)。能力。

[4] 目連(Maudgalyāyana)。

[5] 須菩提(Subodhi)。

[6] 舍利弗(Śāriputra)。

[7] 辟支佛(Pratyekabuddha)。獨覺。

[8] 拘絺羅(Koṣṭhila)。

[9] 阿難(Ānanda)。

[10] 迦旃延(Kātyāyana)。

[11] 憂波離(Upāli)。

[12] Namaḥ samanta-buddhānāṃ bha sarva-kleśa-nirsudana sarva-dharma-vaśita-prāpta-gagana-samāsame svāhā.

不動尊の眞言に曰く

[一三三] 曩莫薩嚩怛佗引蘖帝毘藥薩嚩目契毘藥薩嚩他怛囉二合吒賛拏摩賀路灑拏欠佉引呬佉引呬薩嚩尾覲南二合吽怛羅二合吒憾鉾

勝三世金剛の眞言に曰く

如來は、法幢高峯觀三昧に住して、三界難調の衆生、及び三毒の煩惱を降伏す。三界に於て、天中の天として、無量の眷屬を化して、大天王と爲り、彼の諸天に勝ること百千萬倍なり。更に何の衆生あつてか而も能く勝たんや。

[一三四] 曩莫三曼多嚩日囉二合赧訶訶訶行の義、喜の義、是れ三乘の人の行なり、此の三行を越するは、即ち是れ佛行なり。尾娑摩曳二合奇なる哉、奇なる哉、佛は常に慈を以て瞋を對治し、無貪を以て、貪を治す。今は乃ち大忿怒を以て忿怒を降し、大貪を以て一切の貪を除くなり薩嚩怛佗蘖多一切如來尾灑野境界なり三婆吠生なり佛の境界より生ず。佛の境界とは、諸佛の實相なり。實相より生ず。號して降三世と爲すなり。怛𡅏二合種子路枳也二合三四尾惹野降勝なり吽惹呼召、警覺なり娑嚩二合賀引

大威德金剛の眞言に曰く

[一三五] 唵三界の一切の賢聖を警覺して、皆雲集せしむ。紇唎二合種子悉置力二合、一切の怨家を摧伏するなり。尾訖哩二合多娜曩恐怖吽薩嚩設咄嚕二合一切の怨家は滅壞す娜引捨野薩擔二合婆野禁止薩擔二合婆野禁止娑發二合吒破壞娑發二合吒降伏・摧壞娑嚩二合賀引

【一三三】 Namaḥ sarva-tathā-gatebhyaḥ. sarva-mukhe-bhyaḥ sarvathā traṭa caṇḍa-mahā-roṣaṇa khaṁ khaṁ khahi khahi sarva-vighnaṁ hūṁ traṭa hāṁ māṁ.

【一三四】 Namaḥ samanta-va-jrāṇāṁ ha ha ha vismaye sarva-tathāgata-viṣaya sa-ṁbhave trailokya-vijaya hūṁ jaḥ svāhā.

【一三五】 Oṁ hriḥ ṣṭriḥ vikṛta-dāna hūṁ sarva-śatru-dā-śaya stambhaya stambhaya sphaṭa sphaṭa svāhā

金剛拳の眞言に曰く

[128] 曩莫三曼多嚩日囉二合赧娑怖二合吒野 打散なり。金剛慧の槌を以て、三毒を擊つて、散分して破壞せしむるなり。 嚩日囉二合三婆吠 生なり。金剛より生ずるなり。 娑嚩二合引賀引

一切奉教金剛の眞言に曰く 一切の金剛、菩薩、如來の三部に通同するは、此の使者なり。謂く此の眞言は、本尊の側にありて、命を承けて往來し、所作あるに隨ふなり。上に同じく金剛無勝定に入るなり。

[129] 曩莫三曼多嚩日囉二合赧係係 種子、呼召なり。 緊旨囉拽徙 何ぞ速に作さざるなり。約勅を爲す義なり。人の分に處して、何ぞ速に此の事を作さずして、而して稽遲するや、と云ふが如し。 疑哩二合佷拏二合疑哩二合佷拏二合 食啖の義、諸の煩惱を〔呑〕するなり。 佉那佉那 此の四字は珍經に依て加ふるなり。 鉢哩布羅野 充滿なり、謂く極食して、行人の勝願を滿足せしむる金剛行の三昧なり。 薩嚩緊迦囉赧娑二合鉢囉二合底尾然 本より立つる所の願 娑嚩二合賀引

十四、辨事の化現（持明院）

次に西方に往いて　無量の持金剛を畫け　種種の金剛印の　形色各差別あり　普く圓

かなる淨光を放つ　諸の衆生の爲の故に　中に[130]般若尊を置け　不動の曼荼羅は、　風輪

と火と倶に　[131]涅哩底の方に依つて　大日如來の下に　不動の如來使あり、　慧力と羂索と

を持し　頂髮を左肩に垂れ　一目にして諦觀し、　威怒にして身に猛焰あり、　安住して

盤石に在り　面門に水波の相あり、　充滿せる童子形　光焰は火界印なり。　風方の忿怒

尊は　謂ゆる勝三世なり　威猛の焰に圍遶せられ　寶冠にして金剛五股を持し　自の身

命を顧みず　專ら請して教を受く。　般若の右邊に　[132]焰曼威怒王を置け　青水中の座に

乘じ　種種の器杖を持し、　髑髏を瓔珞と爲し、　頭に冠し虎皮の裙あり　遍身は焰と同

然たり　四方を顧視して　師子奮迅の如くせよ　次に右に降三世なり。

【一二八】 Namaḥ samanta-vajrāṇāṁ sphoṭaya-vajra-sambhave svāhā.

【一二九】 Namaḥ samanta-vajrāṇāṁ he he kiṁ cirāyasi gṛhṇa gṛhṇa khāda khāda paripūraya sarva kiṁ karaṇa sva-pratijñāṁ svāhā.

【一三〇】 般若(prajña)菩薩。

【一三一】 涅哩底(nirṛti)西南隅。

【一三二】 焰曼(yamāntaka)

諸佛第一の威猛は、世間を殘害して、盡く法界に入れて、金剛の界に歸せしむるなり。

一二二 忙莽鷄の眞言に曰く

一二三 曩莫三曼多嚩日囉二合　𣝔怛哩二合種子　吒怛哩二合　吒吒は體、破壞の義なり。此の三昧に由て、無明住地の煩惱を殺するなり。此中の多聲は、卽ち是れ平等にして、如如の理に同する三昧なり。又吒は、是れ我慢を離るるなり。此の如如に住すれば、所有の我慢は、自然に無くなるなり。再び之を言ふは、最極の義なり。惹演底勝なり。法を以て、一切の障難を降伏して恐怖して伏せしむるは、卽ち戰の義なり。娑嚩二合賀

金剛針の眞言に曰く

一二四 曩莫三曼多嚩日囉二合　𣝔薩種子　嚩達磨一切法なり　儞吠吠達儞穿なり、金剛慧の針を以て一切の法を貫達するなり。嚩日囉二合素儞金剛針なり、金剛鋭利の智にて、法性を觀穿するなり。縛囉儞勝願なり先に願を發して以て、得たまへり。當に我等、して皆諸法の原に達せしむべし。娑嚩二合賀引

金剛鎖の眞言に曰く亦金剛商佉羅(śṛṅkhalā)と名く、大智の鎖なり。

一二五 曩莫三曼多嚩日囉二合　𣝔歸命一切金剛なり。佛の智印にして、佛の別名なり。金剛は卽是れ諸　吽引、三解脫、前の如し。　滿馱滿馱野縛なり、壯士の無力の人を捉ふるが如きなり。又二種の縛を離ると說く、卽ち是れ煩惱・所知の縛なり、　冒吒冒吒野縛の上に重縛して、牢固ならしむ。其の頸を斷じて身分をして破壞せしむるが如く、二障を碎かしむることも、亦復　嚩日嚕二合娜婆二合吠是れ金剛生なり。金剛界是の如し。の大智より生ずるなり。薩嚩怛囉二合、一切處なり。鉢羅二合底賀帝能害あること無きなり。金剛實體は、一切能く損害する無きが如し、此の金剛體性を、識達するに由るが故に。娑嚩二合賀引

降三世金剛の眞言に曰く立忿怒月黶と云ふ。此の金剛は、佛の毫相にありて生ずるなり。亦云く毫相は淨にして、由し滿月の如し。

一二六 曩莫三曼多嚩日囉二合　郝紇林二合、攝召なり請召なり、因を離れて無垢なり。傍に點あるは、極忿怒なり。　吽前に準ず　泮吒吒呵するなり。一切の魔障を　娑嚩二合賀引

一切の持金剛の眞言に曰く謂く佛刹の微塵數の金剛は、同じく無勝定に入り、心中に光を出し、光の中に、此の眞言を顯はすなり。

一二七 曩莫三曼多嚩日囉二合　𣝔吽種子　吽吽　發吒　發吒障を呵するなり。二障を再呵するなり。　髯髯生なり　娑嚩二合賀引

【一二二】忙莽鷄(Māmakī)

【一二三】Namaḥ samanta-vajrāṇāṃ triṭa triṭa jayati svāhā

【一二四】Namaḥ samanta-vajrāṇāṃ sarva-dharma-nirvedhani vajra-sūci-varade svāhā.

【一二五】Namaḥ samanta-vajrāṇāṃ hūṃ bandha bandha moṭaya moṭaya vajrodbhave sarvatrâpratihate svāhā.

【一二六】Namaḥ samanta-vajrāṇāṃ hriḥ hūṃ phaṭa svāhā.

【一二七】Namaḥ samanta-vajrāṇāṃ hūṃ hūṃ hūṃ phaṭa phaṭa.

して四牙を現はし　夏時雨雲の色にして　[一〇七]阿吒吒の笑聲あり　金剛寶をもつて瓔珞とし
衆生を攝護するが故に　無量の衆圍遶す　乃至百千手ありて　衆の器械を操持す　是
の如くの忿怒等は　皆蓮華の中に住す　前の金剛鎖に準じて　二空を開きて風を持す
諸金剛は地を持す　金剛拳を內縛にす　二空並べ竪てて、二肘を相近づけ、稍々高く擧げて、以て槌の形に像どり右に向て視ること瞋て打つが如くす　忿
怒軍吒利は　瑩として碧頗梨の如し　威光は劫火の如く　赫奕として日輪に背き　眉
を顰して笑怒の容にし　虎牙は上下に現はれ　千目ありて視るに瞬きせず　威曜は盛ん
にして日の如し　千手の各〻に　金剛の諸器杖を操持し　首に金剛寶を冠し　龍を瓔
とし虎皮を裙とし　月輪の中に在りて　瑟瑟の盤石に坐し　忿迅の　[一〇八]倶摩羅は　青蓮
華に住し　身は黃雲の色に作し　髮は赤にして上に撩亂し　瓔珞と釧とにて身を嚴り、
虎皮を用て跨に纏し　慧には杵、定には無畏　纔に眞言の句を持すれば　化佛口より出
づ　次に　[一〇九]烏芻沙摩は　大忿怒形を作し　黑金にして光焰起り　右には劍、下には羂
索、棒及び三股叉の　器杖には皆焰起り　奉敎等の金剛あり　是の如く等を上首とし
て　十佛刹塵數の　持金剛衆と倶なり

金剛手菩薩は大金剛無勝三昧に住す

更に等比無きを名けて。無勝と爲す。諸佛金剛の躰を現覺し、能く如來智を持するに由るが故に執金剛と名く。

[一一〇]眞言に曰く　內縛五股の印を縛日羅播捉(Vajra-pāṇi)と名く

[一一一]曩莫三曼多嚩日囉二合赧 歸命金剛手　嚩 種子　戰拏 極惡中の極惡なり、謂く形狀暴惡にして。過るものあること無きを示す。乃至一切の世間を噉食して、餘あることなからしむ。戰の字は、遮の聲にして、是れ生死なり。上に點あるは、是れ大空の義なり。言、此の生死を大空に同ずるなり。拏は是れ戰敵なり。猶ほ生死を離れて、大空に等しきがごとし、是を以て、能く對敵するものなきなり。　摩賀嚕灑拏 大忿怒なり。上に說く所の如く、能く離敵する者無きは、大忿の所以なり。吽 前の三解脫に同じ、以上の法は衆生を恐怖して、生死を離れ、三解脫を得せしむるなり。卽ち是

【一〇七】阿吒吒(aṭaṭa)笑聲自然音。

【一〇八】倶摩羅(kumāra)童子。

【一〇九】烏芻沙摩(Ucchuṣma)穢跡又は不淨。

【一一〇】金剛手菩薩眞言。

【一一一】Namaḥ samanta-vajrāṇām va caṇḍa-mahā-roṣaṇa hūṃ.

十三、擁護行者化現（金剛手院）

復次に祕密主よ　今第二壇を說かん　正等四方の相　金剛印にて圍遶す　一切妙金色なり　內心に蓮華敷けたり　臺に[一〇四]迦羅奢を現じ　光色は淨月の如し　亦大空點を以て周匝して自ら莊嚴す　上に大風の印を表し　靉靆として猶し玄雲のごとし　鼓動せる幢幡の相あり　空點を標幟と爲す、　其の上に猛焰を生じて　劫災火に同じ　而して三角形を作り　三角を以て之を圍み　光鬘の相は周普し　晨朝日暉の色あり　是の中に盋頭摩あり　朱黰猶ほし劫火のごとし　彼の上に金剛印あり　流散して輝焰を發し　持するに[一〇五]吽字の聲を以てせよ、　勝妙種子の字なり　先佛はこれを汝に　勸勇の曼荼羅なりと說けり。　忿怒金剛衆なり　次に東の第一より布せよ

發生金剛部菩薩・金剛鉤菩薩・手持金剛菩薩・金剛薩埵菩薩・金剛鋒菩薩・金剛拳菩薩・忿怒月黶菩薩第二に虛空無垢持金剛菩薩・金剛牢持菩薩・忿怒持金剛菩薩・虛空無邊超越菩薩・金剛鎖菩薩・金剛持菩薩・住無戲論菩薩・第三次に金剛持輪菩薩・金剛銳菩薩・適悅持金剛菩薩・金剛牙菩薩・離戲論菩薩・持妙金剛菩薩・持金剛利菩薩・使者軍吒利、及び金剛使者、次に使者大力・金剛鉤孫婆・金剛眷屬拳・金剛使童子・金剛王菩薩あり

部母忙莽鷄は　亦堅慧の杵を持す三股　身を嚴るに瓔珞を以てし　彼の右に金剛針あり　使者の衆は圍遶し　微笑して同じく瞻仰す　獨股は堅利慧なり　內縛して風輪を申べて空に入る　左に[一〇六]商佉羅を置き　金剛鎖を執持して　自部の使者と俱なり　其の身は淺黃色にして　智杵を標幟と爲す　四輪を背けて相叉へ　旋轉して慧を定に加へよ　執金剛の下に於て　忿怒降三世ありて、　大障者を摧伏す　號を月黶尊と名け　三目に

【一〇四】迦羅奢(kalaśa)水瓶。

【一〇五】吽字 [illegible]

【一〇六】商佉羅(Śṛṅkhala)鎖。

[九四] 唵婆誐嚩底娜引曩地跛帝尾娑嘌二合惹引布羅野娜引難娑嚩二合賀引引

戒波羅蜜菩薩の眞言に曰く

[九五] 唵試引囉駄引哩捉婆誐嚩底吽郝

忍波羅蜜菩薩の眞言に曰く

[九六] 唵婆誐嚩底乞鏟引二合底駄引哩捉吽發吒

精進波羅蜜菩薩の眞言に曰く

[九七] 唵尾引哩野二合迦哩吽尾引哩裔二合尾哩裔二合娑嚩引二合賀引

禪波羅蜜菩薩の眞言に曰く

[九八] 唵婆誐嚩底薩嚩播引跛賀引哩捉摩賀引奈引底曳引二合吽吽吽引發吒娑嚩引二合賀引

般若波羅蜜菩薩の眞言に曰く

[九九] 唵地引室哩引二合輸嚕二合多尾惹曳娑嚩引二合賀引

方便波羅蜜菩薩の眞言に曰く

[一〇〇] 唵摩賀引每怛囉二合唧帝娑縛引二合賀引

願波羅蜜菩薩の眞言に曰く

[一〇一] 唵迦嚕捉迦嚕捉賀賀賀糝引

力波羅蜜菩薩の眞言に曰く

[一〇二] 唵娜麼額母儞帝吽引賀賀賀引吽弱

智波羅蜜菩薩の眞言に曰く

[一〇三] 唵麼麼枳孃引二合曩迦哩吽引娑嚩二合賀引

【九四】 Oṁ bhagavati-dānâdhipate visalija-prāyadānaṁ svālā.

【九五】 Oṁ śīla-dhārini-bhagavate hūṁ haḥ.

【九六】 Oṁ bhagavati-kṣānti-dhāriṇi hūṁ phaṭa.

【九七】 Oṁ virya-kari virye virye svāhā.

【九八】 Oṁ bhagavati-sarva-pāpa-harini(?) mahā-dātye hūṁ hūṁ hūṁ phaṭa.

【九九】 Oṁ dhi-śrī śrutu-vijaye svāhā.

【一〇〇】 Oṁ mahā-maitra-citte svāhā.

【一〇一】 Oṁ karuṇi karuṇi ha ha ha saṁ.

【一〇二】 Oṁ damani-mudite hūṁ ha ha ha hūṁ jaḥ.

【一〇三】 Oṁ mama jñāna-kari hūṁ svāhā.

八六 曩莫三曼多沒馱喃引憾種子誐誐曩虚空なり阿難多無量なり遇者囉行なり、無量の行は、虚空に同なり。娑嚩二合賀引

虚空慧菩薩の眞言に曰く（誐誐曩摩帝（引）(Gaganamati)）

八七 曩莫三曼多沒馱喃引㘕種子斫吃羅二合、法輪なり嚩㗚底二合、轉なり、言く聖者は、先づ此の法輪を得玉へり今は謂く一切の有情に、此の法輪を轉じ玉ふなり。娑嚩二合引賀引

蓮華印菩薩の眞言に曰く

八八 曩莫三曼多沒馱喃引倶嚩隷野娑嚩二合引賀引

清淨慧菩薩の眞言に曰く（尾秫馱摩帝（引）(viśuddhamati)）

八九 曩莫三曼多沒馱喃引蘖丹二字種子達麼法なり三婆嚩生なり、言く此の菩薩は、法の自在を得、佛の境界に同じ、佛より生するが故に、法生と名くるなり。娑嚩二合賀引

行慧菩薩の眞言に曰く（梵に左里怛囉摩帝（引）(caritramati)）

九〇 曩莫三曼多沒馱喃引地藍二字種子鉢納麼二合印は蓮華阿頼野藏なり、是の菩提心彼の藏より生ず。娑嚩引二合賀引

安住慧菩薩の眞言に曰く

九一 曩莫三曼多沒馱喃引吽壤智弩納婆二合嚩生なり娑嚩引二合賀引

出現智菩薩の眞言に曰く

九二 曩莫三曼多沒馱喃引爾種子日囉二合悉體二合囉沒弟布囉嚩二合嚩怛麼二合滿怛囉二合娑囉娑嚩二合賀引

執蓮華杵菩薩の眞言に曰く

九三 曩莫三滿多沒馱喃引嚩日羅二合迦摩囉娑嚩二合賀引

檀波羅蜜菩薩の眞言に曰く

【八六】Namaḥ samanta-buddhānāṁ haṁ gaganānanta-gocara svāhā.

【八七】Namaḥ samanta-buddhānāṁ raṁ cakra-varti svāhā.

【八八】Namaḥ samanta-buddhānāṁ kuvalayā svāhā.

【八九】Namaḥ samanta-buddhānāṁ ga taṁ dharma-saṁbhava svāhā.

【九〇】Namaḥ samanta-buddhānāṁ dhi raṁ padmālaya svāhā.

【九一】Namaḥ samanta-buddhānāṁ hūṁ jñānodbhava svāhā.

【九二】Namaḥ samanta-buddhānāṁ ji vajra-sthira-bodhi-pūrva-ātmatra-sara svāhā

【九三】Namaḥ samanta-buddhānāṁ vajra-kamala svāhā

の境界に住し玉ふ。自の種子を種と為し　智者尊の北に布くは、壇波羅蜜菩薩・戒波羅蜜菩薩・忍波羅蜜菩薩・精進波羅蜜菩薩・禪波羅蜜菩薩・般若波羅蜜菩薩・方便波羅蜜菩薩・願波羅蜜菩薩・力波羅蜜菩薩・智波羅蜜菩薩なり。次に金剛藏菩薩・蘇悉地羯囉菩薩・金剛針菩薩・蘇婆呼菩薩・無垢逝菩薩・共發意轉輪菩薩・生念處菩薩・忿怒鉤觀自在菩薩・不空鉤觀自在菩薩・千手千眼觀自在菩薩を置け、次に曼荼羅菩薩・金剛明王菩薩・金剛將菩薩・軍吒利菩薩・不空金剛菩薩・不空供養寶菩薩・孔雀明王菩薩・一髻羅王菩薩・十一面觀世音菩薩を置け。

印形は法教の如くせよ　尊の密は慈氏に同じ　空にて水の中節を持せよ　次に虚空無垢は　二手慧刀の印にせよ　虚空慧は法輪にせよ　蓮華印は蓮華なり　清淨慧は商佉にせよ　行慧は敷蓮華にせよ　安住慧菩薩は　多羅の慧を稍ゝ開け　出現智（此の間に古本に脱落あり）　執杵は五股の印なり　次の十波羅蜜は　右を仰ぎ火にて空を持せよ　內縛にして二空を竪て前印の風は幢の如くせよ　精進は風を舒べ散ず。禪は右を仰むけ左を安ず、　般若は卽ち梵夾なり　地・水に空輪を加へ　火を竪てて風を側め合はせよ、　右を竪てて施無畏にせよ　力の密は戒に同じく　火風輪を相合はす　外縛して地輪を交へ　風は圓に火輪を幢にせよ。

[八三]虚空藏菩薩、清淨境界に住する（能く自心の本性清淨を知り、空に衆色を含み、形に隨て群生を利す。）三昧の眞言に曰く

[八四]曩莫糝曼多沒駄喃伊阿迦奢（虚空なり）三曼多（等なり、一切法は、虚空に等し）弩蘖多（得なり、前には知の義、起の義と云ふ。此の中に、得の義と云ふは。亦相會へり。）尾質怛藍（種種の雜色なり。）嚩囉二合、（衣の義）達羅（被着なり　種種の衣を着するも、虚空の如く、而も無色にして、能く種種の形を現ず。此の菩薩も亦爾なり。能く衆生の種種の願を滿じ、種種の形を現じて有情を利益するなり。）婆嚩二合賀引

[八五]虚空無垢菩薩の眞言に曰く　次に莪莪嚢（引）摩囉（Gagan amalā）

【八三】　虚空藏菩薩眞言

【八四】　Namaḥ samanta-buddhānāṁ i ākāśa-samantānugata-vicitrāṁ varadhara svāhā.

【八五】　虚空無垢は無垢逝とも稱す。

七七 曩莫三曼多沒馱喃引訶訶訶 三因なり、謂く是れ三乘の因なり。尾娑摩二合曳 希有なり、一切有情は、常に我相種種の煩惱あり、若し眞言を念ずれば、我相即ち除かん此を希有と爲す、亦甚だ希奇なり 娑嚩二合賀引

寶處菩薩の眞言に曰く 囉怛曩(二合)迦囉(Ratnakara)

七八 曩莫三曼多沒馱喃引難髯種子係摩賀摩訶 引、大中の大なり、寶處とは、寶の大海の中に生ずるが如く、彼の心より生ずるが故に、寶處なり。娑嚩二合賀引

寶手菩薩の眞言に曰く 囉怛曩(二合)播抳(Ratna-pāṇi)

寶は手より出生す。言く聖者は寶より生ず。何の寶より生するや。謂く菩提心より生す。

七九 曩莫三曼多沒馱喃引衫種子囉怛怒二合、寶なり 嗢婆二合嚩生なり 娑嚩引二合賀引

持地菩薩の眞言に曰く 駄囉抳駄羅髯(Dharaṇi-dhāra)

八〇 曩莫三曼多沒馱喃引喚種子達囉尼 地なり、地は能く一切の物を持するが故に、以て名と爲す 達囉 持なり、諸佛は衆生を荷負するが故に、持と名く、亦衆生をして同じく此を得せしむるなり。娑嚩引二合賀引

寶印手菩薩の眞言に曰く 囉怛曩(二合)謨捺囉(二合)賀薩多(Ratna-mudrā-hasta)

八一 曩莫三曼多沒馱喃引唅種子囉怛曩二合寶なり 儞喇爾多 生なり、諸佛の寶より生ず 娑嚩二合賀

堅固意菩薩の眞言に曰く 涅哩(二合)荼地也(二合引)捨也(Dṛḍhādhyāśaya)

八二 曩莫三曼多沒多喃引詖種子嚩日囉二合三婆嚩 金剛不壞の智印よりして生ずるが故に、以て名と爲すなり 娑嚩引二合賀引

十二、法財福德の化現（虚空藏院）

西方の虛空藏は　勤勇にして白衣を被　圓内の悅意の壇に　大白蓮華座あり　大慧刀
印を持し玉へり　是の如くの堅利刄は　鋒鋭なること猶ほし氷霜のごとくにして、　清淨

【七七】 Namaḥ samanta-buddhānām ha ha ha vismaye svāhā.

【七八】 Namaḥ samanta-buddhānām na jaṁ he mahāmaha svahā.

【七九】 Namaḥ samanta-buddhānām ḍbaṁ ratnodbhava svāhā.

【八〇】 Namaḥ samanta-buddhānām jaṁ dharaṇi-dhara svāhā.

【八一】 Namaḥ samanta-buddhānām haṁ ratna-nirjata svāhā.

【八二】 Namaḥ samanta-buddhānām ṅaṁ vajra-saṁbhava svāhā.

除一切熱惱菩薩の眞言に曰く薩嚩娜(引)賀鉢羅(二合)捨弭曩(sarva-daha-praśamina)

七五 曩莫糝曼多沒馱喃引縊種子係嚩囉與願なり、離因の法を以て、一切衆生の願を滿するなり。嚩囉鉢囉二合鉢多先得なり、先に所願を得ざれば、云何んぞ能く人に授與せん。菩薩所立の誓願は、今滿足す。今本願を憶して而して、一切衆生に與へて、諸の熱惱を除き、一切衆生を化して、佛道を成せしむるなり。娑嚩二合賀引

不思議慧菩薩の眞言に曰く郡進底也、麼底那難多(Acintyamatinandata)

七六 曩莫糝曼多沒馱喃引汚種子薩嚩捨一切願なり 鉢哩布囉迦二合、滿なり、謂く一切衆生の種種の勝願を滿すること、如意珠の如し。如如意珠を滿するなり。娑嚩二合賀引

北方に地藏尊あり　其の座は極て巧嚴ならしめよ　身は焰胎に處し、　雜寶をもつて地を莊嚴し　綺錯互に相間へ　四寶をもつて蓮華と爲し　聖者の安住し玉ふ所は　金剛のごとく壞す可らず　行境界の三昧なり　及び大名稱　無量の諸の眷屬あり。

日光菩薩・堅固深心菩薩・並に持地菩薩・寶手菩薩・寶光菩薩・寶印手菩薩・不空見菩薩・除一切憂冥菩薩なり。

十一、攝取不捨の化現（地藏院）

祕密は內に縛を爲して　火輪を竪てて散開し　二空は風側を持するなり。　右に寶處尊を觀ぜよ、　慧を散じて空・風を寶にす　寶の上の三股の印となる。　寶掌は寶上に於ける一股金剛の印なり　慧は拳にして水輪を舒べ空は三を押せ。　持地は右の寶の上にあり　二手を金剛印とし　寶印手は寶の上に　五股金剛の印をなせ　堅固意は右の寶に　羯磨金剛の印をなせ　定慧を蓮華合にして　空を並べて微しく擧げ開け

地藏菩薩の眞言に曰く尾薩縛(引)捨(引)鉢哩布羅迦(Visarvāśa-paripūraka)

【七五】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ i he varada-vara-prāpte svāhā.

【七六】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ u sarvāśa-paripūraka svāhā.

六八
曩莫糝曼多沒駄喃引訶娑難三字は種子なり。尾麼底無慧なり。掣諸迦裁斷なり、無智を裁斷して、智慧を生ぜしむ、亦是れ斷壞決斷の義、猶ほし能斷金剛般若の義の如きなり。

施無畏菩薩の眞言に曰く薩嚩薩怛嚩(二合引)婆閻娜娜(Sarvasattvābhayam-dada)

六九
曩莫糝曼多沒駄喃引囉娑難三字種子阿佩演那那無畏施なり。何の法をか無畏施と爲すや、謂く阿字に住して、一切の生を離れ、尊者の所願已に滿せり。我等は未だ得ず願くば我れと及び一切衆生とに施し玉へ娑嚩二合賀

除一切惡趣菩薩の眞言に曰く梵に薩縛(引)播(引)野惹訶(Sarvapāyañjaha)

七〇
曩莫糝滿多沒駄喃引特慉二合娑難阿毘庾二合達囉捉擧なり薩怛嚩二合駄敦衆生界なり、一切衆生は、無始の無明に覆はるるが故に、常に三惡趣の中にあり、尊者は以に五力を得へり。願くば之を擧げて清昇ならしめ、一切衆生をして、三界を出づるを得せしむるなり。娑嚩引二合賀引

救護慧菩薩の眞言に曰く跛里怛囉(二合引)拏捨也摩底、(paritrāṇa āśayamati)左拳を腰側に安ず、亦哀愍慧と名く．

七一
曩莫糝曼多沒駄喃引尾訶沙難四字の種子係摩賀引摩賀引、大なり。大中の娑摩二合囉り。憶念な鉢囉二合底然本願なり一切の苦を除くことを願ふが故に、故に名けて救護慧と爲す。今は彼の名を呼んで、本願を憶せしめて、而して一切を救護するなり。娑嚩二合引賀引

大慈生菩薩の眞言に曰く摩賀(引)每周哩也(二合)毘喩(二合)嗢蘖(二合)多(Mahā-maitryabhyudgata)

七二
曩莫糝曼多沒駄喃引諂種子なり娑嚩合二制妬心の義なり嗢蘖合二多生なり、言く、此の慈は自心より生じて、他より生得せざるが故に、大慈と名く、謂く自性清淨心より生じて、他の種子心より生ぜざるが故に、自心生と名くるなり。娑嚩合二賀引

七三
悲旋潤菩薩の眞言に曰く摩訶迦嚕拏鉢囉(二合)捉多(Mahā karuṇa-praṇidha)亦大悲旋潤と名く。

七四
曩莫三曼多沒駄喃引焰種子迦嚕儜悲なり、此の菩薩は悲に緊屬して、自在なることを得す、常に悲の爲に牽かれて、一切の苦を除くが故に沒嚩昵多念なり、本尊の願は衆生を救ふにあり、今當に本願を憶して、我等を救護し玉へ娑嚩二合賀引

【六八】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ kasanāṃ vimati-chedaka.

【六九】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ ra sa nāṃ abhayana svāhā.

【七〇】 Namaḥ samantā-buddhānāṃ dhvaṃ sanāṃ abhyndd ārani-sattva-dhātuḥ svāhā.

【七一】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ vi ha sa nāṃ he mahāmaha smara pratijñāṃ svāhā.

【七二】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ thaṃ svacetodgata svāhā.

【七三】 悲旋潤は又悲念若しくは悲愍と云ふ。

【七四】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ yaṃ karuṇa mṛḍita svāhā.

行者は左方に於て、次に大名稱の除一切蓋障の大精進の種子を作れ。謂く眞陀摩尼なり、火輪の中にあり、翼從する端嚴の身は、當に知るべし彼の眷屬なり。悲愍菩薩・破惡趣菩薩・施無畏菩薩・賢護菩薩・不思議慧菩薩・慈發生菩薩・折諸熱惱菩薩なり。祕密の標幟を、次第に應に安布すべし。名稱除障尊は、悲力三昧に住す。智福を虛心合して、地・水・空を月に入れ空は水中を持す風火輪を並べ立て、摩尼珠を持するが如くせよ。施無畏尊の右に除疑怪あり、內縛にして火輪を竪て、寶瓶に一股を置くがごとくせよ。救護慧菩薩は、慧を舉げて施無畏にせよ。除一切惡趣は、前印と相殊ならず、六六悲手を當に心に在くべし。大慈生菩薩は、慧の風と空とにて華を持して散ずること三たびすべし。悲旋潤は右に置け。悲念を心上に在き、火輪の指を垂れ屈せよ。除一切熱惱は、垂施願の手を作れ。甘露水流注して、遍く諸指の端にあり、次に不思議慧は、施無畏の手を以て、空と風とは珠を持するの狀にし、火等は散じて微しく屈せよ。

除一切蓋障菩薩の眞言に曰く

薩縛儞縛囉拏尾瑟劍避(sarva-nivaraṇa-viṣkambhi) 法性の悲は自在力を以て、能く一切衆生の蓋障を除き、障に於て自在を得。

六七囊莫糝曼多沒駄喃引阿種子なり薩怛嚩有情二合、係多利益なり弊嗢蘗二合多發起なり、起生なり、其の善性を發起して顯現せしむるなり。怛囕二合、怛は是れ即ち多字なり、如如の義、囕は是れ囉にして、無垢の義なり。一點を加ふれば、是れ塵の義、即ち大空入證なり。囕囕二謂く四垢を除くなり、一は愛見垢、二は緣覺垢、三は聲聞垢、四は菩薩垢なり、謂く四垢を除て清淨心に入るなり。娑嚩二合賀引

除疑怪菩薩の眞言に曰く、

憍覩褐羅(Kautukara)此を譯して除疑怪と爲し、或は除垢と云ふ。衆に疑ふ所の事あつて、決する能はざれば、此の菩薩は卽ち往て、而して其の疑網を斷じ、與に不請の友と爲るなり。梵に倶賀哩鑁と云ふ。

【六六】悲手 左手。

【六七】Namaḥ samanta-bud=dhānām āḥ sattva-hitābh=yudgata traṁ traṁ raṁ raṁ svāhā.

計設尼の眞言に曰く 計(引)設寧(Keśini)

六〇 曩莫糝曼多沒馱喃引 枳履二合 種子 係係 召呼 矩忙引嚩計 二童子なり、女聲に作て子を呼ぶ、亦是れ文殊の三昧なり。 那耶 與願なり 壤難二合 智なり 娑麼二合 羅 昔を憶す 鉢羅二合 底然 願意なり、云く、尊者よ、文殊所得の勝願を我に授與し玉へ。 娑嚩二合 賀引

烏波計設儞の眞言に曰く 烏波計始寧(Upakeśini) 智觀を以て無智を穿す。

六一 曩莫糝曼多沒馱喃引 儞履二合 種子 頻那野 穿なり 壤難 智なり。前句は阿の聲有つて、相連る、即ち是れ無智なり。言く妙慧を以て無智を穿て、實理に達するなり。 係矩忙哩計 童女は三昧の義なり、聲を以て而も呼召す。 女 娑嚩二合 賀引

地慧菩薩の眞言に曰く 縛蘇摩底(Vasumati)亦財慧と名く、如意幢を憶念するなり。

六二 曩莫糝滿多沒馱喃引 呬履二合 種子 係娑麼二合 囉 憶念なり 壤曩二合 計覩 幢なり、此の妙慧の幢に由るが故に、諸魔を摧破す。今當に憶念して、我をして亦爾かせしむべし。 娑嚩二合 賀引

質怛羅童子の眞言に曰く 或質多哩(citri)

六三 曩莫糝曼多沒馱喃引 弭履二合 娑嚩二合 引賀引

召請童子の眞言に曰く 鉤に因て引いて菩提に至る、

六四 曩莫糝曼多沒馱喃引 阿迦囉灑二合 野 招召なり、召請と攝召と、皆是れ鉤來の義なり。 薩鑁矩嚕 一切作なり、取與等皆是れなり、謂く尊者文殊の指授する所の事は、皆當に之を作すべし。 阿然矩忙囉 學者の身なり。 寫娑嚩二合 賀引

不思議童子の眞言に曰く 忿怒形を示現し、願を滿し、教を奉持し、成を成就せしむ。

六五 曩莫糝曼多沒馱喃引 阿尾娑摩二合 野儞曳娑嚩二合 賀引

十、如來の除障三昧 （除蓋障院）

【六〇】 Namaḥ samanta-buddhānām kṛ he he kumārike dāya-jñanāṁ smara pratijñāṁ svāhā

【六一】 Namaḥ samanta-buddhānām dṛ bhinnayā-jñānāṁ he kumārike svahā -

【六二】 Namaḥ samanta-buddhānām hṛ he smara jnāna-ketu svāhā.

【六三】 Namaḥ samanta-buddhānām mṛ svāhā.

【六四】 Namaḥ samanta-buddhānām ākarṣaya-sarvaṁ kuru ājñaṁ kumārasya svāhā.

【六五】 Namaḥ samanta-buddhānām avismaya niye svāhā.

青蓮は虚心合にして　*火輪にて水の背を持し、　二風は空の甲を捻ず。　右の光網菩薩は、衆寶網を執持し、　種種の妙瓔珞あり　寶蓮華座に住して、　而も佛の長子を觀ず。　定拳に鉤印を執り、　寶輪を火中に持し、　寶冠に寶印を持す。　右の蓮には無垢光あり、　青蓮にして而も未敷なり。　前印を舒べて微しく屈す(佛身の光の如くす)　[五四]計設儞は刀を持し、　慧拳は風火を竪つ、　(空は地・水の甲を押し、擬く勢の如くす。)　[五五]烏波計設儞は、　前印の火輪を戟のごとくす(空は風・地水の甲を押す。)　[五六]質多羅童子は、　右拳の風輪を杖とす。　召請は風を鉤と爲す(外拳なり)　次に五種の奉教あり、　不思議童子は、　定慧を内縛拳にし、　空を風の甲背に入るるなり、　是の如くの五使者に五種の奉教者あり、　二衆共に圍遶して、　無勝者を侍衞す。　文殊の三補吒(Sampuṭa 虚心合掌)火を反して、二水の背を押し、二風にて二空輪を捻ず。

文殊師利菩薩の眞言に曰く(滿祖室里 Mañjuśrī)

[五七]曩莫糝曼多沒馱喃引　㘕係係(呼召なり、訶聲は因(hetu)なり、謂く二因を離れて、二乘の境界を超ゆ、係係(he he.)童子よ、解脱の道に住する者は、本所立の願を憶念して、來降するなり。)倶摩羅迦(童子なり。諸魔を破壞するなり。)　尾目乞底(解脱)二合　鉢他悉體二合　多(善道なり。住する。)(言く何れの處にか住する。謂く解脱道なり。)　娑麼二合囉(憶念なり)　娑麼二合囉(憶念なり)　鉢羅二合底然(尊者の所願は、悉く一切衆生を度して、我れの如く異なること無けんと、今は昔を憶念する誓なり。)　娑嚩二合賀引

光網菩薩の眞言に曰く　惹𡀔寧鉢羅(二合)婆、(gālini-prabha)諸の含識を攝して、解脱地に住せしめんが爲めに、諸佛大德を招く、即ち鉤の義なり。

[五八]曩莫糝曼多沒馱喃引　髯(種子なり)　係係倶摩羅忙野(幻なり)　蘖多(知なり、一切法の如幻を知る。)　娑嚩二合婆嚩(性なり)　悉體多(住なり。諸法の如幻を知て、諸佛の實性中に住す。)　娑嚩二合賀引

無垢光菩薩の眞言に曰く(種種無邊の行は亦種種の異形を現するなり、)

[五九]曩莫糝滿多沒馱喃引　係矩忙羅　尾質怛囉二合(種種)　蘖底(行なり)　矩忙囉　摩努娑摩二合囉(憶念所願)　娑嚩二合賀引

*火輪中指なり

【五四】 計設儞(Keśinī)

【五五】 烏波計設儞(Upakeśinī)

【五六】 質多羅(Citra)

【五七】 Namaḥ samanta-buddhānām maṁ he he kumāraka-vimukti-pathasthita smara smara pratijñām svāhā.

【五八】 Namaḥ samanta-buddhānām jaṁ he he kumāra-māyā-gata (?) -svabhāvasthita svāhā.

【五九】 Namaḥ samanta-buddhānām he kumāra vicitra-gati-kumāram anusmara svāhā.

[四四]曩莫三滿多沒駄喃引訖叉二合拏多羅閤劍

地藏の眞言に曰く

[四五]曩莫糝曼多沒駄喃引訶訶訶三因なり、謂く聲聞、緣覺、菩薩の因なり。凡そ諸の眞言は、自ら本尊の德を說く、此は總して地藏菩薩の德なり。素怛弩妙色身なり、自身極て淨なるが故に、妙色と名く、卽ち法身なり。娑嚩二合賀引

諸の奉敎者の眞言に曰く

[四六]曩莫糝曼多沒駄喃引地引室哩二合唅沒藍二合娑嚩二合賀引

九、如來の大智示現　（文珠院）

佛子應に諦聽せよ、次に東の第三院に、施願の金剛壇あり、四方相均普し、衞るに金剛印を以てす。當に彼の中に於て、火生曼荼羅を作るべし。內心に復妙善の青蓮華を安置す。智者[四七]曼殊音は、本眞言をもつて之を圍み、如法に種子を布して、而も以て種子と爲し、復其の四旁に於て、嚴飾するに青蓮を以てし、勤勇の衆を圖作せよ。先づ[四八]妙吉祥を安ぜよ。その身鬱金色にして、五髻を其の頂に冠し、猶ほし童子形の如くし。左に青蓮華を持し、上に金剛印を表し、慈顏に微笑を遍くし、白蓮華に坐し、妙相にして圓普の光あり、周匝して互に暉映し、而も佛の加持をもつて、神力三昧王に住し、及び無量の眷屬あり。

觀自在・普賢・對面護・對護・[四九]惹野・[五〇]尾惹野・嚩母嚕・[五一]爾多・[五二]阿波羅爾多あり、北には光網菩薩・寶冠菩薩・無垢光菩薩・月光菩薩・五髻文殊師利菩薩あり、南門の月に[五三]烏波髻失儞菩薩・奉敎菩薩・文殊の二使者・鈎召・四奉敎あり。

【四四】Namaḥ samanta-bud-dhānāṁ kṣaḥ ua tara yaṁ kaṁ
【四五】Namaḥ samanta-bud-dhānāṁ ha ha ka sutanu svāhā
【四六】Namaḥ samanta-bud-dhānāṁ dhi-śri kam mu(?) raṁ svāhā
【四七】曼殊音（Mañju-ghoṣa）妙音。卽ち文殊菩薩。
【四八】妙吉祥　梵に曼殊師利（Mañju-śri）
【四九】若野（Jayā）
【五〇】尾惹野（Vijayā）
【五一】爾多（Jita）
【五二】阿波羅爾多（Aparajita）
【五三】烏波髻失儞（Upakeśinī）

三八 多羅菩薩の眞言に曰く 多唎彌尾、(Tāradevi)船渡の人の大海を越して彼岸に至つて自在を得るが如し。

曩莫三曼多沒駄喃引 眈種子 羯嚕拏悲なり 嗢婆二合 吠生なり、謂く悲者なり。而して此の菩薩は觀音の眼中より生じて、由し法の實性を見るが如し、名て普眼と爲す、如如の體を見るなり。 多𭷓呼ぶ彼れを 多哩抳是れ度の義なり。初の多字を以て體と爲すなり。 娑嚩引二合 賀引

三九 毘倶胝菩薩の眞言に曰く 梵に勃哩倶胝(Bhṛkuṭi)、卽ち形は一切を恐怖して、永く永く四魔を離るるなり。

曩莫糝曼多沒駄喃引 勃哩二合種子 薩嚩婆野一切恐怖 怛羅二合、體と爲す。如如を 散儞又恐怖の義、前は是れ有の畏、後は是れ無の畏、一切衆生に於て恐怖あるが故に、無畏所を得ざるが故に、緣て我慢を生じて、我執自高し恐怖す。有畏を離れて、無畏を得せしむるなり。 吽引 娑頗二合 吒野殘害して障を破るなり。 娑嚩二合 賀引

大勢至菩薩の眞言に曰く 摩賀娑太(二合)摩、鉢羅(二合)鉢跢(Mahāsthāma-prāpta)

四〇 曩莫糝曼多沒駄喃引 參髯髯生の義なり。二重の上の上は煩惱、二の生のは所知障なり。阿字門に入れば卽ち不生、上に大空あり、點は謂く二障を除て、大空生を得るなり。索不動の義、種子なり。動法には生滅あり。動と不動とを經るは、皆是れ不安の相なり。傍に二點を加するは、涅槃に同じ、卽是れ堅住の義なり。已に二障を離れて、大空に同じ、諸佛の住の如し。娑嚩二合 賀引

耶輸陀羅(yaśodhara)菩薩の眞言に曰く

四一 曩莫糝曼多沒駄喃引 琰種子 野 輸駄羅野引 娑嚩二合 賀

白處尊菩薩の眞言に曰く 半拏羅嚩(引)悉儞(Pāṇḍuravāsini)

四二 曩莫糝曼多沒駄喃引 半種子 怛他引 櫱多體、如來なり。 尾灑野境界 三婆吠生なり、彼れより生ずるなり。 鉢娜麼二合、白花 忙履儞華鬘と爲すなり、身を嚴る具なり。是れ卽ち能く諸佛の功德を生じて、以て爲に法身を莊嚴するなり。 娑婆二合 賀引

馬頭明王の眞言に曰く 賀野佐里縛(Hayagrīva)無明の諸障を噉食し盡すなり。

四三 曩莫糝曼多沒駄喃引 唅種子 吽恐怖 佉那野諸障を噉食するなり。 畔惹打破するなり。 薩叵二合 吒野 破碎して盡さしむ 娑嚩二合 賀引

諸菩薩所說の眞言に曰く 野兎(引)訖多(二合)冐(引)地薩怛嚩(二合)(Yathākṛta-bodhisattva)

【三八】 Namaḥ samanta-bud=dhānāṁ ta karuṇodbhave tāre tāriṇi svāhā

【三九】 Namaḥ samanta-bud=dhānāṁ bhṛ sarva-bhaya-trāsani hūṁ sphāṭaya svāhā

【四〇】 Namaḥ samanta-bud=dhānāṁ saṁ jaṁj aṁ saḥ svāhā

【四一】 Namaḥ samanta-bud=dhānāṁ yaṁ yaśodharāya svāhā

【四二】 Namaḥ samanta-bud=dhānāṁ paṁ tathāgata-vi=ṣaya-saṁbhave padma-mā=lini svāhā

【四三】 Namaḥ samanta-bud=dhānāṁ haṁ hūṁ khāda-bhañja-sphāṭaya svāhā

四攝・內供養・蓮華使の諸眷屬と、佛刹微塵の衆となり。

彼の右に大名稱、聖者多羅尊あり、青と白との色相雜れり。中年女人の狀あり、合掌して青蓮を持し、圓光遍ねからざるなし。暉發せること、由し淨金の如し、微笑して鮮白の衣あり、內縛にして空風を竪てよ。左邊に毘倶胝あり。手に數珠鬘を垂れ、三目にして髮髻を持す。尊形は由し皓素のごとく、圓光ありて色に主なし。黃・赤・白相入はり、前印の風・火を交へよ。次に毘倶胝に近く、得大勢尊を畫け。被服は商佉の色、大悲の蓮華を手にし、滋榮にして未だ敷ざるを。圍遶するに圓光を以てし、明妃は其の側に住し、持名稱者と號す。一切の妙瓔珞をもつて、金色身を莊嚴し、鮮妙の華枝を執り、左に鉢胤遇を持し、密印は明王に準じて、上擧して風輪を屈せよ。聖者多羅に近く白處尊を住せしめよ。髮冠にして純白を襲、鉢曇摩華を手にし、定慧を虛心合して、空水を月中に入れ、聖者の前に於て、大力持明王を作れ、晨朝日暉の色にして、白蓮を以て身を嚴り、赫奕として焰鬘を成し、吼怒して牙を出現す、利爪にして獸王の髮あり、印は白處尊の如し、風を空輪の下に移して、相去ること穬麥の如くす、地藏は圓滿合にして、二空を風輪の側にし、是の如くにして應に器を成すべし。

觀自在菩薩の眞言に曰く阿縛路枳帝濕嚩羅(Avalokiteśvara)

[三七] 曩莫糝曼多沒馱喃引娑種子薩嚩二合怛他蘖多引、一切如來なり嚩路吉多觀なり。諸佛の觀なり。即ち是れ平等普眼觀なり。羯嚕儜麼野體なり、大悲を體とす。囉囉囉囉は是れ塵の義なり。阿字門に入れば無なり、即ち是れ無塵の義なり。空悲を以て體と爲すなり。三毒を離れて、無貪等の三善根を得、三解脫を生す。三重の囉あるなり。吽是れ因の義、恐怖の義なり。大威猛自在の力を以て、三重の塵障を怖れしめ、清淨を得て而して佛眼と同ならしむ、吽に訶字あり、是れ歡喜の義なり。上に空點あるは是れ三昧の義なり。惹種子即ち不生の義なり。或は初の薩字を以て體と爲す、警覺の義なり。娑嚩二合賀引

【三六】多羅(Tārā, Tib. sgrol ma) 救度母と云ふ。

【三七】Namaḥ samanta-buddhānāṃ sa sarva-tathāgatāvalokita-karuṇa-maya ra ra ra hūṃ jaḥ svāhā

一切佛心の眞言に曰く普印

三一 曩莫（歸命なり）三曼多沒駄喃引暗薩嚩沒駄冐地薩怛嚩二合（菩薩）紇哩二合捺野彌也二合（心なり）吠奢彌（入なり）曩莫薩嚩尾泥（興願なり）娑嚩二合賀引

虚空眼明妃の眞言に曰く誐誐曩嚕左曩(Gaganalocana)と名く、佛頂の印の如し。

三二 曩莫糝滿多沒駄喃引瞼誐誐曩嚩羅（願なり）落訖叉二合（相なり）彌誐誐曩（空なり）三迷曳（等なり）薩嚩覩（一切處なり）嗢蘗二合多（更に比なきなり）避娑囉（堅くして壞す可らず）三婆吠（生よりなり）入縛二合攞（光炎の明なり）那目（歸命）伽難（不空者なり）娑嚩二合賀引

一切菩薩の眞言に曰く普印

三三 曩莫糝曼多沒駄喃引薩嚩佗（一切なり）尾嬷底（無慧なり無慧を以ての故に癡と名く。）尾枳囉儜（除棄なり）達囉嬷二合駄睹（法界なり）喏佐多（生なり）參參訶娑嚩二合賀引

八、如來の大悲示現（觀音院）

北方に觀自在の　祕密曼茶羅あり、　佛子一心に聽け。　普く四方の相に遍じて、　中に吉祥の商佉あり。　三五鉢曇華を出生し、　開敷して果實を含む。　承くるに大蓮の印を以てし、　普光色は皓月と　商佉と軍那華との如し。　微笑して白蓮に坐し、　髻に無量壽を現じ、　觀三昧に住す。　蓮華部の眷屬あり、　最西の第一に置け。

馬頭觀自在菩薩と大明白身觀自在菩薩と、多羅觀自在菩薩と、觀自在菩薩と、毘倶胝菩薩と、大勢至菩薩と、蓮華部發生菩薩と、第二寂留明菩薩と、大吉祥明菩薩と、大吉祥大明菩薩と、如意輪菩薩と、耶輸陀羅菩薩と、窣覩波大吉祥菩薩と、大隨求菩薩と、次に白處尊菩薩と、大吉變菩薩と、水吉祥菩薩と、不空羂索菩薩と、豐財菩薩と、白身觀世音菩薩と、被葉衣菩薩と、蓮華・燈・塗香・

【三一】 Namaḥ samanta-bud=dhānāṁ aṁ sarva-buddha-bodhi-sattva-hṛdayaṁ nyāveśanim namaḥ sarva-vidhā(?) svāhā.

【三二】 Namaḥ samanta-bud=dhānāṁ khaṁ gagana varalakṣaṇo gagana-samaye sarvata dgatābhisāra-sambh=ave jvala-namāmoghānāṁ svāhā jvala

【三三】 Namaḥ samanta-bud=dhānāṁ sarvathā vimati-vikiraṇa-dharma-dhātu nirjāta saṁ saṁ ha svāhā

【三五】 鉢曇(Padma) 紅蓮。

即時に智生三昧に住して、而して出生種種巧智の百光遍照の眞言を說て曰く

金剛掌にして臂を頂上に舒べ、時時に搖動す。

二四 **曩莫三曼多沒駄喃引暗**

百光を布せんと欲せば暗字を其中に在け、次の輪に十二支を布け、伊等より鄔奥に至る。第二には迦等の二十五字、第三輪の迦引等は二十五字、第四の劍等は二十五、第五の却等は二十五、右に旋轉して布し、相接して三七遍加持せよ。

祕密主よ、これを如來祕密の印と名く。最勝の祕密なり。輒く人に授與すべからず。但し二五已灌頂にして、其の性は調柔なるもの精勤堅固にして、殊勝の願を發し、師長を恭敬して、恩德を念ずる者、內外清淨にして、自の身命を捨てて而して法を求むる者を除く。

七、如來大智慧母（遍知院）

復次に祕密主よ、　如來の漫荼羅は　猶ほし淨滿月の如くにして、　內に二六商佉の色を現ず、　一切の佛は三角にして　白蓮華にあり　空點を幖幟と爲し、　金剛印をもつて圍遶す　かの眞言王より　周匝に光明を放つ　佛は道樹の下に坐して　此を持して二七四魔を降せり　號して遍智印と名く、　能く多くの功德を具し　衆の三昧王を生じ　二八伽耶迦葉　二九優樓頻螺迦葉　次に其の北維に於て　導師諸佛の母をけ、　光曜ありて眞金色なり　縞素を以て衣と爲し、　遍く照すこと猶ほし日光のごとく　正受にして三昧に住す。

復次に七倶胝佛母菩薩等は、　復彼の南方に於て　大勇猛菩薩　大安樂不空　金剛三昧寶は、　救世の諸の菩薩　大德聖尊の印を號して滿衆願と名く　三〇眞陀摩尼珠は　白蓮の上に住す。

【二四】 Namaḥ samanta-bud=dhānāṃ aṃ

【二五】 已灌頂　傳法阿闍梨を指す。

【二六】 商佉(Śaṅkha) 貝。

【二七】 四魔　陰魔・死魔・天魔・煩惱魔。

【二八】 伽耶迦葉(Gayā-kāśyapa)

【二九】 優樓頻螺迦葉(Uruvilvā-kāśyapa)

【三〇】 眞陀摩尼(cintā-maṇi) 如意。

曩莫糝曼多沒馱喃引糝索娑嚩引二合賀引

萬德莊嚴(まんとくしやうごん)眞言に曰く　鼓音

曩莫糝曼多沒馱喃引唅鶴娑嚩引二合賀引

一切支分生の眞言に曰く　普賢菩薩

曩莫糝曼多沒馱喃引暗惡娑嚩引二合賀引

一九 世尊陀羅尼(せそんだらに)に曰く

曩莫三滿多沒馱喃引沒馱達囉尼娑沒㗚二合底沫羅馱曩迦嚩馱羅馱羅馱羅　野馱羅野　薩鑁婆誐嚩底阿迦引囉縛底三摩曳娑嚩二合賀引

文殊師利菩薩法住の眞言に曰く　有本に云く、青蓮、火風を開く

曩莫糝曼多沒馱喃引阿吠娜尾泥娑嚩二合賀

祕印は先に師子座、華印を稍〻相近け、坐上の青蓮、火風を散じ、上に梵夾の印を置き、印の上に蓮華あらしめよ。

迅疾彌勒菩薩(じんしみろく)の眞言に曰く

二〇 曩莫三曼多沒馱喃引摩訶引瑜引誐瑜引擬寧瑜詣読嚩唎欠惹利計娑嚩引二合賀引

その時に世尊は復三世無礙力(むかりき)、如來加持不思議力に依る、莊嚴清浄藏に依る三昧に住し玉ふ。卽(そく)時(じ)に世尊は二一 三摩鉢底(さんまはち)の中より、無盡界の無盡の語表を出し、法界力と無等力と正等覺信解力とに依て、一音聲を以て四處に流出して、普く一切法界に遍じて、虛空と等くして、至らざる所なし。

二二 眞言に曰く　根本の印は師より密授す、

二三 曩莫薩嚩怛帝佗引蘖帝引毘庾引二合　尾濕嚩二合目契毘藥二合薩㗚嚩二合他引阿上阿去引暗惡

Namaḥ samanta-buddhānā-
m saṃ saḥ svāhā

Namaḥ samanta-buddhānā-
m haṃ haḥ svāhā

Namaḥ samanta-buddhānām
aḥ svāhā

【一九】 Namaḥ sam..nta-bud-
dhānām buddha-dhāraṇi
dhāraya-sarva-bhagavati ā-
kāra-vati samaye svāhā

【二〇】 Namaḥ samanta-bud-
dhānām āḥ veda vide svāhā

Namaḥ samanta-buddhānā-
m mahā-yoga-yogini yogeś-
vari khaṃ jarike svāhā

【二一】 三摩鉢底(samāpatti)
等至。

【二二】 等虛空眞言

【二三】 Namaḥ sarva-tatāg-
atebhyaḥ viśva-mukhebhy-
aḥ sarvathā a ā aṃ aḥ

欠空なり 暗惡地なり 慘索含風輪なり 鶴藍大輪なり 嚕鑁水輪なり 嚩娑嚩引二合 賀藍嚕意眞言なり 娑嚩引二合 賀引

その時、毘盧遮那世尊は、復諸の大衆會を觀じて、執金剛秘密主に告げて曰く、佛子よ、祕密八印あり、最も祕密と爲す。聖天の位は威神の同ずる處なり。自の眞言道を以て標幟と爲す。其の曼荼羅を圖すること本尊の如く相應せよ、若し法敎に依て、眞言門に於て、菩薩の行を修する諸の菩薩は、應に是の如く知るべし。自身は本尊の形に住して、堅固にして不動なりと、本尊を知り已つて、本尊の如く住して、而して悉地を得べし。云何んが八印なりや。

寶幢は日暉の色　三角にして光を具す　〔一四〕蓮合して地風を散ぜよ　開敷は淨金色なり。
〔一五〕縛字に金剛の光あり、　風輪を屈して空に在け　彌陀は眞金色なり　月輪にして　〔一六〕波頭繞れり。　開敷せる妙蓮華なり。　〔一七〕鼓音曼荼羅は半月にして空點を圍めり　普賢曼荼羅は滿月にして金剛繞れり　蓮華にして二空を竪てよ　觀音は頗梨の色なり　彩虹にして金剛の旛あり　前に準じて火輪を屈せよ　鉤の如く相接せよ　文殊は鬱金色なり　虛空の雜色にて圍めり　靑蓮にして火輪を開けよ。　慈氏は黃金色なり。　虛空に靑點を用ゐ、金剛掌を旋轉せよ　掌心を相著けよ

大威德生の眞言に曰く寶幢佛

〔一八〕曩莫糝曼多沒駄喃引藍嚕娑嚩引二合 賀引

金剛不壞眞言に曰く開敷華

曩莫三曼多沒駄喃引鑁嚩娑嚩引二合 賀引

蓮華藏眞言に曰く阿彌陀佛

【一四】 蓮合とは蓮華合掌。
【一五】 縛字 ꣿ
【一六】 波頭　具には波頭摩(padma)紅蓮。
【一七】 鼓音曼荼羅、北方不空成就佛の壇。
【一八】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ raṃ raḥ svāhā
Namaḥ samanta-buddhānāṃ vaṃ vaḥ svāhā

その時に世尊は、等至三昧より起て、祕密主に告て言く、善男子、諦聽せよ、內心の漫荼羅の彼の身地は、卽ち是れ法界の自性なり。眞言と密印との加持をもつて、之を加持すれば、本性淸淨の故に、羯磨金剛に護持せらるゝが故に、一切の塵垢・我人・衆生・壽者等の過患を淨除す。方壇にして四門なり、西に向つて、通達し、界道を周旋し、內に意生の八葉大蓮華王を現じ、抽莖・敷蘂・綵絢端妙なり。その中の如來は、一切世間の[八]最尊特の身なり。身語意地を超越して、心地に至り、殊勝悅意の果を逮得す。八葉の上に於て、寶幢如來・開敷華王如來・無量壽如來・鼓音如來、普賢・妙吉祥・觀音・慈氏尊、一切藥中の佛・菩薩母・六波羅蜜・三昧の眷屬をもつて、而も自らを莊嚴す。下に持明・諸忿怒衆を列し、持金剛祕密主菩薩を以て、其の莖と爲して、無盡の大海に處せり。一切の地居天等は、其の數無量にして、而も之を環繞す。

その時行者は三昧耶を成ぜんが爲の故に、應に意生の香華・燈明・塗香・種々の餚饍を以て、一切皆以て之を獻ず。[九]優陀那に曰く、

眞言者は誠諦に　漫荼羅を圖畫せよ　自身を大我と爲し　[一〇]囉字を以て諸垢を淨めよ

瑜伽の座に安住して　諸の如來を尋念せよ　頂に諸の弟子に　[一一]阿字の大空點を授け

智者は妙華を傳へて、　自身に散ぜしめよ　爲に內に見る所の　行人宗奉の處を說け

此れ最上壇の故に　應に三昧耶を與ふべし

漫荼羅は三重なり。內は金輪、二三は中位、[一二]噁字は第三重なり。黃と黃白との色は方便にして一切處なり。その時に金剛手は、大日世尊の身語意地に昇りて、法平等觀を以て、未來の衆生を念じ、一切の疑を斷ぜんが爲めの故に、大眞言王を說て曰く法界平等觀に住せよ

[一三]曩莫三漫多沒馱喃引阿三忙鉢多二合、無盡なり達磨馱覩法界なり蘖登蘖多喃超越の義、無盡法界なり。薩嚩佗一切なり暗

【八】最尊特　大日如來

【九】優陀那(udāna)讚頌

【一〇】囉字　ɾ

【一一】阿字大空點　ɑ̃

【一二】噁字　ɑḥ

【一三】Namaḥ samanta-buddhānāṁ samāpta dharma-dhātu gatiṁ gatānāṁ sarvathā aṁ khaṁ aṁ aḥ saṁ saḥ haṁ haḥ raṁ raḥ vaṁ vaḥ svāhā

劍欠儼儉占襜染瞻䫴嚌喃湛擔探喃淡唵吃嚩梵闍嚂藍鍐睒衫參頷訖衫
曩莫糝滿多沒馱喃引噁
曩莫糝滿多沒馱喃引索
曩莫糝滿多嚩日羅二合赧嚩
臈却虐嚎灼綽弱杓礫坼搦擇咀託諾鐸博泊漠薄藥喏落嚩鑠嗦索曬吃叉二合
伊縊塢塢哩嚟哩嚟翳藹汚奧

菩提心三昧句の眞言に曰く

三 曩莫三曼多沒馱喃引冒引地阿仰壤嚀曩莽娑嚩二合引賀引

菩提行發慧の眞言に曰く

四 曩莫三滿多沒馱喃引左哩也二合引阿引嚩引穰引儜引囊引忙引娑嚩二合引賀引

成菩提補闕の眞言に曰く

五 曩莫三滿多沒馱喃引三冐引馱喑喩毳喃南銘娑嚩二合引賀引

寂靜涅槃の眞言に曰く

六 曩莫三滿多沒馱喃引喉囉嚩引拏惡噓弱搦諾莫娑嚩二合引賀引

祕密主よ、是の如くの字門は、如來神力の加持する所、我今普く諸佛の刹土を觀じて、此の遍一切處の法門を見ざるなし。彼の諸の如來は宣說せざるもの有ることなし。眞言門に菩薩の行を修するものは、此の法門に於て、應に勤めて修學すべし。舸遮吒多波に於て、初中後相加し、等持の品類を以て相入すれば、自然に菩提心と行と成等正覺とを獲得す。大日世尊の如くにして、而して法輪を轉ず。

---

kaṁ khaṁ gaṁ ghaṁ caṁ chaṁ jaṁ jhaṁ ṭaṁ ṭhaṁ ḍaṁ ḍhaṁ taṁ thaṁ daṁ dhaṁ paṁ phaṁ baṁ bhaṁ yaṁ raṁ laṁ vaṁ śaṁ ṣaṁ saṁ haṁ kṣaṁ
Namaḥ samanta-buddhānā-m aḥ
Namaḥ samanta-buddhānā-m saḥ
Namaḥ samanta-vajrānāṁ vaḥ
kaḥ khaḥ gaḥ ghaḥ caḥ chaḥ jaḥ jhaḥ ṭaḥ ṭhaḥ ḍaḥ ḍhaḥ taḥ thaḥ daḥ dhaḥ paḥ phaḥ baḥ bhaḥ yaḥ raḥ laḥ vaḥ śaḥ ṣaḥ saḥ haḥ kṣaḥ
i ī u ū e ai o au
【三】Namaḥ samanta-buddhānāṁ bodhi a ṅa ña ṇa na ma svāhā
【四】Namaḥ samanta-buddhānāṁ caryā ā ṅā ñā ṇā nā mā svāhā
【五】Namaḥ samanta-buddhānāṁ saṁbodhi aṁ ṅaṁ ñaṁ ṇaṁ naṁ maṁ svāhā
【六】Namaḥ samanta-buddhānāṁ nirvāṇa aḥ ṅaḥ ñaḥ ṇaḥ naḥ maḥ svāhā
【七】舸遮吒多波 ka ca ṭa ta pa

卷の中

六、如來祕密の印言と中臺八葉諸尊

その時、薄伽梵は　金剛手に告げて曰く　遍一切處の　甚深祕法の門あり。　此の字門に住するものは、　事業疾に成就す。　[一]寶冠擧手の印五股　身行輪に之を布せよ　眉間・咽・心・臍に　阿字より娑賀に至るまで　右に旋轉して相接せよ　初行の果は圓寂なり。一切處に方便して　身外は光焔の如くせよ　伊等の十二字は　外に在りて而して散布せよ

[二]曩莫糝滿多沒馱喃引阿
曩莫糝滿多沒馱喃引娑
曩莫糝滿多嚩日羅二合赧嚩
迦佉誐伽左磋惹酇吒咤拏茶多佗娜馱跛頗麼婆野囉攞嚩捨灑娑賀吃灑二合
曩莫糝滿多沒馱喃引阿引
曩莫糝滿多沒馱喃引娑引
曩莫糝滿多嚩日羅二合赧嚩引
迦佉誐伽左磋惹酇吒咤拏茶多佗娜馱跛頗麼婆野羅攞嚩捨灑娑賀吃灑二合
曩莫糝滿多沒馱喃引暗
曩莫糝滿多沒馱喃引糝
曩莫糝滿多嚩日羅二合赧鑁

【一】寶冠擧手印　外五股印。
【二】Namaḥ samanta-bud=
dhānām a
Namaḥ samanta-buddhān=
ām sa
Namaḥ samanta-vajrānām
va
ka kha ga gha ca cha ja jha
ṭa ṭha ḍa ḍha, ta tha da dha
pa pha ba bha ya ra la va
śa ṣa sa ha kṣa
Namaḥ samanta-buddhān=
ām ā
Namaḥ samanta-buddhān=
ām sā
Namaḥ samanta-vajrānām
vā
ka kha ga gha, ca cha ja jha,
ṭa ṭha ḍa ḍha, ta tha da dha,
pa pha ba bha, ya ra la va
śa ṣa sa ha kṣa
Namaḥ samanta-buddhānām
aṁ
Namaḥ samanta-buddhānā=
m saṁ
Namaḥ samanta-vajrānām
vaṁ

摩賀摩賀引拽野摩賀摩賀引阿怛麼二合喃引

金剛應身の讃に曰く、

嚩每迦旨囉娑路擬曩額素多曩娑怛鑁三合跛囉迦賀娑多二合鼻哩二合倶胝二合穆佉髻迦羅引乞儺二合悉底哩野四合地尾罽引爾娜嚩哩引鉢囉二合底僧娑覩二合多引娑怛鑁三合阿引哩擿曩麼彌野二合阿者攞制吒喃引地焰

燈明の眞言に曰く、

一六五曩莫糝滿多沒馱引喃引怛佗引蘖多引、如來なり囉呰二合、明なり焔娑叵二合囉儜普遍なり嚩婆引娑曩諸暗なり誐誐
猍那哩也二合、限量なく、虚空に等し。娑嚩二合引賀引

虚空藏菩薩普供養の眞言に曰く、

一六六曩莫薩嚩怛他蘖帝驃歸命一切如來等なり尾濕嚩二合、是れ種種門の義、巧の義なり目契弊門等なり薩嚩他一切なり欠一切智空種なり嗢哪
蘖帝生なり娑頗二合囉係銘普通なり誐誐娜劍虚空なり娑嚩二合賀印の上に於て、一の寶蓮華を想へ、上に普通種子の字を想へ、亦此の字より種種の供養を流出す。流出して金色と作せ。

毘盧遮那の位と　及び行者の所居とに　一六七海會　一六八刹塵衆の　眷屬自ら圍遶す　次に淸雅の
音を以て　佛の功德海と　法身法界體と　諸佛の功德海とを讃し　應に淸雅の音を以
て　歌詠して而して讃して曰く、

薩嚩尾也二合比婆嚩訖囉二合訖哩二合也一切善生の種なり
素蘖哆地引鉢帝爾曩妙用體無碍なり
怛嚩二合
馱覩迦摩訶攞引佐三界は大王の如し
尾嚕左曩曩謨引娑覩二合諦遍照を我は頂禮す

菩提の報身を成就する讃に曰く、

阿難多摩引畢路引娑廣娜者藍引
曩莫三摩娑瞻二合素蘖耽怛囉二合迦攞沓引
摩賀摩賀引難帝摩賀摩賀紇哩二合沓引

【一六五】Namaḥ samanta-buddhānām tathâgatârci-spharaṇe 'vabhāsana-gagaṇa-nandary.ı svāhā.

【一六六】Namaḥ sarva-tathâgatebhyo viśva-mukhebhyaḥ sarvathā kham udgate spharahemaṁ gaganakaṁ svāhā.

【一六七】海會。雲集の義。
【一六八】刹塵。刹怛羅(kṣetra)國土の義、塵は塵芥にして、諸佛化度の國土の塵芥の如く無數の意。

sarva-vyabhibhava grrgrya.
一切善生主
sugatâdhipate jina.
妙用體無碍
traidhātuk..-mahā-rāja.
三界如大王
vairocana namo 'stute.
徧照我頂禮

難勝と相對して、門を挾むが故に名と爲す。色は前に準せよ。

一六〇 曩莫三滿多嚩日羅二合赧係呼名阿鼻目佉引、相對なり摩賀大な鉢羅二合、極なり戰拏大極忿怒暴惡なり佉一切善生種那野食喫なり緊旨囉也徒可不速なり三摩野前の本誓の如し摩努娑麼二合羅憶念なり。本と一切如來の前に於て、誓を立てて、一切の煩惱を噉ふ。今何ぞ本所願の急速に之を作すを憶せざるや。娑嚩二合賀引

塗香の眞言に曰く、

此の供養の以前に、更に水を奉獻せよ（次第及び釋の中に出でたり）。食を奉するに四種の說あり、佛と菩薩と金剛と諸天となり。

一六一 曩莫糝滿多沒馱引喃引尾眞言の體なり。輸馱淨なり誐度塗香納婆二合嚩發生なり娑嚩二合引賀引

華鬘の眞言に曰く、

相叉の印なり。蓮掌を額に置き、右に旋轉して法界に遍くし、衆の華王を開現して、万德皆圓滿す。

一六二 曩莫糝滿多沒馱引喃引摩賀引妹眞言の體心の義怛哩也三合大慈毘瘦二合訥蘖帝生なり娑嚩三合引賀引

焚香の眞言に曰く、

地・水・火を相背け、二風側を相合し、空は風輪の側を捻じ、水・火四輪の上節を開き、額の前に旋轉すること香雲の如くす。

一六三 曩莫三滿多沒馱引喃引達摩法なり馱怛嚩二合、界なり努蘖帝隨の義、遍至なり娑嚩二合引賀引

飲食の眞言に曰く、

密合にせよ、法喜禪悅の食は。能く甘露の門を開く、常に妙供を以て、諸佛に獻せよ。下は神鬼に及ぶまで、悉皆な通ず。飲食の施福田は、世世に豐足せしむ。

一六四 曩莫糝滿多沒馱引喃引阿囉囉不可樂聞の聲、不善の聲なり。迦囉囉前の不善の聲を止むるなり。これ恬怕寂の義、正しく法喜禪悅を以て食と爲す。末隣捺娜弭西方享祭の食沫隣捺禰我が食を受け已って我れに妙食を還へせ摩賀沫凞廣大豐美娑嚩引二合賀引

【一六〇】Namaḥ samanta-vajrāṇām he abhimukha-mahā-pracaṇḍa-khādaya-kiṁ cirāyasi samayam anusmara svāhā.

【一六一】Namaḥ samanta-buddhānām viśuddha-gandhodbhava svāhā.

【一六二】Namaḥ samanta-buddhānām mahā-maitreyebhya udgate svāhā.

【一六三】Namaḥ samanta-buddhānām dharma-dhātvanugate svāhā.

【一六四】Namaḥ samanta-buddhānām a ra ra ka ra ra balindadāmi balindade mahā-bali svāhā.

歸命は前に同じ、一切の聖凡は此の界を越すべからず、若し故に越せば、三昧耶を越す。決定して安からず、聖衆の張爵は、聖言の誓を越するが故に。

[一四五]麗引魯引補哩、尾矩嚩尾矩隷引娑嚩二合賀引

四方の四大護は　無畏と壞諸怖と　難降伏護者と　無堪忍普護となり、[一四六]大界は火を內に交へて　二風輪を散じ舒べよ　法幢高峯觀なり。　無餘の衆を哀愍せよ　[一四七]帝釋の方の華臺には　[一四八]嚩字の光轉じて　無畏結護者と成り　金色にして妙白衣　面に少しく忿怒を現じ、　手に[一四九]檀茶を持す。[一五〇]夜叉の方の[一五一]博字は　壞諸怖の結護なり。　素衣にして潔白の色なり　手に[一五二]揭伽を持す。　龍方に[一五三]索字を觀ぜよ　轉じて難降伏と成り、　色は無憂華の如く　朱衣にして微笑を現じ　而して衆會を觀ず。[一五四]焰魔の方には[一五五]唅・欠あり、

無勝結護を成ず、　黑色にして玄き服衣なり　[一五六]毘俱の眉に浪文あり　首に髮髻の冠を戴き　光は衆生界を照し、　手に檀茶の印を持し　及び一切の眷屬は　皆な白蓮華に坐し　眞言と及び密印とは　前に已に開示するが如し　門門に二りの守護あり　無能は[一五七]三昧を拳にし　翼輪を擧げて開敷し　智の拳心に風を舒べ　猶ほし相擬く勢の如くす。相對は[一五八]慧の拳を擧げて　狀は相擊の勢の如くす。右拳なり

不可越守護赤白色にして極忿怒の形に作る眞言に曰く、

此の二守護は威猛熾盛の故に、百千日の敢て視る者無きが如し、常に如來の內門にありて、而して敎命を奉じ、一切の魔は嬈亂する能はず。

[一五九]曩莫三滿多嚩日羅二合赧訥囉馱二合嚩灑二合、これ是の名は不可視越の、難降伏なり。摩賀引嚕引灑拏大忿怒なり佉種子捺野契なり、一切煩惱の食なり。薩鑁婆怛二合他引蘖多一切如來然敎勅矩嚕作なり、如來の敎勅を行せしむるなり。娑嚩二合賀引

相向守護の眞言に曰く、

【一四五】reru puri vikuri vikure svāhā.
【一四六】大界、大界印、
【一四七】帝釋方、東方。
【一四八】嚩字、[illegible]。
【一四九】檀茶(daṇḍa)、棒。
【一五〇】夜叉方、北方。
【一五一】博字、[illegible]
【一五二】揭伽(khaḍga)。劍。
【一五三】索字、[illegible]。
【一五四】焰魔方、南方。
【一五五】唅欠[illegible]。
【一五六】毘俱(bhṛkuṭi)、皺。
【一五七】三昧、定手卽ち左手。
【一五八】慧、左手。
【一五九】Namaḥ samanta-vajrāṇāṁ durdharṣa-mahā-roṣaṇa-khādaya-sarva-tathā-gata-ājñāṁ kuru svāhā.

て　慧拳の風輪を舒べ　白毫の際に加へて　[一四二]毘倶胝の形の如くし　纔に此の法を結するが故に　當に觀ずべし、此の地に遍じて　金剛熾焰の光ありて　能く極猛利の　無量の天魔軍　及び餘の爲障者を除き　必定皆な退散せん、（左拳を腰に安す）

怖魔の眞言に曰く、

面は忿怒の如く、心は一境に住し、能く如來威猛の大勢の力を現じて、能く一切衆生の所願を滿ず、如來は菩提樹下に此の印を以て、諸魔を摧伏せり。

[一四三]曩莫三滿多沒馱（引）喃（引）摩訶（引）沫羅（二合、大力）嚩底捺奢嚩路（十力なり）嗢婆（二合）吠（平、持なり）摩訶（引）昧怛哩也（三合、大慈）毘瘦（二合）嗢蘖（二合）底（發生なり）娑嚩（二合）賀（引）

次に難堪忍の　密印と明とを用て結護せよ　藏印は水輪を散じて、　旋轉して十方を指せ　これを結大界と名く　用て十方の國を持し　能く悉く堅住せしむ　是の故に三世の事　悉く能く普く之を護る　威猛にして能く覩るもの無し。

大界の眞言に曰く、

謂く初め大菩提心を發してより、乃し成佛に至るまで、間斷せしめず、菩提を退せざるは、卽ち大界の義なり。

[一四四]曩莫三曼多沒馱（引）喃（引）薩嚩怛羅（二合）弩蘖帝（一切の方處なり、謂く十方を皆須らく遍く結すべし）滿馱野（結なり）徙瞞（界なり）摩訶（引）三摩野（大三昧耶）涅哩者（二合）帝（從生なり）娑麼（二合）囉嬭（憶念なり）阿鉢囉（二合）底訶帝（能害あることなし、亦無礙、無壞なりと云ふ）馱迦馱迦（光威なり、光威に由るが故に、界を成す）折囉折囉（遍く十方に往て結界す。）滿馱滿馱（結なり）捺奢儞以（二合、十方なり）薩嚩怛他蘖多（一切如來）弩枳惹（二合）帝（教なり）鉢囉（二合）嚩囉（所證なり）達磨（法なり）臘馱（獲得なり）尾惹曳（無能勝なり）婆（眞言主なり）誐嚩底（世尊なり）尾矩嚕（除なり、能除垢なり）尾矩隸（前句は有相の垢を除き、後句は離相の垢を除く。）麗（種子なり）魯補哩（宮なり）娑嚩（二合、引）賀（引）

第二略說の眞言、

【一四二】毘倶胝（Bhṛkuṭī）。皺の義。

【一四三】Namaḥ samanta-buddhānāṁ mahā-balavati-daśa-balodbhave mahā-maitreyebhya udgati svāhā.

【一四四】Namaḥ samanta-buddhānāṁ sarvatrānugate bandhaya-sīmāṁ mahā-samaya-nirjāte smaraṇe apratihate dhaka dhaka cara cara bandha bandha daśa-diśaṁ sarva-tathāgatānujñāte pravara-dharma-labdha-vijaye bhagavati vikuri-vikure rerū-puri svāhā.

次に金剛杵を執つて　抽擲し金鈴を振ひ　獻ずる所の閼伽水を　法の如く已に加持し
諸善逝者に奉じ　用て無垢の身を浴し　先づ右、後に左の　膝を額に至るまで三たび奉獻し　次に當に一切の　佛口よりの所生子を淨むべし。不動尊をもつて、加持すること二十五遍、蓮合して、風にて火を絞し、空は風の下節を持すべし。

[一三七]眞言に曰く、

變じて寶淨香水の海と成る。底に金沙を布き、八德盈てり。想へ衆聖の淨無垢を浴し、大悲胎藏、大智の海は、能く衆塵を洗ふて、法身を證すと。

[一三八]曩莫三滿多沒馱引喃引誐誐曩虛空なり三摩引三摩引、等無等娑嚩二合賀引

次に、華座を奉る眞言に曰く、

[一三九]曩莫三滿多沒馱引喃引阿引

加護は不動なり偈に曰く、

佉字の大空點を　而も頂上に置け　身を轉じて薩埵と作し　金剛種子の心を　遍く諸の支分に布せよ　諸法は離言說なり　印と眞言とを具するを以て　即ち執金剛に同じ。

彼の[一四〇]眞言に曰く。五股、三股

[一四一]曩莫三曼多嚩日囉二合赧　戰拏摩訶引嚕引灑拏吽引

身に遍く甲を被服せよ、　次に應に一心に　摧伏諸魔の印を作すべし。　眞語と共に相應し

【一三七】普供養眞言。

【一三八】Namaḥ samanta-buddhānām gagana-samā-sama svāhā.

【一三九】Namaḥ samanta-buddhānām a.

【一四〇】執金剛眞言

【一四一】Namaḥ samanta-vajrānām caṇḍa-mahā-roṣaṇa hūṁ.

淨地の眞言に曰く、

一三一
唵引　蘇悉地羯哩入縛二合里多引　曩引南多謨引囉多二合曳引入縛二合　羅滿馱滿馱賀曩賀曩吽引泮吒

一三二
不動大明王　垢を去り清淨ならしめ辟除し光顯ならしめ　及び護身し結界せよ。彼の眞言に曰く、

如來は謂く一切の障を息むるが故に、火生三昧に住して、大障者を摧く眞言を說き玉ふ。謂く行人は初發菩提心より、守護し増長して、佛果を成ぜしむるに至るまで、終に退失せず、非道中に墮在せず。梵名を阿左羅曩引多（Acalanātha）と云ふ。

一三三
曩莫三曼多嚩日囉赧戰拏極惡謂く暴惡なり又甚だ暴惡なり　摩賀路灑傘大忿怒なり　娑破二合吒也破壞なり吽恐怖なり　怛囉二合迦堅固なり悍引𤚥引、二字は種子なり。

次に印と眞言とを以て　而して衆聖を請召せよ、　諸佛と菩薩とは　本誓に依つて而して來ると說き玉へり。　定と慧と內に拳を成じ　一三四慧風を屈して　一三五鉤の如くし　召に隨て而して赴集す灌頂の時は此の鉤印を以て行者を引いて、門に入らしむ。

眞言に曰く、

此の鉤印は十方の諸佛菩薩を召して、道場に集會す。十地を滿足する位なり。況んや餘の八部、未生善心者にして、而も來至せざらんや。能く諸佛の大功德海を招きて、悉く一切如來の功德を滿じ、普く一切衆生を召して亦其の道を得せしむるなり。

一三六
曩莫三滿多沒馱引喃引　阿薩嚩怛羅二合、一切所害の身　鉢囉二合底訶諦引怛佗蘖黨如來矩奢鉤なり　冒地浙哩也二合、菩提行　鉢哩布引囉迦　娑嚩二合賀七遍、索、鎖、鈴。除障には不動なり。

次に三摩耶を示せ　速に無上の願を滿ず。　本眞言主の　諸明をして歡喜せしむるが故に

【一三一】Oṁ susiddhi-kari-jvaritānām tamortaye jvara bandha bandha hana hana hūṁ phaṭa.
【一三二】不動明王の眞言。
【一三三】Namaḥ samanta-vajrānāṁ caṇḍa-mahā-roṣaṇa sphaṭya hūṁ traka hāṁ māṁ
【一三四】慧風、右手の頭指。
【一三五】鉤召眞言。
【一三六】Namaḥ samanta-buddhānāṁ a sarvatrā-pratihate tathāgatāṅkuśa-bodhi-carya-pari pūraka svāhā.

[一一七]十二支生の句　普く華臺の中に遍し、常に無量の光を出して　百千の衆蓮遶れり。[一一八]寶柱皆その上に復觀想せよ　大覺師子座を　寶王を以て嚴飾し、大宮殿の中にあり、周匝するに香華雲と諸纈に愛な行列し　遍く諸幢蓋あり、珠鬘等交絡し　妙寶衣を垂懸す。
及び衆寶雲とをもつてし、普く雜華等を雨らし、繽紛として以て地を嚴り　宮中に淨妙の聲ありて　而して諸の音樂を奏し、賢瓶と[一一九]閼伽とを想へ　寶樹王開敷して　照すに摩尼燈を以てし、三昧と總持との池に自在の婇女あり　佛波羅蜜等と菩提の妙嚴華とあり　方便をもつて衆伎と作し　歌詠の妙法音をもつて　諸の如來を供養し　我が功徳と　如來の加持力と　及び法界力とにて、普く供養して而して住すべし

普印　[一二〇]大輪壇印を結び、次に衆色の界道あり。

[一二一]囉白色中　嚂赤色幢　迦黄色華　麼青色識　訶黑色なり音なり　[一二二]金剛大慧の印なり。

[一二三]觀ぜよ彼の中胎の内に諸尊の種子を一一分明に安布して、先づ圓光を想へ

普光の淨月輪あり　阿字を其の中に置け　次に當に阿字を轉じて　大日[一二四]牟尼と成すべし、清淨にして諸垢を離れ　妙色にして三界を超え　綃穀は身を嚴るの服　寶冠あり紺髪垂る　寂然として三昧地にあり　輝焔は衆電に過ぎ　猶ほし淨鏡内に　幽邃にして眞容を現ずるが如し　喜怒は形色に顯はれ　[一二五]與願等を操持し　正受相應の身　明了にして心は亂るゝこと無く　無相淨法の體は　應に願つて群生を濟すべし　八曼荼羅の眷屬を以て自ら圍遶し　次に東に遍知印　北方に觀自在南に金剛手を置き　[一二六]涅哩底の方に依て　不動如來の使ををけ　[一二七]風方に勝三世　四方に四大護　初門に釋迦文　第三に妙吉祥　南方に除蓋障　[一二八]勝方に地藏尊　[一二九]龍方に虚空藏　[一三〇]蘇悉地の眷屬　護世の威德天を　次第に而も分布して　次に應に香鑪を執るべし。

【一一七】十二支生句。この本の中卷の初めを見よ。
【一一八】寶柱、八柱なり。五峯八柱の寶樓閣。
【一一九】閼伽(argha)。客を款待する爲めの水。
【一二〇】大輪壇印、大金剛輪印。
【一二一】ra raṁ ka ma ha.
【一二二】金剛大慧印、外五股印。
【一二三】觀。以下道場觀。
【一二四】牟尼(muni)。寂默の義、無明妄想なき意にして、義譯すれば聖者となる。
【一二五】與願。與願印、印相は前文にあり。
【一二六】涅哩底(nirṛti)、西南隅。
【一二七】風方、西北隅。
【一二八】勝方、東北隅。
【一二九】龍方、東南隅。
【一三〇】蘇悉地(susiddhi)、妙成就。

誐嚢三麼嚩羅喏乞叉二合引　𡅏　娑嚩二合引　賀引

無能害力明妃の眞言に曰く、

梵夾の印を以て八遍せよ、前の定より起て、更に無量の勝三昧に入る。

〔一二〕曩莫薩嚩怛他引蘖帝毘藥二合薩嚩目契毘藥、阿三迷鉢囉二合謎阿者隷　誐誐泥薩麼二合囉𡅏　薩嚩怛囉二合孥蘖帝　娑嚩二合賀引、此の明の意は、諸佛を警發して、本誓を憶念せしむるにあり。而して後に彩色を下すべし。

五、祕蜜漫荼羅建立、並に諸尊供養

佛國土を嚴淨して　諸の如來に奉事し、　香水の海を諦觀せよ。

大海の眞言に曰く、

二印相互に相叉へ、二空を散じ舒べて、右に旋らす、これ海水の印なり。前の印に準じて、右の風の甲をもつて、右の風の面を押して、定の不動は、即ち八功德水の印なり。

〔一三〕唵尾摩嚕娜地吽引

金剛手持華內五智印

〔一四〕嚩𤚥な嚩日羅二合播引抳　此れ大眞言王なり、印は口授すべし。

妙蓮華王を以て　華藏界を持すべし。

口授なり、此の上の印、四道は祕授なり。

最初正覺等の　敷揄曼荼羅は　密中の秘密にして、〔一五〕大悲胎藏より生じ、　及び無量の世間と　出世との曼荼羅の　彼の所有の圖像を　次第に說かん當に聽くべし　四方にして普く周匝し　一門及び通道あらしめよ　〔一六〕金剛の印をもつて遍く嚴り　中に羯磨金剛あり、　その上に大蓮華あり　妙色にして金剛の莖なり。　八葉に鬚蘂を具し　衆寶をもつて、自ら莊嚴し、　開敷して果實を含む。　彼の大蓮の印に於て　大空點をもつて莊嚴し、

【一二】Namaḥ sarva-tathāgatebhyaḥ sarva-mukhebhyaḥ asame parame acala gagane smaraṇe sarvatrānugate svāhā.

【一三】Oṁ vimalodadhi hūṁ.

【一四】Va vajra-pāṇi.

【一五】大悲胎藏、法界觀。

【一六】金剛印、三股金剛杵。

如來念處の眞言に曰く、

一〇七 曩莫三滿多沒駄喃怛他引蘖多如來 娑麼嘌三合底念なり 薩怛嚩二合係怛嚩二合、利益なり 衆生 毘庾二合嗢蘖多生なり 誐誐曩三忙虚空等の起なり 糝麼無等 娑嚩引二合 賀引

一切法平等開悟の眞言に曰く、

一〇八 曩莫三曼多沒駄喃薩嚩達麼一切法 三麼多平等 鉢羅二合鉢多二合、等を得るなり 一切平 怛他引 蘖多如來 弩蘖多佛の是の如くの開悟に隨同するなり 娑嚩 合賀

已上は如來身會

普賢菩薩如意珠の眞言に曰く、

此の菩薩の所有の三業は普遍賢善にして、諸佛菩薩の敬歎する所なり。

一〇九 曩莫糝滿多沒駄引喃引 參麼多弩蘖多平等至なり進去往なり 尾囉惹塵垢の障を離るるなり 達麼法なり 儞社多生なり、言く無垢は法より生ず。 摩賀摩賀重て言ふは天中の天といふが如し、諸菩薩等は佛を供養し、佛は轉じて普賢を供養す。菩薩の身は三世の佛と等し、天中の天、大供養中の供養なり。 娑嚩二合賀 菩提の万行は、これより生じ、衆願滿足の故に珠と名くるなり。

慈氏菩薩の眞言に曰く、

發生普遍大慈の三昧に住し、印は諸佛の窣堵波(Stūpa)に同じ。

一一〇 曩莫三滿多沒駄引喃引 阿爾單古に阿逸多(Ajita)と云ふ。其の義は無勝、一切の煩惱、及び二乘等、能く勝つことあることなし。 惹野勝を得るなり、無勝の中に於て勝を得るなり。 薩嚩薩怛嚩二合、一切衆生なり。 奢野性なり、心性なり、謂く先世に習ふ所の諸根の性欲なり。 弩蘖多知なり、能く衆生の諸根の性欲を了知するなり。 娑嚩二合引 賀引

時に佛は甘露生の三昧に住して、一切三世の無閡力明妃の眞言を說て曰く頂印なり、第二卷の虚空眼妃と同じく用ふ。

一一一 怛儞也二合他引 誐誐曩三謎引 阿鉢囉二合底三謎薩嚩怛他引蘖多三麼路弩蘖帝 誐

【107】 Namaḥ samanta-buddhānām tathâgata-smṛti-sattva-hitâbhyudgata-gagana-samâsama svāhā.

【108】 Namaḥ samanta-buddhānām sarva-dharma-samanta-prāpta-tathāgatânugata svāhā.

【109】 Namaḥ samanta-buddhānām samantânugata-viraja-dharma-nirjāta-mahā maha svāhā.

【110】 Namaḥ samanta-buddhānām ajitaṁjaya-sarva-sattvâśayânugata svāhā.

【111】 tadyathā-gagana-same apratisame sarva-tathâgata-samantânugate gagana-same vara-lakṣaṇe svāhā.

て、佛事を作すべきなり

一〇一 曩莫三曼多沒駄喃鉢囉二合戰拏嚩日囉二合入嚩二合娑光なり尾娑普二合囉遍なり吽引

如來舌相の眞言に曰く、

如來舌を得れば、法音は十方に遍く、常に如語・不誑・不悪・不異語を作す、眞實の故に常住なり

一〇二 曩莫三曼多沒駄喃怛他蘖多如來なり爾訶嚩二合舌なり薩底也二合諦なり達磨法なり鉢囉二合底瑟恥二合多成就の實諦、法體なり 娑嚩二合引賀引

如來語の眞言に曰く、謂く此の語は如來の無量門の巧慧より生ず。

一〇三 曩莫三曼多沒駄喃怛他引蘖多摩訶引嚩吃怛囉二合語なり尾濕嚩二合枳孃二合曩種種の巧智なり摩護那也大廣なり娑嚩二合引賀引

如來牙の眞言に曰く、

一〇四 曩莫三滿多沒駄喃怛他引蘖多如來能瑟吒囉三合牙なり囉娑囉娑引味なり、味中の上味 鈝囉二合參鉢囉二合引博迦得なり薩嚩怛他引蘖多如來尾灑也境界糝婆嚩生なり娑嚩二合引賀引

如來辯說の眞言に曰く、

此の印に由るが故に、衆に處するに無畏にして、人の爲に正法を演說し、乃至一字中に、無窮の義を含む。辯才は窮盡す可らず。

一〇五 曩莫三曼多沒駄喃阿振底也二合不思議 那部二合多奇特路波嚩引、語の分段 三麼哆普至なり、佛は一言を以て、法等を演說す。鉢囉二合鉢多二合、得なり至なり尾輸駄淸淨娑嚩二合囉言音なり娑嚩引二合賀引

如來持十力の眞言に曰く、此の智印に由て、能く如來の十力支分を持するなり。

一〇六 曩莫糝曼多沒駄喃捺奢沫浪十力身 誐達囉持なり 吽 三 髯 娑嚩二合賀引

【一〇一】 Namaḥ samanta-buddhānām pracaṇḍa-vajra-jvala visphāra hūṁ

【一〇二】 Namaḥ samanta-buddhānām tathâgata-jihvā-satya-dharma-prati=ṣṭhita svāhā

【一〇三】 Namaḥ samanta-buddhānām tathâgata-mahā-vaktra-viśva-jñāna-mahodaya svāhā

【一〇四】 Namaḥ samanta-buddhānām tathâgata-daṁṣṭra-rasa-rasâgra-saṁ=prapaka-sarva-tathâgata-viṣaya-saṁbhava svāhā

【一〇五】 Namaḥ samanta-buddhānām acintyâdbhuta-rūpa-vāk-samanta-prāpta-viśuddha-svara svāhā

【一〇六】 Namaḥ samanta-buddhānām daśa-balâṅga-dhara hūṁ saṁ jaṁ svāhā

九〇 曩莫三滿多沒駄喃阿沒㗚二合都甘露なり、熱惱を除くなり、身心の嗢婆二合嚩り生な 娑嚩二合賀

如來腰の眞言に曰く 慧手の地・水・火・風は、前の如く皆少しく屈す。佛の妙色身を成じ、自性は聖智と成る、

九一 曩莫三滿多沒駄喃怛他引蘖多引、如來 三婆嚩り生な 娑嚩二合引賀引

九二藏印は 九三虛心合にして、風を屈して空輪を押へ 地・水輪を微しく曲ぐ。 普光は火を内に交え、 空を入れて、 風水を散じ 輪を竪てて相合す。 甲印は虛心合にして 九四風幢を火の背に加ふ。 舌相は 九五二空を入れよ。 語門は風と水とを圓にして 空を竝べて猶は口形のごとくす。 牙印は風を掌に入るるなり。 辯說は二風輪を 火側の第三節におき空輪を微しく搖動せよ。 十力は蓮華合にして、 地と空とを屈して月に入れ、 掌内に節を相合すべし。 念處は風を空に捻せよ。 開悟は風の甲を圓にし、地・水・空を掌に入れよ。 普賢如意珠は 九六蓮合にして風を 火の上節に加へて寶形の如くせよ。 慈氏印は前に準じて 風を屈して火輪の下にし、 空を以て 九七押せよ、 妙 九八軍持なり。

如來藏の眞言に曰く 二垢障を除きて、佛の清淨身を悟る。

九九 曩莫薩嚩怛他引蘖帝藍藍二は凡夫の垢を除く、 嚕嚕二は二乘の垢を除く 娑嚩二合賀

普光の眞言に曰く 赤色光

一〇〇 曩莫三曼多沒駄喃入嚩二合攞光なり 摩暱儞鬘なり、焰を以て鬘と爲す、輪環して絶えざるを如來の圓光と名く。 怛他引 蘖多㗚旨體は如來明白の光なり。 娑嚩二合引賀引

如來甲の眞言に曰く

定慧虛心合にして、風を火輪の側に持し、空は火を離るること、小麥許りの如くす。 一生補處の菩薩の如きは、要ず此の無上菩提の甲を被り、金剛座に坐して、一切の魔軍を降して、正覺を成ず。 眞言者は要ず此の甲を破

【九〇】 Namaḥ samanta-buddhānām amṛtodbhava svāhā

【九一】 Namaḥ samanta-buddhānām tathâgata-sambhava svāhā

【九二】 藏印。如來藏印。
【九三】 虛心合。虛心合掌。
【九四】 風幢。頭指。
【九五】 二空。二大指。
地——小指
水——無名指
火——中指
風——頭指
空——大指
【九六】 蓮合。蓮華合掌。

【九七】 押は原文に献に作る。
【九八】 軍持(kuṇḍi)。水瓶。

【九九】 Namaḥ sarva-tathâgatebhyaḥ raṁ raṁ raḥ raḥ svāhā

【一〇〇】 Namaḥ samanta-buddhānām jvala-mālinī-tathâgatârci svāhā

地、風をもつて、空の背を押し、手を反して、三たび眼を飾す。金篦にて暗膜を除く印と成る。先づ右眼、次に左眼、此の祕密方便を以て、能く眼根を淨めて、佛眼を成就し、如來深密の境界を見ることを得るなり。肉眼は一切の色を見、天眼は一切衆生の心を見、慧眼は一切衆生の諸根の境界を見、法眼は一切法の如實相を見、佛眼は十方を見る。と華嚴の五十七に出づ。

八七
曩莫三滿多沒駄喃誐誐曩(空なり)嚩囉(願なり)落吃叉二合儜(一切の相)迦嚕拏(悲の義)摩野(體の義)怛他引蘗多(如來)作咆芻二合、(眼なり)娑嚩二合引賀引

如來索(にょらいさく)の眞言に曰く

此の索は如來の信解の中より生ず。猶ほ信解力の中に、種々の形類を示現するがごとし。或は忿怒となり、或は持明と僞る。大力の勢、有情を攝化す。

八八
曩莫三曼多沒駄喃係係(呼召の攝なり、因に三昧の義あり。成佛の因を呼ぶなり。此の因は本不生にして、因果の相を離る。此の因を淨からしめて、而して果は淨となる)摩賀播捨(大索なり、離相の因、これを大索と名く。)鉢羅二合娑勞(普なり、)那哩也二合、(如空なり。大索は廣く普く遍せざるなきなり。)薩埵(有情)駄睹(界なり、有情界の攝なり。)微謨訶迦(痴を斷く)怛他引蘗多引、(如來)地目吃底二合、(信解生、諸佛が菩薩道を行ぜし時、大誓を立てて一切の衆生を度す。今此の因を以て要ず果を成ず。若し解脫の樂に住して、本誓を憶せざれば、卽ち本願に違す。此れ亦痴と名く、此の痴を除くが故に、究竟して、恒に佛事を作さしむるなり。)儞(生なり)佐多娑嚩二合賀(能く障離を爲すものを縛し及び破壞す。信解の力より生じて、能く種種の形を現ず。四攝をもつて、有情の結を度し、散亂の風を除く。)

如來心の眞言に曰く

前指を易へず、火を申べ、相並べて微屈す。能く大慧慈善の深廣大の方便を生ず。

八九
曩莫三曼多沒駄喃枳攘二合怒(智なり、卽ち諸佛の智、此の智は他より得ず、還た佛心より生ずるなり)嗢婆二合嚩(生なり)娑嚩二合賀

如來臍(さい)の眞言に曰く

阿密㗚(amṛta)は甘露、甘露は智の別名なり。能く身心の熱惱を除き得て、而して之を服すれば、不老不死長壽の身となる。心印微屈等あり。

【八七】 Namaḥ samanta-buddhānām gagana-vara-lakṣaṇe karuṇā-maya-tathāgata-cakṣuḥ svāhā

【八八】 Namaḥ samanta-buddhānām he he mahā-pāśa-prasaraudārya sattva-dhātu-vimohaka tathāgatā-dhimukti nirjāta svāhā

【八九】 Namaḥ samanta-buddhānām jñānodbhava svāhā

賀引

毫相藏の眞言に曰く

慧拳を毫處に置け、毫光は十方に遍くして、能く願を滿じ戒因を淨む

（八三）曩莫三曼多沒馱喃阿唅惹

大鉢の眞言に曰く

袈裟の手の內の角と、及び肩に搭けたる角とを取つて、肘に繞り廻して、手中に入れ、二角をして雙耳の如くならしむるなり。二手を重て引上て臍に當て、鉢を承くる形にす。如來に同じて河沙の諸佛の標幟の儀を持して、非器の衆生をして、法器と爲るに堪えしむ。

（八四）曩莫三曼多沒馱喃婆

有は卽ち三有なり。本不生を以ての故に、卽ち三有を離れて、而も如來眞實の有を得。謂く諸佛の法身なり。

施無畏の眞言に曰く

左手は前の如く、衣の二角を持す。此の印は能く一切衆生の種々の怖畏憂悲を除く卽ち皆な息むことを得。亦未來の種々の大可怖畏を除くなり。

（八五）曩莫三曼多沒馱喃薩嚩他 遍なり 爾那爾那 勝義なり。爾那爾那は最も勝と爲す。能く彼に勝つなり。初に異生の煩惱を離れ、次に二乘の煩惱を離る。故に重ねて言ふ。 佩野曩奢那 恐怖を除くなり 娑嚩二合賀引

與願滿の眞言に曰く 衣を持すること前の如くす、掌を外にして、水を施すが如くす。

（八六）曩莫三滿多沒馱喃嚩羅那 與なり 嚩曰羅二合引、金剛なり 怛麼二合迦 我なり、身なり、意は云く願くは諸佛よ、我に金剛身を與へ玉へ、亦是れ我れ大智の身を受くれば、卽ち是れ其の所願を滿するのみ 娑嚩二合賀

悲生眼の眞言に曰く

【八三】 Namaḥ samanta-buddhānām a haṁ jaḥ

【八四】 Namaḥ samanta-buddhānām bhaḥ

【八五】 Namaḥ samanta-buddhānām sarvathā jina jina bhayana-śana svāhā

【八六】 Namaḥ samanta-buddhānām varada-vajrā=tmako' haṁ svāhā

り。或は定慧虚心合と云ふ。能く諸の煩惱を斷截して、無垢の法身を得

七七 曩莫三曼多沒駄引喃引摩賀引揭伽尾囉惹　達磨埘捺囉二合奢迦娑訶惹　薩得迦二合引野捺喋二合瑟耻砌引諾迦　怛他引蘗多尾目吃底二合儞佐引多尾囉引誐達磨儞惹引多吽引

大法螺の眞言に曰く（口に近づけ之を吹くこと螺を吹く狀の如くし、左右に旋轉す。）

七八 曩莫三曼多沒駄喃暗

卽ち一切の善願を滿するを得て、大法を宣說し、普く聞知することを得せしむ。これは是れ寂靜涅槃の印なり。

蓮華座の眞言に曰く

七九 曩莫三滿多沒駄喃阿

金剛座なり。猶し此れに坐するが如くなる故に、諸佛は此れより生ず。卽ち吉祥座と名く。金剛不壞の阿より諸佛を生す。

金剛大慧の眞言に曰く（五峯の印）

八〇 曩三滿多嚩日囉二合引　赧吽引

如來頂の眞言に曰く

八一 曩莫三滿多沒駄喃吽引吽引

卽ち仁者は諸佛の身に同じ、頂印を頂に安じて、佛は行者の身中に入りて、相好圓滿なりと想へ。

三解脫を具するの義なり、初を因と爲し、後を果と爲す。因は是れ如來行、果は是れ佛なり。

如來頂相の眞言に曰く

八二 曩莫三曼多沒駄引喃引誐誐曩（虛空無量）難多娑叵二合囉傒（普遍）尾秫駄（淸淨）達摩儞惹帝（法界生）娑嚩二合

阿闍梨は右手を拳となし、頂上に於て加持せよ。一切の諸天神は、頂相を見ること能はず。

【七八】 Namaḥ samanta-bud=dhānām aṁ

【七九】 Namaḥ samanta-bud=dhānām a

【八〇】 Namaḥ samanta-vajrānām hūṁ

【八一】 Namaḥ samanta-bud=dhānām hūṁ hūṁ

【八二】 Namaḥ samanta-bud=dhānām gagan-ânanta-spha=raṇa-viśuddha-dharma-nirjāta svāhā

にして　衆罪業を滅除し、　天魔爲障者は　赫奕たる金剛を見ん。　首の中に[六七]百光王を
心に[六八]無生の句を置け　胸に[六九]離染の字を表し　[七〇]無垢眼を安立して　身は如來に同なり
と觀じ　復[七一]滿足の句を念ぜよ。

*曩莫三曼多沒馱引南引阿鍐覽唅欠

◯◗△○□　[七二]器世間を安立するには　空風を最も下に居け　次に火・水・地を觀ぜよ、
この地輪は金剛に同じ　[七三]大因陀羅と名く　光焰は淨金色にして　普く皆遍流出す　次
に應に地を念持し　而も衆の形像を圖すべし。

□○▽◠◯　その時、薄伽梵は　大衆會を觀察して　祕密主に告て言く　[七四]法界の標幟あ
り　これに由て身を嚴るが故に　生死の中に巡歷すとも　如來大會の　菩提幢の標幟
に於て　諸の天龍夜叉　恭敬して而して教を受け　初に佛三昧と　法界と及び法輪と
を印し、[七五]憩伽は歸命合にして、風を屈して空輪の甲側に加へ、　法螺は虛心合にして　風
を空輪の上に絞へ　吉祥願は蓮華、　金剛は大慧の印　摩訶は如來頂　慧拳は毫相藏
瑜伽は持鉢の相　[七六]智慧手を上に舒ぶるを　無畏施者と名く　下に垂れて掌を外にする
を滿願と號す　慧拳を舒べて火水にて空を押せば　智者は佛眼を成す　內縛して風輪を
索にするは心印なり、　火輪を舒べ水を舒ぶるは如來臍　前印にして風を月に入る　これ
を如來腰と名く　次の如く眞言を習ふべし。

大慧刀の眞言に曰く

金剛合掌を亦歸命と云ふ。刀をば利智に喩へ、能除斷を以て義と爲す。惡見の山峯は大山の峯の如く擾亂甚だ多きを除く、煩惱も亦爾なり、今此の印は能く身見及び俱生見・六十二見等を斷害す。此の刀は卽ち大智な

【六八】無生句　[illegible]字。
【六九】離染字　[illegible]字。
【七〇】無垢眼　左右眼に[illegible]の字を觀ず。
【七一】滿足句。滿足一切智智眞言。
*Namaḥ samanta-buddhān=ām a vaṁ raṁ haṁ khaṁ.
【七二】器世間云云。道場觀を示す。
【七三】因陀羅(Indra)。帝王の義、壇の名。
【七四】法界標幟。[illegible]の五字を以て身の支分に配して觀ずるを云ふ。
【七五】憩伽(khaḍga)。劍、卽ち大慧刀印。
【七六】智慧手。右手。
【七七】Namaḥ samanta-bud=dhānāṁ mahā-khaḍga-virāja-dharma-saṁdarśaka-sahaja-satkāya-dṛṣṭicche=daka-tathāgatādhi mukti-nirjāta-virāga-dharma-nirjāta hūṁ.

已て、法界官中に還入す。
復秘密主に告げて言く、[五一]曼荼羅聖尊の分位と、種子の標幟とを造するあり、汝當に諦聽して善く之を思念せよ、吾れ今演說せん、[五二]優陀那に曰く 五種の三昧耶とは、一に本尊、二に眞言、三に密印、四に三昧、五に種子なり。
眞言遍學者は　秘密壇に通達し、　如法に弟子の爲に、　一切の罪を燒盡し　壽命を悉く焚滅して　彼をして復た生ぜざらしめ　灰燼に同じ已て　かの壽命還た復す　謂く[五三]字を以て字を燒き　字に因て而も更に生ず。　一切の壽と及び生と　清淨にして遍く無垢なり　[五四]十二支句を以て　而も彼を器と作せよ。　是の如くの[五五]三昧耶は　一切の諸如來と　菩薩救世者と　及び佛と聲聞衆と　乃至諸の世間と　平等にして違逆せす　此の平等誓の　[五六]秘密曼荼羅を解すれば、　一切の法教に入りて　諸壇に自在を得　我が身は彼と等同なり　眞言者も亦然かなり。　相異せざるを以ての故に　說いて三昧耶と名く。　現前に[五七]囉字を觀ぜよ、　謂く淨光の焔鬘は　赫として朝日の暉の如し。　聲の眞實の義を念ずれば　能く一切の障を除きて　三毒の垢を解脫す　諸法も亦復然り　先づ自ら心地を淨め　復道場の地を淨めて　悉く[五八]衆の過患を除き　その相は虚空の如し、　金剛所持の如く　此の地も亦是の如し、　本尊の[五九]瑜伽に住して　加ふるに[六〇]五支字を以てせよ　等引にして而も運想し　即ち牟尼尊に同せよ　[六一]阿字は遍金色なり　用て[六二]金剛輪と作し、　下躰を加持するを　說て瑜伽座と名く　[六三]鑁字素月の光は　霧聚の中に在りて　臍より上を加持す　これを大悲水と名く　[六四]吽字初日の暉は　彤赤にして三角にありて　本心位を加持す　これを智火光と名く　[六五]唅字劫災の焔は　黑色にして風輪にありて、　白毫際を加持す　說て自在力と名く。　[六六]佉字及び空點は一切の色を成じ　加持して頂上にありと想へ　故に名けて大空と爲す。　五字を以て身を嚴り、　威德の炬は熾然

【五一】曼荼羅(maṇḍala)。壇、道場、輪圓具足等の義あり。今は道場の意。
【五二】優陀那(Udāna, Ched-Du-Brjod-Pohi Sde)。讚歎經。
【五三】字。上字は[illegible]字、下字は[illegible]字を指す。
【五四】十二支句。此の卷の中の初めを見よ。
【五五】三昧耶(samaya)。相應の義、又は如來の本誓の意、
【五六】秘密曼荼羅、大日經第五同名品第十一參看
【五七】囉字[illegible]　火大を表す、如來の智火を以て、無明の塵垢を燒き盡す意、
【五八】衆過患。見思・塵砂・無明の諸惑。
【五九】瑜伽(yoga)。觀行。
【六〇】五支字。[illegible]
【六一】阿字[illegible]　地大にして衆生の心地即ち淨菩提心を表す。
【六二】金剛輪、地輪。
【六三】鑁字[illegible]　水大にして、如來の悲德を意味す。
【六四】吽字[illegible]　火大、
【六五】唅字[illegible]　風大。
【六六】佉字及空點[illegible]　空大。
【六七】百光王。[illegible]字。

[45] 唵引 僕 欠

作壇眞言に曰く、

[46] 唵引 難駄難駄 娜智娜智難駄婆哩娑嚩二合引賀引

淸淨眞言に曰く、

定拳を腰側に安じ、慧手散じ舒べ、風空相捻じて、遍く身の五處を淨灑し、次に香・華・飮食・衣服並に結界。

[47] 曩莫三滿多沒駄引南引阿鉢囉二合底 娑謎誐誐曩娑謎、三滿多引砮蘖帝引 鉢囉二合訖哩二合底尾秣弟引達磨駄引覩尾戍引駄顊娑嚩二合引賀引

諸佛の慈愍有情者 唯願くば我等を[48]存念せよ、 我今請白す、諸の賢聖と堅牢地神並に眷屬と 一切如來と及び佛子とに、 悲願を捨てずして、 悉く降臨し玉はんことを 我れ此の地を受くるは成就を求むればなり 爲に我れに證明加護を作し玉へ。

持地眞言に曰く 定拳は前相の如くし、慧を舒べて、地を按ぜよ。

*曩莫三滿多沒駄引南引薩嚩怛他引蘖多引 地瑟二合引咤二合曩引地瑟耻二合帝阿佐麗尾麼麗引 鉢囉二合訖哩二合底鉢哩輸睇 娑嚩二合引賀引

四、法界生身

その時に[49]薄伽梵は、一切の法界を觀察して、法界[50]倶舍に入り、如來の奮迅平等・莊嚴藏の三昧を以て、自の身表を化して雲のごとく遍ふし、諸の毛孔の中より無量の佛を出し、法界の無盡莊嚴を現ずるを以ての故に、この眞言行門を以て、無餘の衆生界を度して、本願を滿足し、衆聲の門より、隨類の音聲を出し、その本性の如く、業生を成就して、果報を受用し、顯形の諸色と、種種の語言と、心所の思念とをもつて、而も爲に說法して、一切衆生をして、皆歡喜を得せしめ、展轉加持し

[45] Oṁ bhuḥ khaṁ

[46] Oṁ nanda nanda naṭi naṭi nanda bhari svāhā(?)

[47] Namaḥ samanta-buddhānām apratisame gaganasame samanâṇugate prakṛti viśodhe dharma-dhātu viśodhani svāhā

[48] 存念、保護哀愍の意。

*Namaḥ samanta-buddhānām sarva-tathâgatâdhiṣṭhānâdhiṣṭhitâcalevimale prakṛti-pariśuddhe svāhā

[49] 薄伽梵 (bhagavan)。世尊。

[50] 倶舍(kośa)。胎藏、

彼の[四二]眞言に曰く、

[四三]曩莫薩嚩怛他引蘖帝引毘藥二合、一切如來に歸命す　薩縛佩也尾蘖帝引弊能く一切の諸障恐怖等を除く　尾濕嚩二合目契引弊の無量諸門の巧妙　薩嚩他引、諸佛の功德を總す　唅欠空の義法幢高峯觀なり　囉吃灑二合、擁護　摩訶引沫麗大力　薩嚩一切怛他引蘖他如來　奔尼也二合涅尼帝功德生　吽吽內外の二障を恐怖せしむ　怛囉二合吒重て根本隨煩惱を退治するを言ふ　阿鉢羅二合底訶諦無對無比力　娑嚩引賀一切の賢聖を警覺して證明を作さしむ。

纔に憶念するに由るが故に、　諸の毘那夜迦(Vinayakas)　悪形の羅刹(Rākṣasas)等　かれ一切馳散し　地神を警發して　應に是の如くの偈を說くべし。

雙膝を長跪して、定手に杵を持して、心に當て、

慧手は五輪を舒べ、平掌にして地に按ず。

[四四]怛鑁二合、汝なり　泥引尾引、地天なり　娑引乞叉引二合、護なり　部引路引悉親なり。
薩嚩一切沒馱引難佛なり多聲あり　路引易南引、度なり、導師の義あり
左哩也二合引、行なり。曩也修な尾勢引曬引數殊勝なり
部引密淨地播囉蜜路引、彼岸到速者等
摩羅魔天細引便演二合、軍衆　怛他引、如婆蘖南二合、破
舍引吉也二合、迦なり　釋僧呬引曩師子路引易弩引、救世
怛他引賀我の如く魔羅魔なり　惹演降なり　乞渫二合怛嚩二合、引、伏なり
滿拏䕶曆曼荼羅　佉夜引、なり　畫沒藥二合唅我なり

地神持次第眞言に曰く、

金剛掌にして掌を開き、仰け按じて誦すること三七し、覆ひ按ずることも亦復然り、即ち堅牢地と成る。

【四二】 無能堪忍眞言

【四三】 Namaḥ sarva-tathāgatebhyaḥ sarva-bhaya-vigatebhyaḥ viśva-mukhebhyaḥ sarvathāhaṁ khaṁ rakṣa-mahābale sarva-tathāgata-puṇya-nirjāte hūṁ hūṁ trāṭa trāṭa apratihate svāhā

【四四】 tvaṁ devīsākṣi-bhūtāsi
汝大親護者
sarva-buddhānāṁ tāyināṁ
於諸佛導師
caryānaya-viśeṣeṣu
修行殊勝行
bhūmi-pāramitāsca
淨地波羅蜜
mārasainaṁ yathā bhagnaṁ
如破魔軍衆
śākyasiṁhenatāyinā
釋師子救世
tathāhaṁ mārajayaṁ kṛtvā
我亦降伏魔
maṇḍalam lekhayāmyahaṁ
我畫曼荼羅

三八 彼をして堅固ならしめんが爲に　自ら執金剛なりと觀じて　金剛輪を結ばしめよ。

金剛薩埵の眞言に曰く、

第三の三昧耶を以ての故に、自身の土をして、皆な金剛の如くならしめ、無量の持金剛衆の與に、自ら圍繞せられ、又隨類の衆生を折伏し攝受せんとするが爲の故に、執金剛、弟子の事業の爲の故に、又金剛の眷屬を加持するが故に、謂く金剛薩埵の身を莊嚴するが故に、具に三三昧耶を說く。眞言と印とに由るが故に、彼の身心をして倶に淨からしめ、能く現に十方諸佛の法輪、三たび隨て轉ずれば、能く無上の大法輪を、三千大千世界に轉ずるを見る。

三九 曩莫歸命又歸敬三滿多普く嚩日囉二合赧一切金剛嚩日羅二合引怛摩呴引含謂く我なり

我が此の身を諦觀せよ　即ち是れ執金剛なり。　次に金剛甲を擐き　當に所被の服は
遍體に光焰を生ずと觀ずべし。

四〇 かの眞言に曰く、

*曩莫三滿多嚩日羅二合引赧　唵引嚩日羅金剛　迦嚩遮吽因の義、三乘法の故に、具に三身說法の義を論ず。果位を因と名くることを得、因とは出生生起の義なり。

囉字の色は鮮白なり　空點を以て之を嚴り彼の髻の明珠の如く　之を頂上に置け　積む所の衆罪垢は、是れに由て悉く除滅して、福智皆な圓滿せん。　一切の四一穢處には當に此の字門を加ふべし。　赤色にして威光を具し、焰鬘遍く圍遶す。　次に魔を降伏し、諸の大障者を制せんには、當に大護者　無能堪忍の明を念ずべし。

諸佛平等の力は寂に任せずして、大方便を現ず。彼の威光の猛盛に由て、初生の小兒の烈日の光を視るに堪えざるが如く、此れ亦是の如く、一切堪忍して而して敢て映奪する能はざるは、此の明王が此の眞言を以て、行者を護ればなり。

【三八】彼とは、行者自身。

【三九】Namaḥ samanta-vajrāṇām vajrâtmako' ham

【四〇】金剛甲眞言
*Namaḥ samantavajrāṇām oṁvajra-kavaca hūṁ

【四一】穢處、不淨所。便所等。

能く福智聚を滿ず。　謂ゆる三業道を淨除す。

[三四]眞言に曰く、

初の三昧耶を以ての故に、如來の祕密身口意と同じく平等なり。亦自受用の爲の故に、亦大悲胎藏壇を立つるが爲の故に、亦如來の眷屬を加持するが爲の故に、亦五處の眞言各一遍し、能く宿障を除きて以て、自身を淨め、自身を淨からしむるが故に、外障亦淨し、故に諸障皆入ることを得ず、これ大護なり。諸佛警覺して、其の所願を滿するなり。法印を開かざるに由るが故に、一切の諸法を總開すべからず。若し先に作さずんば、諸法を作すべからず。

[三五]曩莫三滿多沒駄喃（歸命一切如來）阿三迷（無等謂く三身なり）怛哩（二合）三迷（三平等、法報化合して一身となりて、衆生を化す）三摩曳（三昧耶）娑嚩（二合）賀（引）

纔に此の印を結ぶが故に、　能く如來地を淨め地波羅蜜を滿じて　三法界道を成す。

次に法界生を結べ　密慧の標幟なり。

身口意を淨むるが故に　遍く身分を轉ず。

彼の[三六]眞言に曰く、

第二の三昧耶を以ての故に、如來加持法界宮の尊特身に同うすることを得、又法性身諸の菩薩を成就せんが爲の故に、又毘盧遮那阿闍梨の事を作さんが爲の故に、又蓮華部の眷屬を加持せんが爲の故に、兩手各別に拳に作して、頭指を竪てて胸に當て、裏に向つて曳き頭指の背を內に向けて漸々に心に至して散ぜよ。凡そ眞言を誦じ、印を作ることは、喩へば耕牛の二頭同く進んで前後することを得ざるが如くせよ。

[三七]曩莫三曼多沒駄喃達塺駄（引）啫（法界）薩嚩（二合）婆嚩（自性亦本性なり）句（引）唅（我なり、我は即ちこれ法界なり、行者未だ眞性を體せずと雖、但し印と眞言とを以てせば、即ち法界に同ずるなり。）

法界の自性の如く　而も自身を觀じ

【三四】眞言。淨除三業道の眞言。

【三五】Namaḥ samanta-buddhānāṃ asame trisame samaye svāhā

【三六】法界生眞言。

【三七】Namaḥ samanta-buddhānāṃ dharma-dhātu svabhāvako' haṃ

つて安坐し、分明に初字の[26]明を諦觀せよ。輪圍九重にして虛圓白なり。正念して心を[27]四無量に運び、慈に入つて遍く[28]六道を緣せよ。有情は皆な如來藏と、三種身口意の金剛とを具せり。我が所修の功德力を以つて、同じく普賢の法界身に入れしめん。

大慈[29]三摩地眞言に曰く、

*唵引 摩賀引昧怛囉也引二合 娑頗二合引囉

悲心をもつて愍念せよ諸の有情は　生死に沈溺して妄分別し、　彼の煩惱と隨煩惱とを起して　眞如平等の理は　河沙の諸の功德に超過せるに達せず　我が所修の三密力を以て

普く願はくば[30]虛空藏に等同ならしめん。

大悲三摩地眞言に曰く、

[31]唵引 摩賀引迦嚕拏引夜娑頗引二合囉

喜心無量にして四生に遍ねし、　本來淸淨にして蓮華の如し、　凡そ所修の行を有情に及ぼし

同じく觀世自在身を證せしめん。

大喜眞言に曰く、

[32]唵 秫馱鉢囉二合謨引娜娑頗引二合囉

捨心淸淨にして法界に遍せしめよ、　我と我所と及び蘊處とを離れ　能所平等にして心生せず、　性相本寂にして空庫に同ぜしめん。

大捨三摩地眞言に曰く、

[33]唵引 摩護引閉乞灑引二合 娑頗引二合囉

次に當に三昧耶の印を結ぶべし。

定慧を虛心にして合し、空を竪建して幢の如くす。

【二六】明。眞言の種子。
【二七】四無量。慈・悲・喜・捨。
【二八】六道。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天。
【二九】三摩地(samādhi)等持。
*Oṁ mahā-maitraya sphāra
【三〇】虛空藏。虛空法界、卽ち宇宙。
【三一】Oṁ mahā-karuṇāya sphāra
【三二】Oṁ śuddha-pramoda-sphāra
【三三】Oṁ mahopekṣa-sphāra

[二二]唵引、薩嚩、怛他、蘖多、本引惹、惹曩引　弩莽捺那、布引闍、迷引伽、三莽捺囉、二合薩怛二合引囉儜、三麼曳引、吽引。

我今諸の如來と、菩提大心の救世者とを、[二三]勸請したてまつる。唯願くば普く十方界に於て　恒に大雲を以て、法雨を降らしめ玉へ。

勸請眞言に曰く　普印

[二三]唵引、薩嚩、怛他引蘖多、睇瀰儜、布引惹、迷引迦、三莽捺囉二合、薩叵二合囉、儜三麼曳引吽引。

願くば凡夫所住の處をして、速に衆苦所集の身を捨てしめ、當に無垢處に至つて、淸淨法界身に安住するを得せしむべし。

奉請法身眞言に曰く、　普通印

[二四]唵引、薩嚩、怛他引蘖多、捺睇引灑夜引弭、薩嚩薩怛縛二合、係引多嘌他二合引野、達麼駄引都、悉體二合底嘌、嚩二合鉢都。

修する所の一切衆善の業は、一切衆生を利益するが故に、我今盡く皆正に迴向して生死の苦を除く菩提に至らしめん。

迴向眞言に曰く、　普通印

[二五]唵引、薩嚩、怛他引蘖多、涅哩二合也引怛曩二合、布引惹、迷引伽、三莽捺羅二合、薩叵二合囉儜、三摩曳引吽引。

これ入佛三昧の前の承事法なり。

三、入佛三昧の行相

身心をして遍く淸淨ならしめんが爲めに、哀愍して自他を救攝し、身は所應に隨つて以

【二二】 Oṁ sarva-tathāgata-pūja-jnānabodhana-pūja-megha-samudra-spharaṇa-samaye hūṁ

【二三】 勸請、他方國土の尊身を道場に迎ひ上る意。

【二三】 Oṁ sarva-tathāgata-dhiṣaṇa-pūja-megha-samudra-spharaṇa-samaye hūṁ

【二四】 Oṁ sarva-tathāgata-dadhesyāmi sarva-sattva-hetarthāya dharma-dhātu sthitir bhavatu

【二五】 Oṁ sarva-tathāgata-niryātana-pūja-megha-samudra-spharaṇa-samaye hūṁ

對して、悉く皆懺悔して復び作さざるべし。

出罪眞言に曰く、 大慧力印

[一五]唵引、薩嚩、播引波、薩怖二合 吒、娜引訶曩、嚩日囉二合引野、 娑嚩引二合賀引。

十方三世の佛の三種の常身と正法藏と、 勝願菩提の大心衆とに[一六]曩莫し、 我今皆悉く正しく歸依したてまつる。

歸依眞言に曰く 普印

[一七]唵引、 薩嚩沒、馱冒地、 薩怛鑁三合、設羅赧蘖車弭、 嚩日羅二合、達磨、 頡唎二合。

我れ此の身を淨めて諸垢を離れたると、 及與び三世の身口意、 大海刹塵の數に過ぎたるとを 一切の諸の如來に奉獻したてまつる。

施身眞言に曰く、 獨股印

[一八]唵引、薩嚩、怛他引蘖多、布引惹、鉢囉二合嚩嘌多二合曩夜引 怛麼二合南、涅哩二合夜引哆夜引弭、薩嚩、怛他引蘖多、室者二合引地底瑟吒二合引擔、 薩嚩、 怛他引蘖多惹引攤、謎、阿引味設覩。

淨菩提心の勝願寶を、 我れ今發起して群生を濟はん。 生苦等の集に纒はれる身と、 及與び無知に害せられた身とを、 救攝し歸依し解脫せしめて、 常に當に諸の[一九]含識を利益すべし。

發菩提心眞言に曰く、 定印

[二〇]唵引、 冒地、喞多母、怛跛引娜夜引弭。

十方無量の世界中の 諸の正遍知の大海衆の種々の善巧方便力と、 及び諸佛子と群生との爲めに、 修する所の諸有福業等とに、 我今一切盡く隨喜せん。

隨喜眞言に曰く、 歸命合掌亦金剛合掌と云ふ。

【一五】 Oṁ sarva-pāpa-sphaṭa-dāhana-vajrāya svāhā

【一六】 曩莫(namaḥ)。 敬禮・歸依・歸命の意。

【一七】 Oṁ sarva-buddha-bodhi-sattvam saraṇam gacchāmi vajra-dharma hrīḥ

【一八】 Oṁ sarva-tathâgata-pūja-pravartanayâtmanaṁ niryātayāmi sarva-tathâgata ścâdhitiṣṭhītam sarva-tathâgata-jānam me āviśatu

【一九】 含識。 有情の万類、又生命あるもの。

【二〇】 Oṁ bodhi-cittam utpādayāmi

觀察し相應すれば成就を作さん。先づ灌頂の傳教尊を禮して、眞言所修業を請白せよ。智者は師の許可を蒙り已て、地分の宜しき處、妙山・輔峯・半巖の門、芰荷・青蓮をもつて遍く嚴る池、大河・經[九]川・洲岸の側、人物衆の憒閙を遠離し、條葉扶疎、悅意の樹、多饒の乳木及び祥草、或は諸如來の聖弟子、常に往昔に於て遊居する所、寺塔・淨[一〇]練若古仙室に依て、當に自心の意樂處に於て、有情を悲愍して、大壇を畫くべし。慧力を具すれば、能く堪忍せん。この夜、放逸にして生ずる所の罪を、慇懃に還淨めて、皆悔除せよ。心目に視觀し諦かに明了にして、五輪投地して、作禮すべし。

二、九方便

十方正等覺、三世一切の具三身に歸命し、一切の大乘法に歸命し、不退の[一一]菩提衆に歸命し、諸明眞實言に歸命し、一切の諸密印に歸命し、身口意の清淨業を以て、慇懃に無量恭敬禮し、禮すること三たび遶ること三たびして讚歎し、出んと欲して、亦還た三禮して讚し上るべし。

[一二]眞言に曰く、

持地の印、手印に四名あり、その右の智手を毘鉢舍那(vipaśyanā 觀)左の左手を三昧(samādhi 定)と名け亦捨摩他(śamatha 止)と云ふ。

[一三]唵引、曩莫薩、嚩怛引蘖多、迦引嚩引吃質多、滿娜、滿娜南、迦嚕弭。

我れ無明に由て積集する所の　身口意業をもつて造れる衆罪、貪欲恚痴心を覆ふが故に、佛と正法と賢聖の僧とに於て、父母と[一四]二師と善知識と　及以び無量の衆生との所に於て、無始より生死流轉中に、具に極重無盡の罪を造れるを、親り十方現在の佛に對

【九】經又は涇に作る。涇は水の名。

【一〇】練若又阿蘭若迦(āraṇyaka)。人里を離れたる淨地。

【一一】菩提衆。具には菩提薩埵(bodhi-sattva)。上は覺智を求め、下は衆生を救ふ丈夫を云ふ。

【一二】禮拜眞言。

【一三】Oṁ namaḥ sarva-tathāgata-kāya vācitta-vandana-vandanaṁ karomi

【一四】二師。依師と戒師とを指す。依師とは教養の師、戒師とは授戒の師。

大毘盧遮那成佛神變加持經蓮華胎藏[一]菩提幢標幟普通眞言藏廣大成就瑜伽

青龍寺　沙門法全集

卷の上

[二]契を結ばんと欲するものは、敬んで十方三世の諸佛に白すべし。我等下猥の愚鈍の凡夫は、此の印を掌持すと雖ども、由し蚊蟻の[三]須彌山を掌持するが如く、恐らくは勢無からん。唯願くば諸佛、我等を加護して、我等をして、無上正覺を得せし給へ。此の印を結持すれば、佛の勢力に同じからん。この語を發し已つて、至誠に禮拜すべし。

一、歸敬序

稽首す毘盧遮那佛の　淨眼を開敷せること、青蓮の如くなるに、我れ大日經王に依て、供養を資くる所の衆儀軌を說かん。次第眞言法を成ぜんが爲に、彼の如く當に速に成就を得べし。此の生に於て、[四]悉地に入らんと欲はば、授學處の師と同梵行(者)とに、一切[五]毀壞の心を懷くこと勿れ。愚童の心行の法を造せざれ。諸尊に於て嫌恨を起さされ。世の導師の契經の說の如く、能く大利を損することは、瞋に過たるはなし。一念の因緣悉く[六]倶胝曠劫に修する所の善を焚滅せん。この故に慇懃に常に捨離すべし。淨菩提心の如意寶は、能く諸願を滿じて塵勞を滅す。[七]三昧と智念と此れに由て生ず。是の故に我今勤て守護せん。又常に大慈悲と、及與び喜捨無量心を具足し、親り[八]尊の所に於て、明法を授かり、

【一】菩提幢標幟。五輪を意味す。
【二】契。印契。十指にて如來內證の德を表示す。
【三】須彌(sumeru)。妙高山。
【四】悉地(siddhi)。修行成就。
【五】毀壞心。淨菩提心を損ふ卑劣心。卽ち瞋恚等。
【六】倶胝(koṭi)。億。
【七】三昧(samādhi)。等持。卽ち心を一境に安住せしむる意。
【八】尊。授法の阿闍梨。

て少數である。それ等の諸尊が、事實存在しなかつたにしても、其の本誓なり形相なりを觀念し、我が淸淨心中に之を諦觀する時に、其所に味ふ可き何物かを見出し得る。これに於て、祖師先德の心中の或物とも交感し得ることに成る。故に觀行を主とする場合は、諸尊の歴史的探求は、全く無用と成る。現今の佛教研究は佛陀の遺骨を數へて居るやうなもので、佛陀の血が流れ、肉の動いて居る所に接しやうとする行き方では無い。佛教者に底力なく、世を感化する力の無いのも、歸する所は、釋尊を現實の上に活かし、働き出させることに、注意が缺けて居るからではあるまいか。

昭和六年三月七日

譯者神林隆淨識

對の位であり、表面は差別相對の位である。平等絶對の位の上に、差別の相對相を現じたものが、胎藏漫荼羅海會である。

眞如實相の理を、超越過境のものと見做して居るのが、無著・世親の大乘始教である。此の超越過境の眞如實相を、人類の實生活の上に引き下げ、我等の見聞し觸知する此の現實世相の中に、眞如實相の理を識味しやうと努めたのが、華嚴・天台の兩一乘家である。この超越過境の眞如實相に、釋尊の大人格を溶融し、眞如實相の理は、釋尊に依つて、事實として人間世界に動き出したものと見やうとするのが、眞言密教である。弘法大師が、立教開宗せらるる便宜上、法身を極力高調した爲めに、歴史上の釋尊は、眞言密教には、縁遠い様に考へられて居るが、密教の經軌を冷靜に讀み去り讀み來る時、如何に歴史上の釋尊に、緊密な關係があり、又如何に此の歴史上の釋尊を理想化し、眞言行者修行の目標として居るかに驚かされるのである。之を一方から見れば、胎藏漫荼羅は、大日如來の種種の三昧示現の陳列場であるとも見られ、否、かく見るのが、經軌の上からは正しい見方かも知れない。それで吾人は今の場合も、斯く見て行かふと思ふのであるが、又之を一方から見れば、釋尊の理想化であり、釋尊の肉身の各支分・頂・舌・臍等、其等を悉く一法門身と見做して居ることや、釋尊修行の德目や、釋尊讃美の概念、其等を單に語として、若しくは概念としてのみ取扱はずに、眞言行者が、自身の觀想心の上にて、具體化し、之を一一尊身として、讃歎し供養するのは、歴史的の釋尊をば、啻に偉人として又聖者として追憶する計りでなく、その偉大にして且つ崇高なる大人格をば、行者の心の中に浸潤させ、身の上に活かして行かうとするのが、瑜伽觀行者の目指す所であることが窺はれる。

胎藏漫荼羅海會の諸尊の多くを、歴史的に其の發達の經過を探ることは、現に學者間に行はれて居るが、其等の歴史的事實を全く無視し、之を一括して大日如來の萬德の發現に外ならないと見做し、殊に釋尊は大日如來が、此の娑婆世界に肉現し玉ふたのであると見做し、此の歴史上の釋尊を通して、久遠實成の佛身、卽ち大日如來を觀見し、行者自身、この久遠の佛身に親炙し、否自身が久遠の佛身であることを、直證し體現しなければならないといふのが、眞言行者の修行の眼目と成つてある。此の如き見方は、行者が瑜伽觀行中に於て、斯く考へさせられて來るのであつて、敢て阿闍梨耶の指示を受くるまでも無い。十方三世の諸佛諸菩薩は、觀佛三昧の行者、若しくは三密瑜伽行者の觀見したもので、歴史的に事實上、世に存在せられた佛菩薩としては、極め

仙・驕答摩仙・蘖栗伽仙・增長天・閻魔王・死王・焔摩七母・暗夜・焔摩后・奉教官・拏吉尼の諸眞言あり、又此等諸尊の位置や、火仙焔魔羅王の尊形、火天・噼思仙・七母・暗夜・焔魔后の印契をも示してある。

3、羅刹部（南西隅）

羅刹主・羅刹斯・羅刹衆の眞言あり、又大羅刹の印契が示されてある。

4、龍衆（西方門内）

廣目天王・水天・難陀・拔難陀・諸龍・地神・妙音天・那羅延天・同天后・月天・二十八宿・魔醯首羅天王 烏摩妃・遮文茶・風天の諸眞言、及び嚩嚕徒の尊形・那羅延・風天等の印が明かされてある。

5、多聞天王、夜叉衆

（北方門内）

多聞天王・諸藥叉・諸藥叉女・諸毘舍遮・諸毘毘支の眞言あり、その他の此の部諸尊が悉く示されてある。

6、伊舍那天（東北隅）

伊舍那・諸歩跢を記し、それ等の眞言を說き明してある。

7、帝釋・日天（東方門内）

この部諸尊の位置・形像・印契を明し、殊に帝釋天王・持國天王・日天子・摩利支・七曜十二宮神九執・梵天・乾闥婆王・諸阿修羅王・摩睺羅伽・諸緊那羅・諸人・普世明妃の諸眞言を明してある。

外金剛部を四方四維に區分する場合に、以上東・西・北の三方と東南・南西・北東の三維を擧げて、北方と西北とが略されてある様に見えるが、實は此等を略したのではなく、他の方維に混入して說き明して有るから、此の點は本儀軌に於て尙校正を要する所であると思ふ。

十七、眞言行者の意得

眞言行者は、如來地に住して、漫荼維を畫く可きこと、不淨に對しては、覽（[illegible]）字觀にて燒淨すること、阿字を身の支分に附して觀ずること、令法久住の眞言、並に諸聖天哀赴の眞言が示されてある。

以上に於て本儀軌の內容項目を叙述し終つたのである。

四、胎藏曼荼羅の組織

次に胎藏漫荼維の組織全體を、如何に觀察す可きであるかに就いて尙一言して置きたい。胎藏界會の諸尊は、大日如來を中心尊格として、その他の諸尊をば、悲門とか智門とかに云ふ如き部類に一括し、此等を漫然と集めたに過ぎないと從來は考へられて居る様であるが、吾人の見る所は、稍ゝそれと異り、十三大院の諸尊集會の一尊をも洩らさず、それ等は悉く大日如來普門の德の顯現と見做し、十三大院の裏面を見れば、遍法界の理法身の一佛一尊であり、之を表面から見れば、十三大院の諸尊聖者が、各ゝに自受法樂の爲めに、自內證の法門を說示して居らるるものと考へたい。此の中、裏面は平等絕

智印に當り、伽耶迦葉・優樓頻螺迦葉・大勇猛菩薩・大安樂不空金剛等の名稱は、彼此全同である。

八、如來の大悲示現（觀音院、北方第一重）

觀自在菩薩・多羅菩薩・毘倶胝菩薩・大勢至菩薩・耶輸陀羅菩薩・白處尊菩薩・馬頭明王・諸菩薩・地藏・諸奉教、以上十尊の眞言が明されてある。又蓮華部發生・寂留明・大吉祥明・如意論・寂靚波大吉祥・大隨求・大吉變・水吉變・不空羂索・豐財・白身觀世音・披葉衣・蓮華・燈・塗香、などの名が列記されてある。

九、如來の大智示現（文殊院、東方、第二重）

文殊師利・光網・無垢光・計設尼・烏波計設儞・地慧・質怛羅童子・召請童子・不思議童子の九尊の眞言が掲げてあり、其他數多の名稱が列記してあるが、今は之を略する。

十、如來の除障三昧（除蓋障院、南方、第二重）

除一切蓋障・除疑性・施無畏・除一切惡趣・救護慧・大慈生・悲旋潤・除一切熱惱・不思議慧の九尊の眞言が示されてある。

十一、攝取不捨の化現（地藏院、北方、第二重）

地藏・寶處・寶手・持地・寶印手・堅固意の六尊の眞言を明す。

十二、法財福德の化現（虛空藏院、西方、第二重）

虛空藏・虛空無垢・虛空慧・蓮華印・清淨慧・行慧・安住慧・出現智・執蓮華杵・檀・戒・忍・進・禪・慧・方・願・力・智の十波羅蜜の諸眞言を出す。

十三、擁護行者の化現（金剛手院、南方、第一重）

金剛手・忙莽鷄・金剛針・金剛鎖・降三世・一切持金剛・金剛拳・一切奉教金剛の諸眞言、其他諸金剛部諸尊の名稱と、並に部母忙莽鷄・忿怒降三世・忿怒軍吒利・忿迅倶摩羅・烏芻沙摩等の形像とが、偈頌に於て、說明されてある。

十四、辨事の化現（持明院、西方、第一重）

不動尊・勝三世・大威德の眞言と、不動如來使者・勝三世・焰曼威怒王（卽ち大威德）の形像が、偈頌に於て、明されてある。

十五、歷史上の眞言行菩薩（釋迦院、東方、第三重）

釋迦牟尼佛・能寂母・毫相・佛頂・白傘蓋・勝佛頂・最勝佛頂・光聚・除障・廣生・發生・無量聲・聲聞・緣覺・無能勝・無能勝妃の諸眞言を記し、又能寂母と毫相との尊形を示し、五佛頂の印契を明してある。

十六、歸順の外道諸天（外金剛部院）

1、淨居衆（東北隅）

自在天子・普華天子・光鬘天子・滿意天子・遍音天子の諸眞言が示されてある。

2、火天部（東南隅）

火天・火天后・喃斯仙・阿趺哩仙・尾哩瞿

のに、今の儀軌に印契が示されてあることは、正に本書の長所である。

三、入佛三昧の行相

先づ大慈・大悲・大喜・大捨の四無量心を明かし、次に三昧耶・淨三業・金剛薩埵・金剛甲・無能堪忍・警發地神・作壇・灑淨・持地の十四項に付いて眞言と印契作法と、それに偈頌とが加へられてある。眞言の句義並に印契作法は、法全阿闍梨が加筆されたものである。

四、法界生身

大日尊の入法界俱舍、法界生身所說の讃頌・大慧刀・大法螺・蓮華座・金剛大慧・如來頂・如來頂相・毫相藏・大鉢・施無畏・與願滿足・悲生願・如來索・如來心・如來臍・如來腰・如來藏・普光・如來甲・如來舌相・如來語・如來牙・如來辯舌・如來持十力・如來念處・一切法平等開悟・普賢菩薩如意珠・慈氏菩薩・一切三世無礙力・無能害力等の三十一項に亘り、印契と眞言とが示されてある。但し印契に關して、本文に表はれてあるのは、如來藏の印だけで、其の他の印は、法全の註に說かれてある。如來の心・臍・腰・藏・舌・語・牙・辯舌・十力等は、現圖漫荼羅に於ては、釋迦院に列せられてあるが。今は法界生身に因んで示されてあるから、生身の釋迦佛の身相の支分と見るよりは、法界生身の身相支分と見做す方が、寧ろ正當な見方であらう。次に普賢と慈氏とは、現圖漫荼羅では、中台八葉中に列せられてある。今この二尊が法界生身の附近に置かれてある所から見れば、此の法界生身は、現圖漫荼羅では、八葉中臺の尊特身に當ることが解る。

五、祕密漫荼羅の建立並に諸尊供養

大海・金剛手持華・祕密漫荼羅の偈頌・淨治・辟除結界・召請諸佛・三昧耶・奉華座・執金剛加持・怖魔・結界・不可越守護・相向守護・塗香・華鬘・焚香・飲食・燈明・虛空藏菩薩普供養・法身讃・報身讃・應身讃等の二十二項に就いて說示されてある。こは行者の清淨心中に觀見せられる祕密漫荼羅建立の次第を示したものであり、以下に示す所の漫荼羅諸尊は、此の漫荼羅を細說したに過ぎないと思ふ。

六、如來祕密の印言と中台八葉諸尊

十二字門の加持・中台八葉諸尊・金剛手說十二字門眞言・祕密八印（大威德生・金剛不壞・蓮華藏・萬德莊嚴・一切支分生・世尊陀羅尼・文殊法住・迅速彌勒）無所不至、百光遍照。

以上六項は胎藏法中の極祕にして、灌頂許可の場合に、法器を撰んで、猥に許可を與へない部分である。

七、如來大智慧母（遍知院、東方第一重）

遍知印等の偈・一切佛心・虛空眼の三項が示されてあるが、この一段は現圖漫荼羅の遍知院に相當して居る。此處に擧げられてある虛空眼は、即ち佛眼佛母に當る。その他、遍知印は現圖漫荼羅の一切

の四行（發心・修行・菩提・涅槃）を表したものである。實相自然の智慧は、法界生身の中に起る悲念發動の基本を意味し、此の實相自然慧の本源を、般若の大空に歸し、之を如來の大智慧母と稱して居る。獨一法界生身の三昧の動きが、十三大院として活躍して表はれてある。而して譯者の今の分類は、十三大院をば、眞言行菩薩の清淨心中に潜在する自性法身の展開する相と見做し、初の中台八葉より持明院に至るまでを、行者の對內的方面、卽ち自心性德の完全發現を意味するものとし、釋迦院と外金剛部院とを、對外方面と見做し、專ら攝化利生の側を示すものと解して、此の分類を爲したのである。この見解に依り、遍知院を如來の大智慧母とし、觀音院を如來の大悲示現、文殊院を如來の大智示現、除蓋障院を如來の除障三昧、地藏院を攝取不捨の化現、虛空藏院を法財福德の化現、金剛手院を擁護行者の化現、持明院を辨事の化現となしたのである。化現若しくは示現とは、大日如來の一門の功德の顯現であることを意味する。

次に釋迦佛を歷史上の眞言行菩薩と見做したのは、金剛頂宗の釋尊に對する見方を表明したもので、その意味は、大日經宗に於ても、亦明かに現はれてある。眞言密教の中心尊格である金剛薩埵は、金剛頂經に明示されてあるが如くに、一切義成就菩薩、卽ち悉達太子菩薩であることは、確定の事實である。此の一切義成就菩薩は、事實世に出興して、當時の外道婆羅門の諸論師を說伏し、彼等を佛一乘法に導き、その奉崇し來れる諸天をば、法城鎭護の善神と見做したものが、今の外金剛部院の諸尊である。釋尊の出世に依つて、混亂せる當時の印度思想界が、平定された計りでなく、地に東西の別なく、時に古今の隔てなく、人類の正に踏み進む可き正道は、釋尊に依つて公示せられた。この事實をば、眞言教の修瑜伽者は、朝夕觀行の上に活現し、思念し、その加持護念の靈感に浸らんとするのが、卽ち胎藏法の修行要目であると譯者は信じて居る。

三、本儀軌の內容項目

一、歸敬序

この一段は、大日經王に依つて、胎藏界諸尊集會に對して、供養の次第を明す旨を示したもので、此は大日經第七卷供養法中眞言行學處品第一の文を抄錄したものである。

二、九方便

九方便とは、歸命諸佛、出罪懺悔、歸依三寶、奉獻淨身、發菩提心、隨喜福業、勸請諸尊、奉請法身、廻向修善の九であるが、此等の印契・眞言・偈頌が明されてある。これ亦大日經第七卷增益守護清淨行品第二の抄錄である。但し第七卷には、眞言と偈頌とだけで、印契は缺けて居る

の法界曼荼羅中に流入する妙行を示したものであり、靑玄の二軌は釋迦牟尼如來が、大日如來の法界曼荼羅中に開會せらるる儀相を示したものであると古來から言はれて居る。この四部は共に胎藏法の實修實行の次第を示したものであるが、胎藏法の次第として、根本基準と成るものは、尙此の外に大日經第七卷、卽ち供養法次第がある。この供養次第法と今の四部とを對照する時に、四部は胎藏の廣法を明かし、都法供養の次第を示し、之れに對して、大日經第七卷は、隨行一尊の供養儀式の次第を詳にしてある。而して日本に廣く用ひられてある胎藏廣次第は、今譯の儀軌に依て作られたものである。

二、本儀軌の內容

本儀軌には品類の區別が明に示されてないから、譯者は試に左の節段を設けて讀者の便覽に供する。

上卷

一、歸敬序
二、九方便
三、入佛三昧の行相
四、法界生身
五、祕密曼荼羅建立、並に諸尊供養

中卷

六、如來祕密の印言と中台八葉諸尊
七、如來の大智慧母（遍知院、東方、第一重）
八、如來の大悲示現（觀音院、北方、第一重）
九、如來の大智示現（文殊院、東方、第二重）
十、如來の除障三昧（除蓋障院、南方、第二重）
十一、攝取不捨の化現（地藏院、北方、第二重）
十二、法財福德の化現（虛空藏院、西方、第二重）
十三、擁護行者の化現（金剛手院、南方、第一重）
十四、辨事の化現（持明院、西方、第一重）

下卷

十五、歷史上の眞言行菩薩（釋迦院、東方、第三重）
十六、歸順の外道諸天（外金剛部）
　1、淨居衆（東北隅）
　2、火天部（東南隅）
　3、羅刹部（南西隅）
　4、龍衆（西方門內）
　5、多聞天王、夜叉衆（北方門內）
　6、伊舍那天（東北隅）
　7、帝釋、日天（東方門內）
十七、眞言行者の意得

以上

胎藏曼荼羅十三大院（中台八葉院、遍知院、持明院、釋迦院、虛空藏院、金剛手院、觀音院、文殊院、蘇悉地院、除蓋障院、地藏院、外金剛部院、四大護院）の中で、蘇悉地院と、四大護院とが、今の分類中に見えて無いが、これは深い理由がある譯ではなく、上記の十一大院の中に含められてあるものと見て差支無い。

胎藏曼荼羅十三大院の中で、中台八葉院は、如來の醍醐の果德にして、蓮華臺は、實相自然の智慧、蓮華葉は、大悲方便である。その中、四方の四葉は、如來の四智、（大圓・平等妙觀・成所）、隅角の四葉は、如來

大毘盧遮那成佛神變加持經蓮華胎藏菩提幢標幟普通眞言藏廣大成就瑜伽の解題

一、本儀軌の由來

本書は唐代長安の青龍寺法全(ハッセン)阿闍梨の集錄したもので、圓仁・圓珍・宗叡の三師に依つて、日本に請來されたものである。本書の根源と成つてゐるものは、善無畏三藏譯の攝大毘盧遮那成佛神變加持經入蓮華胎藏海會悲生曼荼羅廣大念誦儀軌供養方便會(三卷)と大毘盧遮那經廣大儀軌(三卷)とである。(前者を略して攝大軌、後者を廣大軌と云ふ。)尙ほ法全阿闍梨には大毘盧遮那成佛神變加持經蓮華胎藏悲生曼荼羅廣大成就儀軌供養方便會(二卷)の著がある。これは阿闍梨が玄法寺に居られた時の作であるから、略稱を玄法寺儀軌と呼び、之れに對して今譯の儀軌を青龍寺儀軌と稱する。

法全阿闍梨は幼少の時、沙彌として惠果和尙に侍し、後に青龍寺の義操阿闍梨の弟子と成り、唐朝の敬宗より宣宗に至る(825—859A.D.)間に、名聲頗る振ひ、武宗の會昌の初年(841A.D.)には長生殿の持念大德に選ばれた程である。圓仁は會昌元年に玄法寺に至り、阿闍梨より胎藏法を授かり、玄法・青龍の二軌を傳へ受け、圓載と圓珍とは宣宗の大中九年(855A.D.)に、青龍寺にて受法し、圓珍は青龍寺儀軌を請來せられた。又宗叡は懿宗の感通三年(862A.D.)に、青龍寺にて同阿闍梨から胎藏法を受けられた。かく我が後入唐の諸德が法全阿闍梨を慕ふて入唐留學せられたことに徵しても、阿闍梨の學德が當時如何に國の內外に喧傳せられてあつたかを想像せしめるに充分である。

阿闍梨の著書として現在世に知られて居るものは、青龍寺と玄法寺との二軌だけであるが、而も胎藏法に如何に通曉して居られたかは、此の二書に依つて、その一端を窺ひ得るものがあると信ずる。二軌の中でも、青龍寺儀軌は殊に阿闍梨が心血を注いで書かれたものであることが、直に看取せられる。密部經軌中に於て、讀者の惱みと成るものは、印契と眞言の句義とである。本書が讀者を益する點は、實に此の二點に存し、中にも眞言の句義に關しては、充分注意して居られたことが想像される。大日經の眞言句義を研究するには、大日經疏と本書とが、最も信賴するに足るものである。上記の同一種類の四部の中で、吾人が本書を譯して世に公表せんとするのも、阿闍梨の此の功勞を世の多くの學者に知らせたい爲めである。

上記四部の儀軌の中で、攝大と廣大との二軌は、十方三世の諸佛が、大日如來

く衆生を利し、精進力に隨て、世間安樂ならん。是に知んぬ、呪者は、謂く諸の疑網を斷じ、勤て修行を發す。是の故に、密迹、汝當に諦聽せよ。若し一切に呪法を成就せんと欲せば、應に正見を起して、一切を慈悲し、偏に印塔を功すれば則ち成就して、證地難からざるなり。現世の資糧福善圓滿し、當に所生の處に、常に福樂を受くべし。

密迹、過去の無量無數の一切如來、皆是の頂王の法門心地を得玉へり。我亦是の頂王法心を證成す。

その時、世尊、重て佛眼を以て、無量無邊の一切佛刹を觀察し、金剛密迹主に語して言く、我れ餘の諸の三部所說に於て、律法及び成就法の印呪等、皆な取用に任す。彼の呪力を以て、能く障惱を除かん。一切の臭穢・殘宿食は、皆食すべからず。若し食する者は、悉地の驗を證せず。是の如く等の法を略說するのみ。若し我れ億劫の間、廣說すとも盡すべからず。若し人此の頂輪の法門を得て、受持供養すれば、此の生際より、乃し菩提に至るまで、更に退轉せず。應に知るべし、是の人早く已に、故往に資糧菩提の善根を積集せり。此の因緣に由て、今頂輪王法を具足し、圓滿するを得たり。と、

この時、如來、此の經を說き玉ひたる時、金剛密迹主、諸大菩薩・苾芻・苾芻尼・諸天龍・藥叉・羅刹・乾闥婆・乃至一切世間の有情等は、佛の經を說き玉ふを聞きて、皆大に歡喜して信受奉行しき。

五佛頂三昧陀羅尼經卷第四　畢

この印を結んで護身し、印を以て五處を印し、結界には右轉し、解界には左轉す。地界には、地を拄へ、上界には上を拄へよ。

この一法印を亦淨地印と名く。力能く一切の諸事を成就す。

結界と護身とは、淨治地にも用ひ、灌頂時にも用ふ。是の一印呪は、已に上の說の如し。

頂王唎嚕縿迦呪の五

前の根本呪に準じ、唯改て、左中指の頭を屈して、右中指上第一節文を拄へ、右中指は直く竪てて之を伸ぶ。

この一法印を亦頂王心印と名く。力亦能く障礙・毘那夜迦の諸惡鬼神を調伏す。常に此の印を輪結すれば、諸の障印を摧き、灌頂時に用ひ、沐浴時に用ふれば、皆障惱なし。この一法印は亦上の呪の如し。

難勝奮怒王印の六

前の根本印に準じ、唯改て、二中指の頭を屈して、右にて左を押へ、各〻左右指の背の岐間を緊押す。

この一印呪は亦上の說の如し。

密迹、此を略說一印呪と名け、又別印は衆法に隨て用ふ。

若し廣說すれば、是の如く印を流布する者の、敎行は、則ち無量あり、廣說を假らず、何を以ての故に、我餘部に於て、廣く分別して說けり。

五頂輪王成就の呪は、佛眼呪法と共に成ず。是の法門を以ての故に、解脫を得。

若し楓香木を以て、齊截然火し、持するに烏麻を以て、酥乳等と和し、日日三時に、之を燒て供養すれば、則ち呪神の歡喜と護守とを得て、三悉地を與へられん。悉地とは、是れ一切諸佛の說なり。謂

左右の二頭指と、二無名指を二小指とを以て、右にて左を押へ、相叉へて掌の中に入れて拳と作し、二大拇指は並に雙つとも、頭を屈して掌中に入れ、二中指を直く竪て、頭を合して相拄ふ。

この一法印を作り訖りて、頂上に於て、一切の佛頂を破し、心心より諸佛頂を通じて、法用を成就す。若し諸の一切の惡天・龍神・藥叉・羅刹・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩呼羅伽・毘那夜迦は、この印を輪結するを見れば、悉く皆怖れて走らんのみ。

一切輪王心印呪に曰く。

[一九] 那莫、三漫多勃馱南、唵、吽卓二合嚕、計、畔、馱、莎嚩訶、

この一印呪に大威德を具す。若し輪印を誦すれば、大安樂を得て、衆苦を蠲かん。故に國人の安寧も、亦能く一切の事を成辦するが故に。

頂王請喚印の二

前の根本印に准じ、唯二中指の頭を以て、下上に微微に來去す。

この一法印は、一切佛菩薩等、及び諸呪神を啓召す。この一印呪は、已に上說の如し是。れ亦通して、塗香・散花・香燒を供養する處に用ふるなり。

火天を請喚する印の三

前の根本印に准じ、唯改て、二中指を屈して、半環の勢の如くせよ。頭を相著くる勿れ。

この一法印にて、火天を請喚して、而して之を供養す。若し獻供し畢りて、火天を發送する時には、則ち却て直く伸べ、中指の頭を伸べよ。供養の印呪は、已に上の所說の如し。

頂王摧碎印の四

前の根本印に准じ、唯改て右の中指の頭を屈して、左中指上の第一節文を拄へ、左中指を直く竪てて、之を伸ぶ。

【一九】 Namaḥ samanta-bu=ddhānāṃ oṃ hūṃ truṃ bandhu svāhā.

若しくは青蓮を執り、　相闘紛騰して、雲の轉ずるが如く、　勇奕の威光は、日月を蔽せん。若し頂輪法を受持する有らば、　是の如くの難調を皆な調伏せん。

その時、世尊、又金剛密迹主に告ぐ、我復當來の一切呪者の爲に、略して三種悉地成就處を説かん。謂ゆる上中下なり。是の如くの三地に、各ゝ復三あり、或は淨不淨處あり、智者は善く知れ。上は謂く天上の三勝處なり。中は謂く大河岸・海岸・山中なり。下は謂く大泉池にして、蓮華の有る處、花果多き林處、屍陀林處となり。是の如き處は、一切法皆な同じく（成ずるなり）。（次に）不淨處と言ふは、一には惡國王の處、二には賊難多き處、三には惡伴飢饉等の處、皆な同住して作法を修治すべからず。

復三時あり、作法す可らず。謂く極熱時・瀑雨時・極寒時なり。又三時の修治有り、善く分別して知れ。五更時より、辰時に至る。午時より時に至る、酉の時より亥の時に至る。是の如き時の中に、大に念誦法を作せば、皆な圓滿することを得るなり。

密迹、復三密の法あり、善く分別して知れ。若し所念の誦法を解知せざれば、則ち驗を成ぜず。三吽摩法の中に於て、阿毘遮嚕迦法は作すべからず。何を以ての故に、譬へば毒藥の瓶に、乳を盛る可らざるが如し。若し乳を盛れば、乳は皆な毒に隨はん。是の故に善く知れ、餘は應に之を作すべし。骨露草・蘇鬱頭摩羅木、或は楓香木、或は柏木・鬱金香等を以て、又烏麻・蜜蘇・白芥子・法羅奢木等を以て大供養せよ。亦三種の法を成就することを得るが故に。

その時、世尊、復金剛密迹に語て言く、是の法王中に、又成印あり。能く頂輪眞言王・佛眼眞言等、無量の威德、無量の種事を成ず。衆生を利せんが爲に、重て眞言法を説く、一印の中に無量を生ず。又別に通用の印等あり、皆な能く無量事を成就するが故に。

頂王の根本印

し、善巧方便して、法界は虚空性の如しと觀知して、深般若波羅蜜多に入り、二心なく、不放逸にして、妄語せず、常に卒暴ならず、瞋欺と我慢と相嘲と相誹謗とを有情に說かず。三世諸佛菩薩の境界法に依持して行じ、善了分別し、隨喜修學して、軀命を惜しまず、人間を遠離して、阿蘭若に住し、每日三時に、菩提心を發し、佛法僧に歸し、菩薩戒を誦し、聽く所の如く習ひ、法義を思惟して、四攝の法を修し、佛塔を塗掃し、壇を摩して供養し、精進心を發して、心に唯一なれ。應に常に謙下して、和上・闍梨・同學を恭敬し、有情を憐愍して、密義に了達し、樂んで恒に精進し、有情を濟度して、佛性に住せよ。是の如く相應すれば、則ち成就することを得ん。と

又密迹に告ぐ、若し頂輪王呪を證成する者あらば、當來世に於て、身は金色相にして、光明は百千日に過ぎ、衆相を映蔽して、皆な之を現ぜず。頂王呪法を證成する者を見る者は、皆大に歡喜す。如意樹の如く、樂ふ、所圓滿せん。

復次に密迹、若し菩薩有りて、此の頂王法を證すれば、心に天の諸の美食に變化せんことを樂ひ、雨を地獄の一切有情に施さんと樂はば、則ち皆な圓滿せん。

此の法を修する者は、十地の菩薩も、亦障ふ能はず。密迹、此の一字王は、諸呪の中に於て、而も最も上と爲す。若し成就する者は、菩薩の萬行悉く皆な圓滿せん。所有の十重の一切の罪垢、地獄の報も悉皆な銷滅せん。諸の神通を獲、一刹那中に、即ち遍く十方國土、及び阿迦尼吒天に遊往し、菩薩行を行じて、一切佛・一切菩薩・獨覺・聲聞・諸天の歡喜讚歎を得るなり。若し無邊の世界に遊往して、衆生を導化せんと欲せば、彼の言音に隨て、諸の妙法を說きて、亦皆圓滿せん。乃至無量無數の種種の世界に遊往せん。その世界に隨て、種種の身を現じ、皆な色相言詞の巧妙を得ん。と、是に於て如來、復偈を說て言く、

輪王の祕密を成就する者の、　相好は、特那羅天に超ゆ。　諸の明仙中の大威德　各〻手に劍

禮二合、必舍遮步、多那婆娑磨二合、囉、布多娜、迦吒、布多那、筒枯嘌都二合、徙多二合、囉迦、沫多攞、訖里二合、底也二合、迦嘌磨拏、滿底囉二合、庾伽祖、嘌拏二合、庾加、多枳底庾二合、烏祖賀囉、薩婆、皤耶、努師嚫二合、波地囉二合、嘸波薩倶、跛耶細鼻曜二合、母娜窣都二合、婆伽伐底也二合、烏馱攞覓盌經二合、儗囉、儗囉囉、怛那二合、古囉娑、摩失囉二合、羝弭哩弭哩、阿迦舍、馱覩、陀喏嚷、企哩、企哩、薩婆、怛他蘗多、利耶二合、失囉二合、伐迦楞伽囉步羝茝微物儞夜二合、利耶二合、末囉、呵磨、怛他蘗多、怛他蘗帝、微濕縛二合、晋底也二合、麼囉跛攞迦囉二合、謎那冒嚩蘗伐底耶二合、跛囉嚩帝、略迦叉、略迦叉、麼、麼、薩婆、訥師覩、波捺羅二合、袍、波耶、薛曳二合、西比也二合、莎嚩訶。

如來この呪を說く時に、大千界の大地の諸魔宮殿、一時に皆な大に六反震動す。この時、如來は、金剛密迹に告ぐ、此の呪は、是れ我が所說にして、七佛十力の功德を稱讃す。諸の有情を利益し、頂輪王呪、及び諸呪を受持成就せしめんが爲に、如法に書寫し、頸臂頂上に佩帶せしむれば、則ち速に成證せん。呪神を前に置けば、圍遶し護念せん。若し淨不淨處に往詣する有れば、應に先づ是の難勝王心呪三遍を誦ずれば、則ち常に一切の天魔惡人等の爲に、而も障惱せられざらん。若し一切の諸惡鬼神伏せずして、難勝王心呪に違逆すれば、則ち毘沙門城に入ることを得ず。一切の金剛種族に背叛し、及び自種族も、亦相背叛せん。密迹、此の明王心呪に大威德あり、能く一切の事業を護衛し、諸佛菩薩、悉く皆隨喜せん。

その時、世尊、又密迹に告ぐ、我れ一切の苾芻・苾芻尼・信男・信女等の、此の不思議頂王印呪を所持し成就する爲に、三昧耶門を行ずることを說かん。應に各〻清淨の持戒に依て、菩提心を發し、阿闍梨を請して、受法壇に入り、呪法の如くに行ずべし。善根具足し、善知識に依りて、計思正念

菩提心を發し、讀誦し受持し、聽聞し思修すれば、勝福を獲て、一切を成就せん。何を以ての故に、是の法は、聞智等の三智を以て證成す。是の故に、此の法は我已に廣を略せり、當來の有情の爲に、是の法を說くが故に。

復密迹に告て言く、當來世時に於て、多くの有情あり、下劣にして精進し、下劣にして修學し、我慢・邪慢・瞋癡し、具縛・慳貪・嫉妬・諂曲・邪命にして、儀服徐行し、外に賢相を示し、法律に規らず、羞愧の赧なく、魔鬼燒心にして、唯斷見を說き、空にして所有なし。斯の如くの有情は、意思し業思す。晝夜に是の如く、多く功苦し、諸呪を受持すと雖、永く證効なからん。我れ今斯の魔業の有情の黑[18]業を破せんが爲めの故に、諸佛の難勝奮怒王呪を說く。此の有情を利益して、最證を得せしめんが爲の故に。能く精進ありて、每日三時に、持誦する者は、則ち一切の障難・魔魅の障業を破滅せん。時に金剛密迹は、歡喜し踊躍して、佛の雙足を禮し、曲躬し前に立て、世尊に白して曰く、

救世の大覺尊は、智者の恭敬する所、我今樂んで　難勝奮迅王を聞かんことを願はん。と

爾の時世尊、即ち呪を說て曰く、

那母、囉怛娜二合怛娜二合夜引也、娜麼、薩婆、勃陀冒地、婆覩、味二合、蜜也二合怛地也二合他、嚩那、嚩那、嚩那、嚩隸、怛他孽多、索訶佐低、薩婆勃陀、儞尾駛低、阿帽伽、阿波囉二合底何帝、阿波囉嚩帝、微囉剃、微蘗多、皤耶夷二合、微磨唎儞捺囉二合、娑囉二合、哪皤嚩底曳二合、味禮哪以羝、怒囉地蘗迷、薩底曳二合、儞囉冋唎、磨囉嚩擸微那捺芼、賒枳耶二合、毋泥曳二合、娑羝二合、睹薩嚩唎娜、味利曳二合、拏囉迦叉二合、落迦叉二合、麼吽二合、薩波囉蔵爛、嚩哆、薩嚩、迦楞囉鄭祖嚧那、伽底曳二合、娑儞、尾勵聿二合、徒徙孕二合、賀弭也二合、伽囉二合、薩離悉哩二合、跛、泥嚩薩埵婆那伽藥迦叉、邏迦叉娑、弭底

【一八】黑業。白業に對する語。白は善、黑は惡を意味す。

林處に詣り、三日三夜・不食不語、東西して趺坐し、頂輪王呪を誦じて、一洛叉を滿じ已り、袈裟の角を結べ。若しこれ俗人なれば、梳髪を呪結するに、安怛陀那を得よ。世間を遊行するも、人の爲に見られず。

又法あり、諸山頂に住し、常に大麥乳糜を食し、常に日に面し、結加趺坐して、洛叉遍を誦ずれば、亦安怛陀那を證することを得ん。

又法あり、左手を以て拳と爲し、呪すること、洛叉を滿すれば、如上の法を證す。

又法あり、若し月蝕時に、隨心壇を塗り、赤銅器を壇內に置き、赤銅筋を持して、酥を調攪し、酥を呪して絕せざれば、三相を現ぜしめん。一には沸沫の相なり。呪者之を服すれば、大文持を得ん。二には煙相を現せん。服する者は、大安怛陀那を得ん。三には光相を現せん。服する者は、神通を證するを得ん。雄黃法を成就することも亦是の如し。

又法あり、舍利處と山頂處と蘭若處と深山谷處と河泉處とに於て、作す所の輪法を劍法と杵杖・鹿皮等の法とは、皆各〻先づ一千八遍を呪し、然して乃ち法に依て呪を誦せよ。是の如くにして三悉地法の三昧耶を成す。故に、金剛密迹主、汝又諦聽せよ。五頂王の同成就法は、是れ諸佛の說なり。少しく功力以てすれば、則ち成就することを得。若し作法の時に、訖哩迦羅糝蟲の聲、迦迦烏、好鳥等を見聞して、この作法に入れば、則ち成就することを得。呪遍を誦する每に、常に歸命を聽き、一一誦持して、有情に回施すれば、最上勝に大果福を證するが故に。若し愚智の人、尠福の有情有りて、三千日中に、斯の法を誦持すれば、無量の艱苦、乃ち成就することを得。是の故に此の法を、若し修持する者は、精進して一心に一行を淨持し、沐浴清淨にして、雜法を營まず。唯此の法を持し、應に佛果の爲に、衆生を救濟すれば、則ち福果最上の證地を得べし。常に夢にて諸天の大威德を見る者は、則ち成就することを得ん。密迹、此の法も是の如し。若し人有りて、能く法教に依りて、

【一七】安怛陀那(antardhāna) 隱形卽ち身體の姿を隱し他人に見えなくなる法なり。

又法あり、白芥子を油に和し、毎日三時に、一呪一焼し、一千八遍して、七日を滿じ已れば、則ち他人より敬伏せられん。若し白花を焼けば、婆羅門を降伏し、若し黄花を焼けば、刹利を伏し、若し黑花を焼けば、田舍の人に敬伏せられん。若し邪見惡人を遣伏せんと欲せば、稻穀糠・苦練木葉・毒藥等を相和し、一呪し一焼すれば、則ち遣伏を得ん。

若し惡人を罰せんとならば、黑芥子を以て、一呪一焼すれば、則ち摧伏するを得ん。

若し作病鬼を遣伏せんと欲せば、結印誦呪し、毎呪の後に[13]泮(吒)字を加誦せよ。

若し人毒虫・毒藥・悶惱・疼痛すれば、呪後に[14]若顛の二字を加誦すること七遍、又[15]莫摩摩の三字を加誦すること七遍、又枲字を加誦すること七遍、又[16]緣目の二字を加誦すること七遍、皆默音にて之を誦すれば、毒を攘禁せん。若し富饒を欲する者は、諸の乳木を以て、肘の(長さに)截り、然火し、諸の果子を持して、蘇蜜と相和し、一呪一焼すれば、則ち所願の如くならん。

又法あり、白油麻を以て、蘇蜜に和し、一呪一焼すれば、亦願の如くなるを得ん。

又法あり、古嚕草を以て、寸截し蘇に和して、一呪一焼して、一洛叉を滿すれば、則ち正業命を轉じて、更に増壽を得ん。

又法あり、蘇を以て一呪一焼すれば、大威德を得ん。

又蘇と乳と相和して、一呪一焼すれば、大安隱を得ん。

又法あり、蘇と酪と相和して、一呪一焼し、大に財食を以て、赤黄牛の酥を盛れ。

是の如く火食者は、毎日三時に、時別に一千八遍し、各〻七日〻滿すれば、則ち成就を得。

密迹、又頂王の大法を成就せんと樂ふ者あらば、舍利處に於て、又は山頂に於て、燒香供養し、面を東にし、趺坐して、印を結び、呪を誦すること、三洛叉を滿じ、乃し炒稻穀花を蘇蜜に和し、像前に趺坐して、毎日三時に、三指撮持し、一呪一焼して、一千八遍し、一洛叉を滿せよ。又大山の松柏

【一三】泮吒(phaṭ)。
【一四】若顛(jñṭna)。或は韈(jñaḥ)ならん。
【一五】莫摩摩(mā mama)。
【一六】吒(ṭa)に同じ菩提場所說一字頂輪經第四參看（正藏一九、二一九）

大雑勝頂王呪に曰く。[二]

娜麼皤伽嚩底隝瑟膩沙耶薩怛囉阿跋囉爾多耶唵捨麼野捨麼野扇底難底達麼囉闍磨使底摩訶菍地二合薩皤喇陊娑馱餌莎嚩訶

この一法呪は、新淨瓶に、香水を滿盛し、呪すること百八遍し、灌頂浴身し、能く一切の罪垢災厄、毘那夜迦等を除遣し、晝夜に擁護して、能く惡夢を除かん。

その時、釋迦牟尼世尊、密迹に告て言く、この五頂王に、復少法あり、但慷誦して、如來頂印を持結し、頂王呪を印すること、三遍すれば、則ち擁護を成ず。或は火食灰、或は白芥子、之を呪すること、七遍して、髻身に帶佩すれば、亦擁護を成ず。若し災厄魍魎の疾あらば、白綫を索となし、一呪一結して、身頭に帶佩すれば、則ち除滅することを得。若し屍陀林に於て、諸法を作さんと樂ふ者は、印を結び、呪を誦ずること、一百八遍して、則ち身を護蓋して、所作の法に住せよ。

若し扇底迦法ならば、蘇を呪して火燒すれば、則ち應に法を成ずべし。若し伏藏を取らば、淨練の蘇を以て一呪一燒して、一千八遍すれば、無障礙を取らん。或は白芥子を以て、一呪一燒し、一千八遍すれば、亦無障を得ん。

又法あり、月蝕の時に於て、壇を摩し、燒香し、銀器に乳を盛り、壇の中心に置き、專心に乳を呪し、特に月を觀る勿れ。月故の如くならんと欲すれば、則ち之を持服せよ。能く一切身中の厄難を除かん。

又法あり、諸の山頂に住し、常に粳米を食し、乳を飲み、東に面して趺坐し、呪を誦すること、三洛[三]叉を滿じ已れば、則ち三日三夜、不食不語、菩提木を肘截然火し、持するに油麻・酪・蘇蜜等を相和し、三日三夜に於て、一呪一燒し、間斷せしむる勿れ。三日三夜を滿じ、明なんと欲する時、富貴財寶を得ること自然なり。

【二】 Namo bhagavati-uṣṇiṣya sarvatra aparājitāya Oṃ śamāya śamāya śanti danti (?) dharma-rāja-bhasiti (?) mahadhiṣṭitha(?) -sarva-ratn-sādhane svāhā

【三】 洛叉。十万。

この一法は、火食を燒くの時、呪を誦すること三遍し、先づ火天を請して、燒食供養し、後乃ち諸佛菩薩、及び諸の擁護の大士に、燒食供養す。

火天を發遣する呪に曰く、

娜麼皤伽嚩底烏瑟膩沙耶　此の下の句は上に同じ

この一法は、一切の獻火食都て已て、呪を三七遍誦じて、火天を發遣す。

一切頂王の心呪に曰く。

九 娜麼、皤伽嚩底、烏瑟膩沙耶、唵、杜嚕唫二合、畔馱、莎嚩訶。

この一法は自ら護り、他を護りて、一切法を營み、悉く皆清淨なり。

大摧碎頂王呪に曰く。

一〇 娜麼、皤伽嚩底、烏瑟膩沙耶、唵、微枳囉拏度曩、度曩、杜。

この一法は、若し毘那夜迦の爲に嬈、惱せられなば、常に此の呪を以て、灌頂護身し、結界結壇に一切通用せらる。

若し頂王の大結壇を作さば、屋舍を淨むる時にも、亦此の呪を以て、火食・灰・白芥子等を呪すること一百八遍し、相和して、屋舍の內外四面に散じ、或は一切頂王の心呪を以て、水灰等を呪して、之を散灑し、或は誦持する所の身呪と、心呪とを以てするも亦得、又摧碎頂王呪を誦し、佉陀羅木の橛四枚を呪すること一百八遍し、之を四方に釘して、結して壇界と爲せ。

摧惡鬼神呪に曰く、

* 娜麼、皤伽嚩底、隖瑟膩沙耶、薩嚩、米菈娜、苾途梵二合縒迦引耶、咄露二合緂耶、莎嚩訶。

この一法は能く一切衆惡の鬼神及び呪同伴の蠱を摧き、身を結護し、四方住立して、大法を施爲せん。

【九】 Namo bhagavatyuṣṇī= ṣāya oṃ ṭrūṃ bandha svāhā

【10】 Namo bhagavatyuṣṇī= ṣāya oṃ vikramāṇḍhūna dhūna dhū

* Namo bhagavatyuṣṇīṣā= ya sarva-vighna-vidhvaṃsa= kāya dhṛtāya svāhā

五頂王普通成就法護摩品第十

その時、釋迦牟尼如來、一切密法光中・佛不思議界・神變三摩地王に入り、殑伽沙の一切諸佛、同じく一切密法中・不思議神變三摩地王に入る。

この時、金剛密迹、座より起て、合掌恭敬し、佛を遶ること七匝し、却て一面に住し、如來を瞻仰して、目に異顧せず。この時、釋迦牟尼如來、殑伽沙の一切如來と與に、三摩地より安詳として起ち、金剛密迹王に告て言く、汝當に諦聽せよ。一切(諸)佛は、五頂輪王の異呪同法を說き、能く妙大不思議不廣略法を示現し玉へり。若し諸佛の說の如く、成證する有らば、密迹、一切の頂王は、通用の呪品なり。我今先づ一切頂王最勝の三摩地を說て、同じく身を請喚せん。呪に曰く、

六 娜麼皤伽伐底、隖瑟膩沙耶、翳呬、曳呬、簿伽畔、達摩囉闍鉢、囉底綖、麼、麼稱名 喝喋割二合、儉引 健馱、補澁波、度跛、末廩隣、者、慢、避、囉乞使二合 娜跛羅底二合 歌多、末囉、播囉訖囉二合 摩野、莎嚩訶。

この諸法持は、白花を以て呪すること三遍し、一切諸佛頂王・菩薩種族を、壇中の會坐に請召す。一切供養の呪に曰く、

七 娜麼皤伽伐底、隖瑟膩沙耶、縊麼、許二合、健談、補澁跛、許二合、度跛、許二合、嚩嘛儞、許二合、者、跛娜、跛囉二合、底、車、駕囉、車駕囉薩婆步地、瑟耻帝、達、摩囉闍、波囉底歌路耶、莎嚩訶。

この一法は、若し供養の時、持するに塗香・花・水・燒香及び諸の飲食を以て、皆呪すること三遍せよ。火天を請する呪に曰く、

八 娜麼、皤伽嚩底、隖瑟膩沙耶、翳呬、曳呬、帝孺、摩理禰、阿趂娜曳、莎嚩訶。

【六】 Namo bhagavatyuṣṇiṣaya ehi ehi bhagavan dharma-rāja-praticcha mama gṛhṇa kārya (?) gandha-puṣpa-dhūpa balin ca mām ca rakṣiṇâpratihata māla-parakramya svāhā

【七】 Namo bhagavatyuṣṇiṣaya e ma hūṃ gandhapuṣpa hūṃ dhūpa hūṃ balini hūṃ ca pana praticcha hara ca hara sarva-buddhâdhiṣṭitha-dharma-rājâpratihatāya svāhā

【八】 Namo bhagavatyuṣṇiṣaya ehi ehi tejo-malini agnāye svāhā

て、身を擁護し、面を東にして、趺坐し、調氣して呪を誦じ、僧伽梨衣を呪すれば、火焔を現ぜん。呪者は覩已て、身上に被著し、卽ち呪仙を證して、佛刹に騰往せん。能く衆身を現じて、壽命一劫ならん。又法あり、佛神通の月に、河岸砂禪處に詣り、一肘の佛塔を印して、(頂王呪を誦ずること)十萬(遍)數を滿じ、十四日に至りて、如法に護身せよ。復像前に於て、廣設供養し、茘草席に坐し、右手に一新淨の劍を持し、頂王呪を誦ずれば、乃ち空中に衆語の讚を出さしめん。その頂王の像上に、大光を放て、呪者の身を照し、その空中に於て、無量の天樂、鼓せずして自ら鳴らん。時に阿修羅女及び諸呪仙と呪仙の種族と亦皆集會して、無量に讃歎す。この時、呪者は、卽ち身通を證して、呪仙王と爲らん。諸天の服を著して、騰往自在なり。佛土に遊戲して、壽命大劫なり。又法あり、山高勝の頂上に詣し、壇界を嚴飾して、像を置き、東を面にして、印を結び、護身し、持するに諸藥の種種の果子を以てし、喫するに齋食を爲し、飲食する勿れ。頂王呪を誦すること、三七遍し、乃ち當に持するに屍陀林を以てすべし。鐵を鑄て輪を爲り、輻相具足せよ。その作輪匠は、六根端正にして、鑄冶を敎へ已て、一善伴を將て[四]阿修羅窟に至り、窟の門前に於て、像を懸け、壇を結び、佉陀羅木を以て、肘截して火を燃し、火食を燒設し、白芥子と無樓木葉と黑芥子と油とを以て、法の如く相和し、茅草席に坐し、右手に輪を把り、一呪一燒して、十萬遍を滿たせば、則ち修羅門の鎖鑰を破らん。二十萬遍を滿す時は、修羅宮殿は則ち大火燃せん。三十萬遍なれば、則ち修羅童女、而も自ら出現して、恭敬せん。言く大士、今何をか作爲せんとするや。願くば宮殿に入り、隨所に從伴して、亦皆な隨入せん。所に任じて使爲せられん。呪者入る時は、伴を將ひ去る勿れ。何を以ての故に、損害を恐るるが故に。若し入去する時は、左手に[五]輪を把り、呪を誦じて、直に宮殿の中に入りて、修を爲せ。修羅宮殿の一切の財寶は、悉 呪者に屬せん。窟中の一切の修羅大仙と修、羅童女とは、皆僕從とならん。若し世間に於て遊行する者は、身に亦現身を證することを得て、壽命一大劫なり。

【四】阿修羅窟。南天竺の安達羅國にありて、清辯菩薩は此の窟中に入りたりと云ふ。併し一般に阿修羅の住所を指す二萬一千由旬の地下にありと云ふ。

【五】輪。元と武器にして、之れに金・銀・銅・鐵・四類あり。金輪王とは金輪の德を以て世を統治するの稱なり。乃至鐵輪王とは、鐵輪の德に依り、其の世界を統治する王を指す。

當に神通を獲て、有情を利すべし。 輪王を成就して佛地を證し、壽を得ること、天中法勝尊の如し。

金剛密迹、此の成就法は、昔、寶當佛、凡夫たりし時、この頂輪王の呪を修持せり。この成就法は金剛幢佛・光明自在王佛、是の如き無量佛等、一一修持し玉へり。此の成就法、復、觀世音菩薩・不動慧菩薩・曼殊室利菩薩・普賢菩薩、是の如くの無量の大菩薩等有りて、皆、凡夫の時、此の法を修持して、菩提を得たり。 密迹、是の如く汝は往昔因地に於て、金剛幢如來の法滅せんと、欲するや、有情の作し難きを憐愍し、能く（此の法を成就せり）。 佛眼大明呪を修成するが故に。若し當來世に（於て）亦復汝の如く、堅固精進して、菩提心を發し、有情を憐愍して、此の頂王呪を修すれば、則ち成就することを得。復、別に法を修すれば、應に常に頂輪王を對觀して、像前に百萬遍を誦じ、當に乃ち白月の十五日に於て、加浴清淨にして、鮮淨衣を著し、一日一夜、不食不語にして、持するに白芥子を以て水に和し、呪すること一千八遍し、像前に散灑し、八方に周遍して、結して壇界と爲し、諸の飲食・香水・花・香を以て、布置供養し、壇上の四面に、諸の幡蓋を懸け、好雄黃を持し、一蓮葉上に置き、壇の中心に置き、面を東にして、趺坐し、是の雄黃を呪して、三相を現ぜしむべし。若し煖相を得れば、即ち能く一切の有情を調伏し、若し煙相を得れば、即ち安怛陀那大仙を證し 若し光相を得れば、持するに塗身を以てし、盛年の如く、身に金色の相を證し、諸呪仙を以て前後に圍遶せられ、壽命一劫にして、呪仙中の大轉輪王と爲り、牛黃法を成就するも亦是の如し。又法あり佛の神通の月を伺候し、白月一日に、一出一浴し、新淨衣を著し、三時に供養し、三時に懺悔して、發願し誦呪し、諸佛に大法輪を轉せんことを啓請する時には、則ち頂王呪を誦ずること、一千八遍し、是の如く作法して、十五日に至り、復清潔にして、一日一夜・不食不語、持するに新淨の [三]僧伽梨衣を以てし、或は錫杖、或は鉢盂を呪すること一千八遍して、壇內に置け、復種種の飲食・花・香を以て、布設供養し、周勤し、結界し

【三】僧伽梨（Saṃghāti）三衣の中の大衣なり。割截して之を合重したるものにして、複衣と譯す。

一千八盞を加燃し、金剛座を結びて、調氣して呪を誦じ、後夜に至りて、忽に空中に於て、雷震の聲を聞き、像は三相を現ず。一には華蓋動き、二には畫像の上に、大光明を放ち、三には像自ら動く。斯の如くの相を見已て、心に願求する所、皆な圓滿することを得、若し法に依て精勤して誦じて、一倶胝數を滿ずれば、名下に佛に承事供養せん。若し常に法に依て二倶胝を誦ずれば、名中に佛に承事供養せん。三倶胝を滿ずれば、名上に佛に承事供養せん。大自在菩薩の住地を證し、作法無礙力にして、能く一切天龍八部鬼神を調伏せん。若し天龍神を調伏せんと樂はん者は、之を誦すること四遍すれば、則ち各ゝ敬伏して呪者の意に隨はん。若し大菩薩地を證せんと欲すれば、當に海沙潬上、或は江河岸沙潬上に詣りて、呪を誦じ、塔を印すべし。塔の長は一肘、一呪して一塔を印す。隨て一一の塔前に、花・香水・燒香を置き、呪を誦すること、七倶胝を滿じ、最後の塔に於て、大光明を放て呪者の身に入る。この時に於て、三千大千の一切の釋梵天・他化自在天・樂變化天・廣果天・淨居天・色究竟天及び諸天等、並に種族天は、各ゝ空に住して、衆香花を雨らし、種種歌讃し、及び諸龍神・藥叉・羅刹・一切鬼神も、亦皆會湊し、散花供養して、而して之を讃歎す。所有の寒氷地獄の有情は、皆な溫適を得ん所有の猛火地獄の有情は、皆な涼適を得て。是の時、呪者は大威德を得て、身に神通を證し、天中の天と爲り、身は金色相にして、盛年者の如く、大智慧を空自在に證し、諸天等を以て、前後に圍遶せられ、空に騰ること自在なり。その同伴して作法を見る所の者は、皆な隨從して天仙王と爲ることを得、無量百千の呪仙を以て、前後に圍遶せられ、諸佛の刹に詣し、心に隨て皆な至る。或は天帝釋宮に處し、座を分て同じく坐し。身貌威光・精進智慧・一切天人に疋ある者なけん。及び菩薩の方便善巧と、甚深の智慧とを證して、有情を調伏す。復壽命無量數劫を增し、諸の如來の出現成道を見る。この時、如來は重て伽他を說き玉へり。

彼れ不思議にして、天人敬して　諸の貪垢邪見輪を斷じ、　身及び智慧、大精進にして、

卷の第四

五頂王修證悉地品第九

その時、釋迦牟尼世尊、未來世の一切有情の爲に、復大衆を觀じ、金剛密迹首に謂て言く、當來世に於て、多く下劣精進、頑愚の有情有りて、心は渾垢に耽り、下行下見して、無上の大法を成就する能はず。若し淨信純直の有情有りて、呪法を愛樂し、菩提心を發し、眞正を行じ、精進を具する者、密迹、我れ此の人の爲に、略して此の頂輪王、無量殊勝の功德威力を說く。これ諸の如來、大菩薩等の讚する所の道處なり。亦是れ無量佛三摩地門の出生する所にして、能く一切の魔界を超過し、大如來の色身を示し、一切惡天龍・藥叉・羅刹の諸の惡法を摧破せしめ、心を伏して所有の諸佛・菩薩・金剛諸天の呪法を恭敬し、悉く此の中に攝す。我れ無量百千俱胝劫に於て、此の呪を讚說すとも、亦盡す能はず。この頂王呪は、過去の一切如來、彼の有情の爲に、已に敎說し玉へり。我亦曾て過去無量百千の佛所に於て、親しく此の頂王法を聽受し得たり。亦今當に此の呪法を說くべし。金剛密迹、若し人有りて此の頂王の呪を、精持し憶念すれば、則ち無量八難の怖畏を除き、諸の魔軍を破し、諸の重罪を滅せん。

前に說く所の像、隨て一像を畫け、白檀香泥を以て、檀場を摩飾し、日日[一]三時に、法に依て澡浴し、新淨衣を著し、三時に供養し、三時に誦呪し、印を[二]輪結し、頂王の呪を誦じ、二百萬(遍)を滿じ、乃ち三月白月の一日を候し、惹底延花を採持して、當に像を畫き、上繫するに傘蓋を爲るべし。正しく像前に於て、三肘壇を莊嚴し、摩するに白檀香泥を以てし、壇面を塗摩し、乃ち復持するに種種の塗香・末香・燒香・蘇・燈・香水・飲食・花等を以て壇上に布列して、如法に獻供し、舉月一日、頂王呪と佛眼呪とを誦し、三時に各〻一千八遍を誦じて、十五日に至り、壇の四面を遶りて、蘇燈

【一】三時。初夜・後夜・日中なり。
【二】輪結。完全に結ぶ意。

受持し、當來世の一切有情の爲に、分別し解說すべし。頂王印呪の功績力の故に。若し善男子、善女人ありと、樂んで此の大頂(輪)王呪を成ずる者は、應に常に清潔に恒に此の呪を誦じ、此の印を結すべし。この人當に無量百千稱數の功德を得、一切の黑闇の垢障を消滅して、諸の如來・大菩薩等の爲に、歡喜憐愍せられ、所生の處に於て、宿命智を得、身心相智、皆な圓滿なるを得て、諸の夭病なく、能く有情の與に大光明と作り、能く惡界に於て、有情を度脫し、大辯智を得べし。大精進と光明威德とを具して、眷屬圓滿し、世間一切の工巧を洞解し、亦能く一切有情の煩遶癡病を治救し、當に十方の一切如來の加被護念を得、現に菩薩身を獲べし。若し當に人ありて、日日に常に此等の印呪を持し、已れの名を稱すれば、則ち當に一切の毘那夜迦に逼怖嬈惱せられず、一切の罪障自然に殄滅すべし。若し現身に於て、此の頂輪王呪を成する者あれば、則ち當來世に、定んで佛無上正等菩提の大三摩地を證するを得べきが故に。金剛密跡主、此等の印呪は、皆是れ一切如來種族眞實印呪の故に、我今釋迦牟尼如來は、頂輪王呪を成就せしめんが爲に、この印呪を說き玉ふが故に。

五佛頂三昧陀羅尼經卷第三

ぐるが故に。

次に如來大悲印呪の五十二

前の般若の印に準じ、唯改て、二大拇指ゝ屈して、掌中に入る。印呪に曰く、

[五六] 娜莫、三曼多勃馱南、唵、怛楞倪額、虎吽、泮、莎嚩訶。

この一印呪を如來大悲印三摩地門と名く。

次に如來膝印呪の五十三

二手を以て合掌し、各ゝ小指を以て、右にて左を押へ、掌中に屈入す。印呪に曰く、

[五七] 娜莫、三曼多勃馱南、唵、哪暴吉額、跛囉儞跛多也、莎嚩訶。

この一印呪を如來膝呪三摩地門と名く。

次に如來脚踝印呪の五十四

二手を以て合掌し、各ゝ無名指を以て、右にて左を押へ、掌中に屈入す。印呪に曰く、

[五八] 娜莫、三曼馱勃馱南、阿多隷、多隷、嗢多隷、跋佐囉、暮乞使二合捉、莎嚩訶。

この一印呪を如來脚踝三摩地門と名く。

次に如來脚印呪の五十五

二手を以て合掌し、各ゝ中指を以て右にて左を押へ、掌中に屈入す。印呪に曰く。

[五九] 娜莫、三曼馱勃馱南、唵、拔佐囉、商矩羅、部使羝、娜囉、入嚩攞、虎許、莎嚩訶。

その時、世尊、金剛密跡主菩薩に語げて言く、此等の印呪は、一切如來・大丈夫の相、身分を莊嚴する支節より生ずる所なり。汝善男子、如來に復無量倶胝百千印呪有り、この一一の印に、各ゝ無量の僕從の印有るが故に。當に後世時に、此の呪王を成ぜん。我今但當來世時に、此の呪を成ずる者の、大利益を得るが爲に、略してこの呪を說けり。密迹、汝、當に讀誦し、法に依て、是等の呪印を

【五六】 Namaḥ samanta-bud=dhānāṃ oṃ lalidyane (?) hūṃ phaṭ svāhā

【五七】 Namaḥ samanta-bu=ddhānāṃ oṁ namo' gni paranipātaya (?) svāhā

【五八】 Namaḥ samanta-bu=ddhānāṃ atare tare utare vajra-mokṣaṇi svāhā

【五九】 Namāḥ samanta-bu=ddhānāṃ oṃ vajra-śriṅkara-bhūṣṭi-dara-jvala hūṃ svāhā

[五一] 娜莫、三曼多勃馱南、唵、劫比攞、惹置(摩)、攞虎、訃泮、莎嚩訶。

この一印呪を大師子吼と名く。金剛頂輪王教を成就し、能く廣く不可思議・諸未曾有・越意の事を示現するが故に。

如來相字印呪の四十九

又左右二手の八指を以て、各々伸べて磔開き、右にて左を押へても相叉へ、相中節を押へ、八指の頭、各々直く竪て伸べ、岐間を著くる勿れ。二大拇指、亦各々斜に磔り竪て伸べ、頭相去る寸半、印を以て胸に當て、三寸の間著ける印なり。呪に曰く、

[五二] 娜莫、三曼多勃馱南、示。

この一印呪を、如來大丈夫相三摩地門と名く。

[五三] 如來洛訖瑟弭吉祥印呪の五十

又左右の手を以て腕に合せて相著け、十指各々磔開き、直ぐ竪てて微しく屈して、頭を伸べ、各相去ること、一寸半間、開蓮華の如し。印呪に曰く。

[五四] 娜莫、三曼多勃馱南、唵、素沒囉歌弭、羅訖澁弭、莎嚩訶。

この一印呪を如來吉祥印三摩地と名け、能く持者をして、大財寶を得て、衆人に敬讚せられん。

次に如來般若波羅蜜印呪の五十一　一名供養印

二手を以て合掌し、掌内を虚にし、未開蓮華朶の如くす。印呪に曰く。

[五五] 娜莫、三曼多勃馱南、唵、戌嚕底、塞蜜哩底、弭惹曳、莎嚩訶。

密跡主、此の一印呪を如來般若波羅蜜三摩地門と名く。所有の三世一切如來・諸大菩薩・獨覺・聲聞等、皆此の般若波羅蜜印呪の三摩地門より生じて、阿耨多羅三藐三菩提地を成證す。是に知んぬ。此の印呪に大威德あることを。此の印呪を三世の一切如來・諸大菩薩・一切金剛・獨覺・聲聞の母と名

【五一】 Namaḥ samanta-bu=ddhānām oṃ kapila-jati-malā hūṃ phaṭ svāhā

【五二】 Namaḥ samanta-bu=ddhānām jiḥ

【五三】 洛訖瑟弭 (lakṣimi)吉祥相の義。

【五四】 Namaḥ samanta-bu=ddhānām oṃ surakami (?) lakṣimi svāhā

【五五】 Namaḥ samanta-bud=dhānām oṃ sruti-smṛti-vij=nye svāhā

を得る印なり。呪に曰く。

四八 娜莫、三曼多勃馱南、怛地他、君律、倪額、盎矩㗖㰤㗖者、鉢喇拏捨、嚩㗖、珞乞灑、咯乞灑、摩、吽、俱磨哩、失哩耶、摩里儞、莎嚩訶。

この一印呪を、一切如來大慈力呪と名く。若し呪する者有らば、常に慈心を起さん。此の呪を持すれば、則ち當に一切毘那夜迦・虎狼怨賊・鬪諍災難の爲に、嬈惱せられざるべし。印呪の力を以て、速に慈心三摩地を證するが故に。

如來無垢印の四十六

前の慈印に准じ、又改むべきは、無名指の頭にて、大拇指を下に押却し、次に小指頭を以て、大拇指の甲上を押へる印なり。呪に曰く、

四九 娜莫、三曼多勃馱南、虎吽、莫喇達泥、虎嚕、虎吽、泮、莎嚩訶。

この一拇呪を智者、常に呪誦じて飲食を作すべし、常に乃し持喫すれば、能く衆罪を滅す。又食中に毘那夜迦て惱害せられざるべし。

如來甘露印呪の四十七

又右手の大拇指を横へて、頭指・中指・無名指・小指の甲等を押へる印なり。呪に曰く、

五〇 娜莫、三曼多勃馱南、唵、印倪額、部路額、莎嚩訶。

この一印呪は、能く持者をして、甘露法の大解脫門を證せしむるなり。

次に如來大師子吼印呪の四十八

先づ合掌して、心(むね)に當て、左右二手の大拇指を以て、各〻掌中に屈入し、又各〻二頭指・二中指・二無名指・二小指を以て、屈して大指子を握りて、拳と作し、左右の頭指・中指・無名指・小指にて、各〻甲背相合著し、この八指の頭、を掌に著けざる印なり。呪に曰く。

【四八】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ tadyathā kuñja-jñāne aṅgulimālasya Pradeśa bali rūkṣa rūkṣa ma hūṃ kumāri śriya mārini svāhā (?)

【四九】 Namaḥ samanta-buddhānāṃhūṃ mūr dhane kuru hūṃ phaṭ svāhā (?)

【五〇】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ oṃ indrāṇi bhūtāni svāhā

又右手を以て、臍下一寸、横に伸べて、掌を仰け、五指相並べ、次に左手の五指を伸べて相並べ、左手の背を以て、右手の掌上を押し、二手則ち肚に著くる印なり。呪に曰く、

[四四]娜莫、三曼多勃馱南、唵、怛縿、怛縿、塞、縿、普縿、普縿、蜜檫囉跛顇、跛囉末娜顇、嗔娜顇、頻娜顇、虎訃、泮、莎嚩訶。

この一印呪の功能は前に准ず。

如來脊印の四十三

又右手の大拇指を以て、頭指・無名指・小指の甲等を押へ、甲を露はさしむる勿れ。次に中指を以て横へ、大拇指の上を押へる印なり。呪に曰く。

[四五]娜莫、三曼多勃馱南、縊迦、喔那迦、喔乾馱、質都嚧、娜囉、麼抳、捺囉、莎嚩訶。

この一印呪の功能は前に准ず。

如來[四六]髀印呪の四十四

前の脊印に准じ、又改むべきは、中指の頭甲を押へ、頭指の頭を伸べ出して、大拇指の甲上を押へる印なり。呪に曰く。

[四七]娜莫、三曼多勃馱南、唵、覩他者、莎嚩訶。

この一印呪功能は前に准ず。

如來大慈印呪の四十五

前の脊印に準じ、又改むべきは、頭指の頭甲を押へ、無名指の頭を出して、大拇指の甲上を押へよ。我れ一切垢重の有情の爲に、大慈印を說て、慈心を生ぜしめよ。我昔し菩提樹下に坐して、大慈心を以て、此の印を持結し、諸の魔軍、而も自ら散伏するを得たり。此の印を結ぶ者は、應に一切佛力・法力・阿羅漢力・慈念心力を以て、此の印を結べば、則ち一切の極重罪垢、速に皆な消滅すること

【四四】 Namaḥ samanta bud= dhānām oṃ tuṭu tuṭu (?) saḥ saḥ puṭa puṭa (?) mi= trapade paramānṇe chin= dane bhindane hūṃ phaṭ svāhā

【四五】 Namaḥ samanta-bu= ddhānām oka ri naka ri ga= ndha-citra-nara-maṇi-dara svāhā (?)

【四六】 髀。股なり。

【四七】 Namaḥ samanta-bu= ddhānām oṃ tuthaśa (?) svāhā

四〇 娜莫、三曼多勃駄南、阿阿嚩嚩憾。

この一印呪を、如來脣三摩地と名く。持者は當に諸罪を滅することを得可きが故に。

次に如來舌印呪の三十九

右手の頭指・中指・無名指・小指を以て、並て相持著し、心に當て、掌を仰けて、平に申べ、その大母指を掌中に横ふ。印呪に曰く、

四一 娜莫、三曼多勃駄南、唵、娜囉、儞嘆、惹、虎許、泮、莎嚩訶。

この一印呪を如來、舌三摩地と名く。持者は、當に如來舌相の福德圓滿を得べきが故に。

如來臍三摩地印の四十

又左手の五指を以て相並べ、臍下の二麥顆地に當て、側に横て、掌を仰て、平に伸べ、次に右手の四指を以て、相並べ、亦側に横へ、掌を仰て平伸し、(右)手の背を以て、左手の掌上を押へ、右の大拇指を横へ、掌中に屈する印なり。呪に曰く。

四二 娜莫、三曼多勃駄南、唵、阿底捨耶、尾訖囉迷「莎嚩訶。

この一印呪を如來臍三摩地門と名く。

次に如來金剛光焰印呪の四十一

前の(臍)三摩地印に准じ、改むべきは、心上に當るの印なり。呪に曰く、

四三 娜莫、三曼多勃駄南、虎許、入嚩攞、跋日囉、緊、瞻、闍噬闍。

密跡主、此の金剛光焰印呪を亦過去・未來・現在一切如來・金剛光焰・心三摩地・大明呪王と名く。一切證地の大菩薩等、及び諸天龍・八部鬼神・大威德者も皆能く越する無し、況んや餘の下劣の魑魅鬼神をや。

如來小腹印の四十二

【四〇】 Namaḥ samanta-bu= ddhānām a a ba ba han

【四一】 Namaḥ samanta-bu= ddhānām oṃ nara-jihva-ja hūṃ phaṭ svāhā

【四二】 Namaḥ samanta-bud= dhānām atiśaya-vikrame svāhā

【四三】 Namaḥsamanta-bud= dhānām hūṃ jvala-vajra. kiṃ śrī śrī (?)

[三六]娜莫、三曼多勃馱南、唵、虎許、朅。

この一印呪を如來肋印三摩地門と名く。

次に如來見印呪の三十五

右手の中指を以て頭を屈して、大母指の頭と相拄へ、その頭指・無名指・小指は、相並べ、直ぐ上て竪て申ぶるなり。印呪に曰く、

[三七]娜莫、三曼多勃馱南、唵跛、囉悉地、迦履、莎嚩訶。

この一印呪を如來見諸法性三摩地門と名く。

次に如來光焰印呪の三十六

前の見印に准じ、唯改むべきは、頭指・無名指・小指を掌に向けて散開して、微しく屈して、月の初て生ずるが如くす。印呪　曰く。

[三八]娜莫、三曼多勃馱南、唵、入嚩攞泥、莎嚩訶。

この一印呪を如來光顯諸と名くるが故に。

次に如來光照印呪の三十七

右手の大母指を以て、竪て申て、頭指の側に拵著し、頭指を以て直くし、その中小指を申べ、各〻申べて掌に向け、屈して月の初て生ずるが如くす。又無名指を以て、掌に向け、屈して鉤形の如くす。印呪に曰く、

[三九]娜莫、三曼多勃馱南、唵虎、許、麼麼、泮、莎嚩訶。

是の一印呪を、如來照諸三摩地門と名く、圓滿に現ずるが故に。

次に如來脣印呪の三十八

前の光照印に准じ、唯改て、中指を少し許り竪申ぶること麥顆の間にす。印呪に曰く、

【三六】 Namaḥ samanta-bud=dhānām kha

【三七】 Nam ḥ samanta-bud=dhānāṃ oṃ parasiddhi-kari svāhā

【三八】 Namaḥ samanta-bud=dhānāṃ oṃ jvalane svāhā

【三九】 Namaḥ samanta-bud=dhānāṃ oṃ hūṃ mama phaṭ svāhā

次に如來幢印呪の三十

先づ右手の大母指を以て、中指・無名指・小指の胛上に横へ押へ、頭指を以て直く申べ磔堅て、臂を申べて直く上にす。

[三四] 娜莫、三曼多勃駄南、割縿。

この一印呪を如來幢印三摩地門と名く。

次に如來臥具印呪の三十一

前の幢印に准じ、印手を翻へし、頭指を胸に當て、下を指す。印呪に曰く、

娜莫、三曼多勃駄南、阿骨錄二合。

この一印呪を如來臥具印三摩地門と名く、

次に如來乘印呪の三十二

前の幢印に準じ、改て臂を屈して、心の前側に當て臂を手申す。印呪に曰く。

娜莫三曼多勃駄南虎許迦浮暁唵

この一印呪を如來乘印三摩地門と名く。

次に如來頭印呪の三十三

前の幢印に准じ、改て印手を以て、頭頂の上に捻す。印呪に曰く、

[三五] 娜莫、三曼多勃陀南、唵、慕杕駄顉、莎嚩訶。

この一印呪を如來頭印三摩地門と名く。

次に如來肋印呪の三十四

右手の無名指・小指を以て雙へ頭を屈し、大母指面を拄へ、その頭指・中指を並べ著けて、直く竪てて申ぶべし。印呪に曰く、

【三四】 Namaḥ samanta-buddhānām kānta (?)

【三五】 Namaḥ samanta-buddhānām oṃ mūrdhane svāhā

[二七] 娜莫、三曼多勃馱南、唵、怛他伽多、能瑟縿𠼝、虎訐、泮、莎嚩訶。

この一印呪を如來牙印三摩地門と名く、大威力あり、此の呪を誦じて、牙印を輪結するを以て、當來世に於て、佛の齒牙を得ん。

如來授記印呪の二十七

右臂を以て、胸に當て、直く手に申べ、その頭指・中指・無名指・小指を急に拳に把(にぎ)り、その大母指を竪て屈して、頭を去ること頭指側二分間となせ。

この一法呪は、過去の一切如來、未來の一切如來、現在の一切如來、皆な此の印を以て、而も記莂を授。、是の故に智者は、常に是の印を結んで、諸の有情の與(ため)に、菩薩の記莂を授くべし。印呪に曰く、

[二八] 娜莫、三曼多勃馱南、唵、虎、訐特吒二合。

この一印呪は、能く一切如來の事業を成ず。印呪の力を以て、生生に常に念力・進力・戒定固力・福勝蘊力を得、一切の諸の惡鬼神の爲に、而も嬈惱せられざるが故に。

次に如來髆(はく)[二九]印呪の二十八

前の甲印に准じ、唯改むべきは、臂を直く申べ、上に向くるなり。印呪に曰く、

[三〇] 娜莫、三曼多勃馱南、吽惹、阿泗、泮吒、莎嚩訶。

この一印呪を如來髆印三摩地門と名く。大神力を具し、勇猛殊特にして、衆法を成するが故に。

次に如來嬭(ない)[三一]印呪の二十九

前の甲印に准じ、唯改むべきは、臂を屈して[三二]、印を心上に當つ。印呪に曰く、

[三三] 娜莫、三曼多勃馱南、嘱伽囇撲。

この一印呪を如來嬭印三摩地門と名く。

【二七】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ oṃ tathāgata-daṃṣṭre hūṃ phaṭ svāhā

【二八】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ oṃ hūṃ tvaṃ

【二九】 髆。かたぼね。又肩甲とも云ふ。

【三〇】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ pr̥jāhi phaṭ svāhā

【三一】 嬭。乳なり。

【三二】 本文に以印拳面の四字あり。

【三三】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ vakṣaṃ (?)

甲印無ければ、則ち魔嬈の爲に、成効する所無けん。印呪に曰く、

[二四] 娜莫、三曼多勃駄南、唵、部、入嚩攞、虎鈝。

この一法呪をば、如來金剛句の三摩地と名く。常に護身に用ふること、王の甲を被り、厳るに器仗を加ふれば則ち惡賊の兵衆を怖畏せざるが如く。智者も亦復是の如し。毎日三時に、力を量り、法を量り、如法に是の甲印呪を勤修すれば、則ち速に無所怖を成就するが故に。

次に如來髮髻印呪の二十四

前の甲印に準じ、唯改むべきは、中指を伸べて、直く竪て、印を以て頂に安じ、直聳して印を竪てよ。呪に曰く、

[二五] 娜莫、三曼多勃駄南、阿嘱哞。

この一印呪を如來髻三摩地門と名く、力能く一切の事業を成ずるなり。

次に如來耳印呪の二十五

前の甲印に准じ、唯改むべきは、頭指を伸べて直く竪て、印を以て耳門に安じ、上耳輪と齊しき印なり。呪に曰く、

[二六] 娜莫、三曼多勃駄南、斛迦二合。

この一印呪を如來耳三摩地門と名く。常に印を結び、耳を呪すれば、速に當に一切の耳病を除滅して、天耳通を證すべし。

次に如來牙印呪の二十六

先づ左手の頭指・中指・無名呪・小呪を以て、急に屈して、拳に握り、甲を露はさしむる莫れ。又大拇指を以て、直く伸べ、頭指正側の上を押へ、大拇指面上の第一文と、頭指外背とを齊ふし、印を以て左牙頷に置き、右亦是の如くす。印呪に曰く、

【二四】 Namaḥ sam nta-bud=dhānām oṃ bhū jvala hūṃ

【二五】 Namaḥ samanta-bud=dhānām al.ka (?)

【二六】 Namaḥ samanta-bud=dhānām ka ṇa (?)

無名指と、小指とを相著け、並べ伸べて、微少似屈し、大拇指と頭指とを、左手の小指頭と相拄ふべし。この一法印を、智者若し常に持結すれば、現に此の生に於て、當受生に於て、永く信・進・慧・力・如來行力を退失せず、諸の如來の加(持)護念を得ん。印呪に曰く、

三 娜莫、三曼多勃駄、南唵、弭惹曳、摩訶、鑠底、沒駄、𡅏虎𤙖、泮吒、弭惹以、儞泮吒、忙識、黎泮吒、莎嚩訶。

この一法呪を毎日三時に、三七を誦する者は、速に三界に於て、無障礙の勝成就を得るが故に。

如來臍印呪の二十二

如來塑印に准じ、唯改むべきは、右手の大拇指と頭指の頭とを、左手の小指頭を去離すること一麥顆の間にせよ。この一法印を、亦諸佛の大神力印と名く。智者若し常に憶持して、此の印を輪結し、並に此の呪を誦すれば、則ち一日二日、瘥病・瘀黃の病・腹頭の痛病、及び諸等病を消除することを得ん。又一切の災障、自然に殄滅することを得ん。當に壽福命・安隱・豐樂すべきなり。印呪に曰く、

三 娜莫、三曼多勃駄、南唵、紙置、紙置、莎嚩訶。

この一法呪は、能く如來の種種の色類の不可思議神通變化を現じて、有情を誘引す。

如來甲印呪の二十三

當に右の手の大拇指を以て、掌中に横屈し、頭指・中指・無名指・小指を以て、急に大指を握て拳と作す。この一法印を、諸佛一切頂王心印と名く。智者若し常に印を以て、頂傾左右の肩髆を印し、及び心上を印すれば、則ち持者をして、大威力を得せしめん。呪者復如法に精進し、法を修持すと雖、若し此の印無ければ、則ち莊飾なし、形裸は陋なるが如く、國に王無きが如く、屋に人無きが如く、食に鹽無きが如く、池の枯涸するが如く、空の如くにして、叢林花草無きが如く、事火外道婆羅門の法として依る可き無きが如く、王の乘車に控御者無きが如く、智者も是の如く、復精勤すと雖、若し

【三】 Namaḥ samanta-bud=dhānām oṃ vijaye mahā-śakti mūrdha li hūṃ phaṭ vijaye ni phaṭ amogha re phaṭ svāhā (?)

【三】 Namaḥ samanta-bud=dhānām oṃ sici sici (?) svāhā

人の語を聞きて、亦皆敬伏せん。況んや餘の諸の小魑魅の鬼神をや。

難勝奮怒王印呪の二十

當に右の膝を以て地に著け、左脚を屈して膝にて地を踏み、起て前に向はんと欲すれば、餕身の勢を作し、面を仰て怒目し、左邊を邪視し、當に右臂と及び手指等を以て、右邊の後に向き、臂を側めて邪伸し、緊急怒臂して地に向はんと欲する勢に似すべし。五指は散じて磔開き手掌は覆に似せ、側に似す。次に左臂を以て、左邊に後に向け、臂を擡げて緊急し、努て臂手を屈して上に向け、五指散するに似せ、竪努して磔開き、掌面を前に向くるなり。是の印を結ぶ時、大怒聲を發し、虎鈝の二字、三七聲を稱する者は、諸有の障罪は、則ち皆な破滅せん。欲界の魔王及び魔軍の將、悉く皆摧碎せん。我昔初て熙連禪河に詣り、身を沐浴し已て、此の菩提樹下に趣き、金剛座に坐せり。この時、無業百千倶胝の魔衆有り、各〻種種の惡穢の怒相を持て、我を嬈惱する時、難勝奮怒王、忽に我が前に於て、地より湧出し、天女の相を作し、瞋て斯の印を結び、諸の魔衆を摧きしかば、種種の怖相は、一時に散滅し、能く惱す者無かりき。この夜中、明曉時に至りて、我則ち無上正智を圓證す。世間一切の沙門婆羅門を觀見するに證者有ること無し。摧魔の印呪に曰く、

三 娜莫、三曼多勃馱南、唵、虎嚕、虎嚕、戰拏里、摩蹬倪、莎嚩訶。

金剛密跡主、此の難勝奮怒王呪は、是れ我が所說なり。若し呪者、大恐怖の惡鬼神處に遇ひ、而も護身結界して、造修法者を擁護せんと欲せば、應に勤て精進して、此の印を結び、此の呪を誦し、此の法を修すれば、則ち障惱無く、速に成就するが故に。

次に如來槊印呪の二十一

端身結跏趺坐し、左手を以て、掌を仰げ、臍下に横へ屈し、四指は相著けて直く伸べ、大栂指は、微屈して直く伸べ、頭指の根側に捭著し、次に右手の大拇指と、頭指の頭とを以て相捻し、中指と

【三】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ oṃ huru huru caṇḍari-mataṅgi svāhā

に理を論ぜば、彼の熙喜を得ん。亦能く一切の魑魅魍魎・悪鬼神等をも摧伏せん。密迹主、若し人一字頂輪王呪を誦持して、一所に祈法し、二所に祈法して、證を成ぜざれば、則ち應に此の明王呪を加ふべし。齊等雙誦して、二十萬遍を滿せよ。決定して一字頂輪王呪最上の悉地を成就せん。若し是の一二作法を、而も雙誦せざれば、則ち損を加へて、持呪者の身に殃せん。

如來眉間印呪の十八

如來眼印に準じ、唯改むべきは、二頭指を、各〻中指の背の上節に當て、頭は中指の節を離るること、一分許りにす。印呪に曰く、

[一九] 娜莫三曼多勃駄南、紇嚩、虎件。

この如來眉間毫相印呪は、是れ過去の一切如來、已に同じく、宣說し玉へり。我今亦說く、此の印を輪(結す)る時、大自在天・俱摩羅天・大侯啁野天等、皆嬈惱せず。何に況んや、諸の小魑魅鬼神、而も惱を作さんや。

如來口印の十九

如來心印に準ず、唯改むべきは、二大栂指、胛を並べて伸べ、等しく頭節を屈して、右の頭指の側に去らしむること、三麥顆の間、印を以て面門に置き、是の二大栂指の背頭節を、正に脣間に當つべし。印呪に曰く、

[二〇] 娜莫三曼多勃駄南、枳嚩、虎件。

この一印呪に大焰炬あり、能く速に一切の事業を助辨す。呪者若し常に斯の印を輪結すれば、口間に著けて、此を誦せよ。口呪二三七遍して、後に一字頂輪王呪を誦する者は、印呪の力を以て、三界の人天、語論を見聞して、悉く皆敬愛せん。この故に、此の人は應に常に和雅眞歎法を語るべし。斯の人は百千俱胝劫に於て、口疾を裏へず。大自在天・毘瑟怒天・及び諸天龍・八部鬼神は、此の

【一九】 Namaḥ samanta-bud=dhānām klrp (?) hūṃ

【二〇】 Namaḥ samanta-bu=ddhānām kiri (?) hūṃ

野、馱囉野、儞論馱、儞論度䋡拏、壓抳、莎嚩訶。

この法呪印を、大丈夫の相好と名く。若し人ありて、能く此の印を、輪結すれば、則ち速に一切の悉地を成就し、大威德を具せん。若し印を以て、頂を印すれば、卽ち如來の頂印と名け、若し印を以て鼻を印すれば、卽ち如來鼻印と名く。頂鼻の印呪に曰く、

〔一六〕娜莫三曼多勃馱南、唵縊哩抳、虎𤙖泮(馱)、莎嚩訶。

この如來の頂鼻印にて、常に身を結護せよ。當に百千俱胝大劫所生の處に於て、頂鼻の諸疾妻へかるべし。

如來眼印呪の十七

又二手を以て合掌し、二大指を以て、雙屈して掌に入れ、次に二頭指を以て、各〻頭の第一節な屈し、頭を以て二中指側の中節の上を押へ、二頭指の頭、相去ること一寸、これ如來眼の印なり。頂輪王の壇に於て、清淨に輪結すれば、能く大益を作して、諸の重罪を滅〔一七〕す。若し已に過去世、百千俱胝劫に、修する所の功德は、印の威力を以て、悉く攝し來りて、功德蘊を積集す。印呪に曰く、

〔一八〕娜莫薩嚩彈詑伽底瓢、阿囉褐縈、三藐三勃睇縈、唵𤙖、 嚕嚕塞晋嚕、入嚩攞、底瑟侘、悉馱、嘮者泥、薩嚩遏詑、娑馱聹、莎嚩訶。

金迹密迹王、此の如來眼大明正王は、是れ十俱胝佛の同じく共に宣說し玉ふ所なり。我往昔に於て、菩薩たりし時、十俱胝の佛所に於て、斯の呪を受け得たり。若し當に呪者は、一精心を以て。是の呪を誦持すれば、則ち一切菩薩の呪神、悉く現前して、一切の金剛種族の呪品をも、亦皆成就することを得ん。この故に、密跡主、一字頂輪王の呪を持する者は、應に先づ每に此の呪七遍、或は二三七遍を誦すべし。この如來眼大明王呪を、如來は今一切有情の爲に、大安樂と離垢清淨とを得るが(爲の)故に說き玉へり。呪者若し暴惡性の人に遇はば、手を呪し面を摩し、默して斯の呪を誦じ、對して共

〔一六〕Namaḥ samanta-buddhānām oṁ e ri ni hūṁ bandha svāhā

〔一七〕本文に成進一字頂、輪天見者悉地の十一字あり。

〔一八〕Namaḥ sarva-tathāgatebhyârhebhyaḥ samyak sambuddhebhyaḥ oṁ hūṁ ru ru sphuru (?)jvala tiṣṭha siddha-locane sarvârtha sādhane svāhā

如來錫杖印呪の十四

先づ右手の大母指を以て、横へ屈して、掌に入れ、頭指・中指・無名指・小指を以て、急に握りて拳となし、肘を屈し、掌を前に當てて平に申べ、左手に袈裟の角を把り、頭を出すこと四寸、亦肘を屈して前に當て平に申べよ。印呪に曰く。

一三 娜莫三曼多勃駄南、唵、度那、諮駄、(駄)囉拏、虎吽。

この法呪は若し諸惡の一切有情に遇はば、則ち是の印を結び、用て身を擁護せよ。

如來鉢印呪の十五

先づ右手を以て心に當て、掌を仰け、次に左手を以て覆ふて右手の掌上に合し、左小指の頭と右大指の頭と相拄ふ。印呪に曰く。

一四 娜莫三曼多勃駄南、唵、路迦、播羅地瑟耻多、駄囉野、駄囉野、摩訶那皤嚩、勃駄、播怛囉二合　莎嚩訶。

この法印呪に大精進を具し、常に一切如來神力の爲に而も之を加護し、當に是の印を結び、此の呪を誦すべし。一一の遍に地獄・餓鬼の有情を憶して、百八遍を滿すれば、則ち地獄の一切の餓鬼、諸食を飽食することを得、若し曠野に行き、亦此の印を結び、並に是の呪を誦すれば、則ち曠野一切の鬼神に相嬈せられざるを得るが故に。

如來相好印呪の十六

又左右二中指・二無名指・二小指を以て、右にて左を押へ、相叉へて、掌に入れ、各〻掌に捋け、二頭指を直伸し、頭側を相拄へ、二大指各〻頭指の側上に捋け、印を以て、倒垂して、掌を仰で、額上に置き、二頭指の頭を正しく眉間に當つるなり。印呪に曰く。

一五 娜莫薩嚩怛他伽底瓢、阿囉褐弊、三藐三勃睇弊、醯、醯、畔駄、畔駄、底瑟侘、底瑟

【一三】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ dhūna siddha-dhāraṇe hūṃ

【一四】 Namaḥ samanta-buddhānāṃ lokapālādhiṣṭhita dhārya dhārya mahādbhāva buddha-patra svāhā

【一五】 Namaḥ sarva-tathāgatebhyo' rhebhyaḥ samyak sambuddhebhyaḥ he he bandha bandha tiṣṭha tiṣṭha dhāraya dhāraya nirodha nirodha-maṇi svāhā

頂輪王印に準ず。唯當に改むべきは、左右二頭指を掜して、二中指の背後に在き、頭相拄ふ。是の一印を亦坐印と名け、亦頂輪王壇印と名く。

復金剛密迹主に告て言く、この五大印を、一切如來頂輪王種族王印の大印と名く。一には高頂王印と名け、二には白傘蓋頂王印と名け、三には光聚頂王印と名け、四には轉法輪印と名け、五には雹摧煩惱印と名け、この印等を大頂王印と名く。

如來心印呪の十二

前の第一如來心印に准じ、唯當に改むべきは、二大母指を雙べて、掌中に屈入す。この一法印を、如來心大精進印と名く。呪者若し常に是の印を輪結し、頂輪王の呪印を誦すれば、一呪一印して、七遍を滿すれば、則ち能く過去の一切根本の重罪を摧滅す。常に是の印を以て、一切の法成就處と作せば、自身を加被し、及び呪神身を護りて、能く神をして現せしめん。印呪に曰く、

[二] 娜莫三曼多勃駄南、唵、愚娜禮尾囉、莎嚩訶。

この一法呪の功力は、前の第一印呪に同じ、作法處に於て互に用ふることも亦得、是の呪に大威猛力あるが故に。

一切頂王使役の印呪の十三

合掌して、八指の頭を屈して相拄へ、虛掌內に、二大指を並べ直に申べ、先づ合掌して心に當て、大虛掌內は、當に左右の八指を以て、各〻平屈して、頭相拄へ、八指の頭、各〻相去ること三分許りにす。二大指相去ること三分、平直竪申にす。印呪に曰く。

[三] 娜莫三曼多勃駄南、唵、啍嚕(啍)、嚕畔駄、莎訶。

この法呪印は、亦能く一切の事業を成辦し、自らを護り、他を護り、諸法を結修して、障惱無きが故に。

【二】 Namaḥ samanta-bud=dhānām oṃ g ṇa re vira(?) svāhā

【三】 Namaḥ samanta-bud=dhānām oṃ truṃ truṃ bandha svāhā

光聚頂印呪の七

前の高頂天の(印)に準じ、唯當に改むべきは、二頭指、磔開て直く竪て、頭を伸べ、各ゝ中指の頭を去ること、一寸二分許りにせよ。印呪に曰く、

[八]唵、怛他伽都瑟捉沙、娜嚩路枳哆、姹䩤馱、帝孺囉始、虎㖷、入嚩攞、入嚩攞、馱咎、馱咎、捺囉、弭捺囉、㘕那、頻那、虎吽、泮吒、莎嚩訶。

重て一印あり、頂輪王の印に準ず、唯當に改むべきは、左右の無名指、各ゝ直く伸へ竪て、二大指を屈して、二小指の甲側を押へ、二中指と二頭指と並べ屈して、頭相拄へ、半月の如くす。

この一法印を亦頂輪王壇輪と名く、結作法印の八なり。

次に勝頂王印呪の九[九]

前の白傘頂印に準ず。唯當に改むべきは、二頭指を、中指の第一節の下に於て、平屈して、頭相拄へよ。又の印は、光聚頂印に準ぜよ。改むべきは、二頭指を、二中指の上節背上側に叉へよ。

印呪に曰く、

[一〇]唵、惹喩瑟捉沙、入嚩攞、入嚩攞、㖷馱、㖷馱、㘕麼、那麼、㘕嚕㖷、㘕嚕㖷、二合㘕嚕㖷、罹吹曩、虎㖷二合。

前の頂王印に準ず。同じく卽ち是れ轉法輪印の十

又左右の二小指を以て、平屈して、頭相拄へ、次に二無名指を以て、各ゝ掌中に屈入し、二中指各ゝ微しく屈し、竪てて、頭相拄へ、二頭指を中指中節側上頭に當てて相拄へ、二大指各ゝ二無名指の上を押へ、二掌を開き、腕相去ること四寸許りす。この一法印は、能く十二行相法輪を轉じて、諸の垢障を滅す。

如來雹摧煩惱印の十一

【八】Oṁ tathāgatoṣṇīṣā-avalokita-mūrdha-tejo-raśi hūṃ jvala jvala dhaka dhaka dara vidara chinda bhinda hūṃ phaṭ svāhā

【九】第八超頂王の印呪。本文に脫落す。

【10】Oṃ jayoṣṇīṣa jvala jvala bandha bandha nama nama śruṃ śruṃ śruṃ kṣa-hana (?) hūṃ

言辭譬喩を以て、この大印を說くと雖、亦盡す能はず。若し智者、此の印を結持して、頂輪王の呪を誦すれば、則ち常に俱胝百千の魔と魔族との爲に、而も惱亂せられず。この人、後の百千俱胝大劫に於て、惡道に墮せず。何を以ての故に、是の人の得る所の福蘊功德の故に。我は百千俱胝大劫に於て、說くも亦盡きざらん。此の大頂輪王呪を、若し人有りて、一淨心を以て、常に誦持すれば、得る所の念力・慧力・智力は、百千俱胝劫に於ける壽生處に、常に退失せず。金剛密迹首、何を以ての故に、是の如くの大印は、大威德の無量力有るが故に。印呪に曰く、

[五] 娜謨皤伽嚩底、阿跋羅底歌姤瑟抳沙野、唵怛他伽都瑟抳莎、阿娜嚩路枳多、姥馱馱斫訖二合 囉靺囉底虎吽、二合 入嚩攞、入嚩攞、馱咠馱咠、度那、度那、弭度那、弭度那、怛囉縒野、摩羅野、頞娑那野、歌那、歌那、畔惹、畔惹、暗暗、惡惡、各各、補弄二合企抳、補弄二合企抳、軍拏里額、阿播囉爾哆、塞怛囉、馱哩膩、虎吽。

高頂王印呪の五

先づ左右の二無名指と、二小指とを以て、右にて左を押へ、相叉へて掌中に入れ、次に二中指を以て、直く竪てて、頭相拄へ、二大母指、相並べ伸べ、二無指の中節の上を押へ、又二頭指を以て、中指側中節の上に當て、頭を屈して相拄へよ。印呪に曰く、

[六] 唵、入嚩囉、捻弭捻瓢伽覩鄔二合瑟抳莎、度那、度那、虎吽。

白傘蓋頂王印呪の六

前の高頂王の印に准じ、唯當に改むべきは、二中指微しく第一節を屈して、平に頭を相拄へ、次に二頭指を開て、頭相去る半寸にせよ。印呪に曰く、

[七] 唵、麼麼麼麼、虎吽、溺。

【五】 Namo bhagavate pratihatoṣṇiṣâvalokita-mūrdha-cakravarti hūṃ jvala jvala dhaka dhaka dhūna dhūna vidhūna vidhūna trāsaya māraya īśānaya hana hana bhañja bhañja aṃ aṃ aḥ aḥ haḥ haḥ prohiṇi prohiṇi kuṇḍaliné 'parajita sūtra-dhāriṇi hūṃ

【六】 Oṃ jvala divyodgatoṣṇiṣa-dhūna dhūna hūṃ

【七】 Oṁ ma ma ma ma hūṃ jaḥ

訶薩等を攝するなり。

觀世音菩薩種族印呪の二

前心印に準じ、唯改て、左大母指を掌中に屈入し、右の頭指を握り、右の大母指は前の定に依て伸ぶべし。

印呪に曰く、

[三]唵阿嚧力。

若し右大母指の頭を以て、上下來去すれば、則ち請召觀音種族印と名く。

金剛種族印呪の三

前心印に準じ、當に改むべきは、左の大母指は、前の如く伸べ、右の大母指を、掌中に屈入して、左の頭指の頭を握る。[四]印呪に曰く、

*唵拔折囉娃力。

若し左の大母指の頭を以て、上下來去すれば、則ち請召金剛種族印と名く。

輪王印呪の四

先づ當に合掌して、左右の二無名指と二小指と以て、右にて左を押へ、相叉へて、掌中に入れ、二中指を直く竪て伸べ、各ゝ第一節の頭を屈して、相拄へ、二大母指は相並べて、掌に入れて平伸し、又二頭指を以て平屈して、二大指の甲背の上頭を押へて相拄ふ。この頂輪王の根本の大印は、乃ち是れ過去の殑伽沙等の一切如來、已に皆共に說持し、未來の一切如來、當に共に說持すべし。現在の一切如來、今共に說持せん。諸の有情を攝せんと欲するが爲の故に、共に說持せしむ。智者の所在に、此の印を授結すれば、一切姤惡障礙の毘那夜迦、悉く新近せず。密迹、此の頂輪王根本印は、一切諸佛、百千俱胝殑伽沙劫に住して、此の印の功德神力を讚說すとも、亦盡す能はず。復種種の

【三】 Oṁ arolikya

【四】 本文に左大母指、依前定伸の八字あり四文なり。

*Oṁ vajra dhṛkya

卷の第三

五頂王密印品第八

その時、釋迦牟尼佛、この會衆に告て曰く、汝善男子等、應に我が諸如來、三摩地を出現する無量無數の大勇猛力を受持すべし。一切如來、呪身に安住し、一切如來眞實種族、無量無邊未曾有法、無量の威德、大印及び呪を出生流布す。是の中、能く一切の菩提を生じ、能く俱胝一切の魔軍を破し、能く一切の諸大菩薩・大雄力者を攝して、能く一切可畏の有情をして、大慈心を生ぜしむ。善男子等、我今略して一切の辨事業の大印を說かん。と

その時に、金剛密迹主、合掌恭敬して、佛に白して言く、世尊、願くば一切如來に、說示を垂れて、威德の大印及び呪を流布せんことを、一切有情を利益するに當り、少功績を以て、遂に即ち證を成ぜんが爲めなり。と

この時、世尊、金剛密迹に告て言く、汝當に諦聽し、之を思念すべし。我今汝の爲に分別し解釋せん。即ち先づ一切如來の心精進印を輪結せよ。左右の手の八指を以て、右にて左を押して、相叉て掌に入れ、急に合して、拳に握り、二大指を以て、相並べ平に伸べて、右の頭指の中節の上を押て、頭を屈せしむる勿れ。印呪に曰く、

[一]娜莫、薩嚩勃馱菩地、薩埵南、阿弭囉、虎吽淹。

若し二大拇指を以て、雙べて一切を上下來去するをば、則ち啓召如來種族印と名く。印呪に曰く。

*唵爾旅職

この二印呪を如來最精進心と名く。力能く一切の地獄・餓鬼・畜生を度脫し、亦能く一切如來の功勳業事を助成し、諸の菩薩・帝釋・梵王・伊首羅天・焰魔王・水天・[二]毘沙門天・乃至十地の大自在菩薩摩

【一】 Namaḥ sarva-buddha bodhi-sattvānām a vi ra hūṃ khaṃ
※Oṁ jina jikya

【二】 毘沙門天(Vaiśrāmaṇa) 多聞天なり。

めよ。密迹、此の頂輪王の像は、一切佛の說なり。謂く當に呪者は、大利益を得べし。略して是の像を說く。若し見者ありて、隨喜し供養すれば、隨て衆罪を滅し、大功德を得、諸の天龍の爲に、歡喜し瞻視せられ、當に定で一切勇猛頂王呪力を成就し、無數の佛の種種の歌讃を得べし。是の妙變像を供養する功德は、無量無數にして、一切諸佛常に皆讃歎し玉へり。若し信戀する有りて、晝夜に精進し供養すれば、則ち罪障者は、一時に銷滅することを得ん。身業清淨にして、頂王を成就する功德智海は、一切を超過する最勝殊特にして、諸の天人の爲に、供養し恭敬せられ、無量に讃歎せられ、當に佛地を證して、更に退轉すること無かるべし。此の呪を成ずる者は、怒目瞋𠴵すれば、一切の天龍・八部・鬼神は、皆な惶怖を得て、四散馳走せん。天帝釋は、この人を見れば、來りて座を分ち、坐を同ふす。諸大天亦皆座を分つ。三界の諸天は、この(人を)見て來り、傲姿にして迎送し虔敬せざれば、則ち皆な頭を破られて、蘭香枝の如くならん。若し我億俱胝の大劫に於て、この呪を讃說すとも、亦盡す能はず。此の呪を成ずる者を證最上悉地(者)と名く。當に[六八]三十三天中の王命に(服して)、常に安住すべし。殃死せず、壽は天身の如し、天身畢已て、身を變じて佛の如く、五神通を證し、[六九]無量の天を以て、前後に圍遶せられ、諸佛の刹に往きて、種種に變化し、衆生を誘導せん。諸佛の刹に隨て、帝釋身を現じ、或は金剛身を現じ、或は大梵天の身を現じ、或は[七〇]伊首羅天身を現じ、或は童男童女の身を現じて、地獄鬼・畜生趣に入り、隨て諸身を現じて、衆生を救脫せん。或は諸の山林・城邑・聚落を房舍と爲し、種種の衣食を供給施濟し、常に依怙を作して、衆生を度脫し、五神通を具して、菩薩の行を行じ、人中の尊と爲らん。

五佛頂三昧陀羅尼經卷第二

【六八】三十三天中の王。帝釋天を指す。

【六九】本文に乘此天界の四字あり。

【七〇】伊首羅。一名伊舍那(Iśāna)欲界第六天、卽ち他化自在天の魔王なり。

如し、復一類の有情あり、我が殑伽沙等の世界の中に、無量稱の異名を知り、如來の說法は如如、衆生は謂く去來、如來は亦不去來なるも、分別して色相を出現す。童子、已に不去來にして、分別を作すこと無くして、則ち能く無量佛事の[六三]陀羅尼門を出現す。

その時、世尊、復曼殊室利童子に告ぐ、若し是の頂王の法を修持する者有らば、應に吉時白月五日・八日・十三日・十四日・十五日・好星宿時に修し、清潔に洗浴して、新淨衣を著すべし。若し俗人、八齋戒を受け、法軌に依て住し、修造清淨にして、壇場を塗結し、香華と燒(香)とを布献して、火食を設け、當に佛・觀世音菩薩・金剛密迹首菩薩摩訶薩・[六四]婆攞神、及び諸の菩薩、一切聲聞・[六五]辟支佛・諸佛等に供養すべし。斯の如く供養すれば、則ち一切の大威德天・大威呪神・大明呪神の歡喜覩視を得ん。此等の諸天を、復日日如法に供養すと雖、此の法部に於て禮拜すべからず。何を以ての故に、五頂王呪力は不思議なり。是の故に呪者は、亦死喪の家と、初產生の家と、不淨人の家と、旃荼羅の家とに往くことを得ず。顧宿に詣往して、他の供養を受けよ。亦殘臭宿食の供養と、及び自らの食噉とを持たざれ。呪者は三時に每に自ら誓ひ、佛法大菩薩僧に歸依して、菩提心を發し、本[六六]三業を淨治し、佛法僧の戒を念じて、天に施し、常に清旦に於て、八齋戒を受くべし。卽ち殺・盜・婬・妄語・飮酒・脂粉塗身・坐臥大床をなさず、午(時)を過ぎて食せざれ。眞如智、無作の心を以て、虔敬に修習すれば、則ち成辨することを得ん。

その時、釋迦牟尼世尊、復金剛密迹主に告て言く。又輪王の像あり、出世世間の一切呪像に於て、最上無等なり。前の月日に准ぜよ。畫者は端肅にして、具に[六七]十善を持し、細白氎の方量三肘、或は復二肘を以て、中に當て釋迦牟尼佛を畫け、衆相を具足し、身は眞金色にして、說法の相を示し、通身光を佩し、白蓮華の師子座上に坐し、頂上に光を放て、佛の背後に於て、七寶山を畫き、佛の座下に於て、蓮華池を畫き、佛の右邊に於て、呪者の貌を畫け。長跪して佛を瞻、手に香爐を把らし

【六三】 陀羅尼 (dhāraṇī) 總持と譯し、一字に總じて衆義を含持する意。

【六四】 婆羅(bhāla?)神

【六五】 辟支佛。具には鉢羅底翳迦佛陀(pratyekabuddha)譯して獨覺と云ふ。十二因緣を觀じて、世相の無常なるを覺るが故に、一名緣覺とも稱す。又無師獨悟の故に、獨覺と云ふ。

【六六】 三業。身・口・意の作用を意味す。

【六七】 十善。不殺生・不偸盜・不邪淫・不妄語・不惡口・不綺語・不兩舌・不慳貪・不瞋恚・不邪見。

次に佛座下の右邊に、佛眼神を畫き、相好神を畫け。是等の四神身は、皆な金色にして、蓮華座に坐し玉へり。是の變像を如來身最勝輪王大成就の像と名く。一切通用して、皆盡く成證す。時に、世尊、曼殊室利童子に謂て言く、汝往昔に未だ地を證せざるの時、誦するに、是の呪を以てして、此の像を供養し、像は大光を放ち、此の三界を照し。その中の衆生は、意樂歡喜せり。

曼殊室利、汝は光照の爲に、昇りて[五七]三地を證し、[五八]五神通を得たり。是の故に、像の不可思議大三摩地を說く。是れ如來の身なるが故に、我この三摩地力普大三界を以て、諸有情の利益成就の爲に、神通變化をもつて、頂輪王身の如意寶の如くなることを示す。

その時、世尊、復曼殊室利童子に告て言く、汝善く[五九]大被甲冑の善巧方便を以て、有情に安住し、有情を示濟するに無量の變化を以てし、佛身・菩薩身・緣覺身・聲聞身等を現じて、衆生を攝取し、諸の勝法を說て、有情を覺寤せしむ。その時、曼殊室利童子、合掌恭敬して、世尊に白して言く、佛に幾名有りて、頂輪(王)の大三摩地を現じて、此の世に流るや。

時に世尊、曼殊室利童子に告て言く、頂輪王は、(所化の類に應じて、立てたる主の名なり。)謂ゆる[六〇]印捺羅を帝釋等と名く、乃至三界六道の有情類中、差別の名を立て、類に隨て主と爲す。皆な調伏を爲んが爲の故に、類に隨て法名を立てて、差別無量なり。皆な衆生を成熟するが爲の故に、世間に一法・一名・一相として、是の如き如來の所變亦あること無し。曼殊室利童子、一類の人あり、我は不生不滅・眞如實際・實法法界・涅槃實智・無二無相・意生儒童・作者受者・知者見者なりと知りて、是の如き解を作す。童子、此の[六一]莎訶世界の衆生は、我を稱して、大離欲如來・佛・天人師なりと爲す。童子、我は常に此の世間に於て、衆生を成熟するに、是の如き名を示す。乃し五[六二]阿僧祇百千數の名あり、一切聲聞・愚癡の衆生は、我が名を稱すと雖、亦我に是の如くの異名あるを識らず。童子、我是の如く一切の有情を成熟するが爲に、亦諸經の中に於て、是の異名を說く。童子、是の

【五七】三地。十地の中の第三地發光地を指す。忍辱波羅蜜を成就して、修惑を斷じ、智慧顯發するが故に、發光地と云ふ。

【五八】五神通。神境通・天眼通・天耳通・他心通・宿命通。

【五九】大被甲冑。大慈悲心を指す。

【六〇】印捺羅(Indra)譯して帝と云ふ。

【六一】娑訶(Saha)又娑婆とも云ひ、忍土と譯す。苦の世界の意。

【六二】阿僧祇。具には阿僧祇劫波(asaṃkhya-kalpa)無數時分と譯す。無數とは大數の意。

外を揩拭せよ。常に諸の嘲誂戯論を作さざれ。若し喜んで違犯すれば、隨て罪倶に生じて、呪は驗を成じ難し。若し大法を作さんには、恒に年の吉月吉日の時を候して、法に依て三種の品法を營造せよ。謂く神の神通を(得玉へる)月に修するは、最も第一なり。白黑の二月八日・十四日毎に、[五四]三白食を食し、加ふるに香華を以てし、新淨の飲食をせよ。持獻供養し、如法に念誦すれば、倍ゝ速に證成せん。

復像變あり、童女をして香湯にて澡浴し、[五五]八齋戒を受け、絲を持し、織を造せしめよ。方に度量せしめ、刀にて截斷す勿れ。吉時に於て起首し、模を畫け。或は板を以て畫け。匠人は時時に洗浴し、清潔にして、鮮淨衣を著し、八齋戒を受け、正中に釋迦牟尼佛を畫け。師子座に坐し、結加趺坐し、衆の相好を具へ、頂に大光を放ち、說法の相を示し、身に圓光あらしめよ。次に佛の右邊に、觀世音菩薩を畫け。結加趺坐して、身は黃白色、頭に寶冠を戴き、冠中の化佛は、面目瞋怒にして、一手に白拂を把り、一手に數珠を把り、叉眉間に於て、竪に一目を畫き、天衣服を以て、種種に莊嚴して、蓮花座に坐せしめよ。次に佛の左邊に、金剛密迹主菩薩を畫け 結加趺坐し、身は青色の相にして、首に寶冠を戴き、面目瞋怒し、一手に金剛杵を把り、一手に白拂を把り、寶蓮花に坐せしめ、次に座の後に、最勝明王金剛を畫け。大度底使者を畫き、可畏金剛を畫き、黃眼金剛を畫き、大笑金剛を畫き、大拳金剛を畫き、軍荼利金剛を畫け。是等の金剛に各ゝ大力ありて、最勝の調伏(者)なり。皆器仗を執りて、蓮華座に坐せしめよ。應に種種の衣服・瓔珞を以て、皆妙飾莊嚴すべし。

次に觀世音菩薩の後に、馬頭觀世音王を畫き、意樂圓滿王を畫き、白衣觀世音菩薩母を畫き、多羅菩薩を畫き、毘俱底菩薩を畫き、[五六]吠路者那菩薩等を畫け。是の菩薩等は、各各に本所の器仗を執持し、蓮華座に坐し玉へり。應に衆妙の衣服瓔珞を以て、皆な妙に莊嚴すべし。

次に佛座下の左邊に難勝大奮怒神を畫き、大字神を畫け。

【五四】三白食。白は清淨の義にして、牛乳と牛酪と白米とを云ふ。

【五五】八齋戒。不殺・不盜・不婬・不妄語・不飲酒・不塗飾香鬘・不觀聽歌舞・不眠坐高廣牀座。

【五六】吠路者那(Vairocana)遍照と譯す。

五頂王成就品第七

その時、世尊は、復諸の有情を導き利せんが爲めの故に、大成就頂王法を說き玉へり。小智の有情は、世間の法を貪して、心精專ならず、智者は法に依て修習し、定んで當に成向すべし。每日請召の時、世間の諸神・空神・星神・隨所住神は、一心に念誦すれば、喚に隨て來り住せん。常に當に結界護身し、呪を誦じて作法すべし。若し護身・結界・結印せざれば、則ち人の精氣を奪ふ鬼の爲に、呪力を奪はれ、六分して五を偷まれん。或は全(部)を偷奪されん。或は[五〇]茶枳尼鬼の爲に、呪力を奪はれん。若し偷奪を恐るれば、則ち一切頂王呪・難勝王呪を誦ずれば、定んで全く本所持の呪を却さしめん。」と

時に世尊、又來世の一切の呪者は、薄德少福にして、嬉戲に樂著し、不善を同伴とし、女色に耽[五一]盻し、戒に於て缺漏せんことを觀じて、爲に敎法を說き玉へり。則ち心に思惟し堅持して、[五二]六念を修呪の法に係け、菩提心を發せば、卽ち成就することを得るなり。密迹、菩提心を離るれば、卽ち成辨する無し。何を以ての故に、呪の威力を以て、能く菩提を成ず。菩提心は大威力を以ての故に、能く全呪する者は、速に成就することを得ん。呪者は青黑等の物を食せざれ。亦佛床・法床・僧床に臥せざれ。和上・闍梨・父母等の床に坐臥せざれ。喫食にも、亦頻食せざれ。大に飯食を撮り、嚼食して聲を作し、半ば食を出入し、顧視して語食し、共に器を傳て食し、手指にて齒を揩ふは皆作すべからず。呪者は應に知るべし。如法に壇を摩し、正跏趺坐して、端儀默食すべし。

若しは念誦の時、若しは作法の時、若しは請召の時、應に一切の善と不善との語を斷じ。如法に誦念すべし。亦他人と一床の(上に)坐臥し、衣服・[五三]鞵・屩・韈等を傳へ著る勿れ。その食する所の器は、純に赤白の銅器椀を用ひて食せよ。若し已に食し訖らば、則ち水にて淨洗し、重て土灰を以て、裏

【五〇】茶枳尼(ḍākinī)狐魅鬼又は厭蠱女鬼と云ふ。

【五一】盻。怨み見る貌。

【五二】六念。念佛・念法・念僧・念戒・念施・念天。

【五三】鞵は鞋に同じ、かはぐつ。屩わらぐつ、韈したぐつ。

長く胛鉗する莫れば、則ち清潔を得ん。若し髮長ければ、蟣虱の生ずる所となり、生ずるに隨て、障咎あらん。梳洗に功多くして、念誦の數少なからん。若し胛鉗長裏に垢穢を停め、香を捻し香を燒けば便ち汚觸し、隨て障咎を生ず。

日月蝕時に、上成就を作す。一切時處に於て、亦持して觀論する勿れ。和上・闍梨の過と非過とを譏謗する勿れ。若し呪師を供養するの時、忽に呪神、天の快樂を受くるを見ば、愛願する勿れ。國土に主無く、交亂あるを見る時は、中に住して念誦を修する勿れ。又神龜の護地・藥叉・羅刹の常に集る住地・[四六]屍陀林地・無佛法地・虎狼の住地・蚊虻多き地・雨なき方地・風の多饒なる地・多賊の住する地・屠殺(者)の住地・沽酒地・經像を賣る地・凶具を賣る地・婬女の住地・及び衆難の地に住する勿れ。皆な中に住して法を營み、念誦する勿れ。諸法を作求するも、悉く成就せず。

念誦法中燒火の法は勝れ、天神喜滿す。譬へば人食に飽きて、歡喜充適する(如し)。是の故に、佛は一切念誦品法中にて、此の法を最と爲すと說き玉へり。[四七]佛の所說の如く、念誦燒火は、一切法事に、廣く功あれば、廣く成り、少く功あれば、少しく成る。亦他に酒肉・毒藥・刀劍・弓箭・斧槊の具を施す勿れ。亦讃殺・快殺・方便殺・謀殺する勿れ『亦他の災吉の事を、占說せざれ。亦他に迷倒癡法と、及び一切有情を恐怖する所の不安の隱法とを施さざれ。皆な應に作す勿れ。

不淨の[四八]步多鬼處・屍鬼有る處・藥叉・羅刹等の處に遇はば、常一に出入の想を清淨と爲せ。念誦處に於て、結加趺坐し、諸の妙法は・香河水と成ると想へ。身は澡浴に沒し、浴呪の印を結び、身を印して、佛菩薩等の身と爲ると想へ。卽ち塗香を以て、遍身に塗飾し、一至念誦して、動搖し、漫視し、聽察し、謦咳唾嗽すべからず。若し破咄し、動搖し、謦欬する有れば、卽ち重て[四九](五)輪にて、浴印を結びて、身を印し、持するに淨水を以てし、手を洗ひ、口を嗽ぎ、乃復誦念して、亦上法・中法・下法を得よ。定んで成就するが故に。

【四六】屍陀林。又尸多婆那(śita-vana)寒林と云ふ。死屍を捨つる所なり。

【四七】以下の本文に亦不論似國王下義劣、如藥叉相女の十三字あり。

【四八】步多(bhūta)化生の餓鬼にして、刹那に三千界を往還する通力ありと云ふ。

【四九】五輪。五指なり。

供養すべし。次に當に與願頂王、及び所種族に供養すべし。是の如く供養すること、一一次第して皆な香花を持して、前の如く供養し已り、次に當に世間の天神に供獻すべし。斯の如く供獻するを三種族供養の法則と名く。愚癡嬰人は、曉解する所無く、種種に一切呪者を謗毀し、諸の呪法は、盡く是れ漫語なりと說く。智者若し是の如き癡人に遇はば、應に自ら諸佛の實說を覩じて、亦虛施せざるべし。但し精專に供養法・[四〇]扇底迦法・[四一]布瑟置迦法・[四二]阿毘柘嚕迦法を修せよ。若し布瑟置迦法を念誦する時は、燒火・食時には、面を東に向け、一心に加趺端坐し、呪後毎に[四三]莎訶の句を加へよ。若し扇底迦法にて、念誦を作す時、燒火・食時には、北方に面して、心を定め、結加趺坐し、亦呪の後毎に莎訶の句を加ふべし。若し阿毘柘嚕迦法にて、念誦作法するには、燒火・食時に面を南に向け、瞋怒して左脚を踏み、右脚の側上を蹲坐にす。亦呪の後毎に[四四]唬吽等の句を加へよ。

若し常に扇底迦法を作さんと欲せば、烏油麻を以て、白芥子に和し、火食の法を作せ。若し常に布瑟置迦法を作さんと欲せば、亦烏油麻を以て、白粳米を和し、火食の法を作せ。若し佛法中の刺を拔き去らんと欲せば、阿毘柘嚕迦法を作し、毒藥に檳榔伽里根を和し、火食の法を作せ。

布瑟置迦法を作すには、弭攞木・阿輸迦木・阿嗟那木・菩提木・薩惹迦木を以て、常に燒火を(作せ)。扇底迦法には尼劬尼木の頒頭末羅木・阿說他木・天門冬草等を以て、常に燒火をなせ。阿毘柘嚕迦法には、佉他羅木・無樓木・苦練木・迦囉弭攞木等を以て、常に燒火をなせ。

他の惡心を調伏して善ならしむるを、阿毘柘嚕迦と名け、災障を蠲除し、一切を寧靜するが故に、扇底迦と名け。圓滿を得んことを願ひ、求むる者、意の如くなるが故に、布瑟置迦と名く。是の如く等の法は、一切處に於ける呪者は、善思して法に依て修習せよ。此の敎の中にて最上を得んが爲の故に、此の教法中にて、一切の災障を辟除せんと欲するが故に、應に是の如く作すべし。斯の法を除て、更に作すべからず。この(修)行者は、慈心をもつて、一切の[四五]梵行を清淨にし、外道の如く、髮を

【四〇】扇底迦(śāntika)息災の法。
【四一】布瑟置迦(pauṣṭika)増益の法。
【四二】阿毘柘嚕迦(abhicāruka)降伏の法。
【四三】莎訶(svāhā)これに成就・吉祥・圓寂・息災増益・無住・驚覺・驚發・攝取・究竟・散去等の義なり。
【四四】唬吽(hūṃ)これに擁護・大護・自在能破・能滿願・大力・恐怖・等觀歡喜等の義あり。
【四五】梵行。梵は清淨の義、婬欲を行せざるの意。

情は、質直純善にして、福德高勝なれば、隨て作し隨て成ずるなり。今我が釋迦牟尼如來は、濁惡世に出で、解脫を得るの時、及び弟子等、解脫を證するの時、相續して勤て、猜疑の心を斷ち、精進を具足し、福事を淨修すれば、卽ち證を成ずることを得ん。若し福德(の人)にして、法に依て修持すれば、速に成就を獲ん。若し福德尠き人にして、法に依て修持すれば、久しくして乃ち成就せん。是の最上の呪を、若し成就すれば、則ち高勝無等等を得るが故に、譬へば琉璃寶、並に蓮華光寶の如く、功力價直陪數して、喩況の及ばざる(所なり)。故に此の頂輪王の呪力は、不思議なり。勇猛殊特の行者は、應に常に鉢を持して、食を乞ふべし。若し飯餅を得れば、復淨濤擇分して、三分と爲し、一分は佛神諸天に奉獻し、若し食を獻じ已らば、(加)持して以て、水陸の一切有情に施し、一分は外來の乞者に施し、若し乞者無ければ、禽獸に施し、一分は(加)持して以て、法に依て自ら食せよ。若し安隱を求むる法を作す時には、北に面し坐して食せよ。若し富饒を求むる法を作す時には、東に面し、坐して食せよ。若し調伏を求むる法を作す時には、南に面し、坐して食せよ。行者常に慈心を起し、諸の有情の衆苦を受くる者を念じて、誓て當に度脫すべし。若しは大苾芻、若しは鄔波索迦の持梵行者にして、若し慈悲(を念とし)、獨り持法を行ずれば、則ち障礙無きなり。是の故に、智者安隱富饒を樂欲し、速に證を成ぜんとならば、應に常に心を定て、恭敬し合掌して佛塔を禮し、淨治灑地し、牛糞を以て、黃土泥に和し、誦するに一切頂王心呪を以てし、或は摧碎頂王の呪を誦じ、白芥子(を以て)、淨灰を呪すること七遍して、十方に布散して、方界を結し、四橛に繫ぐに、綵索を以てし、之を呪すること七遍し、四角に圍釘し、(四)方地界を結して、坐位を安布し、種種供獻して、護身結印し、請召し供養し、誦呪し燒火すれば、自ら身に驗を成ず。

先づ初に釋迦牟尼如來に供養し、次に當に明頂王に供養し、次に當に次第に、一一の頂王に供養すべし。次に當に觀世音菩薩、及び所(屬の)種族に供養すべし。次に當に金剛密迹主菩薩、及び所種族に

誦時・焼火・食時に於て、其の身を將護せよ。若し法に依て一一護身せざれば、則ち成就し難し。常に諸の惡天龍・藥叉・羅刹・惡姤仙の類、荼枳尼鬼・畢舍遮鬼・餓鬼の爲に、處處に隨逐し、伺求し、障惱し、破壞し、虛耗せられん。是の呪法の中に、曼陀羅花・弭攞花・遏迦花等を以て、時に獻供養する莫れ。及び諸佛頂の供養法中にも、亦供養する勿れ。應に惹底花・頭鉢羅花・倶物頭花・諭底迦花、及び餘の種類の虧勃名花を以て、、常に五頂輪王に供養すべし。若し呪者あり、一二三度に於て、此の法を精修して、悉地を證せざれば、倍ゝ應に勤懇精專に修習すべし。乃至七度せよ。海河潭上に、日日三時に、砂の佛塔を印し、力に隨て印修し、並に諸大乘の餘の經典を轉ぜよ。印は是れ塔にして、數は滿三十萬なり。謂く先世の十重障業を滅す。隨て即ち此の一一の塔を供養せよ。塗末香と諸の妙花香とを以て、佛前に獻供し供養せよ。一一の塔に於て、前に坐し、呪を誦すること一百八遍せよ。智者是の如く法を精ふして、修持するも成就せざれば、謂く宿障重きなり。又日日を加て、一肘塔を印し、一千已上なれば、若し五逆重罪なりとも、亦銷滅することを得ん。況んや、餘の宿障をや。斯の如く法に依て、精勤し修治せよ。但し呪を誦持することも、亦銷滅することを得ん。何に況んや、印塔をや。又法(有り)、江河の岸側に詣住し、持するに蓮華を以てし、一呪一擲して、江河の水中に十萬箇を滿たせば、則ち成向することを得ん。何に況んや、倍加して而も成就せざらんや。若し是の如き處に、法を修行せざれば、則ち成辦せず。斯の如くの呪法は、尠福の人なりとも、印塔を加ふれば、乃ち成就することを得るなり。殖福の德人なれば、但し法に依て誦持し供養すれば、則ち成就することを得るなり。是の如く成す者は、勤て呪を誦持するを、根本と爲すなり。是の故に、堅固精進にして、清淨に菩提を求むる者は、(必)定して成就するなり。未だ曾て呪の經に在るを見ざるも、自ら成ずるなり。要は精進を假りて、菩提・師僧・父母、及び苦の衆生の爲に、勤功修習し、合掌頂禮して、法に依て呪を誦し、障垢を剪除すれば乃ち成就を得て、大功德を爲さん。劫初の有

【三六】荼枳尼(ḍākinī)夜叉の一類にして、人の心臟を食ふ。

【三七】畢舍遮(piśāca)食肉鬼。顚鬼とも云ひ、餓鬼中の勝者なり。

【三八】悉地(siddhi)成就の義。

【三九】十重障業。1.異生性障、2.邪行障、3.闇鈍障等なり。

夢に上樓閣の幢を見、花鬘の上を踏むを見、或は手に[三四]箜篌を把り、僧衆に詣入し、塔に上り船に乘るを見ること有れば、下品を速に成就する相を證すと名く。若し夢に[三五]梅荼羅人・猪・狗・駱駝・驢・死人等に、若しは觸れ若しは近づくと見ること有れば、是れ障にして成ぜざるなり。是の如く等の相を、智者は應に知るべし。若し毘那夜迦、諸の障惱を作せば、(加)持するに粳米を以て、烏麻油に和し、日日三時に、一呪一燒し、各〻一千八遍し、三七日を滿すれば、則ち夢に見ることを得るなり。本神身を現じて、敎ゆるに語言をもつて告ぐ、汝某處を去れ。と、酥蜜相和し、日夜三時に、一時に一呪一燒し、各〻一千八遍し、三日の夜に、則ち夢に毘那夜迦の所有の眞法を見ることを得ん。汝去て喫食せよ。所有の眞道を、汝は當に成辨すべし。と、若し覺め已らば、神呪を加念せよ。願くは當に大丈夫の相を現ぜんが爲に、我が爲に天女の狀相を現じて、我が心境を亂さん。妄りに貪著愚癡等の心を生ずる勿れ。又護身の翟を持して、復安睡せよ。若し持誦の時には、過去の種種嬉謔雜欲漏法を念ずる勿れ。亦未來の衆事を計らんと欲し諸の餘法、我が心を散動し(擾)亂する勿れ。惟一に想を繫けて、呪文の一一の句理に入れ。若し心生を欲すれば身の膖壞を觀じ、若し心瞋を生ずれば、慈悲觀に住せよ、若し心に癡を生ずれば、十二(因)緣を觀ぜよ。若し心に數を緣ずれば、顚倒生の(觀)に住し、則ち心に觀想して、呪神は頂に在り、持するに花香を以てせよ。先づ供養を前め、結加趺坐して、如意に念誦せよ。若し少しも是の法に依らざれば、或は則ち障碍を爲さん。毘那夜迦は、破壞食噉す。若し未だ曾て、此の輪王大種族の壇場に入りて、阿闍梨が、法を敎授せざる者有り、自ら斯の法を持すれば、則ち常に毘那夜迦は、影の如く身を逐ひ、獻食・獻香・獻華・飯食・香水・燒火に障り、呪聲は本呪神に到るを得ざらしむ。此の頂輪王を若し成就する者なれば、則ち常に爲に姹賴駄吒迦・毘那夜迦王も障難を作生せず。況んや餘の一切の毘那夜迦、能く障難せんや。是の故に智者は、呪法を成就す。當に難勝奮怒王呪を以てすべし。或は輪王の僕從呪を以てせよ。持

【三四】箜篌。樂器の一種。
【三五】梅荼羅(candala)賤業に從事して、佛教の戒法を守り得ざる人を指す。

鼻端に[三〇]心の無惑を想へ、右手に(數)珠を掐り、左手を胸に當てて、數珠の印を結び、[三一]徐徐に呪を誦じ、數課を滿じ已て、數珠を以て淨潔合の處に置き、印呪にて護持して、重て香を燒き、諸の華香を如法に供獻すと想へ。則ち本呪を誦じて、壇方界を解き、合掌頂禮して、方に依て發遣せよ。是の如く法を想ふこと三十旬日、靜に諸論を斷じて、每日三時に、三摩地門を見證することを得ん。

五頂王儀法祕密品第六

その時、釋迦牟尼世尊、復金剛密迹主に謂て言く、此の頂王呪成就の法行は、諸佛共に說き玉へり。利益を得んが爲に頂王を成就す。密迹、過去・現在の一切如來は、無差別の偈句教行を、皆悉く空寂なる幽閑勝處にて說き玉へり。我(今)略ゝ示說す。大名山・聖所居處、或は仙神窟、或は空新室處・獨林泉處に於て、これ等の處にて一心善淨に、この法を修行す。諸の不善法を、極淨割除し、善淨法に於て、深入の意を生じ、この二句法は蔓延して、能く善不善の業を生ず。是の故に若し滋味・辛・甘・酢・淡を飲食すとも、貪饕・耽嗜・過飲を欲する勿れ。若し貪を爲せば、便ち持誦し、供養し燒火する能はずして、定心生ぜず。是の故に呪者は、貪愛を離斷し、恒に初夜に於て、力に隨て大方廣佛花嚴經、寶雲經、餘の大乘經を轉讀し、中夜分に至つて、淨茅草を敷き、周四方を結界するに、結印を(以てし)、呪印にて身を護持し、師子王の如く、頭南面東、右脇にして手を枕とし、足を疊て而して臥す。是れ布瑟置迦[三二]・念誦の時の燒火・食時・臥法なり。若し扇底迦・念誦の時の燒火・食時は、頭を東南方に、面を東北方にし、右脇にして手を枕とし、足を疊て、而して臥す。若し[三三]阿毘柘嚕迦・念誦の時の燒火・食時は、頭は西、面は南、右脇にして手を枕とし、側に足を疊て、而して臥す。若し睡夢すれば、夢にて上の菩提樹・栴檀・香樹・弭攞樹・鬱頭末羅樹を見るを、中品を速に成就する相を證すと名く。若し夢に白鶴・孔雀・金翅鳥等に乘ると見れば、上品を速に成就する相を證すと名く。若し

【三〇】心無惑。[illegible]字若しくは[illegible]字を觀するを云ふ。
【三一】徐徐。本文には迄道とあり。
【三二】布瑟置迦(paustika)増益法卽ち富貴榮達を得るの修法を指す。
【三三】阿毘柘嚕迦(abhicāraka)惡魔降伏の修法。

唵弭麼路娜地虎吽[二五]

七遍を誦じて、大海の清淨明徹を觀想せよ、動渇有ることなく、顯現分明なり。

海心の中に當て、寶山を觀想せよ、呪に曰く。

唵阿者攞虎吽[二六]

七遍を誦じ已て、寶山の周匝廣麗にして、衆寶の光飾を具足し、顯現するを觀想せよ。

次に寶山蓮華の呪に曰く、

唵虎迦麼攞莎訶[二七]

七遍を誦じて、無量百千の大葉、七寶蓮華の鬚蘂、臺莖の光飾の顯現するを觀想せよ。

寶殿を觀想する呪に曰く、

那莫薩嚩怛他誐哆南唵薩嚩吐蘗羝薩叵囉伊摩吽伽誐那劍莎嚩訶[二八]

七遍を誦じて、寶殿種種の莊嚴光飾の顯現するを觀想せよ。

次に本所持の呪を誦じ、佛會に啓請す。衆寶殿中に、香雲・香華・香食・香水を持して、佛會に供獻すと想ふて、則ち發願して言く、唯願くば聖衆、各各神力を以て、供養を受け玉へ。と

次に一切頂王の心呪一百八遍を誦じて、東西南北・四維上下を結持し已て、次に壇を觀ぜよ。大界の中、香水海にて、釋迦牟尼の眞報身佛を浴すと想へ。又當に一時に、一切佛身、及び佛種族菩薩呪神、並に呪神を浴すと想へ、總浴を想ひ已て、又種種の栴檀、塗香にて一時に一切佛身、及び佛種族、菩薩呪神等を塗飾すと想へ。又種種の奇妙繒綺、金縷の袈裟[二九]、頭冠瓔珞、及び諸の衣服を、一時に一切の佛身、及び佛種族の菩薩呪神に披串すと想へ。會坐に啓すと想へ。次に諸の飲食を持獻して、一時に一切の諸佛、及び佛種族の菩薩呪神に供養し已て、行者は則ち此の善根をもつて、心口にて衆罪を發露誠懺し、菩提に廻向して、佛に大法輪を轉ぜんことを請ひ、仁者當に諦觀して、

【二五】 Oṁ vimaladadhi hūṃ

【二六】 Oṁ acala hūṃ

【二七】 Oṃ hūṁ (?) kamala svāhā

【二八】 Namaḥ sarva-tathāgatānāṁ oṁ sarvodgati spharā i ma hūṃ gagana khaṃ svāhā

【二九】 袈裟。具には加沙野(kaṣāya)色の名、赤色の義、又不正色とも云ふ。法衣は壞色の布より成るが故に、爾か名く。

迦羅弭羅木等、十二指頭を横へて、銛にて劈截し、調伏法を作せば、亦上成就なり。上等木無ければ、但し葉を得て作れ。葉の元に蟲あれば、亦成就を得るなり。當に牛糞を以て、諸の香水に和し、毎日坐臥處及び灌頂處に塗灑せよ。所用の水は、時に皆な淨細(布)にて漉すべし。內外の衣服は、常に淨く澣濯せよ。斯の如きの作法、若し成就せざれば、則ち一切頂輪王の心呪を加(持)して、遍く誦せよ。又成就せざれば、復佛眼呪等を加へよ。[二〇]皆な同誦して、心を縱憹せしむる莫れ。この佛眼の呪は、過去の諸佛も、曾て已に共に說き玉へり。我今復說く、當に[二一]五逆を懺(悔)して(善法)を成就せんとする者は、此の一字頂輪王の呪を持すれば、大證成を得べし。何に況んや、性淨にして、信根を具する者、持して成就せざらんや。若し是の呪者、此の五頂輪王像に、對坐して持念ことなければ、佛說の如く、像を目前に像想せよ。一心に瞻仰し、合掌禮し已て、端然として跏趺坐せよ。

定想心呪に曰く、

[二二]那謨囉怛那怛囉夜耶阿者攞弭嚩莎嚩訶

誦すること一七遍、(印)を結び、大印上に、無量の衆寶ありと想へ。大山下に、大海の清水有りと想へ。山上に無量百千の大葉の七寶蓮華あり。華臺は大圓廣博にして、莖復庬大なり、蓮華臺葉上に、寶帳の半滿月等あり、寶珠鈴磬・眞珠網縵・周匝彌飾し、中に釋迦牟尼如來あり、身に三十二大人の相と、八十妙好とを具し、結加趺坐して、師子座に坐し、目に頂王像を觀ると想ふべし。

如上の說は、像想に皆な之れあり。殿上に七寶傘蓋あり。衆寶網を以て、四(方)に布き莊嚴すと想へ。是の如くの想觀は、縱廣百尺なれば、百尺を成ずと想へ。縱廣[二三]一里なれば、一里を成ずと想へ。縱廣一由旬なれば、一[二四]由旬を成ずと想へ。展轉して乃し色究竟天に至る。是の行相を觀ずるに、心に猶豫する莫れ。諸境に隨逐すれば、觀を惑はし、心を亂る。

大海を觀想する呪に曰く、

【二一】五逆。具には五逆罪と云ふ。1.父を殺し、2.母を殺し、3.阿羅漢を殺し、4.佛身より血を流し、5.和合僧を破る。

【二二】Namaḥ ratna-trayāya no.ila-viroka (?) svāhā

【二三】一里。支那の一里は六町を單位とす。

【二四】由旬(yojana)約九哩。

身口を淨る呪に曰く、[一六]

那莫薩嚩勃馱菩地薩埵南唵戌殿捺囉輪馱那野莎嚩訶

これ佛族の呪なり。若し壇に入る時、淨衣を著し已らば、水を呪すること三遍し、口を漱ぎ、頭・耳・肩・心を灑灌し、整儀し直視して、大悲心を發せ。歩を整ひ、徐行して直に壇內に入れ。是の如く智者は、恒に新淨氈布等の衣を著して、この呪法を修せよ。常に一切頂王の心呪を以て、一切物を呪し、輪王像の前に、供獻を(加)持し已て、茅草の上に坐し、一心に像の諸佛菩薩を(念)想して、呪を誦じ印を結び、啓召發願し、像を諦觀し、身は動搖せず、目は瞬視せず、蓮華印を結び、佛に啓し、坐して印せよ。是の如く作持す。何を以ての故に、謂く佛座と菩薩座とを得るが故に。

次に數珠を把る呪に曰く、[一七]

唵遏部羝弭惹曳悉地悉馱喝嘌揥莎嚩訶

この佛族の呪には、菩提子の珠を用ひ、珠を持する毎に、皆呪すること三遍すれば、速に向正等菩提、三等證法を成ずることを得。その一切陀羅尼法も、亦此の如くの三成就等の法にて、富貴豐饒を求むるには、金銀珠を用ひ、一切の勝事を成就するを求むるには、頗梨[一八]珠を用ひ、穿つ所の珠條は、童女に持たしめ、各〻本呪を誦じ、珠を呪して貫繫せよ。

數珠を呪する呪に曰く、[一九]

娜謨皤伽嚩底悉睇娑婆馱野娑馱野悉馱梯莎嚩訶

この呪を誦じて、珠を呪じて貫き已り、珠を掬し合掌し、又呪すること七遍し、是を受持珠法と名く。常に茅草に坐して、一心に靜默し、芻麻衣を著し、(數)課を持誦し訖りて、安隱の法を作せ。若し時數畢らば、當に叉特室利木、或は蜜攞木、或は白栴檀木、或は楓香木を呪すべし、十二指頭[二〇]を横へて、齊しく劈截し、安隱の法を作し、富饒法を作せば皆上成就なり。若し棘針木・佉陀羅木・

【一六】 Namaḥ sarva-buddha-bodhi-sattvānām oṁ śuddh-odāra-śuddha-naya svāhā

【一七】 oṁ abhūti vijaye sid-dha-hṛd ya svāhā

【一八】 頗梨。具には頗胝迦(sphaṭika)と云ひ、水精に當る。

【一九】 Namo bhagavati sid-dhe sādhaya sid-dhe svāhā (?)

【二〇】 十二指頭。十二指頭の長さを指す。一指量とは之れに五分と七分との二說あり、大拇指の上節の竪は七分にして横は五分なり。

衣に被甲の呪に曰く、

[一二] 唵、入嚩攞、諦闍、虎吽。

若し浴する時には、右手の頭指・中指・無名指・小指を以て、急に拳を把り、覆ふて心下に置き、大指を以て、直く竪てて、心上に按じ、被甲の呪を誦ぜよ。拳指を呪すること七遍し、被甲と成ると想へ。

被束甲冑の呪に曰く、

[一三] 唵、入嚩攞、播囉訖囉、麼麼、吽吽。

この呪にて、心上の拳指身體を呪すること七遍し、安徐として水に入り、水をして腰に至らしめよ。

一切頂王の心呪に曰く、

[一四] 唵、卓嚕、畔馱、莎訶。

入水を呪し、誦すること七遍すれば、則ち當に[一五]毘那夜迦と、水中の龍元とを禁止して、相災害せず、及び能く一切の事業を成護すべし。又重て土を呪すること七遍し、分て三分と爲し、三種に揩洗し、先づ一分を以て、脚より揩洗に塗りて膝に至れ。次に一分を以て、膝より揩洗を塗りて、臍に至れ。次に一分を以て臍より(揩)洗を塗りて、乃し肩・臂・面・手・背等に至れ。浴し已て衣を著け、又斯の呪を以て、水を呪すること七遍し、三たび頭上に灑ぎて、靜默して語を斷てよ。又此の呪を誦じて、護身の法を作せ。次に難勝奮怒王の呪を誦せよ。次に佛毫相菩薩の呪を誦せよ。次に佛眼菩薩の呪を誦せよ。次に摧碎頂王の呪を誦せよ。

是の如くの呪等を持して、一切を護するを最も勝上と爲す。

若し佛種族呪中の作法なれば、佛眼の呪は上なり。是の五頂輪呪中の作法にも、亦佛眼呪を最上と爲す。若し壇地界及び十方界を結して、自ら護り、伴を護するには、當に摧碎頂王呪、及び一切頂王の心呪を用ふべし。

【一二】 Oṁ jvala-tejā hūṁ

【一三】 Oṁ jvala-parakṣara (?) ma ma hūṁ

【一四】 Oṁ truṃ bandha svāhā

【一五】 毘那夜迦(Vināyaka) 常隨魔と譯す。

一に佛を想へ、慈心もて、備に十方の有情を緣じ、淨土と乾牛糞末とを和して呪し、手を澡ひ身を洗淨浴して、襯衣を著し、護身を結印せよ。

護身の呪に曰く

八 唵、麼麼。虎吽、儞。

復當に此の呪七遍を誦じて、護身すべし。若し罪障を懺(悔)し、神通を求むれば、當に白土の蟲なく、赤からず、黑からず、臭さからず、穢れなきを用ふべし。若し豐饒を求むれば、黃白土を用ふべし。其の土は蟲なく、亦臭穢なかるべし。若し降伏の法ならば、黑赤土を用ひよ。若し尊他を欲すれば。當に白からず黑からざる土を用ふべし。若し他人の愛敬と讃歎とを欲すれば、青赤の土を用ふべし。此の如く等の法は、智者善く知れ。

土を取る呪に曰く、

九 唵、娜囉虎、吽。

土を呪すること七遍し、土を取りて、一切の法を作すべし。若し清潔の聖河泉水に衆鳥あり、四岸の上に於て、花果樹多き福勝吉祥なるに遇はば、中に入りて澡浴せよ。

洗浴を加持する呪に曰く、

一〇 唵、入嚩攞、虎吽。

復此の呪七遍を誦じて、護身し灌頂し洗浴せよ。この水は聖なりと雖、若し豈難あり、及び多くの婦人・小兒・畜獸の踐穢する所ならば、則ち浴するに堪へず。

加持の呪に曰く、

一一 唵、跛囉入囉攞、虎吽。

若し浴する時には、土を呪すること七返し、土を淨處に置き、穢す勿れ。唾する勿れ。

【八】 Oṁ ma ma hūṃ ni

【九】 Oṁ dhara hūṃ

【一〇】 Oṁ jvala hūṃ

【一一】 Oṁ para jvala hūṃ

の身に證することを得ん。誠心に塔法を印し、誦呪して大法を修し、一一分明に解すれば、則ち此の身に證することを得ん。堅固甚だ精進にして、廣大の心無量なり。作法を最上と爲せば、則ち此の身は證と得ん。身支の相具足し、質直にして善福を具し、能く苦の飢渴を忍べば　この人成就するに堪へん。是の如くの善根者は　當に此の經を得、及び此の法門を得べし。彼れ亦時を久ふせずして、最勝に成就を證せんのみ。

その時、世尊、金剛密迹首に謂て言く、我が滅度の後、癡頑罪惡の有情有り、及び住壽我所幢相の苾芻[四]・苾芻尼[五]・鄔波塞迦[六]・鄔波斯迦[七]有りて、常に好んで愚癡邪見の諸惡の談論に隨逐し、美味に貪著し、懈怠少德にして、如來の威德靜慮と、十力無畏と、大乘の說とを信ぜず。無力にして菩薩の律行と、方便の法教とを順修せず。謗心毀呰して、諸佛菩薩の三摩地門の神通威德を敬せず信ぜず。彼等持作すとも、成就を得ざれば、則ち我を謗し、菩薩を謗し、此の法は佛の所說に非ず。是れ魔の所說なり。と唱言し、妄に菩薩を說き、及び大我を行ず。是の呪を勤持する善男子・善女人等を謗毀し、惱亂して、諸の障碍を作す。此の咎殃に因て、當に無間に無量の重罪を得べし。是の故に、密迹、善男子・善女人等ありて、菩薩行を發行せんと願ふ者は、堅固に信向し、一心に正願して、常に樂んで大乘經典を書寫し、讀誦し供養して、他の爲に解釋し、寶雨經に依て、菩薩一一の法門を、行學し加行し、法の如く行ずれば、則ち成就を得、復謂く、密迹、何の成就する所ぞやとならば、身に從て懇に布施・持戒・忍辱・精進・定・惠の清淨を勤め、一心に修習すれば、則ち速に成就せん。時に金剛密迹首、復佛に白して言く、世尊、云何んが、是の頂輪王祕密門の觀想護淨を行ずるや。世尊、惟願くば(哀を)垂れて、解釋を爲せ。此の法支の法を具足するが故に、速に頂王成就の證法を得んことを。

その時、世尊、金剛密迹首に詔て言く、汝復諦聽せよ。我れ薄福尠福の少精進者を利益せんが爲に、一切の祕密門修持の法時を說かん。毎日三時に、洗淨浴法し、諸欲を貪らず、念心亂れず、唯

【四】苾芻(bhikṣu)乞士・勤息・道士等の譯あり。
【五】苾芻尼(bhikṣuṇī)勤息女等と云ふ。
【六】鄔波塞迦(upāsaka)淸信士・近事男等と譯す。
【七】鄔波斯迦(upāsikā)淸信女近事・女等と譯す。

卷の第二

五頂王行相三昧印品第五

その時、金剛密迹首は、合掌恭敬し佛に白して言く、世尊如來・無上應正等覺、願くは唯愍を垂れて、修行者の爲に、略して頂王の行法成就、甚深理趣の廣大威德を說き玉へ。復世尊に白して言く、一切の餘呪は、皆此の呪中に依て、誦持する所の者なり。云何んぞ成することを得るや。と。

この時、世尊は、金剛密迹首に謂て言く、善哉、善哉、密迹首、汝は善く此の問を發し、而も我に問ふ。汝當に諦聽・諦聽して、淨心に持念せよ。我今汝の爲に說かん。一切諸佛の行法理趣、金剛句義は、無量佛の最勝偈句の理法より生する所にして、呪者を利益し成就することを得るが爲めなり。と

その時、釋迦牟尼世尊は、普く大衆を觀じて、大梵聲讚の伽他を說て曰く、

釋迦大師子の　無量の菩提門、　理趣自在の行は、　當に最上の使と爲すべし。　苦迫の有情を見、　樂んで此の法を持行すれば、　天人共に戴仰し、　當に無上尊を成ずべし。　此の最勝の　大妙[一]陀羅尼を、　信じ及び樂んで供養すれば、　心迹は應に菩提なるべし。　塔・淨堂室、　河邊及び泉側、　獨樹・山窟の中、　山林多花の處に住し、　獨り坐して心を堅固にし、　身口を潔て清淨にし、　この處に食し行住し、　法に依て常に禁誡し、　一心に呪を憶持し、　識祕の　[二]三摩地を、　出生し及び成就し、　法成就を證し已る。　樂ふ所は皆圓滿し、　久しからずして　[三]菩提を獲、　當に二種の意、　持戒と並に善伴とを用ふべし。　此を成就するは難からず、　不動の心堅極なると、　佛頂菩提の法とを、　此れ則ち身に證することを得。　若し同法の伴無ければ、　勤修して有情の爲めにせよ。　難思衆多の相を、　則ち此

【一】陀羅尼(dhāraṇi)總持。

【二】三摩地(samādhi)定又は等持と譯し、心を一境に住せしむる意。

【三】菩提(bodhi)覺又は智と譯し、佛陀證悟の眞實智慧を指す。

中に多くの蓮華魚獸を畫くべし。密迹首、此れを光聚頂王像と名く、是れ諸佛の說なり。有情を導て諸法を成就し、難を脫せしめんが爲めの故に。

次に超頂王の像を說かん。若し像を畫かん者の織を治する所の法は、上の如し。或は方圓三肘一肘、菩提樹下の佛の說法は上の如し。右手を以て申べて、右の膝の上に仰げて、施無畏とし、左手は橫に仰て、臍下に揩け。頂に衆光を放ち、樹上の左右に、矩律婆天を畫くこと前の如し。八淨居天も、亦上の如し。持呪者を畫くことも亦上の如し。此れを超頂王の像と名く。是れ一切(諸)佛、有情を憐愍するが爲の故に說く。

次に勝頂王の像を說かん。若し畫く者は皆上の如くす。菩提樹下に坐して、佛說法し、右手を以て、掌を揚げ、左手は任著す。亦師子座あり、頂に衆光を放ち、樹上の左右も亦同なり。八淨居天も亦同じ、持呪者亦同じ。此を勝頂王の像と名く。是れ一切(諸)佛、有情を利する爲めの故に說く。

復次に密迹首、汝應に畫く(所の)諸佛菩薩に、無量の色身有りて、變化して有情を導引するを知れ。有情は成就を欲するが爲めなり。是等の呪は應に常に正しく慈悲心・喜心・捨心・布施心・忍心・持戒心・精進心・靜慮心・般若波羅蜜心・無上菩提心を發して、有情を利益すべし。方に隨て、㲲絹紙板の上に得せしめよ。一肘半肘、皆任(意)に之を畫け。而して之を供養すれば、則ち最上の成就、五頂輪王の三摩地を得て、能く行者をして、速に不退を得せしむるが故に說く。

五佛頂三昧陀羅尼經卷第一

すゝ(者)あらば、今世に(長)壽福樂を(得)、[五二]倶胝[五三]劫の所作の重罪をば、則ち殄滅することを得ん。若し諸佛頂呪者・佛種族呪者・諸大菩薩族呪者・金剛種族呪者・及び餘の呪者有りて、若しは已成、若しは未成驗なりとも、斯の像の前に對して、本呪法を作せば、速に本呪最上の成就と所求の法とを得るが故に。

五頂王三摩地神變加持化像品第四

その時、釋迦牟尼佛は、金剛密迹首に謂て言く、汝復白傘蓋頂王の變像畫法を諦聽せよ。是れ[五四]殑伽倶胝佛は、當來諸有情の爲の故に說く。若し畫像者は、織法を護持せよ。畫匠等も、前に准せよ。方圓三肘の中に、菩提樹を畫け。正しく樹下に當て、釋迦牟尼佛を畫け。大人の相を具し、身は黃白色にして、說法の相を示し、師子座に坐し。佛の右に金剛密迹首を畫け。身は紫赤色にして、右手に金剛杵を把り、左手に白紅脫色を把りて、合掌恭敬す。次に佛の前に當て、白傘蓋頂王を畫け。身は金色杖にして、衆相を具足し、手に蓮華を把り、菩提樹上の左右に於て、各ゝ矩律婆天を畫け。手に寶索を持し、上空の中に、八淨居天を畫け。各ゝ散華を掌にし、衆寶雲に乘じ、佛座の右に於て、持呪者を畫け。地に跪き瞻仰して、手に香爐を把り、上下四面に、遍く衆華を畫け、密迹首、此の名を白傘頂王變像畫法と曰ふ。

復金剛密迹首に告て言く、我當に復光聚頂王變像畫法を說くべし。畫法は上の結護の如し。或は方圓三肘一肘、菩提樹下に、釋迦牟尼佛を畫け、結加趺坐して、種種の寶光明焰を放て、說法の相を示し、白蓮華寶師子座に坐し、樹上の左右に、矩律婆天を畫き、手に寶索を持す。又上空に於て、八淨居天を畫き、各ゝ散花を掌にして、衆寶の雲に乘じ、座下の右邊に、持呪者を畫け。䠒跪して佛を瞻(仰)し、手に香爐を把る。佛の後に山の種種の莊嚴を畫け、佛の座下に當て、大海水を畫き、水

【五二】倶胝(koṭi)億。
【五三】劫。具には劫波(kalpa)時分と譯す。
【五四】殑伽(Gaṅgā)具には殑伽沙數と云ふ。印度の大河の名、此の大河の砂の數程の多數を指す。

珞を冠し、具に身を莊嚴し、右手に寶を把り、左手は左の膝の上に仰けて、之れに無畏を施し、蓮華座に坐す。

次に佛毫相菩薩の後に[四〇]摩莫計金剛母を畫け。身は龍白相にして、亦七寶瓔珞の衣服をもつて、具に之を莊嚴し、右手には般若經夾を把り、左手には寶を把りて、之れに無畏を施し、身勢頭面は、一に[四一]般若波羅蜜菩薩の如く、寶蓮華座に坐す。此の菩薩は乃ち是れ一切諸佛・菩薩・金剛の母なるが故に。次に金剛母の後に、央倶施女金剛を畫け。次に金剛拳女金剛を畫け。次に金剛雹女金剛を畫け。此等の金剛は、各各白服を以て、世の莊嚴を具し、身は蓮華座に坐し、金剛母の侍眷屬と爲る。是等の金剛は、大威德明呪大力を具して、能く衞護するが故に。次に觀音母菩薩の下に、[四二]多羅女菩薩を畫け、身は黃白色にして、右手に靑[四三]優鉢羅花を把り、左手は施無畏とし、亦種種の衣服瓔珞を以て、具に之を莊嚴し、蓮華座に坐す。次に後に[四四]毘倶胝女菩薩を畫け。身は白色の相にして、三眼四臂、一手に如意杖を把り、一手に[四五]君持を把り、一手に數珠を把り、一手に蓮華を把り、又[四六]幀上の左右二角に於て、各各に諸天を畫け。諸天は各〻天樂を奏す。次に佛の上に於て、八淨居天衆を畫け。種種の華を散して、而して佛に供養す。幀の東方邊面に[四七]提頭賴吒大王を畫け。南邊に焰魔王を畫け。西邊面に水天を畫け。北邊面に[四八]倶吠羅天王を畫け。此の四天王を、護世天王と名く。東北角面に、[四九]伊舍那天神及び[五〇]步多鬼を畫け。東南角面に、火天神と及び苦行仙とを畫け。西南角面に、[五一]羅刹王及び所僕從とを畫け。西北角面に、風天神と及び所僕從とを畫け。菩提樹上に當て、大梵天及び梵衆天を畫け。次に難勝奮怒神の下に、持呪者を畫け。長跪し瞻仰して、手に香爐を把り、頂輪王を觀る。佛座會の下に熙連禪河を畫け。

是に於て、世尊は金剛密迹首に告て(曰く)、此の像は乃ち是れ大頂輪王大畫像の法なり。是れ一切佛の同じく共に說く(所)なるが故に。若し智者、斯の像を見て、則ち信親し禮(拜)し燒香し供養

【四〇】 摩莫計(Mamaki)。

【四一】 般若波羅蜜(多)(prajñāpāramitā) 智慧到彼岸と譯す。

【四二】 多羅(Tārā)眼の意。

【四三】 優鉢羅。具には優曇鉢羅(Udumbara)靈瑞又は瑞應と譯す。

【四四】 毘倶胝(Bhṛkuṭi) 皺と譯す。觀世音の衆生愛護慈愍の相なり。

【四五】 君持(kuṇḍi)水瓶。

【四六】 幀「はりぎぬ」なり。繪畫をゑがくに用ふる絹を指す。

【四七】 提頭賴吒(Dhṛtarāṣṭra)持國。

【四八】 倶吠羅(Kuvera) 多聞天の異名。

【四九】 伊舍那(Īśāna)。

【五〇】 步多(Bhūta)。

【五一】 羅刹(Rakṣa)。

く身を莊嚴し、寶石上に坐し、目に佛を觀る。次に金剛密迹菩薩の後に、軍拏利童子金剛を畫け、次に金剛持童子と善臂童子と慕較馱縿迦童子とを畫け。是等の童子は、顏貌熙怡し、各各七寶瓔珞の衣服を以て、具に之を莊嚴す。次に觀世音菩薩の後に、馬頭觀世音大明呪王を畫け。面目瞋怒、身は赤色相にして、蛇を瓔珞と爲し、腕に寶釧を著け、臂に寶環を著け、蓮華の冠を戴き、目は輪王を觀、腰に衣服を著け、寶蓮華座に坐し玉へり。次に蓮華遜那利菩薩を畫け、右手に羂索を把り、左手は垂下して伸べ、蓮華座に坐す。次に鉢刺拏捨囉喇呪神を畫け。身に四手あり、一(手)に羂索を把り、一(手)に斧を把り、一は施無畏、一は寶果を把りて、蓮華上に坐す。次に頂輪王の後に、難勝忿怒王を畫け、四面四臂にして、身は白色の相なり。耽肚の相を示し、髽は朱儒の如し。腰に虎皮を畫き、蛇を耳璫と爲す。(三八)德叉迦龍王を以て腰繩と爲す。婆修吉龍王を以て路腨と爲し、諸の惡毒蛟を(以て)遍く身を莊嚴し、編髮を冠と爲し、遍身に火焰ありて、寶蓮華に立てり。右の第一手に金剛杵を把り、次の第二手は中指・無名指・小指を以て、拳と作し、大指にて上を押し、頭指は直く申べて、肘を屈して上に向け、左の第一手に、三戟叉を把り、次に第二手に鉞斧を把り、正中の大面は、目を怒らし、口を張り、口より衆光を出し、目に佛を觀る。右邊の側面は、頂輪王を觀、左邊の側面は、自呪者を觀、頂上の面は、如來會衆を觀る。次に忿怒王の下に、地天神を畫け。身は白色の相にして、手に寶匣を把り、長跪して而して坐し、寶地の上に坐す。次に地天神の右に、熙連禪河神を畫け。身は艶白色にして、合掌恭敬し、頭上に七蛇の龍頭を畫け。次に熙連禪河神の後に、七頭迦里大龍王母と、止鱗駄七頭龍王とを畫け。各各跪きて掌に寶蓮華寶珠を捧げ、如來を瞻仰す。是の二龍は、已に曾て無量無數の一切諸佛を供養せり。又地天神の左に、阿難陀九頭龍王と、無熱惱五頭龍王と娑伽羅七頭龍王とを畫け。各各跪きて、掌に蓮華七寶を捧げて、如來を瞻仰す。次に大慧菩薩の右に、(三九)半拏羅婆四儞觀音母を畫け。菩薩の身は、白色の相にして、妙寶衣と七寶の環釧とを著け、頭に瓔

【三八】德叉迦(Takṣaka) 毒視又は多舌等と譯す。

【三九】半拏羅婆四儞。(Pāṇḍuravāsini)白衣。

傘蓋頂王の後に、超勝頂王を畫け。亦菩薩形の如くにして、身服狀相に大威德を具し、(佛)頂輪王を觀じ、手に弭惹布囉迦果を執り、白蓮華に坐し玉へり。次に(佛)頂輪王の右に、光聚(佛)頂王を畫け。身は金色相にして、身に圓光あり、種種の色と作り、(手)に如意珠を執り、蓮華座に坐し玉へり。次に(佛)頂輪王の左邊に、主兵神を畫け。右手は右膝の上を覆ひ、之れに無畏を施し、左手は掌を揚げて、白蓮華に坐し玉へり。次に光聚(佛)頂王の後に於て、勝(佛)頂王を畫け、身は金色の相にして、結加趺坐し、(佛)頂輪王を觀じ、左手に寶如意珠を執り、右手は右の膝の上に仰ぎ、之れに無畏を施し、身に圓光有り、蓮華座に坐し玉へり。次に佛の右側に、普賢菩薩を畫け、結加趺坐して、手に[三六]白拂を執り、次に佛の左側に彌勒菩薩を畫け、結加趺坐して、手に白拂を執り、次に佛座の下に、前の右邊に當て、觀世音菩薩を畫け、左邊に金剛密迹首菩薩を畫け、各各躬を曲げて仰ぎ視、結加趺坐して、寶蓮華に坐し玉へり。

次に普賢菩薩の後に、曼殊室利童子菩薩を畫け、次に無垢慧菩薩を畫け、次に寂靜慧菩薩を畫け、次に無盡意慧菩薩を畫け、次に虛空藏菩薩を畫け、次に虛空無垢藏菩薩を畫け、次に大慧菩薩を畫け、是等の菩薩の身は、眞金相にして、合掌恭敬し、曲躬趺坐して、寶蓮華に坐し、各各種種の七寶冠・天の諸の寶服・瓔珞・環釧を以て、而して之を莊嚴す。

次に彌勒菩薩の後に於て、佛眼尊者菩薩を畫け、其の狀端正にして、甚だ慈悲あり、身は金色相にして、目に會衆を觀、諸天の服を以て、遍く身を莊嚴し、右手に寶如意珠を執り、左手は左の膝の上に仰けて、之れに無畏を施し、結加趺坐して、蓮華座に坐し玉へり。次に佛毫相菩薩を畫け、[三七]佛母の狀に同じく、身は金色相にして、右手に蓮華を執り、左手は左の膝の上に仰けて、之れに無畏を施し、寶蓮華座に坐して、目に輪王を觀る。次に佛眼菩薩の座下に、遜那利大明呪王を畫け、猶ほし佛母の如く、身相色白く、右手に蓮華を把り、左手の掌を胸に(向け)、諸の衣服を以て、遍

【三六】白拂。白毛の拂子。

【三七】佛母。佛眼佛母菩薩。

如法に濯浴して乃し得よ。實色を塗る盞は新淨なるべし。彩色の調和に皮膠水を用ふる勿れ。膠香を用て、畫彩を調色し、或は如來種族部中の教法軌則の畫像を取るも亦得。是の像を畫く者は、當に一切(諸)佛の神通を以て、(次に示す所の)月に畫彩莊飾すべし。謂ゆる正月・五月・九月、これ等の月を用ふ。月の初の一日或は十五日に[34]起首し畫摸せよ。その像を畫く處は、佛の殿堂に於てし、或は淨山間の仙人の縮處に於てせよ。相を占ひ、方圓百步にして臭穢有ること無れ、水復蟲無く、淨美清潔なれ。當所に地を畫し、日日如法に香水を塗灑し、有相の畫人を取れ、諸根端(正)具(足)し、性復眞正にして、信の五根を具すべし。若し畫彩の時は、八齋戒を授け、一出一浴、新淨衣を著し、諸の談論を斷つべし。

先づ正に中に當て菩提樹を畫け。種種の寶をもて、枝葉華果を莊り、如意樹の如くに間雜各〻異なれり。七寶の枝條、七寶の葉華、眞珠を蘂と爲し、赤珠を鬚と爲す。衆寶琉璃を以て諸果と爲せ。或は枝有りて、種種の果芽を出し。或は枝有りて、種種の寶雲を出し。或は枝有りて、甘露を出すこと、雨の如くし。或は枝有りて、天衆の寶衣を懸け。或は枝有りて、寶鐸鈴磬を懸け。或は枝有りて、珊瑚・琥珀・赤珠・馬瑙を出し。二枝の間に光電を畫くこと雲の如くし。枝葉花上に、又白鶴孔雀、[35]迦陵頻伽・鸚鵡・舍利(鳥)、共命等鳥、及び諸の好鳥を畫き。その池には七寶を畫き、遍く皆な莊彩し。是の如くの地の樹下に、如來形を畫け。結加趺坐して、師子座に坐し、說法の相を示し、麗かなる三十二相、八十種好を備へ、身には圓光を放て、大光明焰あり。佛頂の左右に於て、輪王有りて圍遶して坐す。

若一座下の右邊に、(佛)頂輪王を畫け。身は金色の相にして、如來を瞻仰し、白蓮花に坐し、身に圓光あり。次に佛座下の左邊に、白傘蓋頂王を畫け、菩薩形の如くにして、身服狀相に大威德有り、(佛)頂輪王を觀じ、金色相にして、身に圓光あり、手に蓮花を執り、蓮花座に坐し玉へり。次に白

【三四】起首。着手する意。

【三五】迦陵頻伽(Kalavinka)。

迹、この呪王經は、無量の佛刹に於て見聞するを得難し。若し聞を得る者は、皆是れ如來神力の加被あり。若し斯の經を得れば、則ち是れ如來の種族なり。何を以ての故に、此の如來の呪、三摩地王は、實に思議し難し。應に知るべし、此の呪尊の一切呪は、最上最勝なり。是れ諸の有情、當に決定して最上の心を生じて、此の五(佛)頂輪王呪を成ずべし。若し有情ありて、此の經に遇ふことを得て、淸淨如法に、是の呪、是の經を、或は書し或は誦すれば、當に知るべし、斯の人は、則ち當に是の五(佛)頂呪の三摩地王呪を(成就することを)得べし。瞋心・恚心・妬心・害心を斷割し結賊すれば、則ち諸天の爲に、恭敬供養せられ、而も恃怙せらるゝが故に。

一字頂王畫像法品第三

その時、釋迦牟尼如來、一切有情を利せんが爲に、佛眼を以て、この會の大衆を觀じ、金剛密迹首に告て(曰く)、此の大明王呪頂輪王の像は、一切佛の說なり。出世世間一切畫像の最上上の故に、この像形は、(美)好寂靜にして、瓔珞の衣服を(著)し、能く一切罪垢の有情を運んで、涅槃の岸に到る最勝の三摩地にして、この像は佛所の神通變化なり。若し(佛頂)輪王の像を擬し畫くものあらば、先づ曾て(佛頂)頂輪王の灌頂(を受け)、無勝の壇に入りて、手に具足せる呪句印法の法式を授かり、最勝(佛)頂王等の壇に入り已て、成就する者なり。謂く阿闍梨[三一]より印談[三二]を許可せられて、出世の大涅槃處を證せんことを求むべし。是の如くの行人は、乃ち應に像を畫くべし。

正命・正行・淨行の婆羅門家の善童女、若しくは大姓種族の父母、眞正の善信童女に命して、敎淨護飾し、理絲を撚治して、細密に織縫し、刀にて裁斷する勿れ。闊量は四肘、長量は六肘にして、觸汚有る莫れ。惡絲を用ふる莫れ。織を持して像を畫け。或は闊さ三肘、長量は五肘、若し力が是の如くの織作を辨ぜざれば、亦價に任じて、新鮮淨好の者に求めよ。物を持し得已て、淨香水を以て、

【三一】阿闍梨。具には阿闍梨耶(ācārya)敎授の義。
【三二】印談。印契とも云ふ。
※ 此の間に勿還價直の四字本文にあれども讀み得ず。

の方處に、暫らくにても觀讀あれば、一切の諸魔は則ち中に入らず。何に況んや持者をや。密迹、人有りて精勤して勝頂王呪を受持する者は、是の人は神通を獲得せざる無し。この呪は亦一字（頂）輪王呪に同じく、能く神通を起して、地獄に入り、有情の一切の重苦を度脫す。密迹、此の呪の功德は、無量無邊なり。我今略して少（分）を說くのみ。」と

その時、世尊、諸の菩薩に告て言く、この五頂王呪は、一切如來力の三摩地より流出す。我今略して少分を說く。密迹、若し善男子・善女人有りて、無量の佛所に於て、衣服・臥具・湯藥・飲食・財寶・一切等の物を、日日三時に持して、用て供養し、百千劫を經て、得る所の功德は、人有りて三七日に於て、法に依て、是の五頂輪王を持する功德の百分千分の一にも如かざるなり。何に況んや、是等の呪王を讀誦し受持して、決定不退の菩薩地を成就するを得るものをや。一切諸天大威德者も、是の五頂王（呪）を成就する人を見ば、座を起ちて、而して迎へんのみ。逆ふ者は頭破れて七分と作らん。一切諸天の威光は、影蔽だも、現ぜず。この人の威光は、諸天に過ぐること百千萬倍なり。若し大福純善德の人有りて、成佛を樂はん者は、則ち當に如法に是の經を書寫し誦持して、常に塗香・末香・燒香・華果・飲食を以て、而も之を供養せよ。若し佛の神通威德と、一切の深法とを信じて、菩薩の行を行ずる者有るを見て、則ち當に爲に慳惜あることなければ、則ち成就を得ん。百千劫に於ても、地獄に墮せず。宿命智を得て、乃し[三]阿耨大菩提に至り、一切（の魔障も）嬈害する能はず。演ぶる所の敎命は、人皆敬んで受けん。若し命盡る時は、靜慮に入るが如くならん。密迹、若し福德有りて、端正にして、諸の缺漏無く、容貌圓滿にして、常に懈怠ならず。惟大乘道敎を修學せんと樂はば、菩薩の大願を圓滿し、衆魔の境を超て、菩薩地に趣かん。是の如くの人は、是の經を得て、此の呪を成就するを得ん。密迹、若し斯の人を見ば、敬して善友と爲せ、應に種種の方便を以て、爲に此の法門の功德を說き、儀法を敎授すべし。この人は則ち是の大五頂王呪を成就するを得ん。密

【三】阿耨。具には阿耨多羅(anuttara)無上。

三摩地を成就するに等しきが故に、亦能く一切の事を成就するが故に、能く光明と作りて、一切を照すが故に、是の呪は乃ち一切如來の一切力三摩地より涌流出現す。是の呪は一切如來の加持力無き處に、爲に一切の諸大菩薩の無量の威徳を現ず。

その時に世尊は、一切の有情を安樂するが爲の故に、即ち復高頂王呪を說て曰く

〔三〇〕那麼娑漫哆勃駄南、唵入嚩羅入嚩羅、捻弊特伽妬瑟膩沙、度那度那、虎吽虎吽。

この呪神を說くこと上の如し、若し善男子・善女人等、一字(頂)輪王呪を成就せんと樂ふ者は、應に内外をして嚴飾し清潔ならしめ、特に樺皮或は絹紙上、雄黄に斯の高(佛)頂王呪を書し、肩臂に佩帶して、並に斯の呪を持すれば、即ち速に成就す。若し國王・王族・大臣・僚佐・清信男女・一切の人等、斯の呪を信ずる者に、亦書寫せしめて、頂・肘・臂に佩せしめよ。(然れば、彼等は)諸人衆の爲に互に相敬諾せられ、而も侵惱せられずして、災垢を銷滅す。當に辯才を得て、福相圓滿なるべし。若し軍將及び諸兵(にして、此の呪を持する者)有らば、衆に敬信せられん、斯の呪を亦書して、呪旗に持繫せしめ、及び頭臂に佩して、他の軍陣に往けば、皆自ら臣伏して、互に殘害せざらん。何を以ての故に、諸の如來力の加持の故に。是の呪の威力は、一字(頂)輪王の力に同じ、この諸如來の三摩地力は、加持に等しきが故に。

その時に釋迦牟尼如來は、復不思議神通の威徳を示し、一切惡趣の地獄の種種の苦を滅せしむるが故に、一切如來の神通威徳の三摩地處に入りて、即ち一切如來勝頂王呪を說て曰く、

唵入嚩攞、嗞庾瑟呢沙、入嚩攞、入嚩攞畔駄、畔駄駄哪、麼哪麼、訥噜麼訥噜、莽訥噜莽祁矩、歌娜虎吽。

この呪を說く時、此の呪の威徳は、諸の地獄の衆惡の有情の種種の飢苦をして、盡く皆停息せしめ、一時の甘食の美膳を得、密迹、此の勝頂王呪は、是れ殑伽沙等の諸佛の神通變化にして、所在

【三〇】 Namaḥ samanta-buddhānāṁ oṁ jvala jvala divyodgatoṣṇīṣa dhuna dhuna hūṁ hūṁ.

一に一字頂輪王の威神力に同じ、金剛何の故に、卽ち呪を說て曰く、

[二七] 唵怛他蘖都瑟昵沙、阿那嚩路枳哆、姥𣥓駄那、帝殊羅始、虎吽、入嚩攞入嚩攞、馱咢馱咢、捺囉弭捺羅、瞋娜瞋娜、頻娜頻娜、虎吽虎吽、泮吒泮吒、莎嚩訶。

斯の呪を說き已て、是に於て如來頂に大光を放つて三千大千世界に滿ち、光は其の地を變じて、普く大成して大寶蓮花を現じ、如來は中に坐し、雜色寶の光は、重重に晃耀し、大千(世)界を合して空際に滿周し、大切の寶花を而も傘蓋と爲す。種種の寶鐸を以て、種種に莊嚴し、大千(世界)を周圍して、而も牆壁と爲す。純無價寶にして之を嚴飾し、基陛は衆寶をもつて莊嚴す。是に於て會中の一切諸大菩薩、斯の神變を覩て、踊躍歡喜して、大安樂を得、出世世間の一切の呪法を、已に成就する者は、皆悉く斷壞す。何を以ての故に、大光聚の力は、一字(頂輪)王に似たるを以ての故に、是の光聚呪を心所に憶念すれば、他の呪を破斷し、卽ち皆破斷す。唯一字輪呪王と、白傘蓋呪と超頂呪王と、佛眼母呪と佛五字心呪とを除く。餘の出世世間の一切諸法は、悉く能く斷割し打撲し調伏して、前に摒喚し、若し有呪者なれば、大證驗を得、光聚呪を暫く讀み暫く誦する者は、則ち一切の鬼神の耻撻怖辱を摧伏することを得。金剛密迹首、この光聚王呪を不淨臭穢、腥臊屎尿の處に於て誦する勿れ、佛の[二八]舍利[二九]制底無き處に誦せざれ。諸の一切の呪に對する勿れ。呪像・壇會・諸の有情の前に、暫く妄に斯の光聚王呪を誦するなけれ。何を以ての故に、是の光聚王呪は、一字輪王の力に同なるが故に、唯佛舍利塔の處・淨空間の處・高山頂の處・名山窟處・海岸の勝處・海渦洲處を除く。何を以ての故に、是の光聚王呪は、威德猛大にして、能く自他の呪力の威德を壞して、皆な成ずること無からしむればなり。若し善男子・善女人、是の光聚王呪を受持し讀誦する時は、先づ一字(頂)輪王呪と、及び佛眼呪、各ゝ七遍を誦じ已て然して斯の呪を誦すれば、卽ち大威德を得、四大安隱にして、身膚光澤あり、辯智聰悟なり。汝密迹道首、是の光聚王呪を、若し成就すれば、則ち一字輪王呪の

【二七】 Oṁ tathāgatoṣṇīṣān-avalokita-mūrdhāni-tejo-rāśi hūṁ jvala jvala dhaka dhaka dara vidara chinda chinda bhinda bhinda hūṁ hūṁ phaṭ phaṭ sv hā.

【二八】 舍利。具には舍利羅(śarīra)遺骨にして、殊に佛陀の遺骨を指す。

【二九】 制底(caitya)塔廟。

若し是の轉輪王の呪を誦する時、毎に當に先づ佛眼の呪七遍を誦ずべし。數已て乃ち安じて、是の頂輪王の呪を誦ずべし。時數已て、又佛眼の呪を誦ずること一七遍すれば、則ち安隱なるを得て、諸の嬈惱無からん。

その時、世尊、復坐上に復し、一切佛加被の白傘蓋頂呪王の身を現じ、この時に於て則ち頂上に當て、三千大千世界の虚空際合に遍く一蓋を現ず。亦空居の有情を觸惱せず。是の時、觀世音・金剛首の二菩薩は、合掌して世尊に白して言く、是の如くの神變は、是れ何の因縁ぞや。欻ちにして大千(世界)に遍く、狀は傘蓋の如し。佛の頂上に住するも、邊際を見ず、識解すべからざるなり。

世尊、告て言く、これ此の無量の如來は、共に白傘蓋頂王を說く。又是の一切如來の無邊の色寶と、無邊の音聲と、一切如來の寶鐸網羅は、普周に顯現して、莊嚴不思議なり。諸佛世尊の光明傘蓋なり。一切如來の白傘蓋頂王なり。我は傘蓋の爲に、此の傘蓋を現じて、諸の有情をして、速に成就を得せしむるなり。應に知るべし、これ一切諸佛の白傘蓋頂王を現ず。一切菩薩大威德者は、盡く思ひ共に度るも亦知る可らず。縱ひ諸佛子、百千俱知劫も、前際と中際とを觀思するも、見ず知らざるなり。

この時、釋迦牟尼如來、仰で頂上の白傘蓋王を觀ずるに、佛の神力を振ふて、白傘蓋呪王の身相光明を持す。卽ち呪を說て曰く、

[二六] 那麼娑曼哆、勃馱南、 唵怛他蘗都瑟昵沙、阿那嚩盧拆哆、姥献馱那、唵吽麼麼麼麼、虎訡、儞。

佛、此の呪を說く時に、三千大千(世界)は六返震動す。この時、世尊は、諸の菩薩摩訶薩に誥ぐ、此の白傘蓋頂王は、一切の呪等を能く成じ能く攝す。この呪王の力は、不空無障なり。勇猛無礙無等等の故に。

その時に、世尊は、有情を利するが爲の故に、復大光聚の呪を現ず。此の呪の所有の神力威德は、

【二六】 Namaḥ samanta bu-ddhānāṃ oṃ tathāgatoṣṇīṣa-anavalokita-mūrdhana oṃ hūṃ ma ma ma ma hūṃ diḥ.

し玉へり。この呪は乃ち是れ一切諸佛種族の母呪、復是れ一切諸大菩薩の生(成)養育の母、又是れ諸佛五眼の呪なり。卽ち呪を說て曰く、[24]

那摩薩嚩哆誐諦瓢、囉呵弊、三藐三勃勝弊、唵嚕嚕、塞普嚕、入嚩攞、底瑟他、悉馱盧者爾薩嚩剌拕、娑馱儞、莎訶。

此の一切佛眼の呪を說き已る。其の觀世音菩薩・金剛密迹首菩薩は旣に醒覺し已て、地より起てり。その諸の威德、一切の天衆、各〻本心を得て、適悅し安樂し、各〻本より自らの手の器仗を持し、專心に歸佛し、瞻仰し讃言す。希有なり世尊、希有なり善逝、時に[25]二大士、合掌して佛に白して言く、世尊如來、今日は何故に、特に轉輪王の相、大光明聚に化し玉ふや。甚だ希有なり、本より未だ曾て見ざる(所)なり。と

如來告て言く、大善男子、これこの頂輪王相は、諸佛形相の神變を執持する三摩地門なり。譬へば汝等は集りて、大壇の種種の威德、諸の神變の像、不思議の事を現ずるが如く、如來も亦爾り、是の如く大轉輪王を振現す。奇特の身色、姿貌威德あり。此の頂王は、是れ一切如來、最勝の三摩地に安住する身なり。所有る一切の諸大菩薩も、能く越する者なく、一切の呪王も亦過ぐる者なし。若し所在の方處に、此の呪を誦する者は、五踰膳那の出世世間の一切の呪王は、悉く成ずることなし。汝若し此方處の所說に、同じて大呪を加持すれば、餘の總ては成ずること無けん。若し此の頂王呪を念ずる者あらば、則ち出世世間の一切の大呪を悉く成辨することを得ん。汝の說く所の一切の法呪を、誦持して驗無ければ、卽ち此の呪を以て、而も常に助誦すれば、卽ち成就することを得るなり。五踰膳那の一切の菩薩・金剛呪神・天龍・八部、皆な住入せずして、成就の相を現ず。又他の一切最大王呪の威德神力も、亦此の大輪王呪に及ぶことを得る能はず。何を以ての故に、この呪の威德神は、最尊奇特にして、等侶なきが故に、十地の諸の菩薩も、亦此の呪の威德力を怖る。何に況んや諸天をや。

【二四】 Namaḥ sarva-tathāgatebhyas rahobhyaḥ(?) Samyak sambuddhebhyaḥ oṁ ru ru sphara-jvala tiṣṭha-siddha-rocane sarva-ratasādhane svāhā.

【二五】 二大士。觀世音と金剛密迹の二菩薩。

情に於て、大慈處と作り、能く一切如來の神力三摩地處を現じて、卽ち一字明頂輪王呪を說て曰く、

[一七] 那牟娑漫多勃馱南唵部嚕護吽

その時、如來は是の一字頂の明呪を說く時に、殑伽沙等の三千大千世界は、一時に六反震動し、贍部洲の猛風の諸の叢林草等を吹くが如し。この中、一切の諸の山王も、亦皆大に動き、一切の海源は盡く皆湧沸す。佛の神力を以て、一切の魔宮には、大火遍く起れり。是の中の諸魔は、火の爲に逼られ、悉く皆な悼怖して、佛を稱して歸依す。一切の地獄の苦は、皆な止息することを得。

その時、世尊は爲に、一字明頂輪王の大威德を現ず。時に忽に身を變じて、狀は大輪王の如くに、具に七寶の眷屬圓滿を現じ、一一の寶中に、各〻大光輪を放て、無邊の一切の法寶を照して、一時に雜寶の光を出現す。この大輪王は、寶座の上に坐し、身は盛威赫奕として、種種の光を放ち、一切を映照して、猶ほし金聚の如し。會中の有情と、有情種族とは、一も能く瞻仰する者有ることなし。是の會の一切の諸大菩薩、彌勒等の如きも、亦能く瞻觀する者有ること無し。觀世音菩薩、金剛密迹首菩薩は、佛の威神を以て、欻然の間に、悶亂して地に躄る。是の時、彼の諸大威德天、謂ゆる[一八]大自在天・[一九]那羅延天・[二〇]帝釋天・[二一]倶吠羅天・[二二]婆魯拏天・[二三]焰魔法王乃至一切の諸天神・一切の鬼神・大威德者の執る所の輪・戟・杵・索・棒・杖、及び諸の眷屬の手中の器仗は、悉く皆墮落せり。

その時、大轉輪王は、大悲の光を現じ、諸の菩薩をして、菩提神通三摩地を憶念せしむるが故に、是の時、一切の諸大龍神・藥叉・羅刹・乾闥婆等の八部等、一時に戰怖して、身毛聳え竪ち、大輪王の姿貌威光を覩瞻する能はず。時に彼等は心に世尊に歸依して、南無佛陀・南無佛陀と言へり。

その時、世尊は觀世音菩薩・金剛密迹首菩薩、及び諸の大衆の醒解を得る爲めの故に、疾く須臾の間、是の威身を隱して、如來相に還りて、一切の佛眼大明呪母は、謂く甚だ畏る可き難調伏の者なり。謂く出世世間の願を成就せんと欲せば、一切明の頂轉輪王呪、一切の事位に諸の諍論を滅すと說示

【一七】 Namo samanta-buddhānāṁ oṁ bhrūṁ hūṁ.

【一八】 大自在天。梵に摩醯首羅(Maheśvara)と云ひ、三目八臂ありて、白牛に騎る。第六欲天卽ち他化自在天の主なり。

【一九】 那羅延(Nārāyaṇa)鉤鎖力士・堅固力士等の譯なり。その力量は大象の七十倍ありと云ふ。

【二〇】 帝釋。梵に釋提桓因又は釋迦提婆因陀羅(Śakradevendra)能天主と譯し、忉利天主なり。

【二一】 倶吠羅(Kuvera)毘沙門天の異名にして、財寶の神なり。

【二二】 婆魯拏(Varuṇa)水神なり。

【二三】 焰魔法王(Yamarāja)十王の一、地獄の主なり。

に依て、是の一字輪王頂の明を讀誦し授持する者は、所有の一切諸天・世人・種種の鬼神は、悉く無能害にして、諸の破壞を作さず。是を以て、當に一切の安樂を得、無量の福を受け、大慈悲を行じ、不退地に住して、諸の惱疾・火水・刀王等の難無く、諸の毒害等無かるべし。我が此の一字は、三摩地輪王の呪を出生す。若し新學大乘の菩薩、及び諸人等、信仰し誦持し、書寫して佩(帯)する者有らば、則ち無量の大威德天、而も之を擁護するを得ん。諸惡天龍は、相障惱せずして、常に安隱を得ん。若し書寫する者は、當に淨浴して、鮮淨の衣を着すべし。法の如く齋戒して、壇の側に坐し、樺木皮の雄黄に書したる呪を持して、諸の[一二]苾芻、[一三]苾芻尼に施し、[一四]袈裟の角に繫ぎて而して之を被佩し、若し國王・王族・大臣・僚佐・諸の族姓男・族姓女にして佩する者は、各〻頭上に佩し、或は頂上に或は腕臂等の上に繫げば、則ち安隱を得て、諸の災惱を除き、常に諸天の爲に、觀敬し讃歎せらる。皆な諸の惡道に墮せざらしむるが故に、金剛密迹首、この大呪王も亦能く諸の災星と變怪とを滅して、大安樂を示す。亦能く一切の天龍・[一五]八部・鬼神を攝伏し、亦能く當部の諸呪者を成就す。復金剛密迹首に告ぐ、是の一切如來白傘蓋佛頂王・超頂王・勝頂王・光聚頂王呪は、同等に一切如來の三摩地の中に住し、神力皆等しく、無量廣大なるも、猶ほ一字明頂輪王・最上の三摩地呪に及ぶ能はず。何が故に最上無等なりやとならば、猶ほし如來眼呪・毫相呪・慈悲難勝・如來牙・手・鉢・袈裟・轉法輪等の呪の如き、共に是の呪を說て、乃ち最上たるを得るなり。又大悲大慈・大丈夫の(獅子)吼より、乃し一切の諸大菩薩に至るまで、等しく摧壞する能はず。一切の諸佛は隨喜し加被し、大智光と作りて、諸の黑暗を破す。染淨の慧を堅にして、能く威德を作す。吉祥の福相にして、世間の最勝なり。無垢清淨にして、勇猛堅固なり。[一六]四無畏を現はして、深善慧、廣大無量の最勝智と作り、能く無間の金剛、十力大光の威德と作りて、諸の暗障を破りて、諸佛の智に入り、能く一切の諸大菩薩の萬行の功德と、一切の智慧とを成じ、能く一切の勇猛寂靜、高無障礙の大威德處と作り、能く一切の業惡の有

【一二】 苾芻 (Bhikṣu) 又比丘と云ふ乞士又は道士と譯す。

【一三】 苾芻尼 (Bhikṣuṇi) 又比丘尼と云ふ。

【一四】 袈裟(Kaṣāya) 壞色と譯す。赤血色衣と義譯するあり。本色を故意に壞亂し、見る者をして愛着心を起さしめざる衣の義にして、離塵服又は無垢衣なぞとも云ふ。

【一五】 八部。
1. 天(Deva)、
2. 龍(Nāga)、
3. 夜叉(Yakṣa)、
4. 乾闥婆(Gandharva)、
5. 阿修羅(Asura)、
6. 迦樓羅(Garuḍa)、
7. 緊那羅(Kiṃnara)、
8. 摩睺羅迦(Mahoraga)、

【一六】 四無畏。
1. 一切智無所畏。一切智者なりとして畏るなき意。
2. 漏盡無所畏。我が漏旣に盡せりとして、衆中にありて師子吼して畏なき意。
3. 說障道無所畏。障道を非難して說て畏なき義。
4. 說盡苦道所畏。盡苦の道を說て畏るることなき意。

をして、住して勤修せしむるが故に、是の故に［八］密迹首、汝當に諦聽し諦聽すべし。我今宣說せん。往昔の一切如來、早く已に之を說き、未來の一切諸佛、亦當に之を說くべし。

その時に釋迦牟尼如來は、卽ち佛眼を以て、盡く周く一切世界の有情を觀察し、及び未來の一切世界と一切有情との一一往昔の福願力等と、善根を種ゆる處とを觀、諸の菩薩に誥げて言く、善男子、汝等は一切如來所說の一字轉輪王呪、一切の最勝三摩地、最不思議神通力處とを憶念せよ。是の法は能く一切世界に於て、大佛事を作す。と、

その時に彼の諸の菩薩摩訶薩は、佛の教誥を蒙り、各〻心に一字轉輪王の三摩地處を念じ、唯觀世音菩薩と金剛密迹菩薩とを除く、何を以ての故に、（上記の二菩薩には）佛の加被あるが故に。

五佛頂王陀羅尼入三摩地加持顯德品第二

その時に世尊は、佛の神變大三摩地に入り玉へり。三摩地に入る時に、盡く周く一切有情界を憶念し已て、則ち無量・［九］俱知・［一〇］殑伽沙等の大劫に於て、修する所の積集せる無量波羅蜜の善根を以て、三十二大丈夫の相より大光明を放ち、一一の相上に、各〻法印を現じ、一一各〻に種族の光明有りて、而して之を圍遶す。最も頂上に於て、無量百千の光明を放てり。其の光の雜色は、遍く十方を照せり。是の中、有情にして、斯の光に遇ふものは、各〻相警悟す。其の光は還り來りて、佛を遶ること三匝し、各〻本相に復せり。

この時、釋迦如來は、斯の光を放ち已りて、三摩地より安徐として伸起し、諸の佛刹を觀ること師子王の如く、及び會衆を觀じて、金剛密迹首菩薩に告て言く、汝今諦聽せよ、一字頂輪王明呪王法・四［一一］鄔瑟膩沙呪王・佛眼毫相呪王、此等呪王は是れ如來の手足、是れ如來の臂、是れ如來の口なり。轉輪法王は、一切有情に大利益を作し玉ふ。若し此の世界の一切菩薩等、及び諸の人人等、能く法

［八］密迹首。秘密主又は金剛手と云ふ。

［九］俱知(koṭi) 億の數。

［一〇］殑伽(Gaṅgā) 印度のベンゴール灣に注ぐ大河なり。

［一一］鄔瑟膩沙(Uṣṇīṣa) 譯して佛頂又は肉髻と云ふ。

下に坐せし時、則ち[三]四魔を破して、無上正等佛の智を證するを得たり。汝等亦應に此の地處に坐すべし。汝をして當に無上の佛智を得せしめん。この語を語げ已て、寂然として不動なりき。

その時に金剛密迹首菩薩は、佛威神の德を以て、是の往昔の本所の願力に乘じて、卽ち座より起て、偏袒右肩し、衣服を整理して、長跪合掌し、恭敬瞻仰して、佛に白して言く、世尊我今如來正覺轉輪頂の呪法を啓問す。何の方便を以て、少功力をして、則ち誠に一切如來の大明祕法の加行壇印の種種の法事、一字轉輪王法に向ふことを得せしむるや。大[四]三摩地に入りて、壇處を成就するの法、念誦法輪、結印の法、祕密の法、圖畫像の法、業障を除く法、安隱の法、豐饒財の法、降魔怨の法、一切如來種族の眞實の法、及び出世世間の無礙最勝明法、及び一切有情の有情界を盡して、菩薩を成就する行法、[五]陀羅尼法(これ等)は、この贍部洲界の一切有情をして、大安樂を得せしむ。是れ諸の有情は、轉輪王如來祕密の力を以て、一切當に大佛事を作すを得べし。猶ほ此の[六]贍部洲界の一切有情は、大安樂を得るが如し。卽ち能く此の頂王の法を成就すれば、隨て一切の天神と、天神種族の呪法と、一切の龍と、龍種族の呪法と、一切の[七]藥叉と、一切藥叉種族の呪法と、一切羅刹と一切羅刹種族の呪法と、一切乾闥婆及び種族の呪法と、一切阿素洛及び種族の呪法と、一切迦樓羅と、一切迦樓羅種族の呪法と、一切緊那羅、及び種族の呪法と、一切摩呼洛伽、及び種族の呪法と、乃至世間と出世間との法を成就することを得べし。盡く皆な成就して障碍する所なく、諸の有情の爲に、大住處を作り、諸の垢障を除きて、我が呪法を成ず。及び觀音諸大菩薩大威德者、壇印呪法と、一切如來所說無量難成壇印呪法とを成するが故に、惟如來應正等覺に垂として、有情を愍導し、我が爲に之を說く。

時に世尊は、金剛密迹首に語げて曰く、善哉、善哉、汝等は諸の當來の一切有情の爲に、大利益を作し、能く我が所問の是の一字王頂大轉輪王に於て、一切如來所說の祕密壇法等を成じ、諸の呪者

【三】四魔。天魔・煩惱魔・死魔・陰魔なり。

【四】三摩地（Samādhi）定又は等持と云ふ。心を一境に平等に持念する意なり。

【五】陀羅尼(dhāraṇi) 總持と譯す。單字音の中に諸の義利を總括し含持する意。

【六】贍部（Jambu）具には南贍部洲と云ふ。我々の住する此の世界を指す。

【七】藥叉(Yakṣa) 捷疾鬼。又は輕疾鬼と云ふ。行步の輕捷なる鬼の意。之れに地上に居るものと、虛空に居るものと、天界に居るものとの別あり。

五佛頂三昧陀羅尼經

大唐天竺三藏菩提流支奉詔譯

卷の第一

序品第一

是の如く我れ聞きき。一時薄伽梵摩竭提國に在り、始て正覺を成じ、菩提樹下・金剛道場に大寶藏を帳り、その地の寶帳は、皆是れ如來神通・大福功德の所成なるが故に、純に無量上妙珍奇を以て自然に盛顯し、種種に莊嚴し、衆色交映して、大光明を出し、奇特の寶輪は、清淨圓滿なり。無量の色を以て間雜莊飾し、周匝圍遶して、而して之を顯現す。寶蓋・幢幡の光明は晃曜たり。妙香花鬘・七寶の羅網は、その上に彌覆し、無盡の大寶は、自在に顯現す。是の諸の寶樹の花葉は、光茂す。佛の神力の故に、此の場地をして廣麗嚴淨ならしめ、光明普く照らし、一切の奇特、妙寶積聚し、無量の善根は、道場を嚴飾す。その菩提樹は高顯にして殊特なり。琉璃を幹と爲し、妙寶を枝條とし、寶葉垂布して、猶ほし重雲の若し、雜色の寶花は、互相に間錯し、大寶の[一]摩尼は、以て其の果と爲す。その光は遍く一切の佛刹を照らし、種種に現化して、佛事を施作し、普く大乘一字佛頂轉輪王呪菩薩道を現して、佛の神力を敎ゆるが故に、種種の梵音妙聲を演出して、如來無量の功德を讚揚し、無數の大菩薩と倶なりき。その名を金剛幢菩薩摩訶薩、觀世音菩薩摩訶薩等と曰ふ。無量の諸大菩薩を、皆な上首と爲し、一切の大衆會と與に、妙菩提樹下に於て、佛の神力を以て、周圍五百[二]踰繕那の會座となして而して坐し、相障礙せず。如來は中に於て、彌勒菩薩及び諸菩薩に諳げて言く、汝善男子、此の樹は乃ち是れ佛菩提をもつて、莊嚴する所の樹なり。我れ最初此の樹

【一】摩尼(maṇi)寶なり。

【二】踰繕那(yojana)又由旬とも云ふ。帝王一日の里程にして、四十里又は三十里なりと云ふ。支那の一里は我が六町に當る。

如來脚の眞言と印契とが明してある。

第四卷

五頂王修證悉地品第九

行者が調氣して呪を誦ずる時、後夜に至つて、空中に雷震の聲を聞き、若しくは本尊の像には三相が現はれる。その三相とは、一には華蓋が動き、二には畫像が大光明を放ち、三には像自ら動くことであるが、此の如きは悉地成就の前兆であると言はれて居る。

五頂王普通成就法護摩品第十

此の所に請喚・一切供養・請火天・發遣火天の諸呪と、一切頂王心呪・大摧碎頂王呪・摧惡鬼神呪・大難勝頂王呪とを明かし、又頂王の根本印・頂王請喚印・請喚火天印・頂王摧碎印・頂王咄嚕縿迦印・難勝奮怒王印などが示されてある。此の品に明す所の護摩とは、乳木を一肘の長さに截り、蘇蜜と相和し一呪一燒することを意味し、一般に知られて居る護摩とは稍ゝ異つて居る。

本經は釋迦牟尼佛が摩竭陀國菩提道場に於て、一字頂輪王の三昧に入て、諸魔を降伏する爲めに說かれたものである。隨つて本經の要旨は、有ゆる障難を排除して、善法を成就することに成つてある。經の中心尊格は、釋迦牟尼佛と成つてあるが、全體の組織から見て、其の釋迦牟尼佛は、一轉して直に大日如來と稱せられ得る素地が出來て居る。大日經・祕密漫荼品第十一には、毗盧遮那世尊が菩提道場に於て、十二句の法界を觀じて、四魔を降伏し、天魔の軍衆を破壞して、無邊智を生じ、一切法に於て自在を得玉へたる旨が明してある。此の點が本經と全く一致して居る。

次に本經の密印品第八に於ては、五十五の眞言と印契とが明してあるが、その都ては皆な釋尊を中心尊格とし、その三昧に入て得玉ひたる諸の境界相と、その肉身の各支分とが、眞言と印契とに依つて、觀證せられる組織と成つて居る。眞言密教の兩部大經である大日と經金剛頂經とは、大體に於て矢張かゝる組織である。而して其の異なる所は釋迦牟尼佛の代りに、毗盧遮那佛が中心尊格と成つて居るだけのことである。之れに依て見れば、菩提流支三藏が、支那に梵本を請來せらるる當時にありては、印度に於て密部藏經は、雜部密教から純密教に移らんとする轉向機であつたことを想像し得られるであらう。

昭和六年十月五日

譯者　神林隆淨識

謂ゆる五佛頂王とは、一字金輪佛頂・白傘蓋佛頂・超頂王・勝頂王・光聚頂王である。中に於て一字金輪佛頂は、其の勢力最も勝れ、他の頂王を制服する威力を具へて居る。若し人五佛頂王の呪を樺木皮に書し、之を身に佩帶すれば、諸の災殃を除き、諸天神は、此の人を見て敬仰讃歎し、天龍八部衆は、爲に摧伏せられて、諸呪を悉く成就することを得とあり。

一字頂輪王畫像法品第三

一字頂輪王の像を畫かうとする者は、先づ頂輪王の灌頂を受け、無勝王の壇に入りて、阿闍梨より印と眞言とを授かり、而して後に淨處に於て、本曼荼羅を畫くべきこと、並に繪具、畫像の樣式なぞまで、詳細に示されてある。

五頂王三摩地神變加持化像品第四

白傘蓋頂王・光聚頂王・超頂王・勝頂王の畫像樣式が明されてある。

第二卷

五頂王行相三昧耶品第五

五佛頂王呪を修行する行相を明し、護身の呪・取土の呪・洗浴の呪 被甲の呪・一切頂王の心呪を掲げ、又佛眼呪を誦すべきを諭し、其の他に身口を淨むる呪・數珠の呪・定想心の呪等が記されてある。

五頂王儀法祕密品第六

五頂王を修行する場所と、行者の食事と、結界と臥床法と、其の他增益法と息災法と降伏法との三種の修法に於て、修行法の異なれることが說かれてある。

五頂王成就法品第七

修法を成就せんと欲せば、必ず護身・結界・結印を爲す可きであり、若し之を行ぜざれば、人の精氣を奪ふ惡鬼の爲に、呪力を奪はれ、呪力の六分の五つまでも偷み去られることを誓め、又修法を始むべき日や、行者の食事に付き注意し、又釋尊を中尊とする曼荼羅の樣式を明し、次に釋尊が文殊菩薩に對して、頂王に關する修法に就て、種々の注意を與へて居られる。

第三卷

五頂王密印品第八

(1)心精進、(2)觀世音種族、(3)金剛種族、(4)輪王、(5)高頂王、(6)白傘蓋頂王、(7)光聚頂、(8)(超頂王は脫落)(9)勝頂王、(10)轉法輪、(11)如來雹摧煩惱、(12)如來心、(13)一切頂王使役、(14)如來錫杖、(15)如來鉢、(16)如來相好、(17)如來眼、(18)如來眉、(19)如來口、(20)難勝奮怒王、(21)如來槊、(22)如來臍、(23)如來甲、(24)如來髮、(25)如來耳、(26)如來牙、(27)如來授記、(28)如來髀、(29)如來嚬、(30)如來幢、(31)如來臥具、(32)如來乘、(33)如來頭、(34)如來肋、(35)如來見、(36)如來光焰、(37)如來光照、(88)如來脣、(39)如來舌、(40)如來臍、(41)如來金剛光焰、(42)如來小腹、(43)如來脊、(44)如來髀、(45)如來大慈、(46)如來無垢、(47)如來甘露、(48)如來大師子吼、(49)如來相字、(50)如來洛瑟弭吉祥、(51)如來般若波羅蜜、(52)如來大悲、(53)如來膝、(54)如來脚踝、(55)

ある。一字佛頂輪王經の娑は莎に、其の音が相通ずる所があるから、强ち同一文字でなくも認容し得るのであるが、莎訶と云ふに至つては、輾展傳者の過りであるか、兎に角、三藏の意を受けて居る音譯では無い。又一字佛頂輪王經の縒若しくは鞞の字は、三叉は、多よりは人好きのする字でないだけ、其所に改めらる可き餘地あることを示して居る。隨て兩經が同本異譯であるとすれば、前者が舊作であり、後者が新作であると見做さなくてはならなくなる。尙後者に於ては、三藏の主張して居られる莎嚩訶の三字が記されずに、莎訶とのみある所から、三藏の外に他人が手を入れたものであることが解る。尙又一字佛頂輪王經が三藏の譯されたものであるとしても、三藏は既に高齢に達して支那に來られたのであるから、其の譯經を一一點驗されたのではなからう。其の眞言呪文の句讀を切つてある所から考ふるに、梵語を解し得ない人の手に依つて爲されたものであることが直に解る。

次でに一言しなければならないことは、眞言の音譯が、此の當時尙不正確であつた許りでなく、脫字なぞも隨分有るやうに思はれ。正確の音を記錄し得ないことは勿論、本經に現はれてある眞言は同本異譯の經以外には、殆んど見出し難いものが多數であつて、參照し得るものとては、一字佛頂輪王經と菩提場所說一字頂輪王經との外には、予の知る限りに於て、何物をも見出し得無い所から、支那音譯をローマナイズ爲し得ないものが、尙ほ二三殘留してあることは吾人の甚だ遺憾とする。

又此の經が未再治本であることは、これ亦疑ひなき事實で、漢文直譯の中に於て括弧を附したるは、文字の不足を補ふて、意味を取るに便ならしめたものである。此の括弧の中の文字の如きも當然有る可き筈の字が除かれてあるのは、文意を强める爲めに故意に除いたのではなく、筆受の場合、若しくは起草の時に、不注意から脫落したもので、脫稿後に校訂しなかつた事を證明して居る。又時には全く意味の取れない計りでなく、而も不用とまで思はるる文字が挿入されてあるやうに見えるが、而も尙其の旨を脚註に記したのは、讀者の叱正を請ふ考である。兎に角、本經が古來學者に依つて餘り注意されて無いことだけは事實である。

次に本經の内容を述ぶれば

第一卷

序品第一

釋迦牟尼佛が、摩竭陀國菩提樹下の金剛道場に於て、觀世音菩薩・彌勒菩薩・金剛密迹首菩薩等に對して、一字轉輪王呪の最勝三摩地を念ずべきを諭して居られる。

五佛頂王陀羅尼入三摩地加持顯德品第二

五佛頂三昧陀羅尼經解題

本經と同本異譯とも見做し得べきものが他に二本ある。其一は矢張菩提流支三藏譯の一字佛頂輪王經五卷であり、其の二は不空三藏譯の菩提場所說一字頂輪王經五卷である。此の二本はその內容が唯一品を除くの外は、殆んど一致して居る。三經の內容關係を擧ぐれば左表の通りである。(正藏一九)

一字佛頂輪王經(菩提流支譯)

第一卷
序品第一(二二四頁)
畫像法品第二(二二九)
第二卷
分別成法品第三(二三三)
分別密儀品第四(二三三)
分別祕相品第五(二三五)
成像法品第六(二三七)
第三卷
印成就品第七(二三九)
第四卷
大法壇品第八(二四六)
供養成就品第九(二五三)
第五卷
世成就品第十(二五六)
護法品第十一(二六〇)
證學法品第十二(二六一)
護摩壇品第十三(二六一)

菩提場所說一字頂輪王經(不空譯)

第一卷
序品第一(一九三頁)
示現眞言大威德品第二(一九四)
第二卷
畫像儀軌品第三(一九八)
行品第四(二〇〇)
儀軌品第五(二〇一)
分別祕密相品第六(二〇三)
第三卷
末法成就品第七(二〇五)
密印品第八(二〇九)
第四卷
諸成就法品第九(二一四)
世成就品第十(二一七)
第五卷
無能勝加持品第十一(二二〇)
證學法品第十二(二二一)
護摩品第十三(二二二)

五佛頂三昧陀羅尼經(菩提流支譯)

第一卷
序品第一(二六三頁)
加持顯德品第二(二六四)
第二卷
畫像法品第三(二六六)
化像品第四(二六八)
三昧耶品第五(二六九)
祕密品第六(二七一)
第三卷
成就法品第七(二七三)
第四卷
密印品第八(二七四)
悉地品第九(二八〇)
護摩品第十(二八二)

此の表から考ふるに本經は菩提流支譯の一字佛頂輪王經の第八、第十一、第十二、第十三の四品を除き、更に加持顯德品第二の一品を加へたものと見做すべきである。

次に一字佛頂輪王經は、同じく菩提流支譯でも、本經と多少相違して居る點がある所から考ふるに、本經は後人に依つて、多少修正を加へられ、一字佛頂輪王經の方は、後人の手が加はつて居ない樣にも思はれる。後人が修正したか否やは、眞言呪文を一見すれば直に解る。一字佛頂輪王經には、娜莫三曼多勃馱南、並に窣嚩訶とあるのに、五佛頂三昧陀羅尼經には、娜莫糝曼彈勃馱南、並に莎訶と改められてある。贊寧の宋高僧傳第三に依れば、眞言陀羅尼の末句を、古來から薩婆訶若しくは馺嚩訶なぞと言つて、眞の梵音を寫して居らない所から、菩提流支三藏が莎嚩訶と訂正されたと云ふことで

の時に十方の菩薩は、佛の光明の閻浮提に遍きを見、各ゝ心藏に於て偈を以て佛を歎す。
善哉、この光明は、これ佛心中の力なり。魔王は覩見すと雖、散滅して形身(を現はすこと)無し。善哉、この光明は、これ佛の無礙力なり。魔王自ら殄滅し、十方の菩薩來らん。善哉、この光明は、これ佛の隨心の力なり。其の力は、菩薩に及び次に凡夫身に及ばん。婆馺・婆樓那、及び鬼子母神、諸天・夜叉衆、同時に來りて供養し、一切の金剛衆、及與自在天、香積諸梵王、皆悉く來りて歸依せん。一切の諸の星宿、風火電嬡神。四天龍藏等、花を持ち來りて供養す。四維上下界、虚空及び水際、十方に横流し、皆な心中心を歎ず。如來の心中心は、劫を盡して說くも盡きず。假使百千海も、一毫にも等しからず。假使千世界なりとも、七毛端に及ばず。[162]薩婆若を滿足するも、佛心の際に及ばず。我等廣く願を修して、已に無量劫を經、所有の諸の如來は、未だ心中心を悟らず。如來の心中心は、唯佛乃し能く了し、菩薩は讃嘆す雖、一毛の光にも及ばず。十方に化事を現ずるは、皆是れ心中心なり。乃し[163]有頂に至るまで、亦是れ隨心の生なり。諸佛は隨心を說き、我亦隨心を學す。我既に修學し已り、願くば佛之を存記せよ。若し隨心成を得れば、俱時に正覺を成せん。

その時、大衆は佛の所說を聞き、一一合掌して、佛の心中心を持せり。如來は見て卽ち金色の臂を舒べ、普く印頂を爲りて、菩薩の記を授く。その時、大衆は佛の授記を得、歡喜奉修し、佛を禮して去れり。

佛說心中經卷下(畢)

【一六二】薩婆若(sarvajña)。一切智。

【一六三】有頂。色界頂阿迦尼吒天なり。

驅策迅速にして、求むる所、滯無からん。復一法有り、若し病疫有りて、劫起流行すれば、七味の毒藥を取れ。謂ゆる烏頭附子・狼毒芭豆・虎珀光明沙・龍腦・香肉・豆蔻・貪來を呪すること一千遍、水を以て之を漬け、水を取りて病者の身に灑げば、病として除かざるは無きなり。若し卒跛有らば、刀を呪すること一千遍し、將に患處を指すべし。時に應じて舒展し、永劫加はらず、報を盡すまで無病ならん。

佛は阿難に告ぐ、若し我れ此の法要を說かば、劫を窮むるも盡きず、諸有る求むる所の者は、我が上法に依て、之を求むれば、果遂せざる無きなり。諸有の所作、一切の事業は、大小を問ふこと無く、盡く皆成就し、滿足して缺くること無けん。若し能く常に持して、直に菩提に至らば、不退轉を得ん。若し能く日日に、此の法を作す者、此の心を持する者は、能く世間の與に、[160]大樹王と作らん。諸の衆生を陰ふて、諸苦を離るることを得、能く一切をして、皆な佛心を得せしむ。一切衆生、不退を得る者は、皆猶ほ此の人の如く、持誦の威力あらん。

その時、如來は呪法及び功能を說き已り、一切の菩薩、及び諸の金剛天仙の身光は悉く現せず。惟佛(の光)のみ有りて閻浮提に遍ねかりき。

十七、讚　佛

その時、諸天は虛空の中に住して、自然に廻轉し、一切の魔宮傾覆し、須臾の間に、散滅して餘無く、乃至大地[161]六反震動す。其の時に、十方世界の所有の菩薩は、諸の花幢を持して、釋迦牟尼佛を供養す。その諸花中、所有の音聲は皆な佛の心中の事を說く、諸佛心中應に現はれんとするや、心に隨て用ふる所、不可思議なり。持する所の花香は、皆な不可說なり。亦不可說の音聲を現はし、說く所の神力皆亦不可說なり。其の諸の菩薩は、佛の心中心の力を以て、不可說の變現を示す。そ

【一六〇】大樹王。大覆護者となること。

【一六一】六反、四方上下なり。

中に置けば、卽ち白龍は掘より出でて、時に應じて雨下る。若し雨多き時は、金色の赤土を取り、紙上に於て、一龍を畫作し、呪すること、一千八十遍して、著井の中に放てば、卽ち赤龍有りて、天に騰り、時に應じて卽ち（雨）止まん。復一法あり、穀麥一切の苗稼、滋茂せざれば、蘇一斤を呪することと一千遍し、風に隨て燒けば、一切皆悉く潤ひ、時に隨て成就せん。復一時あり、若し世間に疾病流行すれば、赤紙の上に於て、彗星の形を畫き取り、呪すること一千八十遍すれば、其の病卽ち除かれん。その星形は六箇の小星あり、合して一星と成り、木揭の形の如し。復一法有り、若し國家に刀兵あり、四邊を嬈亂して寧からざれば、一鑌刀子を取りて呪すること一千遍すれば、方に隨ひ指す所に、卽ち神兵を現ぜん。無量億世界の所有の外難は、自然に退散せん。復一法あり、若し一切の伎藝・文筆・工巧・內經・外典、盡世の幻術、及び佛・菩薩・金剛所行處の所緣の境界を習はんとすれば、每日晨時に千遍を持し、一百日を經れば知り盡さざるなし。復一法あり、若し海龍王寶、諸佛如來の付する所の龍藏要記を得んと欲すれば、但し五種の香を燒け、謂ゆる檀・沈・薰陸及び龍腦[一五八]畢力迦等なり。夜靜なる時に於て、呪誦し、面を四方に向け、各〻一千八十遍を誦すれば、其の時卽ち四方に龍王あり、主藏する所の物を、卽ち自ら奉送せん。復一法有り、若し地藏の中の寶を須ひんとすれば、但言へ、我れ此の寶を要して、是の如くの功德を修營す。と、足を以て地を踏み、呪を誦すること一千遍す。其の時、十方の地神、世の諸物を發し、來りて行人に送り、其の所用に供せん。若し名利の爲に惡用すれば、卽ち果遂せず。復一法有り、若し一切の人に相憎まるる者は、五木花を取りて呪すこと一百八遍し、その佛の字を書して、各〻一本に付す。卽ち自ら和敬して永く相憎まれず。復一法あり、若し人先づ一切法を持して、功効無ければ、但し自身著する所の上蓋衣を取り、呪すること千遍して、佛と與に敷坐し、其の七日を滿じ、卽ち取りて、將に著せよ。或は復行に持し、法要に持すれば、卽ち効驗有り、一切の菩薩、及び[一五九]金剛藏、自然に臣伏せん。

【一五七】鑌。はがね。

【一五八】畢力迦（Pṛkhā）。目宿香又觸香と云ふ。

【一五九】金剛藏。護法神なり。

垢消除して、障難並に盡く。若し上の毘那夜迦ありて、降伏せしめんと欲すれば、聲に應じて降伏すべし。(降)伏せざれば、右脚の大母指を以て、地を按し、呪を誦すること百八遍せよ、其の時、毘那夜迦は、七孔より血を流して、自然に降伏せん。十方世界、所有の通虛、及び持呪仙、及び[一五四]吠陀、及び八龍藏界の所有の祕法、一切の諸有情類は、心に應じて呼召して、順伏せざるなし。唯惡法の[一五五]此(等)の中に入らざるを除く。若し求むる所の諸の天菩を供養せんと欲する者は、面を仰いで天を看、呪を誦すること一百八遍せよ、其の香即ち下らん。若し十方の佛刹・菩薩の境界に往かんと欲せば、但中指を以て、天を指し[一五六]摩醯首羅を呼べば、相隨はん。天處には入らず。臨命終時には、十方の諸佛は頂に臨み、自ら迎へて己れの世界に將えん。現身に不死を求め、必ず佛世界に(至らんと)欲せば、但し誦すること十億遍に至れば即ち得、必ず此の天地、更に顏を改めずして、不至の心を除かん。若し至心ありて此れに應ぜざれば、我は即ち妄語し、所有の經教は、並に是れ魔の說にして、佛之を說き玉ふに非ざるなり。

復一法有り、錢財を求めんと欲する者は、一熟錢を取りて、字を開き、中節に當て、密に呪すること一百八遍し、即ち指を展べて、彼の人心を指せ、其の人開意して、意の多少に任じ、口に道へば即ち隨はん。若し臣・公主・妃后・諸宰貴者を召呼せんと欲せば、但し美香一顆を取りて、彼の人名を抄し、內に頭指を下して、呪すること一千八十遍すれば、即ち自ら奔り來らん。若し穀麥を須いんとし、須ゆる所の者、三顆を取り、復中指の下に安じ、前の作法に依れば、即ち心に稱ふを得ん。若し一切をして歡喜せしめんと欲せば、中指を屈して口に入れ、呪すること百八遍し、指を將て、前人を指せば、隨順して逆はらず、悉く皆歡喜せん。復一法あり、諸龍を召さんと欲せば、但し井水を取り、呪經を挩すること一千遍せよ。寫著は龍水中に有り、其龍自ら來りて、伏敬して事に從はん。復一法有り、若し天雨なければ、龍腦及び井水一挩を取り、呪すること一千遍して、日

【一五四】吠陀(Veda)。婆羅門教の聖典。
【一五五】此等の中。持呪仙等を指す、此等が惡法に入らざれば、降伏の要を見ずとの意なり。
【一五六】摩醯首羅(Maheśvara)。大自在天。

阿難は佛に問ふて言く、世尊、それ衆生有りて、苦を脱せんことを求めんと欲し、魔を降さんことを求めんと欲し、攝持せんことを求めんと欲して、有餘の法の爲に、心中心を用ゆるを爲すべきや。若し此の心中心を用ふるに、未だ法則を見ざるものありや。

佛は阿難に告ぐ、汝法を知らんと欲せば、善く聽け、復當に汝の爲に、更に隨心陀羅尼を說くべし。卽ち呪を說て曰く

[一五一] 唵摩尼達哩吽泮吒

又一本に　嗚呼摩紐馱唎虎吽泮吒、嘲音

又一本に　唵摩紐達哩吽泮吒

若し受持者あらば、須らく日を擇ばざれ。星宿・日月を擇ばざれ、齊と不齊とを問はざれ。如來の前に於て、或は像前に於て、或は淨室或は舍利塔の前に於て、心に隨て持する所の香花をもつて、心を盡して供養し、[一五二]白月の十五日に於て、洗浴し清淨にして、新淨衣を著し、力に隨て所辦供養し、護法の爲めの故に、[一五三]三種の白食を須ひ、一方壇を作り、心に隨て之を作り、幡燈は力に隨て辦じ、心中心及び隨心呪を誦じ、各〻一千八十遍し、像の足下に於て、便ち睡眠を取れ、晨朝時に於て、如來卽ち方に身を現ぜん。及び聖者金剛も、亦爲に身を現ぜん。十方の菩薩、諸天卽ち來りて圍繞し、一切の行願、皆悉く滿足せん。若し身自ら犯觸及び諸罪有るを知らば、誦すること萬遍に至れ、自ら佛の清淨光明の身を現ずることを得ん。乃し一切の諸法に至るまで、但し百萬遍を誦し盡すを知れ。別持の法有ること無し。若し一切の難伏怖畏の像ありて、能く人を怖らす者あらば、但し右手の中指を以て、掌中に屈入し、大指を以て、中指の節上を押へ、陰に隨心呪を誦ぜよ。百遍を過ぎずして、自然に降伏せん。毒害と火災とは、氣を以て之を吹けば、自然に除滅せん。難滅を能く滅し、難除を能く除く。若し一切の障難の事あらば、但し二手を以て合掌し、頭指と無名指とを以て、掌中に相鉤し、小指・大指・中指に掌中に相著け、面を合して四方に向ひ、各一百八遍を誦ぜよ。罪

【一五一】Oṁ maṇi-dhari hūṃ phaṭ

【一五二】白月。陰曆の一日より十五日までを云ふ。月光明相に向ふが故に、爾か名く。之れに對して黑月あり、同曆の十六日より三十日までを云ふ。

【一五三】三種の白食。單に三白食とも稱す。牛乳・牛酪・白米なり。

は一四九六十二見に於て、愛憎の想無きを信ずる。九には佛は一五〇五濁世に於て、常に衆生を度するを信ずる。無礙心は邊際あること無きを說く。十には佛・菩薩及び金剛は、常に神力を現じて、能く衆生を化して。一一に佛と成るを信ずる。若し是の如き者をば、第十心と名く。第十一心とは、諸法の中の一切の言論義辯に於て、愼んで自讃する勿れ。己れの善を讃せず、豪貴に近かず、衆善を捨てず、深く菩薩を觀じて、目前に在るが如くすれば、一切の怖懼は漸く自ら降らん。意を攝すれば、佛菩薩は自然に(怖懼を)除盡せん。是を第十一心と名く。第十二心は、深く自身を觀じ、若し少の慢をも有らば、自ら當に加持すべし。若し怠惰あらば、自ら當に身を捨つべし。若し麁横あらば、豪貴の友をも捨てよ。若し(省て)多慢あらば、自ら須らく調伏すべし。若し多諂有らば、利刀の境を觀ぜよ。若し多貪有らば、火を執て而も居るなり。若し多欲有らば、當に臭肉を觀ずべし。若し汚穢を行ぜば、先づ牢獄を觀ぜよ。若し能く是の如き者は、是れ佛の心中心の法を決定するなり。佛心なること、更に疑ひ無きたり。是を第十二心と名く。

その時、阿難、佛に白して言く、世尊、佛心中心の如きは、直に是れ佛の境界なりや、衆生の境界にも及ぶや、若し衆生の境界有りて、此の十二心に同じければ、此の心は衆生の行處に非ず。若し衆生行に、如上の事を得れば、卽ち疑あることなし。云何んが衆生能く此の心を行ずるや。と

佛、阿難に告ぐ、但し自ら之を持せよ、十方(諸佛)の冥證にして、汝の測る所に非ず。汝若し測ることを得れば、何ぞ佛心中心と名けんや。と

その時、阿難、復佛に白して言く、世尊、是の如くの法契、言は虛妄ならず。今問はんとする所を、佛は當に許し玉はんと欲するや不。

佛の言く、汝は何をか問はんと欲するや。汝の言はんとする所に任せん。と

十六、隨心陀羅尼の作法並に諸功方

後に乃し方に其の人に施し、常に餓鬼王と與に野に居り、此の人をして常に厭足なからしめ、厭足無きが故に、一切の法力倶に失す。卽ち[144]檀波羅蜜を以て攝入し、號して大施主王と爲す。此の攝に從ひ已りて、貪心亦盡く。第六の毘那夜迦を名けて、詐僞と爲す。其の人來る時、純に非法を辨じ、正智を得ず。多く過患を見て、妄に法相を生ず。利無きに利を求め、廣く異說を行じ、衆導の首と爲し、正法の中に於て、謗法の心を起す。卽ち[145]般若波羅蜜を以て攝せらる、號して智慧藏王と爲す。復毘那夜迦有り、名けて斷修と爲す。此の人來る時、一切の念心、倶時に都て盡き、[146]惛惛として重睡し、復衆病を生じ、外魔を發動し、爲に內障を作して、人をして怖懼せしめ、多く妄見を起し、異法の想を念ず。是の如くの諸想は、卽ち無畏を以て攝せらる。但し大悲を行じて、願て眷屬と爲せ。其の人卽ち自ら臣伏し、臣伏を得已て、物として呵責するにあらず。是れを第六心と爲すなり。七には七菩提分に於て、我常に懃求し、修する所の功德は、常に一切に施し、一切衆生の苦を攝し、我が身受を待て、一切をして見聞覺知せしめ、一切衆生をして、魔境を去離せしむ、是を第七心と名く。八は八聖道中に於て、常に厭足なく、常に十信を生じ、十善行を存し、非人の過を說かず、自ら讚せず、他を毀らず、施を想ふことなく、報を望まず、常に施を行じ、誓て法を持して疲厭無く、願行の如く行じ、本心を失はず、是を第八心と名く。九心は衆を欺かず、法を嫌はず、我慢せず、增上せず、執着せず、他を誑らかさず、常に質直を行じ、修する所の行願は、一一記持し、佛及び僧寶には、接足承事し、禮する所の尊像を輕慢せず、一一の如法を禮す。是を第九心と名く。十には須らく十信具足を存すべし。一には佛は常住にして、世に在り、大神通有るを知る。二には法は深遠にして大方便力を具し、決定力有るを信ず。三には佛の慈愍は、廣く法要を施し、衆苦を拔濟することを信ず。五には佛は[147]五垢の中に於て、常に慈光を現ずるを知る。六には佛は[148]六賊の中に於て、父母の如くなるを信ずる。七には佛は七孔に於て、常に佛音を出すを信ずる。八には佛

【一四四】檀。梵には檀那(dāna)布施と譯す。

【一四五】般若(prajñā)。智慧。

【一四六】惛惛。心の暗き意。

【一四七】五垢。五塵(色・聲等)の境を指す。

【一四八】六賊。六塵なり。眼等の六根を媒介として功德の法財を劫掠するが故に、賊と云ふ。

【一四九】六十二見。外道の邪見に六十二派あり、1色は常なり、2色は無常なり等。

【一五〇】五濁。四相の中にて住劫中、人壽二萬歲已後に於て、五種の不淨法現はる。
1劫濁、見等の四濁起る
2見濁、身見等の見惑
3煩惱濁、貪瞋等の修惑
4衆生濁、果報衰へること
5命濁、壽命短縮、
此等は劫濁時に盛んに起る。

第三心と名く。四には佛念處に於て、成佛の想を作す。我れ當に住持して、常に放捨せざるべし。毘沙門王の掌の[一三四]舍利塔の如し。十金剛藏が共に一金剛珠を持するが如く、十世界の[一三五]跋折羅神が、共に一跋折羅杵を持するが如く。十世界に一日光を觀るが如く、亦十方の衆生は、一世界に同なるが如く、これを第四と名く。五には能く諸佛の一一の言句辯論、一一の說法、一一の法樹、一一の印契、一一の神通、及び大小の力用に於て、已身は法に於て堪え(ず)と歎じ、下劣の想を作し、一一の思惟・睡眠に入らず、決定して心を生じ、大千界の是信と非信との爲に、但し損する所無し。是を第五心と名く。若し能く是の如き者は、即ち五眼清淨なるを得て、明に世界を見る。六には六度の中に於て、諸心を攝し、慈定門に入りて、[一三六]毘那夜迦を攝して、[一三七]六種の善知識と爲す。第一の毘那夜迦を名て無喜と爲す。此の人來る時、人の心中をして喜怒定かならず。多く(人をして)殺法を行ぜしむ。師は即ち[一三八]羼提波羅蜜を以て、慈忍定に攝入して、慈忍王と作す。第二の毘那夜迦を名けて幻惑と爲す。此の人來る時に、心動亂せられ、人をして定かならず。衆法の中に於て、亦印受せざらしむ。動亂の時に於て、即ち[一三九]禪波羅蜜を以て、攝入し、號して不動智と爲す。第三の毘那夜迦を名けて妄說と爲す。此の人來る時に喜多く、綺言の中に於て、決定の心を生じ、誑語の中に於て、直信を生じ、清淨の中に於て、貪欲の心を生じ、[一四〇]染汚の心を生じ、人を顚倒ならしむ。即ち[一四一](尸)羅波羅蜜を以て攝入し、號して善巧方便の主と爲し、即ち此の人をして、能く爲す所無からしむ。第四の毘那夜迦を名けて執縛と爲す。此の人來る時は、即ち行者をして、翻て魔王を禮せしむ。それ此の毘那夜迦は、常に一切の魔王と共に、伴侶と爲る。所以に魔の大身を現じて、歸依せしめ、信心を攝入して、惑亂を轉動せしむ。既に覺知し已らば、即ち[一四二]毘梨耶波羅蜜を以て攝し、號して名けて大方便王と爲すなり。第五の毘那夜迦を名けて可意と爲す。此の人來る時、人をして悕望の心を成就せしめ、専ら[一四三]劫剝を行じて、廣く財物を求め、將に麁用を爲さんとす。先づ財心を以て

【一三四】舍利塔。舍利具には舍利羅(sarira)遺骨の意、塔は塔婆(stūpa)の略。舍利を安置せる塔を云ふ。
【一三五】跋折羅(Vajra)神。執金剛神を指す。
【一三六】毘那夜迦(Vinayaka)。常隨魔、又障碍神とも稱す。
【一三七】六種善知識。六度を修する菩薩を指す。
【一三八】羼提(kṣānti)。譯して忍辱と云ふ。六度の一なり。
【一三九】禪。具には禪那(dhyāna)靜慮若しくは思惟修と云ふ。
【一四〇】染汚。煩惱を指す。煩惱は眞性を染汚するが故に、爾か云ふ。
【一四一】尸羅(śīla)。清冷と云ひ、戒を指す。
【一四二】毘梨耶(virya)。精進と譯す。
【一四三】劫剝。はぎとる意。

なり。佛の思惟處なり。佛の覺悟處なり。佛の行道處なり。佛の決定處なり。阿難、一切の菩薩・金剛・諸天、下は凡夫・諸餘の神鬼・夜叉・羅刹・星宿・諸天・幻術・魔王、是の如く等は、能く我が心（中心呪）を行じて、卽ち我が通を得、若し我が此の心（中心呪）の法を行ぜずして、我が通を貪らんことを欲するも、是の處り有ることとなし。と

阿難、佛に白して言く、世尊、如來の心（呪）は、十地の菩薩なりとも、由ほ知る能はず。縱ひ知る者ありとも、佛の位に進んで、然して（後に）始て之を知る。今衆生は修せんと欲するも、皆是れ下賤にして、而も心（呪）を了せず、相貌を決せんことを願ふ。

佛は阿難に告ぐ、我れ汝の與に、心中心（呪）の相貌は、一切衆生に離れざるを說かん。

十五、十二種の心

十二種の心（呪）あり、是れ佛の心中心（呪）の事なり。何者か是れなりや。一には自身の相、苦なるも而も苦を辭せず、自心處苦にして、而も一切衆生、受苦の時、念念に稱說す。大悲愍より決定心を生じ、自身に苦を見ざれば、法に於て所得なし。能く衆生の苦を見、救護するに命を以てす。徹到して出離を得る者、是を第一心と名く。二には一切の苦を觀て、現前の如く想ふて而も動轉せず、一切の苦を觀じて、不定想を作す。自身に苦あれば、三昧想に入る。諸の惱亂來りて相及ぶ者有らば、[三二]四禪想に入るを作せ。一切の怨家來らば、父母の想を作せ。諸の苦を救はんと欲すれば、此の苦人を觀ぜよ。孝順の子の父母に向ふが如く想へ、是を第二心と名く。三は自心の事を將て、他心の行に同ぜよ。他心の事を將て、自心の行に同ぜよ。乃至一切の身分は、己身の分と等しく、一切の所欲は、己の所欲と等し。一切の邪心は、正相と等しく、世間一切の法寶は、重きこと己れの命と等し。世間の[三三]三光は己れの眼の光と等し、乃至所有の食飲・妙藥は身の病等を差す。是を

【三二】四禪想。色界の四禪定なり。

【三三】三光。日月星。

毒龍と皆自ら伏し、自然に慈を生じて覺知せず、善哉、無畏神通王、語を出せば大千(世界)皆な震動し、動て以て自然に來りて歸伏す。伏して以て其の心は覺知せず。　善哉、無量の慈悲心、能く慈悲を以て諸趣に[一三〇]流れ、　一切に慈を得て佛法を修し、　修する所の慈は覺知せず。　善哉、無量の善藏王、廣く善財を付して、衆生に與へ、持する所の善は善定を得、持善の人は覺知せず。　善哉、無量の(東方)寶幢王、此の幢光を持て世界を陰ひ、衆生は光を蒙つて、苦縛を脱し、苦を離るゝことを得る者は覺知せず。　善哉、無量の大法樹、能く大千の與に陰涼を作す、所有は陰に住して熱惱を離れ、　離惱を得る者は覺知せず。　善哉、無量の大法鏡、一切の黑冥暗を破し、心中を明にするを得て、智慧を出し、智慧を具する者は、覺知せず。　善哉、如來は一音聲、　聞持する所の者は一味を得、是の如くの一味は、衆生に遍し、爾乃ち名て大慈悲と爲す。　我れ今下愚にして凡夫智、若し佛を歎ぜんと欲すれば、窮盡するなし具に微心を以て少しく歎ずるのみ。　願くは佛慈悲して、之を納受し玉へ。

その時、阿難、偈を以て佛を歎じ、佛に白して言く、世尊、我今愚賤にして、佛を歎ずと雖、佛の神德の故に、我れ宣する能はず。世尊、是の如くの因縁、是の如くの神力、是の如くの自在、是の如くの決定を、我れ未だ聞見せず。　如來は何に因てか、今乃ち說き玉ふや。如來は久しく衆生の根性、(智の)淺深、皆な等しからざるを知り玉へり。何の故に、昔時此の智は普く衆生に及べるを說かずして、而も(今此の智の)來往することありや。と

十四、佛は心中心呪を讃歎す

佛は阿難に告ぐ、我が此の[一三一]心中心(呪)は、常に我が前にあり。我れ未だ出世せざるに、此の心(呪)は出世し、我れ未だ生を受けざるに、此の心(呪)は生を受く。我れ未だ定を得ざるに、此の心(呪)に先づ定にあり。是の如く定・慧・力は、是れ佛の住處なり。是れ佛の行處なり。是れ佛の定處

【一三〇】流れ。六道に死生を重ぬる意。

【一三一】心中心。呪の名。

智なり。　凡夫も聖行に及べば、　發念は菩提に等しく、　一切果位中は、　皆[125]是れ佛心の力なり。

佛、阿難に告ぐ、我が此の句偈は、虛空花の如く、佛の神力を以てすれば、卽便ち虛空の中に住して、菩薩の蓋と成る。それ此の蓋下に復百億殑伽沙・[126]那庾多・不可說不可說の世界の無邊量の化佛あり。復是の如くの不可說量の法身佛あり。復不可說量の報身佛あり。一一の眷屬は、皆是れ菩薩唱導の首なり。復不可說量の菩薩ありて、一一の菩薩に、復無量の眷屬あり、皆是れ人中唱導の師なり。皆是れ三地・四地及び八地等、而も共に圍繞す。是の如く等の佛及び菩薩・聲聞・緣覺・四果の聖人、一切の諸天仙・無量世界の　[127]四天王、梵王・帝釋及び阿修羅、及び一切羅刹・夜叉・鬼神衆・一切の大威德者・大神通者・大護念者・大慈悲者・大自在者・皆共に此の蓋を圍繞す。持心不退にして佛の心中心法を受けたり。

その時に卽ち大不可說・不可說數の地神あり。各々一千葉の蓮華を持して、此の如上持呪人の足を承け、十方に遊騰して、光明の身を現ず。その光は皆な紫磨黃金の色を現はし、一一の衆生、此の光を見る者、卽ち[128]有流を斷じ佛定に入りて、卽ち大千世界に起す所の因緣所作の事業を見ることを得、皆悉く明了にして果を獲ざるなし。

十三、阿難、佛を讚歎す

その時、阿難は、偈を以て佛を歎ず。

善哉、我が師、釋迦文、一音遍く大千界を了し、　一微音を以て度脫し了り、衆生の身分を覺知せず。善哉、如來に自在の光あり、[129]是臭と非臭とを皆な照觸し、自心に甘露の水を涌出して灌洗して淨を得て覺知せず。　善哉、無畏自在の心、能く無畏を以て諸處を怖れしめ、野象と

には波羅蜜多(pāramitā)、譯して到彼岸と云ふ。目的の彼方に到達する義、意譯して單に度と云ふ。六度とは布施・持戒・忍辱等にして十地の位の菩薩の行ずる德目なり。

【一二五】是語。善言なり。

【一二六】那庾多(nayuta)。十萬なり。

【一二七】四天王。忉利天の主、帝釋天王の外將なり。須彌山の中腹に由揵陀羅と稱する山ありて、須彌山を圍む。此の山に四峯あり、四天王は各々、其の一峯に眷屬と倶に住す。
東方持國天(Dhṛtarāṣṭra)
南方增長天(Virūḍhaka)
西方廣目天(Virūpākṣa)
北方多聞天(Vaiśravaṇa)

【一二八】有流。三界の果報を有と稱し、流とは惑を意味す。流に四種あり、見流・欲流・有流・無明流なり。三果の果報たる有漏の身に對して迷着するを有流と云ふ。

【一二九】是臭。好香なり。

敎は、皆是れ佛の心智、念念に果報を得るは、皆亦是の生に由る。一一の諸如來の說量は、窮盡なく、一一の佛の神力に、復無量の方あり、一一の方面中に、復無量の佛あり。一一の佛の神足は、皆佛心より起り、一一の佛心の中に、[一二六]心中心を攝入す。此の如くの心中心の說は、佛の不可說なり。一一の不可說は、これ亦是れに由て生ず。世間・非世間　出世・非出世　善巧の諸方便、言說の諸記論、祕密陀羅尼、他心自在定、過去現在智、未來に成果を得。斯れ亦是の生に由る。[一二七]魔王・轉輪王・梵天・自在等、一切諸有の力は、佛心より轉ずる所なり。邪術と正印と、見聞にて卽ち辨了す。是の如くの聖心の力は、廣く衆の境界に達するも。斯れ亦[一二八]是の生に由る。如來印の衆道は、降魔にして[一二九]非人を度す。神變及び自在の（視）は諸の[一三〇]非境に入る衆の爲に苦縛を斷じ　諸の世界を震動し　（慈眼の）視は[一三一]一縁中に入り、大慈は十方に滿つ、これ亦是の生に由る。一切衆生の類は、諸の福業等を種ゆ、成熟と不成熟とを、他心自在智にて、所生の地を決了し、一一十方に遍く、一切の諸の衆生は、音を聞て皆佛を信ず、是れ廣長舌相なり、これ亦是の生に由る。十方の諸國土、天上及び下方、乃し萬の刹土に至るまで、一一の刹土中、皆な萬の世界あり、衆生は量る可らず。音を聞て皆な佛を信ず、是の如くの舌相等、これ亦是の生に由る。[一三二]光音・遍淨天、或は及び非世界、有形と無形等とに、倶に能く佛性を含み、有流と及び無流と、虛空影響の類とは、形中と天中とに隨す。佛に承けて卽ち歸念し、不信と及び[一三三]闡提と、この法を斷ぜざる等、倶に因緣を得る者、是の如くの諸の衆生は、（佛の）光を承けて、世を離るゝことを得、これ亦是の生に由る。下愚・凡夫等も、能く佛心呪を持すれば、卽ち佛の心地に同じく、[一三四]六波羅蜜を具して、當に大神通を獲べし。遍く諸の佛界を照し、卽ち六神通を具し、說く所は諸佛の如く、足を擧げ及び足を下す、皆大神變を得、是語及び非語、皆悉く一音同なり。縱ひ是佛非佛なるも、說く所は、佛の正

【一二六】心中心。呪の名。

【一二七】魔王。欲界第六天の他化自在天王にして、これ天魔王たり。

【一二八】是生。現在世なり。

【一二九】非人。惡人の意。

【一三〇】非境。邪惡の境界を指す。

【一三一】一緣。一個の具縛の衆生を意味す。

【一三二】光音。色界第二禪天の終天にして、一名極光淨天とも云ふ。成劫の初めに、人類の大祖は、此の天より下降す。

【一三三】闡提。具には一闡提（Icchāntika）無佛性と譯す。佛敎を信ぜず、隨て佛陀となる素因なき義なり。

【一三四】六波羅蜜。波羅蜜は具

時に出現し、大地は傾覆し、一切の山河大海、[一一]目眞隣陀山、[一二]鐵圍山、大鐵圍山及び十寶山、一時に傾覆し、龍藏浩沸し、天地變滅し、星宿墮落し、衆生都て盡るも、此の人は滅沒破壞を畏れず。一切の諸惡も、能く其の便を得ること有ること無し。何を以ての故に、佛目護るが故に、佛衣の下に於て、自ら藏隱するが故に、菩薩の蓋中に自ら身を安ずるが故に、一切の金剛は、佛の勅する所を得て、此の人を衞るが故に。一切の所有、自ら(此の人を)恭敬するが故に。若し常に持する者は、當に知るべし、此の人は必ず佛身を得ること、錯謬せざるが故に。阿難、若し衆生我が此の法を持して、佛を得ざる者有れば、我れ卽ち位を退して、[一三]阿鼻獄に入り、更に壽生無からん。と、佛は一切衆生に誓へり。と(佛の誓言を疑ひたる)阿難の身は、遍體血流るゝに及び、大地壞裂し、日月現はれず、星宿隱沒す。

十二、除疑偈

その時、阿難に疑心有るが爲めの故に、是の如き事を現ず。その時、阿難は唯身と及び心とを守る所を知らず。その時、如來は阿難の心悔を見、卽ち阿難の爲に除疑偈を說く。

諸佛の境界中は、[一四]小根の及ばざる所なり。久遠の諸佛の語を、　菩薩は知る能はず、　諸佛神通の中、　この境は　[一五]見非の境なり。久遠の諸如來は、我が此の一心に同じ。此の心は諸心に非ず。　此の心は卽ち是れ佛なり。若し此の心事を行ずれば、世間を離れざるなし。過去の諸佛の心、未來及び現在中、乃し菩薩等　諸天身に及ぶまで、下愚の凡夫の類、能く我が此の心を持し、　速に無生忍を證し、更に世間に住せず、　菩薩・聲聞衆　及び餘の四果等、上は諸佛に及ぶまで、これに由て生ぜざるはなく、　持戒にして圓滿なるを得、　信施にして報を得るあり。存念常に不退にして、在在所生の處、常に喜んで逢迎せらるゝを得。　所說の諸の言

【一一】目眞隣陀山。目眞隣陀(Mucilinda)は龍王の名、此の龍の住する所なるが故に、爾か名く。
【一二】鐵圍山。須彌山の周圍に七山八海あり、第八海は鹹海にして、贍部洲等は、此の海に浮び、此の鹹海を圍繞するは卽ち此の山なり。
【一三】阿鼻(Avici)。譯して無間と云ふ。贍部洲の下、二万由旬に、無間地獄ありと云ふ。
【一四】小根。信心薄弱なる人を指す。
【一五】見非。凡夫の見得る境界にあらざる意。

その時、阿難、佛に白して言く、世尊如來の持する所は、能く是の如し、其の未だ佛心を得ざる者は、云何んが(誦)持せんや。我れ諸藥を見るに或は香・或は臭なり。我れ諸水を見るに、或は濁、或は淸なり。我れ日月を見るに、或は明、或は暗なり。我れ所修を見るに、或は凡、或は聖、或は佛、或は魔、或は想、或は像、或は有、或は無、或は安、或は危、或は是、或は非なり。如上の事は乃し無量に有り、先後定らず、境像顚倒し、幻化不一なり。云何んぞ如來、諸の凡夫を以て、佛の(誦)持と同せんや。若し佛の(誦)持を得れば、一一佛業なり。若し佛持にあらざれば、卽ち是れ魔の業なり。云何んが如來、諸の凡夫を以て、一佛心に同せんや。

十一、持　戒

佛言く、阿難、善哉、善哉。一切の凡夫は、能く持戒を受く、我が此の心は、實に我が心に同じ、けれ難、卽ち我が力に同きたり。若し(戒を)得ざれば、我れ輪廻を受けて、六道に生死す。說く所の言教は並に是れ虛妄にして、衆生に墜墮せんのみ。當に知るべし、我は卽ち是れ魔にして、如來にあらざるなり。阿難、汝當に疑あるべし。阿難、汝更に我が說く所を聽け、若し衆生有りて、能く此の法を持すれば、卽ち如來の心なり。如來の心は、此の人を藏して掌に守る。當に知るべし、此の人は卽ち如來の眼なり、所有の髓脈は、佛と齊等なり。當に知るべし、此の人は是の如く求めて、(佛は其の)手掌の上に、是の人を安置するが故に。當に知るべし、この人は是れ如來頂たり。如來の頂上を此の人に安置するが故に。當に知るべし、この人は如來の心なり。(佛は)如來の心藏を、この人に付屬するが故に。善男子、當に知るべし。この人は如來の依なり。久遠の過去の諸佛は、此の人を護ることに依て、廣く世諦を救ふが故に。當に知るべし、此の人は卽ち是れ佛樹なり。卽ち是の佛日は永劫に滅せざるたり。當に知るべし、此の人は是れ佛金剛山たり。假使世界千萬億、恒河沙數に、諸惡災祥、同

日を經、我復心を以て十方佛を召喚す。十方佛同時に我が頂に來至し、時に應じて我が身邊の所有、我と類を同ふす。唯我能く諸佛を知るも(諸佛)亦覺らず。我復眼を以て、十方佛を視る。その時に仙衆の惶怖計ることなし。哀を求めて頂禮して、我に依附し、復重て懺悔し、唯願くは、救護して、我(等)をして畏れ無からしめよ。と、我卽ち佛心を以て之を觀ずれば、卽ち無畏を得、卽ち我が所に於て、佛の心中心の法を受け、便ち神通を得たり。

阿難、我が此の心法は、十方所有の諸惡心法の與に主と爲る。若し人一切の事法、及び非事法を求むれば、是れ世諦の法にして、(又)出世諦の法なり。我が此の心法に依らずして、別に神通を得ると云ふものあらば、是の處り有ること無し。と

十、定　印

その時、阿難、復佛に問ふて言く、如上の所說に定印有らん、その(定)印は如何ん。願くは爲に定印の軌則を宣說し給へ。

佛、阿難に告ぐ、善く聽け、先づ以て結伽趺坐し、我が心呪を念(誦)すること一七遍せよ。手を呪して然して定印を結べ。先づ左手を仰けて、交脚に搭けよ。卽ち右手を以て仰けて左手の上に安じ、十指を以て腕骨を齊ひ、右手の中指を以て、大指の上文を捻すれば成る。若し人、呪を誦すること一百八遍し、三度身を踊らし、乃至地下も虛空も及び三十三天も、皆悉く心を撫して善を生じ、一切の諸大惡王、能く人を害する者、能く道を障る者、皆な佛を念ぜしめ、佛を謗らざらしめ、諸の衆生をして、佛菩薩を(見るを)得、永く退轉せずして、宿命智を識らしめよ。如來は常に此の印を以て、有緣を召募し、其の大地をして三十六種に震動せしむる者、常に此の印を用ふればなり。此の印の功力は具に說く可からず。所有の(誦)持者は、但自ら之を知るのみ。と

羅山に往き、諸の呪仙の種種の法を作るを見る。我れ後の時に近づきて此の呪を得たり。纔に七日を經て、その諸の呪仙、我が身を識らず。惡人と爲りて、種種の惡術を作りて、我を降伏せんと欲し、神力を盡して以て七日を經、殊に獲る所なく、唯自ら燋枯す。我時に[一〇七]怜念して即ち諸仙に語る。當に知るべし、汝の力の如きは、縱ひ[一〇八]大劫を盡すとも、我を害する能はず。若し害し得る者ありと云ふとも、是の處り有ることなし。と、諸仙齊しく來りて即ち我に語りて言く、汝は他心智を得るや、我れに害心あるを知れり。我れ即ち(彼に)告げて、我は他心智を得たりと言へり。諸仙問ふて言く、既に是れ他心智を得る者には、我れに何の害有らんや。と、我れ即ち告て、汝等に言はん、併隈[一〇九]平章、此は是れ惡人の宜しく作すべき某法なり、併隈處に在りて、彼の人形を作り、刀を以て之を刻めば、其の人即ち死して、復前進せず。と、我曩に傳說す。其の時、諸仙、此の事を說くを聞き、心即ち燋悴して、來りて我を頂禮す。

復、問ふ、我を聖者と言ふは、云何んが知るや、我即ち答て仙衆に言へり。汝等は是れ妄、我は即ち是れ眞なり。汝(等)は即ち是れ邪、我は即ち是れ正なり。汝(等)は即ち是れ有を見、我は即ち空を見る。汝(等)は即ち是れ枝葉、我は即ち是れ根本なり。汝(等)は即ち是れ虛、我は即ち是れ實なり。汝(等)は即ち是れ諂佞、我は即ち是れ直信なり。汝(等)の有法は我よりして生ず。云何んぞ兒子、父母を反害せんや。豈に枝葉、根を害するあらんや。豈に虛僞、眞實を害すること有らんや。豈に螢火、日光を害すること有らんや。豈に微土、能く大流を竭すこと有らんや。豈に毒藥の氣、能く甘露味を破すること有らんや。豈に羅刹、佛身を損すること有らんや。豈に蟻子、須彌山を撼かすこと有らんや。と

その時、諸仙、我が此の語を聞き、心に瞋恚を生じ、我と共に力を挍せんとす。諸の星術を以て、我を[一一〇]怖愶す。我れ時に須臾らく憶念し、定は即ち心に在り、氣を以て天に噓き、呪を誦すること七遍す。黑雲空に遍く、星宿現ぜず、日月光無く、我復地を吹けば、其の地動搖して安からず、七

【一〇七】怜念。怜愍思念なり。
【一〇八】大劫。長時間の意。
【一〇九】平章。かんがへはかること。
【一一〇】怖愶。おそれさす。

以て之を啄けば、諸苦除滅す。若し除くことを得れば、必ず定んで大驗あり。(心呪を)持誦すること、百萬遍に至て啄けば、山を倒すことを得、衆罪を滅することを得ん。諸有の災疲の鄣は、世間に於て、不祥を作す者にして、晨朝の日に於て、一口の水を啄き、三日を滿ずるを得れば、災疲即ち滅し、能く大千世界の地、及び虚空を護らん。邪正を定めんと欲する者は、一銅鏡を取りて、無間に大小呪經、萬遍持行し、乃し邪正に至れば、必定して決了せん。若し此の心、彼の心、諸佛の心、菩薩の心、金剛の心、諸天の心、四果聖人の心、四海の龍藏の心、及び龍王の心、天王の心、日月星宿の心、藥叉羅刹の心、一切鬼神王、乃至世間隱形伏匿の心、及び世間衆生の心を知り、並に所緣の處を知らんと欲せば、法華經を案じて、莊嚴すれば[104]、六根の功德は此れより生ず。佛子は必定、凡夫は必定、菩薩は必定、(執)金剛は必定して、能く此の法を作す。餘は無能者なり。

九、心中心呪の作法

阿難、復佛に白して言く、世尊、如し此の法を修するには、何の壇界有りや、何の藥木ありや、何の供養ありや、何の香花有りや、何の綵色有りや、何の知識有りや、何の[105]處所を用ふるや、請ふ具に之を說け。と、

佛、阿難に告ぐ、汝は顚倒を爲して、是を正問と爲すや。若し是れ正問ならば、即ち此れ顚倒なり。若し正しければ、應に問ふべからず。此の如來の心は色より生ず。邪執の法、像法、事法、我れ都て爲さず。唯心法ありて、心の實際に至る。阿難、一法として攀緣すべきもの有ること無し。如來の處に至れば、心は境に異ならず。唯一のみ是れ實なり。阿難、若し能く作佛する者ならば、何ぞ一切事法に於て、身心に大光明を放たざらんや。若し身心に於て(大光明を發)すれば、當に知るべし事法は一として、事(成)立せざることなけん。何を以ての故に、我昔し凡夫たりし時[106]、尼佉

【一〇四】六根。眼・耳・鼻・舌・身・意。

【一〇五】處所。壇を設くる場所を云ふ。

【一〇六】尼佉羅(Nikhara)。

順伏せざる者なし。必ず當に如法に我が佛心に依て、佛心の法を取るべし。必ず當に効を證すべし、更に異法なし。而も能く我が此の心事を成ずる者なり。

八、大通力と心中心呪

その時、阿難は佛に白して言く、世尊、此の如くの心法は、佛自ら依持し、大神通を以て妙法を得給へり。乃し諸の菩薩・金剛、久しく佛行に處し、亦佛所に至りて、卽ち能く佛の堅固住を學し、決定不退にして、菩提の證を得たり。諸の下愚の如く、求むる者を欲樂せば、云何んぞ至ることを得んや。佛力は廣大にして、威德は玄曠なり。志行深邃にして、大忍力に住し、然して始めて成ずることを得るなり。今は云何ぞ、衆生をして此の法を修學せんと欲するや。云何んが如法たることを得るや。云何んが證驗するや。云何んが能く了見するや。復何の法ありて、諸の魔王等、一切の諸大惡王、諸の餘の變怪をして卽ち自ら調伏せしむるや。復何の法有りてか、佛心を立證するや。我れ契經の所說を聞き、久しく勤苦して具に[一〇二]諸度を修せしも、猶ほ未だ卽ち證せず。我今趣く所を知らず。唯願くは我が爲に一切所有の法要を解說して、成佛及び世間の所知を證驗し給へ。佛、阿難に讃し、善哉、善哉、汝知らんと欲する者を、聽受し思惟せよ。我今當に說くべし。それ此の佛身を世間に誰れありて能く識り、誰れ有りて、自ら知るや。誰有りて行を行じ、一々差失なきや。誰有りて能く生死際の盡るを知るや。實に知ることあることなし。唯佛と佛とのみ、能く此の事を知る。阿難、我が此の心呪は、但慈悲を行じて、日に持すること千遍、千日を滿ずるを得れば、佛力自ら成り、所作自ら成じ、十地の願力も[一〇三]迴(背)する能はざるなり。復一法有り、驗を知らんと欲する者は、持すること十萬遍、外に一口(に水)を含み、心(呪)を誦すること百遍し應に所作あるべきに、水を

柄を即刻聞き得る力

4 他心通　他人の心中を知る力

5 宿命通　過去世の生涯の事を知る力

6 漏盡通　一切の煩惱を斷盡して得る自由の力

【九八】八解脫、八背捨ともの云ふ。

1 貪欲を無くし、外境に對して欲なく自在を得ること

2 色に對する貪心を無くして自在を得ること

3 淨色に對しても何貪心を起さざること等なり。

【九九】金剛藏王密跡、金剛手秘密主を指す。是れ金剛薩埵と同身なり。但し三昧の異りに依て名を異にす。

【一〇〇】跋陀。具には跋陀羅(Bhadra)星の名にして壁宿なり。

【一〇一】鬼子魔母。單に鬼子母と云ふ。梵に訶利底(Hariti)と云ひ、暴惡女神の意。初め少兒を好んで食ひしが、後佛に歸して少兒を愛護することと成れり。

【一〇二】諸度、布施・持戒・忍辱等の六度の修行を指す。

【一〇三】廻背。そむき・さまたげる意。

一皆佛の心地を論說す。復大通あり。若し衆生有りて、母腹に在る者、處胎孕者、兒たらんとする者、卽ち能く過去の心地を憶識し、所生の處、本所經事を知り、並に能く記持す。復大通あり、十方世界の諸惡の災毒、永劫に起らず。復大通あり、その通の光明は、十方界に遍く、一一の界量は、是れ佛及び諸の菩薩、乃至[九三]聲聞四果等の類、倶に明見を得て、疑滯有ること無し。倶時に皆能く明にして三界に遍く、諸の苦際を盡して、佛壽の劫に同じ。復大通有り、其の通の光明は、[九四]五種の色を現じ、一一の色中に、五百萬億・那由他・殑伽沙の化佛あり、倶に眷屬の大菩薩衆を將て、空に昇て而して來る。是の眷屬は、皆能く佛の心中心の所有の法要を論說し、卽ち自ら明解す。復大通あり、其の通の光明は、十方刹に遍し、其の時、大地動搖すること、三十六遍し、星宿日月、時に應じて墮落し、遍く八方に於ける所有の魔、及び魔民は、皆魔業を捨てゝ、其の威神を退して、卽ち佛通を得、佛通は已に倶に能く本所受の業を憶識し、卽ち悔恨を生じて哀を求め、[九五]懺悔し、自ら出家を求む。一人として心不定なる者あることなきなり。

佛、諸の善男子に告ぐ、それ此の通光は十方界に遍くして、大威德あり、[九六]三明・[九七]六通・[九八]八解脫を具し、如法に修する者は、直に佛身に至り、更に異身なし。何を以ての故に、諸佛の心は同時證なるを以ての故に、諸如來は同印可なるを以ての故に、我が盧遮那は是れ佛母なり。常に此の中に於て自ら住持するが故に、所有の願求を自ら印可するが故に、自ら願を滿ずるが故に、自ら觀察するが故に、自ら一切の與に灌頂師と爲り、所有の學者は自ら來りて證するが故に、能く佛心を知る者は、廣く諸天を遣はし、來りて供養するが故に、[九九]金剛藏王・密跡の諸菩薩をして、災變を絕ち、常に覆陰を爲さしむるが故に、又一切諸天の不可識者を遣はして、圍遶を求むるが故に、乃至世界所有の化形者・變形者・種種の伏匿者・潛隱世間者、常に來りて護衞するが故に、上は釋梵・諸天・藥叉天衆來りて從伏するが故に、四海の[一〇〇]毗陀・[一〇一]鬼子魔母・惡鬼・藥叉等、一切の非行、乃至是の如く等の衆、

【九三】聲聞四果。預流・一來・不還・阿羅漢。
【九四】五種色。青・黃・赤・白・黑。
【九五】懺悔。梵漢交へ上げたる名、懺摩(kṣama)忍容の義、已れの罪過を忍容して、三世の諸佛若しくは同衆に對して、向後再び罪過を侵さざるべきを盟ふ意。悔は前非を愧づる義。
【九六】三明。
1宿住智證明　過去世のことに明かなること
2生死智證明　未來世のことに明かなること
3漏盡智證明　現在世のことに明かなること
【九七】六通。
1神境通　空中を自在遊歩し得る力
2天眼通　遠隔の處に起る事實を透視する力
3天耳通　遠隔の地にある事

七、如來の大通力

その時、阿難、釋迦牟尼佛に問ふて言く、世尊、此の事云何ん、我れ自ら親しく供養を承け已て、劫數を經、唯願くは我が爲に示現し給へ、及び諸の法要を我修行し、衆生の心際に流注せんと欲す。と

その時、如來は阿難に告て言く、阿難、我今是の如くの神力を示現せん。汝等遞に相告げ語て、愼んで驚怖すること勿れ。阿難、卽ち如來の語を受け、大衆に告て言く、大衆當に知るべし、大衆當に知るべし。と、高聲に三たび告ぐ、その時、阿難、身の騰るを覺えずして、虛空の中に處し、大衆仰ぎ觀て、阿難の身を見て、謂く是の阿難は無礙通を得たり。と、其の時、音聲遍く阿迦尼吒天[八九]に至り、所有の世界、盡く皆知聞す。阿難、佛に白して言く、世尊に遍く告げ已て、唯示現を願ふ。

その時、世尊、卽ち四十齒を以て、倶時に齊密に慈愍定に入り、心中心の呪を計念[九〇]し、この念を作し已て、復右手の中指を以て、南方を指し、足の大指を以て地を案ず。その時所有の世界、及び非世界、所有の地獄、虛空に湧出す。復上方世界に於て、所有諸雨にて、寶蓮華を雨らし、此の地獄を破せり。其の時、世界に一人も諸の苦を受くる者有ることなし。穢惡都て盡き、倶に法眼を得て、如來を見る。復一切世界の諸の大藥叉、及び羅刹王、諸梵[九一]、帝釋、四天王等、一切の餓鬼、及び阿修羅王[九二]を示現するあり。是の如くの身、皆神通を得たり。謂ゆる通とは、善く慈愍に通ずるなり。普く衆生を覆ふこと、佛の如く異ることなし。復大通有り、虛空の中に於て、微細の雨を雨らし、所有の一切起願、求むる者、皆滿足することを得、嬰重疾病、此の聞力を承けて皆除差を得。餓者は飽滿し、熱者は淸涼たらん。復大通有りて、十方界に遍く、所有の衆生、その時に當て、一

1、毘婆尸(Vipaśyin)、
2、尸棄(Śikhin)、
3、毘舍婆(Viśvabhū)、
4、拘留孫(Krakucchanda)、
5、拘那含(Kanakamuni)、
6、迦葉(Kāśyapa)、
7、釋迦(Śākyamuni)。

【八九】阿迦尼吒。具には阿迦尼瑟吒(Akaniṣṭha)、譯して色究竟天と云ふ。色界十八天中の最上なり。或は有頂天とも稱す。

【九〇】計念。念誦する意。

【九一】諸梵。梵衆とも稱す。色界初禪天の第三階級を指す。

【九二】阿修羅王。正しくは阿素洛王(Asura)と云ひ、非天と譯す。惡神の王なり。四王ありて、各々百千の眷屬を有す。

世界に菩薩あり、現身に佛と爲ることを得。世界に菩薩あり、能く無邊の身に化す。世界に菩薩あり、能く佛の所知を知る。世界に菩薩あり、能く衆生の(苦)縛を解く。世界に菩薩あり、遍く諸佛の[八四]刹に入る。世界に菩薩あり、種種に方便を示す。世界に菩薩あり、堪忍して諸苦に入る。世界に菩薩あり、衆を己身に攝す。是の如くの諸の菩薩は皆是れ灌頂の主なり。諸佛の身を示同し、念に應じて諸境を現ず。神通波羅蜜、その實は不思議なり。能く急難の中に於て、無畏、大自在、我れ是の如き等を觀ずるに、佛と亦異ることなし。若し受持を具する者は、佛と同じく不思議なり。佛の法藏を誦持して、一一皆遍く了(知)せん。即ち此れ[八五]法雲の頂、皆是れ滿足の位なり。

云何んぞ此の人等、此の因緣を知らざらんや。若し此れ知れざる者ならば、下愚何ぞ能く了(知)せん。

その時、毘盧遮那佛、光明の中より、大音聲を出し、阿難を歎じて言く、善哉、佛子、是等の菩薩は、大慈有りと雖、慈遍からざるを以ての故に、この以に知らず。大悲有りと雖、悲遍からざるが故に、この以に知らず。大忍有りと雖、[八六]忍遍からざるが故に、この以に知らず。大通(力)有りと雖、通亦遍からず、大力有りと雖、力亦遍からず、示現有りと雖、示現遍からず、無礙(力)有りと雖、無礙遍からず、是の如く遍からざるもの、一一の菩薩に、皆悉く之れあり。若し遍きを得れば、佛性を了見す、卽ち能く我を知る。此の佛性は猶ほ故に未だ了(知)せず。云何んが能く知るやとなれば、如來の[八七]量處なればなり。阿難、佛に白して言く、世尊、是の如し菩薩は猶ほ以て(此の理を)知らず。一切衆生、云何んぞ、此の理を解するを得んや。佛の言く、汝と我とは、此を親しく[八八]第七佛の釋迦牟尼に承く。次に當に宣說すべし。一切衆生、自然に了することを得ん。能く奉持する者は、一切衆生、自然に我が所說を解することを得ん。と

【八五】法雲。十地の位の中の第十法雲地なり。

【八六】忍。智を意味す。

【八七】量處。量測する所、卽ち認識範圍なり。

【八八】第七佛。過去七佛中の第七米田目の佛を指す。卽ち七佛とは、

佛心中心印品中卷下　法別

三藏　菩提流志　奉詔譯

その時、阿難は大衆中に處して、潸然として憂愁す。その中間に於ける諸有の經律、一切の藏門倶に然も(八一)掩閉す。諸の大金剛、及び諸菩薩、一切所有の(八二)靈祇、世界に遊ぶ者、乃至諸大龍、神仙衆、及び百千萬億の世界の四天王等、乃至釋梵、諸天は、悉く皆迷悶して、頓に精光を失へり。唯諸佛のみ有りて、能く廣大の因起を知る。各各安坐して、皆身及び心に於て、微細の光を放ち。自ら想ふて慰悶す。

六、阿難の悲歎

その時、毘盧遮那如來、復身分に於て、更に異色を開き、無量の威德あり、大端嚴の光ありて、其の光普く照し、乃し有罪無罪等に至る。是の如くの衆生は皆無怖を得。復光中に於て演說し、微細の音聲あり。諸佛に告て言く、諸の大聖衆、此の威光は知り難し、此の威光は測り難し、唯大聖のみ有りて、我が力と等しく、我が心と等しく、我が慈と等しく、我が悲と等しく、我が解と等しく我が知と等しく、我が辨と等しく、乃し世界所有の知量に至るまで、能く盡く知る者は、卽ち能く此の光明を知る。謂ゆる因緣(を明)にして、而して種種の知見を得るなり。

その時、阿難、其の悶中に於て、心に少省あり。強て自ら(八三)意を持し、卽ち問を起す。(毘)盧遮那世尊、それ此の光を、唯諸佛のみ(之を了知すと)說き玉ふや。佛の言く、是の善男子、唯佛のみ能く知る。菩薩有りと雖ども、未だ佛の見に同じからず。と、その時、阿難、前んで佛足を禮し、五體を地に投げ、眼中に涙を垂れ、偈を以て問ふて曰く、

【八一】掩閉。かくす。
【八二】靈祇。地神なり。
【八三】意を持す。勇氣を起す意。
【八四】刹。具には刹怛羅(kṣetra)國土の義。

此の身と同じからん。若し至誠の人有らば、夢に菩提を授與せん。我れ夢中に因を說かん、汝等當に善く聽くべし。若し法を見んと欲する時は、必ず(變)化の樓閣を見ん。諸佛は空に乘じて往き、頂に臨んで卽ち自ら安んず。或は大河に臨んで、陸にて船を手に隨て造るを見、或は高山上に通じて自ら根栽無きを見、或は浮圖[七九]を作り、空に騰りて自ら往來するを見、若しくは說法の會に、身自ら法王と爲ると見、或は素像の時に、手を舒べて卽ち嚴飾するを見、或は諸經卷を、手に引て卽ち執持するを見、若しくは諸の樓閣に、其の身自ら安坐するを見、或は大江河裏に入りて、沒溺することなきを見る。是の如くの諸の法相は、卽ち法因と成ることを得、普く示すに持光[八〇]に依り、必ず須らく我覺に依るべし。若し我が法に依らざれば、未だ菩提あることを見ざらん。縱ひ契經の中に於てすとも、習ふ所疑滯多からん。

その時、大衆、此の法を聞き已て、歡喜奉行して、佛を禮し而して退けり。

佛心中心經卷上

【七九】浮圖。佛陀(Buddha)

【八〇】持光持誦を指す。

その時、如來は一切の諸の大衆に印可せんと欲するが爲めの故に、卽ち正授菩薩の契を以て、十方を指して以て三遍を經れば、卽ち黑風有りて吹き、諸の菩薩は、皆悉く地に倒る。諸の菩薩等、地よりして起てば、卽ち赤色の雲有りて現はれ、諸の一切細末栴檀の香を雨らし、大衆の身に洒ぎ、次に香水を雨らして、諸の大衆を浴し、大衆を浴し已て、時に應じて、卽ち此の通自在を得たり。自在を得已て、具に此の法を修し、七日を經已て、普く佛身に同ず。佛初て涅槃し、諸來[七七]の化佛に供養するは、是れ此の契の力なり。と、その時、大衆、此の契力を得、卽ち共に同聲に、佛德を讃歎す。

善哉、救世者、普く大神通を示し、微小にして十方に現じ、倶に大功德を獲、佛身は卽ち凡體なり。德力十方に等しく、微妙淨法身、下愚も決定して有り、親族此の果を證し、咸な未來に遍く、當に願くば凡夫の音をして、佛語と同じく異ること無からしめんことを。

その時、文殊師利法王子等、復神通を以て、遍く十方に告げて、而して佛を讃歎す。

善哉、聖師子、慈光は世間に遍く、微妙淨法身、希有の事を顯現す。久修して而も了せず、光を放てば卽ち菩提となり、此の如くの諸の佛身は、是れ我が大師の力なり。當に知るべし、盲聾(を導く)の道も、此の慈悲に過ぎたるは無し、唯願くば後覺の人、亦我が今日と同じからんことを。

その時、如來は偈を說て曰く

一切の諸身中、佛體に過ぎたるは莫し、所有要妙の法は、諸佛[七八]の心に過ぎたるは無し、將に心を衆生に示さんとす。衆生卽ち佛體なり。此の如くの大聖の力は、菩薩も知ること能はず。劫恒河沙有りとも我始て一りに付屬す。若し能く修に依る者は、卽ち我が

【七七】諸來。十方より來れる意。

【七八】諸佛心。心中心の呪を指す。

を持すれば、我の如く異ること無けん。と

その時、大衆は同聲に佛に白して言く、世尊、それ此の童子は、此の契法を修すること幾久しくして、當に是の如き力有て、我(等)を攝して、之を滿足するや。と、佛大衆に言く、汝等、今は菩薩心未だ足らず、所の以に大衆に攝せらる。善く聽け、我れ汝等の爲に、此の因緣を說かん。我昔し初て雪山に住して道を修せしに、多くの諸の惡獸等あり、善心有ること無く、皆人を食はんと欲す。我れ時に定に在りて憶念す。我が師空王如來所說の此の呪を、始て宣すること一遍す。其の時諸の惡蟲獸、皆佛心を得て、我を害せず、漸次に憶念す。其の時、蟲獸は菩薩戒を受けて、皆な草菜を食せり、後に於て此の童子あり、我に聞きて、山中に供給す。我に於て始て一宿を經、我れ持するに因て、次に聽て我が呪を得、復明日を經、我が印を盜んで之を結し。卽便ち山を出でて更に我に事へず。七日の間を經て、是の如くの力を得、後に我を過ぎ、卽ち神通を以て、我を攝せんと欲す。我が[七五]持の爲めの故に、二とも相攝せざるなり。汝等、當に知るべし。盜法の中にも、由ほ是の如くの大力あり、何に況んや正受をや。

その時、大衆、佛の說を聞き已て、願くは我に法を賜へて、此の童子の威神自在なるに同ぜんことを。と、佛の言く、汝等却て後七日、當に此の通を得れば、人信ぜざるに非ざるべし。卽ち當に忘失せざるべし。

その時に當て、諸の外道は隱形衆中に有り、佛は知て制せず、後に於て、(諸外道は)此の契を持して、諸の菩薩を降さんと欲す。惡心の爲めの故に、契を結ぶの時、身心を燒却して、自法をも亦失ふ。善哉、此の法を、妄に持して、一切の事業をも、俱に廢置すること勿れ、唯止惡女、妬心にて持すれば、卽ち効無し。若し惡妬の心無ければ、速に證すること難きにあらず。善哉、世尊、唯願くば印可せよ、唯願くは[七六]印可せよ。速に佛地を證して、佛身の如くなることを得せしめよ。

【七五】持。持明卽ち眞言の功力を意味す。

【七六】印可。眞言並に印契を授くることを承認すること。

成就の契を持し、身を化して佛と作る。一一の眷屬は皆自ら身を變して菩薩と作る。心王師子吼王佛は、西方より來り、正授菩薩の契を持して、彼國より來り、路に衆生の是心と非心と在り、契を以て之を指し、總じて皆な佛と成れり。遠聞ある者は、菩薩の記を得、最勝如來の下に、一童子の年十四歳なるあり。北方より來りて、如來の母契を持せり。經る所の諸國に、大夜叉、羅刹[七三]軍、大黑鬼軍、吐火神軍、大黑風痛及び蛇男あり、是の如く等の男をば、佛母契を以て之を指せば、皆な慈心を發し、童子を隨送して、佛所に至ることを得せしむ。是の如く惡獸も、並に佛心を得、菩薩の記を受く。師子音佛は、下方より來り、善集陀羅尼契を持し、百萬億陀羅尼神の眷屬、虛空に飛騰して自ら來りて證を爲す。上方の香積如來、下り來り、一童子の身、並に香世界の一童子の身、佛の語契を持して、上方より空を飛んで徐ゝに來る。下方の衆は、謂く是れ香積如來、普光如來、閻浮[七四]提に下りて、各ゝ自ら花を齎して供養し、下りて佛前に至る。乃ち是れ童子なり。

その時、如來は、大衆に告げて言く、善く聽け、前の所來の如く、並に師に承受し、倶に佛力を承け、皆大通ありて、久遠に成就せり。卽ち未だ證を爲す可らず。汝等、善く聽け、更に一人を喚ばんと、佛卽ち告て言く、光明童子、善來、其の時、童子、雪山に住在す。佛の喚聲を聞き、卽ち我が所に來至す。その時、童子は、大衆の中に至る。大衆、譏訶して、如來は汝を喚ぶ。今（汝の）眷屬は、何に在りて、我（等）が師と爲るに堪ゆるや。と

童子答へて言く、我等が眷屬は、汝（等）卽ち是れなり。大衆答て言く、我等は共に汝を久しく相識らず。云何んぞ當に是れ汝の眷屬なりと言ふや。と

その時、童子、密かに語契を持して、大衆を指し、佛の化身を除く。諸餘の菩薩は、盡く皆な此の童子を禮す。其の時、大衆は覺知するもの無く、四衆禮し訖て、皆自ら告て言く、仁者、我等は今仁者に師たらんことを請ふ。童子答て言く、如來の語契は、實に虛妄無し、汝等大衆、一心に之

【七三】 羅刹。具には羅叉娑(Rakṣasa)と云ひ、多く海邊に住し、人の血肉を食する鬼類なり。

【七四】 閻浮提(Jambu-dvipa) 須彌山の水面に表はれたる部分の南方の洲にして、我々の世界は之れに屬す。

衆生は、此の中に入らんと欲するも、得可きや、不や。佛の言く、無礙（通）。我本の說法は、只下劣を緣す。如し下劣にして求むることを得んと欲する者あらば、（吉）日に輪壇を結すべし。その壇に三院あり、[七一]逆日に之を結して諸の供養なく、唯美香・戟・羌の三箇あるのみ。若し戟と羌と無くば、三刀も亦（設くることを）得、三蓋香、三面鏡、三盆水あり。其の壇は縱廣八尺、第一院は白、第二院は朱、第三院は青、各〻五の方法の如くす。第一院中に、佛位を求むる者、之を求め、第二院中に、菩薩法を、之れに求め、第三院中に、金剛を之れに求め、餘の一切の諸天仙・神鬼・地神等の法は、壇外に於て、之を求むべし。[七二]擧心すれば卽ち成ず。多くの日餘を假りても功有らざれば、契を傳ふることを得ず。凡そ微しの功能をも現ずるをば、今且く略說せん。但勤修有れば、諸有る功法、自然に證得せん。

五、諸印契の傳來

その時、大衆は佛に問て言く、世尊、それ此の法契は、誰れより授持せられしか、誰れの灌頂を得、誰れの加護を得て、今此の通を得、遍く十方に滿ち、能く一切をして盡く皆な降伏せしめたりや。能く一切の諸法をして、自然に露現せしめたりや。誰人か佛に於て此の法を修持し、說の如き通を得しや。誰人か通を得て、佛自ら證見せしや。我等今請ふて、其の師範と作さんと欲す。と、

その時、佛は大衆に告て言く、汝等、今疑あらば待つこと須臾せよ。自ら當に見ることを得べし、汝自ら問を證せよ。その時に如來は、自心の中に於て、語契を結持し、遍く十方一切の心中心者に告ぐ、急に來れ、大衆、見んと欲す。と

その時に、多羅菩薩、菩薩の心契を持し、眷屬に圍遶せられ、東方より來りて、身を變じて佛と爲る。一切の大衆は菩薩の像身と作りて、而して佛前に現はる。堅意菩薩は、南方より來り、菩薩

【七一】逆日。前日の意、逆はアラカジメと訓す。

【七二】擧心。一念發作の意。

その時、實德菩薩、佛に白して言く、世尊、此の如くの定契、何の加持有りや。佛は何ぞ說かさるや。若し說かざれば、病露現とも、[六八]方救を知るなけん。その時、佛は實德菩薩に告ぐ、我が此の定契の一一をもつて、諸佛は此れより定を得、久遠より以來、唯諸佛に此の定契あるのみ、諸の菩薩、一切の金剛の若きには、此の契無きなり。若し此の契あれば諸佛に同じきなり。と、それ此の定力に、言宣有るや不や。實に言宣なきなり。若し言宣無ければ、如上の諸法も、亦言宣無きなり。誰人か到ることを得、誰か能く言宣せんや。唯我此の身、能く解了を爲すなり。唯過去の諸佛、能く解了を爲す。其の諸の菩薩、能く解了する者は、即ち我が身に同じくして、菩薩に非るなり。

四、授法壇

その時、如來は、此の語を說き已て、下方に一菩薩あり、無礙通と名く。下方より佛前に來りて誦出し、心は憂慼に住し、嘿然として而して坐し、所有の寶座、皆現前せず。唯自ら長歎して、佛を讃歎せざりき。その時、大衆甚だ以て驚愕し、大衆佛に問ふ。佛即ち答て言く、此の人は普遍なり。この以に長歎するなり。佛は無礙通菩薩に告げて、今何事か有りて、唯自ら噓嗟するや。と、無礙通菩薩の心、始て歡悅し[六九]寶座始て現はる。（此の菩薩に）大威光有りて、影は大衆を閉づ、即ち寶座を下り、履と衣服とを整ひ、往て佛の前に立ち、佛に白して言く、世尊、我れ下方に於て、佛の心中心、及び如上の契等を說くを聞き、便即ち記持し、此の通を得て、今此に來至す。善哉、世尊、然るに我を悲愍せよ。當に知るべしや、不や。佛言く、我以て知り竟れり。汝當に聽受して、衆生に付與せよ。我が持する所は、佛心なり。若し佛心を持すれば、即ち曼荼羅となるなり。と

無礙通菩薩の言く、世尊、未だ佛を得ざる者、決定無き者、[七〇]攀緣多き者、慈悲無き者、此（等）の

【六八】方救。方便して苦難を救ふ意。

【六九】寶座。無礙通菩薩の座に當る。

【七〇】攀緣。外境に心を引かるることあり。

(諸佛・諸菩薩等の一切の語言を)解了せざれば、一切の諸佛は妄語を爲すなり。若し我をして、此の契力に喩へしめば、喩無くして喩ふ可く、比無くして比す可く、乃至過去・未來・現在の一切諸聖、能く此の契力を知らざる者も、之を持(誦)して[六五]通(力)を得れば、根際を知らざるなり。我今說くと雖、而も付屬あり、亦[六六]根際を知らず。當に知るべし、久遠の佛力、遞に相付屬し、遞に相承受し、遞に相印可し、遞に相授記す。

如上の事、自在心中の語契より出生す。輕用す可らず。之を記し、之を愼め、之を愼め。初心の衆生に、我が如上の印法を見せしむる勿れ。消息を度量す可きこと難し、小小の事に輕用することを得ざれ。若し小小の事に用ふることあれば、人をして驗を失せしめん。縱ひ用ひんと欲する時にも事の大小を量れ。

(7) 安心の印

その時、世尊は此の法を說き已て、一切の菩薩、及び諸の[六七]金剛藏王、諸の眷屬等、即ち其を修持せんと欲すれば、天地大黑、日月星宿、精光を失却し、諸有の神靈、忽然として沈沒す。佛は此を視已て、便即ち微笑し玉へり。其の語契を以て、十方界を指せば、天地大明す。時に諸の菩薩、各ゝ自ら身を現じ、各各動搖し、天地大に動き、其の神力を盡すも、亦止むる能はず。其の時、如來は却て後、安坐して、大衆に告て言く、我安契を用ふ。これ能く安ずるや不や。と即ち左手の四指を舒べて、前に向け、大指を拓て、掌中に橫著し、右手は亦左手の如く、右膝の上に安ず。時に應じて一切の大衆、及び大地等、並に悉く定を得たり。善哉、諸の大衆等、當に知るべし、久遠の諸佛に、是の如くの力不可思議有り。と、一切菩薩の心中、始て安立す可く、如上の諸法は、決定して加持せられん。若し決定無ければ、縱ひ劫を盡して修すとも、何ぞ益を成すること有らんや。

【六五】通。神通力なり。

【六六】根際。機根の際限即ち力倆の程と云ふ意。

【六七】金剛藏王。金剛薩埵の降伏三昧に住したる身にして、執金剛の主たり。胎藏界曼荼羅の虛空藏院に、一百八臂の金剛藏王在り、是れ百八煩惱退治の相なり。

知聞するが故に、心中所須の諸法、但口にて告て言く、我れ此の法を須ひ、我此の力を須ひ、我れ此の寶を須ひ、我れ此の藥を須ひ、我れ此の食を須ふ。若し一切の所須有らば、但し淨心に契を結び、呪を誦じ、一千八十遍に至れば、所須の物、令に應じて卽ち持たんとする所の物を、神自然に奉送すること有るべし。善男子等、若し三十三天に有りて此の語音を聞けば、謂く如來語なりとして、卽ち來りて供養せん。十方の藥叉・羅刹・鬼神等の惡心の殘害者も、此の言音を聞かば、毒心卽ち除かれん。(此等殘害者は)十方に在りと雖、卽ち自ら(來りて)哀を求め、弘誓の願を發さん。(彼れ卽ち言く)我れ佛敎に乘じて、更に敢て惡を作さざるなり。と、下方世界の諸[六二]金剛藏は、此の言音を聞き、金剛座に踊出して、此の(持誦の)人を扶持して、其の座上に安かん。[六三]維摩詰は、東方の金剛座を取るに、此の契の力を用ひたり。多寶如來は、下方より發音して、この契の力を用ひ、言を出して卽ち得、更に疑滯無かりき。何を以ての故に、佛の言者は十方に遍きを以ての故に。此の言者は、諸佛の言者に同じ、言音に二あること無きを以ての故に。此の言音は諸佛の言音と同じく、常に決定するを以ての故に。所有の諸法、口にて宣說する所は、卽ち同じく記持して、錯謬無きが故に。念念不退にして、佛の記持に同じく、常に闕かざるが故に。所出の言音を、一切衆生、若し聞くことを得る者は、皆解了するが故に。是語も非語も、口にて說く所の者は、諸の法音の如く、一切衆生、皆信受するが故に。所說の敎令は、衆生記持して忘失せざるが故に。縱ひ非語有りとも、諸の衆生をして、將に正法と爲して、能く護持せしむるが故に。諸の衆生、失念し失心して、錯れる敎命を說くこと有らんも、我が此の言音は能く本心に正定を得せしむるが故に。所習の法要は、能く衆生をして、聽聞せんことを樂はしむるが故に。所說の言音に[六四]違越無きが故に。善男子、若し此の法を持し、若しは行、若しは坐、或は住、或は臥、先づ三歸を念じ、然して後に、此の契を結持して、百日を滿することを得ば、一切の語言、解了せざるなし。若し能く至心に、結持すとも

【六二】金剛藏。これ金剛地藏にして、卽ち地神なり。

【六三】維摩詰、具には維摩羅詰(Vimalakīrti)無垢稱と譯す、淨名とも云ふ。佛在世時に毘耶離城にありて、釋尊の敎化を輔けたる大居士なり。

【六四】違越。本誓宗願に違ふ意。

此の契は如來の身なり。能く一切の大神をして、世間に布かしむるが故に、善男子、我が此の契は、始て一人に付屬す。我が此の契は、卽ち貧に流注して、諸の衆生の手に下る。其れ此の衆生は、是れ我が菩薩、隨念の所生なり。菩薩の記を得て、我れ始て付屬す。善哉、善哉、善男子、寧、諸佛は婬欲の身に同なりと說くとも、此の契を輕んずる莫れ。(此の契は)必ず須らく(持契者を)護持すべし。何を以ての故に、豈に諸佛は婬欲の行を成ずるものならんや。諸佛に若し婬欲無ければ、當に知るべし、此の契は必ず諸佛に同なり。若し此の契を持すれば、縱ひ地獄の因を造り、地獄に墮すとも、地獄內の諸受罪者をして、生天を念ぜしめ、一人も罪苦を受くること有ることなからしめん。釋迦如來は、病を現じて、地獄に入りて、諸の衆生を救ふに、當に此の契を用ひたり。更に餘の契の能く此れと等しきものなきなり。若し我が說をして、劫劫[六〇]に相續して、盡る可らざらしめんには、之を記して輕用せざれ。

(6) 如來語の印

第六　如來語契　亦勅令諸神契と名け、亦勅令魔王外道契と名け、亦名開持不忘契と名け、亦善說語祕門契と名け、亦同一切衆生言音契と名け、亦一切逆順而說無能違契と名け、亦一切言音無錯謬契と名く、

先づ左右の二手を以て合掌し、左右の二無名指と二小指とを以て、掌中に叉[六一]し、卽ち二大母指を以て、左にて右を押し、二無名指と二小指との甲上を捻し、二中指と二頭指とを並べ竪てて直く申べ、總して拆開して二分計りにして成す。

若し善男子、善女人、此の契を得る時、或は聞くことを得る時、或は見ることを得る時、其の人の身上の所有の積劫の重障難は、自然に消滅し、一切の法要も非法要も、出語讚歎も、卽ち實を成するが故に、所出の言音、勅召の諸事、十方(國土の有情に)に告令すること、時に應じて十方に同じく

【六〇】劫劫。長時の意。

【六一】叉。交ゆるなり。

すこと三遍すれば、時に、地藏は金剛際に及び、遍く其の山下に涌出せん。金剛を擲てば他方に著いて、一切衆生、覺知するものなけん。如來の如くに光を放ち、地を動かすには、當に此の契を用ふべし。若し災疫流行し、惡風暴雨の禁制し難き者あらば、當に此の契を結び、經を呪すること七遍し、輪轉四匝すれば、災疫停息せん。若し一切陀羅尼を持する有りて、久しく(此の契印を)用ふれば功あり。夫れ効を得ざる者は、當に此の契を結んで頂上に在くべし。最勝に至ることを得れば、其の力卽ち成じて、更に擬滯なからん。善男子等、如來の神力は此れより生ず。如來の契法は、此よりして出づ。過去の諸佛の所有の契集法藏は、此れよりして集る。諸佛所攝の菩薩・金剛神力、及び諸天仙、一切の外道、能く伏事を爲す者は、皆な此の契を以て攝持す。若し一切法にして、諸の衆生の決了せざる者有らば、亦此の契を結んで、此の人心を指せば、自然に了達せん。諸佛・菩薩・金剛の所行の神通は、人の知らざる者にして、皆此の契を用ふるなり。善男子、各々所有の一切陀羅尼、自證の功力は、大千界を動かすことを見るも、此の契を得ずして、能く了知す(ると云ふ)者ありと言はば、是の處り有ることなし。縱に諸法を持すれば、多く犯觸あり。但し此の契を得れば、犯觸を懼れず、亦退散も無からん。一切の諸聖、上は諸佛に及び、下は種種の隱形、種種の幻化に至るまで、常に來りて(此の結誦者を)供養し、常に此の契を持する(者は)、所有の福力、諸佛と共に等しからん。若し無上菩提を修するの人は、當に持して用て(神)力を有すべし。諸餘の貪詐小心(者)には、妄りに宣傳する勿れ。縱し傳へて効無ければ、卽ち起て法を謗らん。善男子、當に知るべし。此の契は是れ諸佛の身なり。能く諸法を攝して、自ら宣通するが故に、善男子、當に知るべし、此の契は以て如來の身なり。能く諸聖を攝し、來りて輔を作すが故に。善男子、當に知るべし。此の契は如來の心なり。諸藏門を攝して、意中に在るが故に。善男子、當に相るべし、此の契は如來の身なり。能く一切の菩薩、金剛を攝して、世間を護るが故に、善男子、當に知るべし、

ひ口を嗽ぎ、然して此の契を結び、口を閉て靜座し、十方の佛語を、心中に自ら了し、一一思惟して諸佛の心と、諸佛の言音とは、此よりして出づることを證せよ。言音既に出でなば、十方世界所有の陀羅尼法門、及び一切の陀羅尼神、及び百萬億の金剛藏王、百萬億世界の菩薩摩訶薩、及び諸佛の陀羅尼藏・龍藏・日藏・月藏・地藏・阿修羅藏・伏藏・寶藏・諸佛の祕藏、乃至諸佛所有の一切慈悲藏等、自然に開發して、皆自ら現前し、雲玉雨花の如く、遍く十方世界に徹し、所有の陀羅尼藏を、即ち(持誦者)自ら了達せん。了達することを得已らば、一切の陀羅尼法、取て用ふるに滯ることなけん。若し善男等、此の法を持せんと欲せば、須らく檀香・薰陸香・沈香等を燒き、須らく衣服を淨め、發す所の誓言に、

我今此の契法を持して、普く一切衆生の爲に、此の誓を設け已んぬ。と、即ち此の契を結んで誦持すること、一百八遍に至れば、即ち一切諸佛、身を化して百億神と爲るありて、各[55]器仗を嚴り、及び諸の眷屬に圍遶せらる。呪者及び百億神軍、百億鬼軍、百億の諸天仙衆、一切の水・火・風天、所有の[56]精祇變怪來集せざるなし。既に雲集し已て、問ふて言く、何の所作をか欲するや、我れ(等は汝持誦者に)違逆せず。と、[57]又王(にして此の結持を爲す者)は、四天を化して、大威力を得、至る所の方、自然に調伏せらる。若し不順の者有り、契を以て之を指さば、時に應じて、契上に兵衆を化出せん。(その兵衆は)身に火焰を持し、前後に照徹して、十方世界を過ぐ。一一の兵の身は、皆長さ千尺、縱廣は正に等しからん。轉輪聖王は、四天下に、此の契を用て、法藏を得んと欲し。契を持して心に在けば、即ち陀羅尼王を持する有り、爲に法要を說けば、自然に開解す。若し惡獸を降すに、(此の)契を以て之を指せば、時に應じて、契上に即ち五師子有りて現はれ、惡獸自然に[58]弭伏せん。如來は昔し[59]摩訶陀羅國に於て、護財の狂象を降すに、此の契力を用へり。若し山岳を移動せんと欲せば、此の契を結んで呪すること一千遍せよ、(次に)契を以て山を指すこと三遍し、地を指

【五五】器仗。諸尊の持つ所の武器等なり。

【五六】精祇。地神なり。

【五七】本文に、能爲即爲所須七寶千子隊形法式の十四字あり。

【五八】弭伏。弭とは耳をたれること、伏は降伏の意。

【五九】摩訶陀羅國。摩揭陀(Magadha)國の阿闍世王、曾て太子たりし時、提婆と計りて、狂象を驅て釋尊を害さんとせり。

で之を持すること百遍すれば、能く惡業の衆生の與に大福田を作し、善業の衆生は、果を證して記を受けん。當に知るべし、此の契は、假使一切の諸佛、同時に出生すとも、此の契の神力は、諸佛の力の如し。善男子、當に知るべし、此の契は不可思議なり。若し願に於て持する者は、必ず須らく珍重すべし。妄に宣傳して諸の非人に與ふべからず。何を以ての故に、我自ら保護するが故に、若し非人に傳ふれば、即ち我を謗するに同じ。若し我を謗する者は、必ず出離すること無からん。若し出離すとも、云何んが十方の諸佛を見ることを得んや。云何んが十方の諸佛名を聞くことを得んや。更に何を以てか、諸佛の法身を見ることを得んや。諸佛は永劫に更に護念すること無らん。一たび地獄に落ちて、十恒河沙劫を過ぎて、始めて(人界に)出生することを得ん。出生することを得と雖、百千劫を經て、無目の身を受けん。當に知るべし、此の契は、必ず須らく、記持して輕用すること勿れ。受法懺悔すれば、難を除き、苦を救ひ、障を摧して、人を度し、魔を降し、毒を止むるの用あるも、縱に輕小の事あり、意に此の法を用ふる者は、多く成就せず。自ら當に驗を失ふべし。若し能く此れに依れば、諸驗自ら成じて、別持を假らず。我をして句義の重疊を廣說せしめ、大地に遍くして、猶し亦盡く之を記せざるは、輕んぜざるがためなり。

(5)　如來善集陀羅尼の印

第五、如來善集陀羅尼の契、亦攝菩薩契と名け、亦攝一切金剛藏王法身契と名け、亦集一切陀羅尼神藏契と名け、亦集一切威力自在契と名く。

先づ左右の二手を以て合掌して、二中指を交へ、右にて左を押し、掌の中に於て、二大母指の左にて右を押し、各〻本中指を捻して環の如くす。二無名指と二小指とは、並べ竪てて、頭相捻す、二頭指は、二無名指の上節を捻して文成す。若し善男子、善女人等、此の印を持せんと欲せば、先づ晨朝の時に當て、至心に三世の諸佛を稱念し、面を十方に向けて、三歸依[五四]の法を說き、清淨に手を澡

【五四】三歸依。歸依佛・歸依法・歸依僧。

ふも、亦是の處りあること無し。世界を盡して、諸天有りと雖ども、(此の契印を)見聞することを得ず。何を以ての故に、佛より受けざるが故に。善男子、當に知るべし、此の契は諸力に同ぜんと欲するも、(諸力に於て、此の契印に)校量(すべきもの)有ること無し。若し能く至誠に持して、三日を經れば、大地震動して、佛の出世の如く、日月の光明、自然に現はれず。何を以ての故に、此の力の爲の故なり。善男子、我が此の印契は、久しく我に事ふる者、卽ち來れば付屬し、我が心に同ずる者は、我亦付屬せん。大慈悲を具する者にも、我れ亦付屬せん。法性を長養する者にも、我亦付屬せん。能く衆生を度して、直に菩提に至らんものにも、我亦付屬せん。我が經敎に依て、記持して心に在らんものにも、我亦付屬せん。能く衆生の爲に決定を作す者にも、我亦付屬せん。能く衆生をして、戒行を修行せしめ、所有る魔事に、制約を爲して、退失せざらんものにも、我亦付屬せん。善男子、當に知るべし、此の契は佛の額上の光なり。之を[五〇]結持すること百遍し擧げて額際に至れば、卽ち能く光を放つ。善男子、當に知るべし、此の契は如來の心なり。[五一]結契して百遍を持(誦)すれば、自ら佛心を得ん。善男子、當に知るべし、此の契は如來眼なり。[五二]持契すること百遍し、擧げて左眼に至れば、卽ち佛見に同ず。擧げて右眼に至れば、卽ち菩薩の見に同じ、擧げて眉間に至れば、卽ち金剛不壞・神通自在の見に同ず。善男子、當に知るべし、此の印は如來神通の變化なり。結契して之を持すること百遍し、擧げて左[五三]膊に至れば、卽ち如來の無邊身に同ず。身の通(力變)化自在にして、衆生は身中に在りと觀見す。擧げて右膊に至れば、卽ち大地は運轉して、身中に在りと觀見す。善男子、當に知るべし、此の契は卽ち是れ如來の神足なり、無碍の故に。契を結んで持すること百遍すれば、上下八方、時に應じて示現し、皆亦七歩の縱跡あり。善男子、當に知るべじ、此の契は如來の語に同じ、持契百遍し、擧げて口に至れば、所說の法要、如來の音に同じく、碍滯あること無く、皆契經に合す。善男子、當に知るべし、此の契は、如來の頂輪なり。契を結ん

【五〇】結持。結印持誦。
【五一】結契。手に印契を結ぶ意。
【五二】持契。口に持誦し、手に契印を結ぶ。
【五三】膊。肩背なり。

位を求めんと欲する者、菩薩位を求めんと欲する者、金剛位を求めんと欲する者、天神位を求めんと欲する者、十方に現ぜんことを求めんと欲する者、西方に生ぜんことを求めんと欲する者、下方に自在に生ぜんことを求めんと欲する者、十方に自在に生ぜんことを求めんと欲する者、世間にして闕短なきを求めんと欲する者、唯當に至心に思惟して、自ら事を念じて日に(神呪)千遍を持すべし。七日の間に卽ち能く至ることを得。[四五]一たび世界を離るれば、更に往來せず。何を以ての故に、佛身に同ずるが爲に、佛の神通を得るが故に。佛心に同ずるが爲に、佛の慈を得るが故に。佛眼に同ずるが爲に、佛見を得るが故に。佛力に同ずるが爲に、[四六]佛持を得るが故に。佛行に同ずるが爲に、世間(の善事)を行ずるが故に。佛印を得るが爲に、親しく(阿闍梨より)印を受くるが故に。諸佛と同じく變化すること を得るが爲めの故に。法身を得るが爲に、諸魔外道自ら降伏するが故に。何を以て降伏するとなれば、[四七]二身を見て、唯一身と見るなり。見るに二佛無く、唯一佛を見るが故に。善男子、當に知るべし。此の契は唯佛と佛とのみ、乃ち能く記持して、諸聖の記持する所に非ざるなり。唯諸の菩薩の願力を滿ずる者のみ、乃ち能く記持して、初心の記持する所にあらざるなり。諸金剛の記持する所に非ず。佛より授與せられたる者にして、然して始て憶持することを得ん。小通はその器にあらざるなり。善男子等、若し此の契を將てすれば、十方世界の、所有の通靈は、識知せざるなく、攝受せざるなく、頂禮せざる無く、歸從せざるなく、加護せざるなく、十方の如來、印可せざる無きなり。寧、百億恒河沙數世界に於て、諸有の大地、盡く皆な滅沒し、諸の[四八]須彌山王は[四九]末して微塵と爲り、復佛身あり、遷轉して不定なりとするも、當に知るべし、此の契は定相有ることなしと說く可らず。何を以ての故に、豈に諸佛に遷轉の身あらんや。當に知るべし、此の契は諸佛の執持にして、菩薩の執持にあらざるなり。若し菩薩有りて、佛に從て受けず。能く此の契を行ずと云はゞ、是の處り有ることなし。若し金剛手ありて、佛に從て受けず、能く此の契を得と云

【四五】　此の處に脫句あらん。
【四六】　佛持。佛の加持護念の意。
【四七】　二身。法身と應身となり。
【四八】　須彌山(Sumeru)具には蘇彌盧と云ひ妙高山と譯す。
【四九】　末。粉抹の意。

り、二大母指、並べて二頭指の中節を押す、二無名指を直ぐ竪てゝ頭相捻す、二中指を蕊して、二無名指の後に向けて亦相捻す。四指の頭齊合して印成す。

その座は結跏を須ふ。亦驗を得んには、小聲に前呪を[四一]陰誦す。若し善男子、善女人有りて、此の契を持せんと欲すれば、心に十方諸佛を念ずること七遍し、然して後に當に此の契を結ぶべし。其の契は[四二]大月の十五日毎に此の契を結んで、萬遍を持誦せよ。十方世界所有の法門の應身即ち現ず。乃至三十三天も須らく至るべく、即ち至て更に滯碍なし。諸佛長生するが(如く)、我亦長生せん。諸佛成道するが(如くに、)我亦成道せん。諸佛人を度するが(如くに、)我亦人を度せん。諸佛無礙なるが(如くに)我亦無碍ならん。諸佛化身するが(如くに)、我亦化身せん。諸佛法身なれば、我れ亦法身なり。諸佛光を放てば、我亦光を放たん。諸佛寂定なれば、我亦寂定ならん。諸佛三昧に入れば、我亦三昧に入らん。諸佛説法すれば、我亦説法せん。諸佛不食なれば、我亦不食せん。乃至種種の諸佛所作の事、皆悉く能く爲し、能く作さん。何を以ての故に、此の中に於て、是れ八種の母たるが故に、及び八自在なるが故に、諸佛は常に、[四三]八自在を説くが故に。我れ此れよりして生じて、更に別の處なし。此の契あれば即ち能く八方自在の力を攝す。一一の方界に皆八方あり、一一の方に皆八種の隨心あり、何等をか八と爲す。一には變化隨心、二には慈悲隨心、三には救苦隨心、四には説法隨心、五には逆順自在隨心、六には諸の要契を攝して自ら來り相逐ふ[四四]隨心、七には所有の諸毒を善に向はしめ、佛身の無退轉に至るを得る隨心、八には世間所有の果報福德・能施所施・能割所割・能修所修、須らく成ずべくして即ち成じ、須く破すべくして即ち破する隨心なり。

善男子等、是の如くの隨心事中の一一に、皆な百十恒河沙の隨心事あり、具に説く可らず。若し求むるもの有る者は、但し晨朝に於て、契を結んで之を求むれば、遂ぐ可らざるは無きなり。若し果さゞる者あれば、諸佛の妄語なり。若し善男子、善女人ありて、此の契を持せんと欲する者、佛

【四一】陰誦。微音にて誦するを云ふ。

【四二】大月。白月を指す。白月とは、陰暦の一日より十五日に至るまでを指す。

【四三】八自在。
1. 一身を以て多身に示す。
2. 一塵身を以て大千界に滿す。
3. 大身を輕く擧て遠く到る。
4. 無量の類を現じて、而も常に一土に居す。
5. 諸根を互用す。
6. 一切法を得て、法想なきが如し。
7. 一偈の義を説くに、無量劫を經ること。
8. 身を諸處に遍じて、猶ほし虚空の如し。

【四四】隨心。意の欲する通りに成る義。

正に、前に現じ、十方の諸佛・菩薩・金剛・諸の天地神、日月星宿、五道巡官[三七]、司命司察を召さんと欲して、此の契を結び、呪を三七遍し、運心[三八]して十方に遍く、三遍を經て、一切を匝りて卽ち至る。十方の寶藏及び龍藏[三九]、伏藏神[四〇]等を召さんと欲すれば、契を以て天を指せば、卽ち其の前に現ぜん。神鬼及び諸金剛・天神・菩薩を使はんと欲し、乃至一切の道力を使令せんと欲する者は、契印を以て、口に陰誦すること七遍、或は三七遍すれば、時に應じて現前し、任意に使役せられん。每日、夜及び晨朝を問ふこと無く、契を結びて誦すること千遍に至れば、十方の如來、自ら其の力を助けん。何に況んや、諸の餘の一切外道及以び內道をや。諸の法術あり、幻惑ある者を破せんと欲する者、心を擧ぐれば、卽ち(之を破することを得ん。)大悲心を起して、(受苦の衆生の)救護を作さんと欲し、疑滯あること無ければ、(卽ち救護することを得ん)。諸有の病苦(に惱める者あり、)來りて救を求め、身より(病苦)を去る能はざれば、但此の契を結んで、口に(誦)じて、其の病人の邊を撿挍すれば、卽ち聖人ありて、自ら身を變化し、彼の病苦を救ふて、還て除差を得せしむ。此の法を用ゐんと欲すれば、必ず須らく消息を記持すべし。不淨を用ふる莫れ。若し不淨を用ふれば、一切を滯礙して成ずる者有ること無し。若し諸印法を久しく持すれども、成ずることを得ざる者は、此の契を結んで、日に千遍を持せよ。七日を經ずして、法として成らざるはなく、用ふる所、卽ち滯礙なからん。之を記せよ、之を記せよ、非人に傳ふる勿れ。勤苦し願求すれば、三七日を經て、佛菩薩たることを得ん。

(4) 如來母の印

第四如來母契（又金剛母と名け、亦菩薩母と名け、又諸佛教母と名け、亦諸法母と名け、亦諸印母と名け、又自在天母と名け、又契持母と名け、亦總持母と名く。）

先づ左右二手を以て合掌し、二小母指、交屈して掌中に入れ、二頭指鉤して、二小母指の頭を取

【三七】五道巡官。五道とは地獄・餓鬼等の六道と同じ、廣略の異のみ。六齋日には四天王が、帝釋天の命を受けて、人々の行爲の善惡を巡視すと云ふ。巡官とは此の四天王を指すならん。
【三八】運心。觀想の義。
【三九】龍藏。龍宮の經藏なり。龍宮は大海の底にありて、龍王の神力の所作なりと云ふ。
【四〇】伏藏神。伏藏守護の神なり。伏藏とは土中に埋伏せる寶藏なり。

若し善男子等ありて、佛・菩薩・金剛の心法を持(誦)せんと欲すれば、此の契に從ふに依て、念に應じて、卽ち不動智を得て、十方界に遍からん。これ聖・非聖、これ魔・非魔、及び諸の天仙、四果聖等、諸大鬼神等は、同時に卽ち本心をもつて、共同契合し、世間所有の事業、世辨・非世辨は、此れより卽ち和合して、佛心に同ず。何を以ての故に、佛の三昧門を得るが故に、諸佛の祕藏は、此の攝に從ふが故に、諸佛の頂輪は、此れより成ずるが故に、一切の金剛の依住する所なるが故に、十方の衆聖は、來りて歸命するが故に、一切の諸惡は善に迴向するが故に、所有の諸惡は、自ら心に攝するが故に、一切の諸障は、自ら消除するが故に、天魔[三三]波旬自もら降伏するが故に、裸形外道、成過の女は、自ら哀を求むるが故に、一切の龍藏は、自ら開發するが故に、諸の伏藏神は、自ら布施するが故に、龍王の寶珠は、自ら現前するが故に、[三四]閻羅天子、五道の開閉の所有る主は、當に自ら來りて懺悔すべきが故に、一切諸法現前を得ざるもの、此の契に依從すれば、卽ち現前することを得るが故に、一切の諸佛菩薩の逆順の諸(法)門は、自ら了知するが故に、一切菩薩の威光も、此の行人の身を遮る能はざるが故に、小大の願求皆果し遂ぐるが故に、若し善男子、善女人有りて、此の契を得て持するものは、淨心の中に於て、愼んで惑亂する莫れ。心を收めて定に在け、先づ[三五]三歸を念じて、戒を受くる心を發し、然して此の契を結ぶべし。之を結ぶの時に當ては、卽ち十方の地神有りて、香爐を執持して、此の人を供養せん。帝釋・梵王も、其の人の前に現じ、爲に願敎を說て印を持せん。大神立て左右に在り、爲に證明を作す。灌頂輪王及び執金剛神は、立て前後に在り、手に佛を扶け、甲は行者の身にあり、諸の金剛藏位は、虛空に立ち、大寶華を雨らして、行者を慰安し、十方の如來は、縱に十方に住して、白毫光を放て、行者の身を照し、光中の化佛は、大法輪を執て、行者を[三六]印し、頂を印するを得已て、所有る佛法、自然に了達す。此の契を作さんと欲せば、三種の香を燒く。一には檀香、二には薰陸、三には沈香なり、各別に燒くべし。三世の諸佛、同じく

【三三】波旬。波卑面(Pāj im-an)の訛音にして、惡者又は殺者と譯す。

【三四】閻羅。具には閻摩羅闍(Yama-rāja)羅闍は王の義。閻摩は元と人類の元祖にして男性なり。その女性を閻彌(Yamī)と稱す。此の二神は佛敎文學に入りて、人類の行爲の善惡を裁判し、罪惡を罸する役を演することと成れり。閻羅の世界は南閻浮提の地下五百由旬の所にありと云ふ。

【三五】三歸。歸依佛・歸依法・歸依僧なり。

【三六】印。加持護念する意。

要にして、成ずることを得んと欲するものは、初夜の間に於て、契を結んで持誦し、本坐を離れずして、便ち睡眠を取れば、十方世界の所有の要法、心の欲する所の者、卽ち自ら來らん。若し小通を求むれば、三日を經ず。若し大通を求むれば、七日を過ぎず(して之を獲得し、)夢寐の中に於て、佛自ら頂を〔三〇〕印し、その功力を護らん。若し諸佛菩薩・神鬼精靈・金剛等を見ることを得んと欲し、印を結ぶ時每に、印をもつて、眼を印すること、一千八十遍に至れば、卽ち見て必ず須らく心を安んずべし。恐動せしめて、(他)人をして心を失せしむる勿れ。若し諸惡災害、本土に及ばんとすれば、契を以て之を呪すること一百八遍し、契を以て大を指し、成佛の字を書けば、其の災は卽ち滅して、更に復生ぜず。若し此の契を持する時、諸魔の惱を被らば、但小賊と言はゞ、再三を經ずして、其の魔卽ち退かん。世間の小小の諸病、及び難治不可識のものは、但契を結んで呪すること一日を滿ずれば、癲病も亦除かん。若し龍藏に於て、須ゆる所の法要は、契を結んで呪を誦じ、龍王の名を呼べば〔三一〕一宿を經ずして、其の法自ら現はれん。之を見る時に當て、誦持更ざることを得ず、忘失せざれ。若し此の法を得れば、但自ら之を祕して、〔三二〕非人に傳ふる勿れ。之を愼め、之を愼め。此の契を用ゐんと欲すれば、事の大小を量り、大事に小事を行ひ、行用を(誤り)て、其の靈驗を損する莫れ。之を記せよ、之を記せよ。

(3) 菩提心の印

第三に正に菩提(心)の契を授く〔一に橋授諸祕門の契と名け、亦頂輪契同一切佛用と名く。〕

先づ左右の二手を以て、無名指は中指と頭指との兩間に頭を出し、次に二中指と二頭指と以て、頭を並べて相捻し、四指の頭を齊ふして相著け、二大母指は、二頭指の上節の文を捻し、二小指は頭を並べて直ぐ竪て、腕を合して印を成ず。

〔三〇〕印。加持護念する義。

〔三一〕一宿。一夜を過ごす意。

〔三二〕非人。數に相應せざる人の意。

入して、永く復出です。縱ひ出る者あるも、是れ佛の慈悲なり。然るに始て出ることを得るとも、愼んで瞋を生ずる莫れ。此の呪を持する者、若し瞋を生ずれば、十方(の諸佛・諸菩薩・諸天善神は皆悉く)浩沸[二三]して、歡喜せざるなり。(瞋を生ぜざる)時には、十方(國土)始て安し、諸の善男子、こは當佛の首、諸法の母、諸契の王なり。十方の諸佛は、此より生じ、諸佛世尊の如く、(過ち有る者なし。若し過たざる者は、必ず須らく、記持して輕用する勿れ。事の大小を量りて、之を用ゐよ。若し諸法を持するには、先づ此の契を以て首と爲す。此の契を得ざれば、諸法は主なく。縱ひ成就すること有るも、所有の身心、亦決定せず。諸神は所作を衞らず。諸法に諸の障難多からん。之を愼め、之を愼め、淨用せざる莫れ。

(2) 菩提心成就の印

第二菩提心成就の契(一に十方如來同印頂契と名く、前呪を用ふ。)

先づ左右二手を以て、中指相交へ、右にて左を押す、虎口の中に於て頭を出す。二無名指並び屈して、二中指の背上を押し、二母指各よ[二四]捻し、二無名指の後相にて頭を拄し、二頭指は二無名指の背上に於て頭相拄し、二小指は直く竪て合せ、頭相拄して成ず。若し善男子、善女人、此の契を持する者は、業を轉じ障を消し、速に無上正等菩提を證せん。常に此の契を持すれば、聞持不妄なるを得、諸の法要に於て、自然に通達し、久遠より來た、未だ(憶)持せざる所の者も、心に應じて所作皆悉く契合せん。持法の時、諸の外道及び、[二五]魔波旬有り、來りて惱さんと欲するも、(行者)[二六]心を擧ぐれば卽ち退く。須ゆる所有らんと欲して、契を[二七]點ずれば卽ち來る。乃至千變萬化して、能く人法を惑はすものも、契を結んで心に持(誦)すれば、卽ち本形を現ず。地中の[二八]伏藏、龍宮の寶處も、若し[二九]所須ありて、契を以て之を指せば、時に應じて卽ち至る。十方世界の所有の法

【二三】浩沸。騷擾する貌。

【二四】捻。おさふ。

【二五】魔波旬。具には摩羅波卑夜(Māra pāpīyān)障碍罪惡者の意。

【二六】心を擧ぐるとは、思念する意。

【二七】點。契を結んで念する意。

【二八】伏藏。土中に埋沒せる寶藏なり。

【二九】所須。必用の義。

せん。唯願くは、如來、大悲心を起して、此の[一六]神妙の章句を說き玉へ。大衆欣仰して、今受持せんと欲す。と

佛は諸の善男子に告ぐ、樂說を便ち說かんとす。諦聽せよ、諦聽せよ。その時、如來は復菩提心を以て、大衆を[一七]契護して、心をして不動ならしめ、卽ち呪を說て曰く、一切佛心中心大陀羅尼

[一八]唵跋囉跋囉、糝跋囉糝跋囉、印地㗚耶、毘輸達爾、哈哈嚕嚕、遮隸迦嚕遮隸、莎嚩訶。

(1) 諸願成就の印

第一先づ左右の二手の、二無名指を以て、各〻屈鉤して、中指の後を忿し、二大母指を以て、各〻屈して、二小指の甲上を捻し、二頭指各〻屈して、二無名指の頭に鉤し、二中指は直ぐ竪て、頭指を[一九]捻す。腕を合して心上に當て、其の印卽ち成す。若し人此の契法を修持する者は、菩提心を得、菩薩智を具足し、[二〇]一切の波羅蜜門を具足し、具攝して心にあり、[二一]所有の諸佛菩薩、及び諸の祕門は、是れ此の印の攝なり。淨室に於て、此の契經を受持すること、七日間すれば、所有の法要は、卽ち目前に現はれん。諸の魔道と衆生道と及び諸の鬼神道とに於て、是の如く隱形伏匿す。此の印契を持すれば、自然に處を知り、更に形を變ぜんと欲すれば、變ずることも亦得べし。諸の善男子、若し此の契を得れば、念に應じて、卽ち十方諸佛ありて、其の頂に雲集せん。念に應じて、卽ち十方菩薩ありて、求むれば侍者と爲らん。念に應じて、卽ち十方の金剛ありて、求むれば給事と爲らん。念に應じて、卽ち十方の諸天ありて、侍衞し供養せん。諸魔眷屬、悉く本土を捨て、來りて法威を助けん。一切の[二二]毘那夜迦、求むれば來りて供養せん。

諸の善男子、魔怨外道を降伏せんと欲せば、先づ此の契を結んで、三七遍を呪せよ。擧げて心上に在き、身を迴はして起立し、左轉一匝すれば、其の時、大地震烈し、其の魔の諸衆は、下方に陷

【一六】神妙の章句とは如來の心中心呪を指す。

【一七】契護。加持護念する意。

【一八】Oṁ bhara bhara saṃbhara saṃbhara indriya viśuddhāni hūṁ hūṁ ru ru cale karu cale svāhā.

【一九】捻。指頭にておさふ。

【二〇】一切波羅蜜門。施・戒・忍等の十度を指す。

【二一】所有。あらゆる。

【二二】毘那夜迦（Vināyaka）常隨魔又は障碍神と稱し、象頭人身なり。

愼んで自讃する莫れ、他の過を見る莫れ。第四に諸の求法に於て、譏嫌を生ずる莫れ、諸の佛敎に於て、過惡を遮護せよ。師僧中に於て、父母の想の如くせよ。第五に若し願敎を行ぜば、愼んで遺失する莫れ、諸の貧富等に於て、心に觀察するには、須らく世諦に懷きて、而して諸人に順せよ。第六に佛の句偈に於て、常に須らく警察すべし。修する所の諸法は、必ず須らく、遍持すべし。乞求する所あらば、心に應じて卽ち施せ、愼んで上中下根を觀察する莫れ。第七に持する所の契印は、淨行ならざるなく、[一二]時結にあらざる莫れ、名聞利養の爲に、而も用ふる莫れ。行ずる所の法あらば、亦[一三]非衆生を捨つることを得ざれ。第八に一切所有に於て、偷竊を生ずる莫れ。非理の惡を斷じ、諂佞を行ずる莫れ。佛の法要に於て、護ること己れの命の如くせよ。乃至良賤に[一四]二心を存ずる莫れ。第九に諸の苦際を救ふて、至誠ならざるなかれ。又實に退心する莫れ。自ら法を輕んずる莫れ。他をして輕んぜしむ莫れ。須らく己れの謗を斷じて、他をして謗らしむる莫れ。必ず須らく、質直にして、常に耎語を行じ、善道を勸存して、大慈悲を起すべし。第十に邪行を斷除して、虛空を損する莫れ。志信堅固にして、疲苦を辭せざれ。常に[一五]不捨を勸めて、善知識を慕ひ、或は林泉淸淨の處に於て、廣く弘願を發し、愼んで怯弱なる莫れ。念念に存攝して、邪見(を起さ)しむる勿れ。常に大乘に住して、善知識あれば、承迎禮拜せよ。

是の如くの十事を(善く守りて、罪惡を)斷除する者は、是れ持法の證なり。決定して直に無上菩提に至りて、更に退轉せざらん。菩薩及び金剛身を修して、滿足せんと欲するも、(決して)難きにあらず。と

三、一切佛心中心大陀羅尼と其の印契

その時、諸の菩薩は、此の說を聞き已て、佛に白して言く、世尊、此の願行の如く、我れ今修學

【一二】時結。當に結印すべき適當の時期に於て行ふ意。
【一三】非衆生。罪惡の人を指す。
【一四】二心。善惡愛憎等の差別心。
【一五】不捨。攝取して捨てざる意。卽ち悲心なり。

に、扶持せしむるが故に、能く一切眞至の[九]菩提をして、退轉なからしむるが故に、能く世間所有の事業をして、自ら明了ならしむるが故に、乃至過去・未來・現在の一切世界の[一〇]有通・無通・有智・無智・有賢・無賢は、盡く歸伏するが故に。その時に大會は、此の説を聞き已て、咸く聽受せんと欲す。大衆の中に於て、忽に光明起り、百千日に過ぎたり。その時、實德菩薩は、佛に問ふて言く、此れは是れ何の光なりや、何等の因緣なりや。と

世尊、答て言く、此は歡喜光なり、心中心(呪)より生ず。と、當に知るべし。此の光は量る可らず、稱す可らず、讃歎す可らず。亦印可すべからざるなり。何を以ての故に、諸佛と同じく、印可無きが爲めの故なり。諸の如來と同じく、所得なきが故に、一切の諸相、亦無見なるが故に、愼んで諸根を守りて、捨離すること無きが故に、諸の魔怨をして、便を得ざらしむるが故に、能く魔王の諸の道路を遮るが故に、是の因緣を以て、心中心(呪)と名く。と

その時、一切の大衆、佛に白して言く、世尊、我等が所修の因緣、及び佛の妙敎より、未だ曾て是の如く讃歎すべき功德・大威神力を聞かざりき。唯願くは、如來、我等の爲に、此の句、證修覺地を宣説し玉へ。唯願くは、我をして中に於て修行せしめ玉へ。と

二、證修佛地

その時、如來は諸の菩薩、諸の善男子に告げ玉はく、今當に宣説すべし。證修佛地に十種の持あり、必定して、成就せん。何等をか十と爲す。

第一に心を持し、法に於て礙なく、佛に於て信を生じ、心に於て平等なり、衆生に於て慈を生じ、色に於て無著なり。第二に持戒して闕かざれ。常に(心を)[一一]攝して定に在り、不妄語を修し、好んで衆生に施して、憍慢を斷除す。第三に惡を行ふ莫れ、不殺戒を修して、惡食を食する勿れ。

【八】扶持。擁護の意。
【九】菩提(bodhi)覺智の義。
【一〇】有通。五神通力を有する者。
【一一】攝。放心なき意。

その時に如來は三昧より起て告て言く、諸の善男子、善哉・善哉、衆生は沒し盡せり。汝悉く知るや不や。我今諸の衆生は、我が法を解せず、我が心を知らず、我が際に到らず、魔に持せらる。如何んぞ救ふことを得ん。誰れか方計ありて護ることを得るや。誰れか方計ありて、此の毒を(除き、衆生を)攝し得るや。其の時に、卽ち二十千萬億の菩薩有り、皆是れ灌頂大法王子にして、威德自在なり。來りて佛に白して言く、世尊、我に菩薩の慈あり。と、佛の言く、此は慈の攝に非ず。と、復百千萬億恒河沙數の世界に金剛密迹あり、一一の密迹は、四天下の力士を持す。前んで佛に白して言く、世尊、我れ能く力にて攝す、と。

佛の言く、金剛、此は力の攝にあらず。と、その時に復一切世界の大自在天あり、能く身を變じて、佛の前に來り、佛に白して言く、世尊、我に自在あり、變化の所攝なりや。と、佛の言く、汝は幻惑の所知にあらず。と、衆會の中に於て、一菩薩あり、名けて實德と曰ふ。佛に白して言く、是の如くの金剛・菩薩・天仙は、皆悉く攝持する能はざるや。佛、今如何んが、諸の衆生をして、此の難を脫することを得せしむるや。と

その時、如來は實德菩薩に告て言く、唯如來の心中心(呪)に(餘)の及ぶ能はざるものあり。何を以ての故に、能く諸魔をして、大慈を生ぜしむるが故に、能く諸法をして應に隨て現ぜしむるが故に、能く諸佛をして常に離れざらしむるが故に、能く諸菩薩をして眷屬たらしむるが故に、能く諸金剛をして、威力を施さしむるが故に、能く諸天衆をして、常に擁護せしむるが故に、能く諸大[七]藥叉をして法衆を成助せしむるが故に、能く一切の諸大鬼神をして、歡喜を生ぜしむるが故に、能く持誦者をして、佛力に等しからしむるが故に、佛心に等しからしむるが故に、佛智に等からしむるが故に、佛威に等しからしむるが故に、能く持者の心に爲作せんとする所をして、辯ぜざること無からしむるが故に、能く所有の障難をして皆な斷絕せしむるが故に、能く帝釋梵王をして、常

【七】藥叉(Yakṣa)速疾鬼・能噉鬼等と譯す。空中を飛び、人に害を加ふ。雪山の北に住すと云ふ。毘沙門天王は之を領し玉へり。

佛心經品亦通大隨求陀羅尼　卷上

三藏　菩提流志　奉詔譯

一、心中心呪を說くに至る因由

是の如く我れ聞きき。一時、佛は倶熖彌國金剛山頂に住し、遍く十方を觀ずるに、皆な火色の如し。その時、如來卽ち噓と長歎し、普く衆生を視るに都て[一]差途なし。善い哉、衆生は當に何んの救ふ所ぞと思惟し已訖れり。一切諸佛の世界、及び諸の菩薩の境界、上は[二]三十三天に至り、下は[三]金剛際、及び魔宮殿に至るまで、悉く皆震動す。その時に卽ち過・現・未の一切諸佛有りて、正思を念せり。復諸の菩薩等有りて、自心の中に住して、而も復動ぜず。復[四]金剛(神)ありて、諸の眷屬の執金剛を領し、其の座に安んぜずして、十方に遊行し、復諸の天仙・魔衆有りて、怖れ走りて(身を置く)處なし。

その時卽ち[五]金剛藏菩薩有りて、前みて衣服を整ひ、佛に白して言く、世尊、今の此の瑞は惡相とやせん。、善相とやせん。と

その時に如來は、但自ら思念して、而して復答へず。その時、會中に菩薩あり、金剛慈と名く。金剛藏菩薩に告げて言く、是の相は不善なり。佛は今悲愍して、慈心三昧に入り、名て善と爲さず。と、且つ自ら心を淨めて、佛の宣べ給ふ所を待つ。

その時に復德藏菩薩あり、金剛慈に問ふて言はく、云何んが名けて慈悲三昧と爲す。と、卽ち金剛慈、告て言く、正に是れ[六]救攝の處なり。善哉、善哉。と、その時、各ゝ身心を淨め、須臾の間に、如來の心、諸の衆生に遍するを見る。

【一】差途なし。衆生は皆悉く佛性を具へ、佛の本性と毫も異ること無き意。

【二】三十三天。忉利天(Trāyastriṃśa)欲界の一天にして、須彌山の頂上にあり。帝釋天を主とす。

【三】金剛際。金輪際とも云ふ。須彌山の水面より八萬由旬の下にありて、厚さ三億二萬由旬にして、水輪と地輪との間にあり。

【四】金剛神。護法神とも稱し、手に金剛を持して魔衆を擊退す。

【五】金剛藏菩薩。等覺の菩薩が、金剛心の位に於て、極微細の妄執を斷ずる三昧に住する尊なり。時に忿怒身を現するは、極細妄執を斷ずる勇奮の狀を示す。

【六】救攝。救濟攝取卽ち救ひ取る意。

を遣はして之を迎へ、天后復深く三藏を欽し、東洛の福先寺に住せしして、佛境界・寶雨・華嚴等の經典、十一部を譯し、中宗の神龍二年（706 A.D.）に京兆の崇福寺に住して、大寶積經を譯するなぞ、譯經の功績頗る大なるものがある。開元十二年（724 A.D.）に駕に隨て、洛京に至り、長壽寺に住し、同十五年（727 A.D.）十一月に入寂し、春秋一百五十六、謚して開元一切遍知三藏と稱せられたと云ふことである。三藏が支那に來られた時には、既に百歲を超えて居られたのであるから、譯經の悉くが三藏の手に成つたものではなく、寧ろ三藏は其の責任ある最高顧問の位置に置かれたのであらう。宋高僧傳に依れば三藏の譯場には、天竺の大首領伊舍羅（Īśara?）等が梵文を譯したと言はれて居るから、此等の人々が重に譯したものと思はれる。而して本經は何時に譯されたのであるかと云ふに、吾人未だ其の信ずべき記錄を見出し得ないのであるが、貞元新定釋敎錄第十四に依れば、長壽二年（則天武后の年代693 A.D.）に此の經に類した經が二三部譯されたことに成つてある。然るに同錄には本經の名が擧げて無いのであるが、恐らく記錄洩れであらうと思はれる。長壽二年說は大正新脩大藏經勘同目錄（二二〇頁）に出て居るが、此の說が眞實であるとすれば、菩提流志一百十二歲の時に、本經が譯出されたことに成る。本經を始めて日本に請來したものは、弘法大師である。大師は延曆二十三年（804 A.D.）に入唐し大同元年（806 A.D.）八月に歸朝して居られる。而して大師の御請來目錄には、菩提流志譯の經は、佛心經二卷と不空羂索眞言經の第六卷と第二十卷とを、請來されたことに成つてある。之れに依て見れば、本經が譯出されてから一百十三年目に、日本に傳來されて居るのである。

昭和六年九月十五日

譯者　神林隆淨　識

神と地祇とは、語は稍ゝ似て居つても、其の思想内容を全く異にして居る。現に角、此の如く支那道教に於て使用して居るかの如く思はれる語を、譯經の上に使用したと云ふことは、譯者の責任に歸すべきであると思ふ。譯者は支那人に佛教思想を普及する爲には、彼等の思想に近いものが、佛教にも存して居ると云ふ所を示し、かくて支那人が佛教に注意を拂ひ、遂には佛教を信ずるに至るであらうと云ふ考から、故意に斯の如き譯語を使用したとすれば、譯者の責任として甚だ輕からざるものがあると思ふ。譯經者は其の原典の意味を誤りなく、正直に他國語に飜譯すべき事であつて、其所に教義宣傳の考を交へてはならない筈である。

本經が支那作のものでなく、或る原文の譯本であると云ふことを、吾人は深く信じて居るのであるが、其の理由としては、本經が支那作であれば文章に於て支那的の風韻があり、且つ文章の如きも、一層完全に出來上つて居る可き筈である。

本經は漢文譯の儘では、意味の明瞭しない個所が多くあるので、吾人は淺學をも顧みず、字句を補足して讀むことを試み、而も其の補足した語を明にする爲に、其の語を括弧の內に入るゝことにした。又中には全く不用の文字と思はるゝものが、漢譯には存して居るのであるが、此は一一注意するのも煩しい程であるから、斷りなしに省略して和譯したのである。此の點から見て吾人は本經を以て未再治本と斷定して居る。隨て又一方に於ては、本經が支那に於て故意に作られたものでなく、其の原文の存在すべきを信じて居るものである。

本經の內容に付て尙ほ一言附加へたいことは、心中心呪は、不空譯の隨求卽得神變加持成就陀羅尼儀軌には、單に心中眞言と言はれてあること。尙又本經に明されてある印契に關しては、大隨求卽得大陀羅尼明王懺悔法（正藏二〇、六四九）に明してある所と、稍ゝ異つて居るが、中には同一のものもあるから、參照する價値があると云ふことである。

本經の譯者菩提流志(Bodhiruci)三藏(581—727 A.D.) は、宋高僧傳第三に依れば、南天竺の婆羅門 (Brāhmaṇas) 種族にして、姓は迦葉 (Kāśyapa) と云ひ、年十二にして婆羅門の學に志し、聲明卽ち文法學(Vyākaraṇa)並に僧佉(Sāṃkhya 數論) 等の論を學し、其の外に曆數・呪術・陰陽・讖緯等にも精通し、其の後年六十歲を超えてから、志を飜して佛門に入り、耶舍瞿沙 (Yaśa-ghoṣa 彌音)三藏に就て諸の經論を學し、其の後五天を遊歷して、佛教の研鑽に一身を委て居つたが、其の聲譽は遠く唐の高宗大帝の知る所と成り、永淳二年 (683 A.D.) に使

の問答が記述されてある。此の點は雜阿含經第二十二(正藏二、一五五)等に於て釋迦をば毘盧遮那と呼んである所と、其の旨略ゝ一致して居る。次に純密思想が現はれて來るや、釋尊は變化身であり、大日如來は法身であるとして、明確に區別されることに成つた。かく嚴密に區別が立てられるやうに成つてからは、大日如來の對告主は、金剛手祕密主であることに成つた。隨て純密敎の敎系に於て、阿難が大日如來に對して質問を發して居る記錄が殆んど全く見出すことが出來ないのである。之れに依つて見るに、本經の作られた當時には、尙ほ未だ佛身觀の思想が、充分に發達して居なかつたことを明に示して居る。

次に阿難尊者は、聲聞の代表的人物である。聲聞衆は大乘思想を甚だ喜ばず大乘敎は佛說では無いと一般に認めて居る又大乘敎系の人々も、聲聞一派の者に對しては、小智の輩にして共に深理を語るに足らずとして退け、小乘聲聞の徒を極めて卑下して居るのが常である。此の小乘聲聞の代表的一人物を出して、釋尊の大通力を示し、彼をして不可解なりとして悲歎せしめ、其の後遂に釋尊の大通力を信じて、佛陀の威德を讃歎し、此の祕密乘に歸信する一場面を記述して居るのは、小乘聲聞の徒の祕密佛乘に歸順したことを記述して居るのである。又一方に於ては、祕密佛乘が釋尊の在世當時に於て、既に存在し、一般の聲聞の弟子等から、如何に不可解のものであるとして、迎へられて居つたかと云ふ一面をも示して居るのである。

以上二項は、下卷に記述されてあるが、尙次に上卷に於て、殊に注意すべき事項は、五道巡官、司命司察、若しくは精祇と稱する語が記されてあることで、此は支那の道敎思想の混入を思ひ起さすものである。此の如き語句があるからとの理由で、此の經典全部を支那製作のものと斷定を下すことは粗忽のやうにも思はれるが、而も此の如き語の混入して居ることは、本經に對する信用を薄くするものである。吾人の考としては、此の經は矢張譯經であつて、支那に於て故意に作られたものとは思はれない。而して五道巡官とは四天王が、娑婆世界の人間の行爲を、六齋日に巡視すると云ふ信仰から、其れを更に推し廣めて、五道の衆生の行爲を監視すると云ふことに成つたことではあるまいかと思つて居る。又司命司察も、四天王巡察の思想から、起つた語であると想像される。次に又精祇と云ふ語は、純密敎の經典には、全然現はれて來ない語であるが、之を地神と解すれば、別に不審にはならないのであるが、印度の地神と、支那思想の精祇とは全く異つて居つて、天神地祇と云ふ語と、印度で言つて居る天

佛心經解題

本經は主として大隨求陀羅尼の心中心呪の功力の廣大なること、並に此の呪に俱ふ諸の印契に不可思議力の存することを明してある。密教の經軌中に於て印契を高調して明してあるのは、顯譯年時の前後を通じて、唯此の經あるのみと言つても過言では無いと信ずる。殊に同一の陀羅尼を誦じながらも、印契の異なるに連れて、特別の效驗が現はれて來ると明してあるものは、此の經の外には殆んど其の類例が無いと思はれる程である。

本經は心中心呪を明すことが、上下二經に亘つての本旨と思はれるが、而も其の全文の結構の上から見て、完本とは思はれない樣な感がある。上卷は比較的に調ふた記述法に依つて居るが、下卷は阿難尊者が密教に引き入られる道程を明して居るのであつて、阿難と釋尊との數回に亘る問題が繰返されて居る。本經の內容は左の通りである。

上卷

一、心中心呪を說くに至る因由
二、證修佛地
三、一切佛心中心大陀羅尼と其の印契
　1. 諸願成就の印
　2. 菩提心成就の印
　3. 菩提心の印
　4. 如來母の印
　5. 如來善集陀羅尼の印
　6. 如來語の印
　7. 安心の印
四、授法壇
五、諸印契の傳來

下卷

六、阿難の悲歎
七、遍照如來の大通力
八、大通力と心中心呪
九、心中心呪の作法
十、定　印
十一、持　戒
十二、除　疑　偈
十三、阿難の歎佛
十四、佛は心中心呪を讚歎す
十五、十二種の心
十六、隨心陀羅尼の作法並に諸功力
十七、讚　佛

以　上

右の各節の內容を說くことを略し、本經中殊に注意す可き二三の事項に就て述ぶれば、本經に於ては、釋尊と大日如來とを同一佛身と見做して居るの觀がある。本經卷下に於て阿難尊者と毘盧遮那佛と

同じく總持の[七三]諸善逝に入る。願くは共に有緣の修學者は。無上の淸淨海に安住せんことを。

三種悉地祕密眞言法一卷（畢）

【七三】諸善逝。諸佛。

菩提心は此れ金剛部、大悲は蓮華部、方便は此れ應化身なり。是の故に[59]阿字は是れ胎内にして、位を指せば、等覺已前に在り、[60]娑字は胎外にして、位を指せば妙覺なり。[61]嚩字は是れ用にして、一切の法輪は咸な此の門に依る。跡恣の二化は、[62]十界を濟度するなり。此は如來の智印にして、是の心の實相は、一切智智の果なり。卽ち菩提心を因と爲し、大悲を根と爲し、方便を究竟と爲す。一切の智門は、五種の義を以て、衆緣と爲すなり。若し衆生有りて此の法教を知らば、世人應に供養すべきこと、猶ほし[63]制底を敬ふが如くす。制底は是れ生身[64]舍利の所依なり。是の故に諸天世人、福祐を祈る者は、皆悉く供養す。若し行人是の如くの義を信受する者は、卽ち法身舍利の所依なり。復梵音の制底と[65]質多と體同なり。此の中で祕密には、心を謂つて、佛塔と爲すなり。第三の曼荼羅の如く、自心を以て基と爲す。次第に增加して乃し中胎に至る。涅槃の色は最も其の上に居す。故に此の制底は甚だ高きなり。又中胎八葉より次第に增加して、乃し第三の隨類の普門身に至り、處として遍ぜざる無きなり。故に此の制底は極て廣し、蓮華臺[66]達磨駄都は、謂ゆる法身の舍利なり。若し衆生此の[67]菩提心印を解する者は、卽ち[68]毘盧遮那に同じ、故に世間應に供養すべきこと、猶ほし制底を敬ふが如くすべきなり。然るに毘盧の身土は、[69]依正相融し、[70]性相同一にして、眞如は法界に遍滿し、大我の身口意は平等にして、太虚空の如し、虛空を以て道場と爲し、法界を以て床と爲す。大日如來は、此の道を知見せしめんが爲に、二種の法身を示す。智法身の佛は、實相の理に住し、自受用の故に、[71]三十七尊を現じ、一切をして不二の道に入らしむ。理法身の佛は、如如寂照に住し、法然常住不動にして、八葉を現じ、自他受用の爲に、三重曼荼羅を示し、[72]十界をして大空を證せしむ。この理智の殊、廣略の異有りと雖、本來一法にして、曾て殊異なく、萬法は一阿字に歸し、五部は一遮那に同ずるなり。

我は毘盧遮那に依りて、心智の印を開き、標義を建つ、無量の功德にて、普く莊嚴し、

【五九】阿字 अ

【六〇】娑字 स

【六一】嚩字 व

【六二】十界。六凡四聖なり。六凡とは地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天、四聖とは聲聞・緣覺・菩薩・佛。

【六三】制底(Caitya)。佛の納骨塔。

【六四】舍利。梵語具には舍利羅(śarīra)、身骨の意。

【六五】質多(citta)。慮知心。

【六六】達磨駄都(dharma-dhātu)。法界。

【六七】菩提(bodhi)心。覺心。又は智心。

【六八】毘盧。大日法身。

【六九】依正。依法と正法とあり。依法とは山河大地等の器世間、正法とは之の器世間に正住する有情の萬類なり。

【七〇】性相。性とは實體又は本體の意、相とは現象に當る。

【七一】三十七尊。五佛・四波羅蜜・十六大菩薩・四攝・八供養。

【七二】十界。六凡四聖なり。

曼荼羅の中胎と爲り、其の外の八葉は亦佛の位次に隨て、列布するなり。四方は卽ち是れ如來の[四九]四智、其の四隅葉は、卽ち是れ[五〇]四攝の法なり。且つ東南方は普賢にして、是れ菩提心の妙因なり。次に西南方は文殊にして、是れ大智慧なり。次に東北方は彌勒にして、是れ大慈なり。大慈大悲は、倶に是れ第二義なり。次に西北方は觀音にして、卽ち是れ證なり。謂く行願成就して、此の華臺の三昧に入るなり。其の四方葉中の初の[五一]阿字は、東方にあり、菩提心に喩ふ。最も是れ萬行の初めなり。黃色は是れ金剛性、其の名を寶幢と曰ひ、亦阿閦佛と名く。次の[五二]阿字は南方にあり、是れ行、赤色にして火の義なり。卽ち文殊の義に同じ、卽ち是れ華開敷にして、亦寶生佛と名く。次に[五三]暗字は西方にあり、是れ菩提なり。萬行を修するが故に、等正覺を成ず。白色は卽ち是れ圓明究極の義、又是れ水の義、其の佛を阿彌陀と名くるなり。次に[五四]惡字は北方にあり、是れ正等覺の果にして、其の佛を鼓音と名く、是れ釋迦牟尼なり。卽ち是れ大涅槃にして、迹を極め、本に還るが故に、[五五]涅槃なり。佛日已に涅槃の山に隱るゝが故に、色は黑なり。次に卽ち中に入る、[五六]惡字長聲是れ方便なり。卽ち知る、此の心法界の體は、本來常に寂滅の相なり。此は是れ毘盧遮那本地の身、華臺の體、八葉を超え、方所を絕し、有心の境界にあらず、唯佛と佛とのみ、乃し能く之を知る。此の方便を以て、大空に同じく、而して衆像を現じ、中心は空にして、一切の色を具す、卽ち是れ加持世界、曼荼羅普門の會にして、處として有らざるなきなり。但し是れ如來の一身、一智、一行なり。是の故に、八葉は皆是れ大日如來の一體なり。是の故に、中尊の大日は是れ法身なり。祕密主は金剛慧印にして、卽ち是れ[五七]般若なり。觀自在は持蓮華印にして、是れ解脫なり。卽ち身密は法身の德、口密は是れ般若の德、意密は是れ解脫の德なり。般若に因るが故に、解脫を得、解脫は般若に依る。此の二は法身の體に依りて、不卽不離、一を闕くも得ざること猶ほし[五八]伊字の三點の如し。

【四九】四智　大圓鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智。
【五〇】四攝。鉤(布施)・索(愛語)・鏁(利行)・鈴(同事)。
【五一】阿字　𑖀
【五二】阿字　𑖁
【五三】暗字　𑖀𑖽
【五四】惡字　𑖀𑖾
【五五】涅槃(Nirvāṇa)。入滅又は煩惱妄想の無くなる意。
【五六】惡字長聲　𑖁𑖾
【五七】般若(prajñā)。智慧。
【五八】伊字の三點　𑖂

十方界の一切衆生を利益するは、皆成佛の義なり。凡人の[四一]汗栗駄心（これを眞實心と云ふ。）の形は、猶ほし蓮花の合して、而して未だ敷ざる像の如く、筋脈ありて、之を約して以て八分と成す。男子は上に向き、女人は下に向ふ。此の蓮華を觀じて、其をして開敷せしめて、八葉の白蓮華と爲し、此の臺上に阿字を觀じて、金剛色と作すなり。

復阿字は方黄壇の如く、身は其の中に在り、[四二]阿字より[四三]羅字を出し、身を燒て悉く灰と成り已んぬ。此の灰の中に[四四]縛字を生ず、其の色は純白なり。此れより阿・鑁・囕・唅・欠の五輪字を出生す。即ち腰下より頂上に至り、[四五]身の五處に安立す。謂く淨菩提心なり。此の五字門を以て、緣と爲して、大悲の根を生ず。佛の[四六]娑羅樹王は增長し、彌布して法界に滿ち、然して一切法は即ち此の五字門に出る。本より不生にして言說を離れたり。自性淸淨にして、因緣なく、虛空の如くなり。八葉を位(座)と爲し、臍より心に至るを金剛臺と爲す。（海中に堂を立つ。）臍を大海と爲し、臍より已下は、此れ地居の諸尊位にして、海岸の邊にあるなり。謂く諸佛大悲の海より、金剛智を生ず。金剛智より一切の佛會を生ずるなり。此の心の八葉花臺の上に於て、[四七]阿字を觀じ、此の字より無量の光を出し、心中より四散して、合して光鬘と爲ること、猶ほし花鬘の如く、普く一切の佛刹に遍じ、此の光は頂より、足に至り、周匝して行者の身を環遶するなり。復觀ず、[四八]暗字は頂上にあり、轉じて中胎藏と成り、此の字より三重の光焰を生じ、一重の光は遍く、咽上に遶り、咽より頂に至り、光照の及ぶ所に、諸尊隨て現じて、第一院の曼荼羅を成ず。次に一重の光は、遍く心上に遶り、臍より以上咽に至る。諸尊隨て現じて、第二重の曼荼羅と成る。次に一重の光は、遍く臍上より臍以上に遶り、諸尊隨て現じて、第三重の曼荼羅を成ず。即ち是れ世間天の院なり。諸尊の形色相好、各々差別あり、宛然として自身の中に具足し、猶ほし親しく佛會に入るが如し。而して自身都て曼荼羅身と成る、即ち是れ普門の法界身なり。其の中胎藏は即ち是れ毘盧遮那自心の八葉華なり。即ち此の心蓮華臺上に於て、

【四一】汗栗駄(hṛdaya)。處中心と譯す。
【四二】阿字
【四三】羅字
【四四】縛字
【四五】身の五處。心、額・項・兩肩。
【四六】娑羅(śāla)樹。
【四七】阿字
【四八】暗字

こと一遍すれば、藏經を一百遍轉讀するが如し、若し一遍讀誦すれば、八萬四千の十二[三五]圍陀藏經を誦するが如く行人の一切の苦難を除く。

卽ち如來の一切法平等に入り、一切の文字、亦皆平等にして、速に[三六]摩訶般若を成就することを得。兩遍誦ずれば、億劫生死の重罪を除滅す。文殊・普賢は四衆に隨逐して、圍遶し加被す。この慈無畏・護法善神は、その人の前にあり、若し四遍誦ずれば、總持して忘れず。若し五遍誦ずれば、速に無上菩提を成ずるなり。

中品の悉地は[三七]阿・尾・羅・吽・欠なり、これを入悉地と名く。能く枝葉を生じて、遍く四方に滿つ、光明光耀は佛の法界に入る。若し一遍誦ずれば、藏經一千遍を轉讀するが如し。これを降伏四魔六趣、滿足一切智智剛名金句と名くるなり。

上品の悉地は[三八]阿・鑁・藍・唅・欠なり。是を祕密悉地と名け、亦成就悉地と名け、亦蘇悉地と名く。蘇悉地は遍法界なり。佛果を成就して、大菩提を證する法界の祕言なり。光明遍滿して、唯佛と佛とのみ、能く此の門に入るなり。緣覺と聲聞とは照すこと能はず、此を亦祕密悉地と名く。若し一遍誦ずれば、當に藏經一百萬遍轉讀するが如し。

出悉地は足より腰に至り、入悉地は臍より心に至り、祕密悉地は心より頂に至る。是の如く三悉地の中、出悉地は化身の成就なり。入悉地は報身の成就、祕密悉地は蘇悉地の法身成就なり。實に是れ三種の常身、正法の藏、法身遮那具足の體、[三九]五部[四〇]三部眞實の源なり。是の故に毘盧遮那佛を稽首禮す。此の三五字は、卽ち十五種金剛の三昧なり。一字は卽ち十五字、十五字は卽ち一字、一字卽ち五字、五字卽ち一字なり。逆順旋轉、初後不二なり。今の八門中に萬法を該攝し、一字の中に一切の字を攝し、一切の字の中に、一字を攝し、一字を以て一切字を釋し、一切字を以て一字を釋し、一字を以て一切字を成立し、一切字を以て一字を成立す。一字を以て一切字を破し、一切字を以て一字義を破す。卽ち是れ順一遍と逆一遍となり。次に順旋轉を四遍し、次に逆旋轉を四遍す。

【三五】圍陀(Veda)。婆羅門教の聖典の名なれど、今は專ら佛教聖典を指す。

【三六】摩訶般若(Mahā-prajña)。大智の義。

【三七】阿尾羅吽欠

【三八】阿鑁藍唅欠

【三九】五部。佛部・蓮華部・金剛部・寶部・業部。

【四〇】三部。佛部・蓮華部・金剛部。

庫藏なり。能く三世の惡魔怨と戰て、三世の勝利を獲得するが故に、鉀鎧鉾楯、弓箭器杖の如し。是の故に三世の諸佛菩薩は、其の中に沒在して、此の五字門を出生す。これ三世諸佛萠芽の種子なり。

此の瑜伽の座は黄色にして、金剛方輪、即ち是れ金剛座なり。

阿は金剛の地部、一阿字にて地觀と金剛座觀とを作す。鑁は金剛の水部、二鑁字にて水觀と蓮華觀とを作す。藍は金剛の火部、三藍字にて日觀を作すなり。唅は金剛の風部、四唅字にて月觀を作すなり。欠は金剛の空部、五欠字にて空觀を作すなり。五輪法界塔婆にて、如來體性は、無生なりと觀するなり。右五部の眞言は、是れ一切如來、無比甘露の珍漿、醍醐佛性の妙藥なり。一字、五臟に入つて、萬病生ぜず、況んや日觀と月觀とを修するをや。即時に佛身の空寂を證得せん。

阿鑁覽唅欠。

右の五字は法身の眞言なり。若し日に一遍、或は七遍、或は二十一遍、或は四十九遍を誦する者は、功德を校量するに、一遍の福は、藏經一百萬遍を轉讀するが如し、何に況んや、禪寂にして坐して定門に入るをや。阿字觀を修して、諦審分明なること、日の空を照すが如くなれば、即ち是れ佛性を了觀し、獲る所の福は、比量すること無きなり。祕藏の文句は、實に不思議なり。只恐る聲聞の法師、小乘持律者は、疑を生じて信ぜず、反て其の罪を益し、譬へば王に稚子あり、偏に最も憐念す。庫藏の珍寶、傾け竭して惜まず。唯干將と鏌耶とを與へず。用を解せざるが故に、其の體を傷けんことを恐る。是の故に如來は、密に大菩薩に傳へて、聲聞の劣慧に與へず。[三三]駄盧摩陀都は、法身如來の眞實なり。腋より頂に至るを上と爲し、臍より腋に至るを中と爲し、足より臍に至るを下と爲す。眞言の中に於て、當に三種の成就を分別すべきなり。

下品の悉地は[三四]阿・羅・波・左・那、これを出悉地と名く、能く根莖を生じて、遍く四方に滿つ、誦する

【三三】駄盧摩陀都（dharma-dhatu）。法界。

【三四】阿羅波左那　अरपचन

意を主り、中央及び土と爲す。土は夏季を主り、其の色は黃なり。黃色は地より生じ地は火より生ず。前說の如く、五陰中の識陰心は、地を持す。或は木の臟と爲す。木の靑は是れ空なり。脾は黃氣及び心より生じ、口を主るを意と爲す。甘味多くは脾に入り、脾を增し、腎を損す。若し脾中に意無ければ、多く迴惑し、肝が脾を害すれば病と成る。若し木が土を剋するが如くんば、肝は强く脾は弱し。當に心を肝に止むべし。黃氣を以て、靑氣を攝取すれば、脾の病は則ち差ゆるなり。黃氣は欠字なり。

五臟は蓮華の下に向ふこと靡きが如くなり。內は五臟にして、外は五行なり。出でては形を成す。體は此れ則ち名なり。色は即ち四大・五根にして、名は即ち想行等の四陰心なり。即ち是れ日月、五星[二七]、十二宮[二八]、二十八宿[二九]は人の體と成る。山海大地は阿字より出で、江河流水は鑁字より出で。金玉珍寶、日月星辰、火珠光明は、藍字より成り、五穀萬果、衆花の開敷は、唅字に因て結し、秀香美人、人畜の長養、顏色滋味、端正相貌、福德富貴は[三〇]欠字より莊嚴せらる。

阿字は是れ東方阿閦如來、鑁字は西方阿彌陀如來、藍字は是れ南方寶生如來、唅字は北方不空成就如來、欠字は是れ上方毘盧遮那・大日如來なり。

阿字の意は甚だ深く、空寂の體にして、之を取らんとするに取る可らず、之を捨てんとするに捨つ可らず。法の母、大灌頂王は阿字これなり。阿字は是れ難信の法にして、小乘の律師には、特に見せしむる勿れ。此の本の五部の梵本は、四十萬言にして、毘盧遮那經と金剛頂經とに出づ。要妙最上の福田を採取するに、唯此の五字眞言なり。誦する者の獲る所の功德は、比量す可らず、思議す可らず、說く可らざるなり。金剛頂經五部の眞言を受持し讀誦して、理性を觀照すれば、人をして福を獲せしめ、骨は堅く體は健にして、永く災障及び諸の病苦無く、長壽を攝養す。この五字門は、是れ[三一]五智の髻珠、五佛の肝心なり。十方三世の諸佛・[三二]能寂の智母、一切衆生養育の父母、十方法界の

【二七】五星。木・火・土・金・水。
【二八】十二宮。師子宮・女宮・秤宮・蝎宮・弓宮・摩竭宮・缾宮・魚宮・羊宮・牛宮・婬宮・蟹宮。
【二九】二十八宿。畢・觜・參・井・鬼・柳・星・張等宿曜經卷下參照。
【三〇】欠字 𑖏
【三一】五智。大圓鏡智・平等性智等。
【三二】能寂。釋迦牟尼佛を指す。梵の釋迦(Śākya)を義譯して能仁又は能寂と云ふ。

卽ち是れ應化身の如來にして、實に是れ智法身の火生曼荼羅なり。心は神を主り、其の形は鳥の如し。南方を火となし、火は夏を主り、其色は赤にして、赤色は火より生じ、火は木より生ず。五陰中にて受陰心は、火を持し、受心は想心より生ず。又心は赤氣及び肝より生じ、心は出でて舌と爲り、血を主り、血窮りて乳と爲る。又耳を主りて、鼻喉・鼻梁・額頭等を轉じ、苦味は多く心に入りて、心を增し肺を損す。若し心中に神無ければ、多く前後を忘失し、腎が心を害すれば、病を成ず。水の火を剋するが如く、腎强ければ心は弱し。當に心を腎に止むべし。赤氣を以て黑氣を攝取すれば、心病は則ち差ゆ。赤氣は藍字なり。

[二〇]唅字は羯磨部にして腎を主る。[二一]吽字は卽ち賀字の轉なり。卽ち是れ大日如來は常に壽量・風大の種子に住し玉へり。三解脫門は、三際不可得の義にして、法身大力の曼荼羅なり。風は則ち想陰心の所持なり。五藏とは肝・肺・心・脾・腎なり。胃とは[二二]六腑の一の名、胃は肚、是れ脾の腑にして、五臟六腑の海水なり。穀は皆な胃に入り、五臟六腑は皆胃に稟く。[二三]五味各々走流し、其の嘉味は胃に入るが故に、腎は胃に稟くるなり。腎は臍腰の下に在り、左を腎と名け、右を命門と名く、腎は心腹(胃なり)に敷き、腎の窮りは水の精なり。腎は志を主り、北方及び水と爲す。水は冬を主り、其の色は黑なり。五陰中は行陰にして、心は水を持す。行心は受心より生じ、受心は想より生ず。腎は黑氣及び肺より生じ、耳を主り腎出でて骨と爲り、髓を主る。髓窮まりて耳孔と爲り。骨窮りて齒と爲り、鹹味多くは腎に入り、腎を增して心を損す、若し腎中に志なければ、多く悲哭す。脾が腎を害すれば、病と成る。若し土の水を剋するが如くんば、脾は强にして腎は弱なり。當に心を脾に止むべし。黑氣を以て黃氣を攝取すれば、腎病則ち差ゆ。黑氣は[二四]唅字なり。

[二五]欠字は虛空部にして、脾を主り、欠字は則ち大日如來の無見頂相にして、[二六]五佛の證する所の大空智處にして、寂滅眞如の種智なり。十方三世諸佛の證する所の菩提道場の殊勝の曼荼羅なり。脾は

【二〇】唅字
【二一】吽字
【二二】六腑。
【二三】五味。甘・酸・苦等。
【二四】唅字
【二五】欠字
【二六】五佛。阿閦・寶生等。

れば、地は是れ色法なり。五陰中の色陰にして心地を持す。其の種子は不淨なり。凡そ五臟は是れ色法にして、五陰中の色陰より、心は發するが故に、名色に約して、地に是れ色法なり。今肝は魂を主る。魂神氣は、東及び木と爲す。木はその色空なり。木は春を主り、其の色は青なり。青氣は木より生じ、木は水より生ず。肝は青氣及び腎より生じ、其の形は立てる蓮華葉の如し。其の中間に鬧珠を著く、閭肉は胸の左にあり、肝は出でて眼と爲り、筋を主る。筋窮りて爪と爲るなり。今は五字門を以て。五臟六腑を主るが故に、內外交雜して之を明すのみ。又酸味多くは肝に入り、肝を增して脾を損す。若し肝中に魂なければ、多くは惛惛、肺が肝を害せば病と成る。金が木を剋するが如く、肺强ければ、肝弱し。當に心を肺に止むべし。青氣を以て、白氣を攝取すれば、肝病則ち差ゆ、青氣著しければなり。

〔一四〕鑁字は蓮華部にして肺を主る。鑁字は是れ〔一五〕縛字の第十一轉なり。〔一六〕尾字は是れ第三轉なり。〔一七〕阿字を轉釋する義なり。卽ち大日如來の智海の水大輪の種子なり。神通自在の法を智法身と名け、亦報身と名く。是れ卽ち蓮華部の曼荼羅なり。肺臟は魄を主る。魄の形は花の如く、鼻を主り、西方の金と爲る。金は秋を主り、其の色は白なり。白色は風より生ず。風は地の陽氣より生ず。五陰中の想陰心は風を持す。想心は識より生じ、識心は過去の行より生じ。過去の行は、無明より生じ、無明は妄想より生じ、妄想は還た妄想より生ず。十二因緣を輪廻するなり。肺は白氣及び脾より生じ、辛味多くは肺に入りて、肺を增し、肝を損す。若し肺中に魄無ければ、恐怖癲の病あり。心が肺を害すれば、病を成す。火の金を剋するが如し。心は强く肺は弱なり。當に心を心に止むべし。白氣を以て赤氣を攝取すれば、肺病則ち差ゆ。白氣は鑁字なり。

〔一八〕藍字の寶部は心を主る。藍字は是れ大日如來の心地に火大の種子を植ゆ。三世諸佛の〔一九〕室宅にして、一切衆生の無始の無明・塵垢・妄執を焚燒して、菩提心の牙種を出生す。阿字を轉釋するなり。

〔一四〕鑁字
〔一五〕縛字
〔一六〕尾字
〔一七〕阿字
〔一八〕藍字
〔一九〕室宅。住處の意。

三種悉地破地獄轉業障出三界祕密陀羅尼法

中天竺國三藏善無畏　奉詔譯

[1]瑜伽事法に約して千條あり、略して少分を述べん。口を開き、手を擧ぐれば、[2]法界宮を震かし、蓮華藏世界は、諸如來の出定處なり。卽ち地獄を摧破するを以て、業障を轉じて、三界を出づ。當に知るべし　[3]如法に人主の頂に　[4]布字して、冠中に戴けば、萬國清泰なり。[5]節度觀察は、旗旌の上に眞言を書寫すれば、四方晏靜にして、專城の大守は、鎭遏して戎を總べ、[6]鼓角上に梵字を題せば、嚴警の鼓音、遠く聞えて、妖氣を清め、熾盛は千里に布き、苗稼洪潤にして、人に災疫なく、地土神祇、風恬雨順なり。念誦加持して、戰鼓の上に書すれば、賊軍自ら降り、一人名を損せず、金剛の鼓となる。

稽首す毘盧遮那佛、　淨眼を開敷して蓮華の如く、　三界の　[7]調御、　天人の師たり、　大菩提心救世者の　深妙なる眞言加持の法は、　無上の阿字門に流入し、　白毫　[8]無相の正遍知は、　圓滿にして恒に照すこと日月の如し、　身口意業は三密を成じ、　三密は卽ち應化の法と成る。　[9]五輪五智は是れ五分なり。　五分に盡く法界輪を攝し、　阿閦・寶生の救世者、彌陀・成就不空王は　悉地の吉祥輪を成じて、　斯の妙法を傳へて　[10]諸有を化し、　慈心自在なる[11]降三世、　金剛薩埵・不動尊、　誓願に違することなく時期に應ず、　瑜伽の事畢りて金剎に還る。

佛の言く、阿字は　[12]金剛部にして肝を主る。[13]阿字は卽ち是れ大日如來の理法身なり。本性清淨にして、極理畢竟、不可得空なり。金剛地輪の種子にして、金剛部の曼荼羅なり。若し名色に約さ

【一】瑜伽(Yogi)。相應一致の義。能觀の人と、所觀の法と一如一體となる意。
【二】法界宮。蓮華藏大千世界。卽ち全宇宙法界涯を意味す。
【三】如法。法則通りの義。
【四】布字。身體の各支分に梵字を觀念的に分賦すること。
【五】節度觀察。支那唐代の節度使並に觀察使にして、何れも外國へ差遣せらるゝ官吏の官名なり。
【六】鼓角。鼓は太鼓、角は貝の類。
【七】調御。導師の意。
【八】無相。相として具せざるなき意にして、衆相を圓滿に具備せる正遍知者を指す。
【九】五輪。五月輪卽ち五佛を指す。
【一〇】諸有。一切衆生。卽ち有情の萬類。
【一一】降三世。三界主の魔王を降伏する尊。
【一二】金剎。佛國土。
【一三】阿字　列

墮す。是の故に常に大苦惱を受けて善所に生ぜず。故に不信の者には、爲に此の三眞言、三身佛果、三菩提の良藥を說く可らず。

若し人、是の眞言を一度聞く者は、過去の生生中に、無量の善根の種を殖え、亦還て過去の善根力に依て、今當に聞くことを得るなり。是の人定んで命終には、必ず願に隨つて、十方淨土の中に往生し、其の土衆、及び三千大千世界の一切衆生の爲に、是の法を說かん。又拔苦與樂して、大菩提の果を證することを得せしめん。當に知るべし、是の人は如來の所化にして、是れ菩薩なり。何に況んや、自ら誦するをや。他の爲に教を傳ふる者の功德は不可思議なり。各ゝ清淨の信心を以て、五十萬遍を滿ちて、身中の無數億劫、無始以來の無量惡業の罪、永く滅除し、願に隨て命終の後、蓮華臺藏世界の中に生じて、常に本より阿字の本佛を覺りて、毘盧遮那如來の妙體身を見奉り、當に彼の世界にて、自ら法樂を受く。と、是れ毘盧遮那如來金口の說なり。[五〇] 五智の如來は、阿字の中より出生し、無量の身を化す。若し阿字の一文を聞くもの、今の毘盧遮那如來是れなり。

白毫光相正遍知、圓滿恒照なること、日月の如し、　阿閦・寶生救世者、　彌陀・成就不空王、
咸な悉地吉祥輪に於て、　斯の妙法を傳へて諸有を化し、　慈心・自在の降三世、　金剛薩埵・
不動尊、　誓願に違せずして、時期に應じ、　瑜伽の事畢りて、金剛に還へる。　我れ毘盧遮那佛
に依て、　心智の印を開き、　標儀を建て、　無量の功德をもて、　普く莊嚴し、　同じく總
持の諸善逝に入り、　願くば有緣修學者と共に、　無上清淨海に安住せんことを。

佛頂尊勝心破地獄法一卷（畢）

【五〇】五智。大圓鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智・法界體性智。

に[四二]阿摩羅・無垢淨識を加ふ。當に九重の心月輪の義と爲るべきなり。出悉地（根蔕、足より腰に至る、化身。）入悉地（枝葉、臍より心に至る、報身。）成就悉地（心より頂に至る。法身佛果なり。）皆悉く阿字に入流す。當に三品觀を作すべし。

上品者の體は卽ち大千界の身に同じ、卽ち法身摩訶毘盧遮那如來身に同じ、大千界內に一切衆生の爲に、八萬四千の法藏正教を說きて、俱時に成佛せんと欲するなり。

中品者の體は、中千界の身に等しく、卽ち[四三]應身大日如來の身に同じく、中千界の內にて、一切有情の爲に、八萬四千の法藏教法を說くと觀じて、俱時に成佛せんと欲す。

下品者の體は、小千界の身と等しく、卽ち化身[四四]文殊師利菩薩の身と同じく、小千界內にて、一切衆生の爲に、八萬四千の藏經を說くと觀じて、俱時に成佛せんと欲す。

但し此の三種の眞言は密中の密、祕中の祕にして、二乘の人、破戒不信の衆は、此の門に入り難し、菩薩信心の衆は、晝夜に誦念すべし。將に定んで[四五]阿耨多羅三藐三菩提を得て、無量無數劫中に、[四六]六道中の一切受苦の衆生を救度して、皆悉く是の阿字の中に入れ、無量無數劫の一切の諸の煩惱惑業を斷じて、無上菩提心を發さしめ、皆悉く佛果を證せしめんとす。

若し最上根の人あつて、常に日夜三時に持念し、若し時時刻刻に憶念すれば、定んで此の人、父母所生の身を捨てずして、現身に當に不思議難得の佛身を得べし。

若し人有りて、此の說を聞き、不定の疑心あらば、[四七]阿鼻地獄の中に墮落して、無量不可思議恒河沙・[四八]阿僧祇・無數の大劫を經ん。若し纔に彼の地獄の劫を盡して出づる者、又十八地獄及び八萬四千の地獄の中に入らん。是の如く傳へ傳はりて、各々一切の盡劫を經て、餓鬼の中及び畜生の中に墮し、各々其の劫邊を盡し、劫盡き已て人間に生じ、法を信ぜざるが故に、貧窮極苦し、一生の間に無數の大病を受け、晝夜無間に、是の如くの病に苦む。一善をも修せず、命終の後、[四九]阿鼻地獄の中に

【四二】阿摩羅(amala)。無垢識又は無垢淨識とも云ふ。

【四三】應身。勝應身にして報身と同じ。

【四四】文殊師利(Mañjuśrī)。妙吉祥。

【四五】阿耨多羅三藐三菩提(anuttara-samyak-saṃbodhi)。無上正等正覺。

【四六】六道。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天。

【四七】阿鼻(avici)地獄。無間地獄。

【四八】阿僧祇(asaṃkhya)。無數。

【四九】阿鼻(avici)。無間と譯す。間斷なく苦を受くる意。

地は、即ち法身成就なり。即ち是れ三種の常身・正法藏なり。是の故に毘盧遮那佛に稽首禮す。

毘盧遮那佛の　開敷せる淨眼は、蓮華の如く、　三界調御の天人師、　大菩提心救世者に稽首す。　深妙なる眞言加持の法は、　[三三]無生阿字門に流入す。

阿字は阿摩羅識の如く、[三四]阿摩羅識は體、[三五]阿梨耶識は用なり。阿字は萬法を含藏すること、猶し藏識の諸法を含むが如きなり。故に毘盧遮那の四字に、四教の義を含み、九重の月輪に、八葉九尊を表はす。

文殊の眞言は、下品の悉地なり、[三六]阿羅波遮那。

一字唵慈臨二合　萬事に通用す、是を出悉地と名く。能く根莖を生じて、遍く四方に滿つ、一遍を誦ずれば、藏經一百遍を轉讀するが如し。出悉地は、足より腰に至る。

[三七]阿微羅吽佉は、大日如來眞言の中品の悉地なり。これを入悉地と名く、能く枝葉を生ず。

又入悉地は、臍より心に至り、四方に遍滿して、光明晃曜、佛の法界に入る、入悉地と名く。若し一遍を誦ずれば、藏經一千遍を轉讀するが如し。

[三八]阿鑁覽唅欠　上品の悉地の毘盧遮那の眞言なり。この五字をば、祕密悉地と名け、亦蘇悉地と名け、亦成就悉地と名く、祕密悉地とは、心より頂に至り、蘇悉地とは、即ち法身成就なり。又成就悉地とは、佛果を成就し、大菩提を證する法界の祕密(眞)言の光明遍滿す。唯佛と佛とのみ、能く此の門に入る。緣覺と聲聞とは此を照す能はず。即ち祕密悉地と名く。若し一遍誦ずれば、一切經一百萬遍を轉讀するに當る。

是の如くの三種悉地の眞言は、佛頂尊勝の心眞言にして、皆是れ大日如來三身の眞言なり。これに依て當に知るべし。尊勝佛頂とは、即ち是れ毘盧遮那如來の身、即ち是れ三部佛頂の身なり。一に[三九]波陀那は即ち六識、二に[四〇]阿陀那識は即ち七識、三に[四一]阿梨耶識は即ち八識なり。今第四

【三三】無生。本來不生常住實在の意。
【三四】阿摩羅(amala)識。無垢識。
【三五】阿梨耶(ālaya)識。藏識。
【三六】阿羅波遮那
【三七】阿微羅吽佉
【三八】阿鑁覽唅欠
【三九】波陀那(upādāna ?)。
【四〇】阿陀那(ādāna)。執持識。
【四一】阿梨耶(ālaya)。藏識。

薩、金剛舞菩薩、金剛焚香菩薩、金剛花菩薩、金剛燈菩薩、金剛塗香菩薩なり。四攝菩薩とは、金剛鉤菩薩、金剛索菩薩、金剛鎖菩薩、金剛鈴菩薩なり。

是の如くの眷屬を以て、是の如く觀じ已て、以て心の清淨を證し、自身を佛と爲し、衆相皆圓滿し、即ち[二一]薩般若を證し、三十七尊の聖圓を具し、即ち空中に諸佛は[二二]胡麻の如く、虛空界に遍ずと觀ず。想へ、身に十地を證するなり。鑁字は變じて大悲の水と成り、擬散して我れ及び一切有情の菩提心の[二三]大地に灑ぎ、百六十心の戲論の垢を洗淨して、皆悉く煩惱罪垢を斷じ、即身に父母所生の身を捨てずして、現身に大菩提佛果の位を證得す。又觀ず：身內に大海あり、其の底に[二四]鉢羅字あり、色は金色なり。其の字變じて金龜と成る。是れ佛性なり。其の龜の上に[二五]蘇字あり、變じて須彌山王と成る。其の山上に[二六]阿字あり、變じて種種の色、微妙金剛の地輪と成る。輪上に三十八肘の道場あり、[二七]暗字變じて、三重の[二八]摩尼寶殿と成る。即ち欲・色・無色界なり。七寶を以て莊嚴し、其の妙宮內に十肘の壇場あり、即ち此れ十法界なり。其の場中に大覺師子座あり、其の中に阿字あり、變じて四肘の瑟石の座と成る。即ち重曼荼羅なり。その重とは、發心・修行・菩提・涅槃なり。其の上に白大蓮華あり、其の華の上に阿字あり、變じて法身摩訶毘盧遮那如來の身と成り、阿・鑁・覽・唅・欠を說く。此の五字變じて五智如來の身と成る。大日如來は變じて[二九]憾字と成り、字變じて劍と成り、劍變じて不動明王の身と成る。明王變じて[三〇]瞿利伽羅大龍と成り、忿怒の相を現じて、利劍に纒ふ。龍王變じて二人の使者と成る。[三一]矜迦羅使者と[三二]制吒伽羅使者とこれなり。是の五字をば祕密悉地と名くるなり、亦成就悉地と名け、亦蘇悉地と名く。蘇悉地とは法界に通じて、佛果を成就し、大菩提を證する法界祕密の言にして、光明遍く滿つ。唯佛と佛とのみ、能く此の門に入る。緣覺・聲聞は此を照す能はず。亦祕密悉地と名く。

若し一遍誦すれば、一切經一百萬遍を轉讀するが如し。祕密悉地とは、心より頂に至る。祕密悉

[二一] 薩般若(sarva-prajñā)。一切智。
[二二] 胡麻。遍滿の例とす。胡麻には油が遍滿するが如くに、諸佛が十方法界に遍滿する意。
[二三] 十地。歡喜地・發光地等にして菩薩の聖位なり。
[二四] 鉢羅字
[二五] 蘇字
[二六] 阿字
[二七] 暗字
[二八] 摩尼(maṇi)。寶。
[二九] 憾字
[三〇] 瞿利伽羅(Kṛkāla)。黑龍の意。
[三一] 矜迦羅(Kiṃkara)。不動明王の八大童子の第七。
[三二] 制吒伽羅(Ceṭakara)。八大童子中の第八なり。

玄の色の如くにして、漸く舒べて廣く成り、風輪の上に、鍐字を想ふ。變じて水輪と成る。上に[九]鉢羅字の金色を想ふ。變じて一金龜と成り、背上に[一〇]素字を想ふ。卽ち變じて妙高山王と成り、四寶を以て成する所なり。亦[一一]劍字あり、變じて金山と成り、七重に圍遶す。虛空の中に、毘盧遮那佛身を想ふ。毛孔より香乳を流出し、雨は[一二]七金山の間に澍ぎ、以て[一三]八功德香水の乳海と成る。心に當て妙高山上に[一四]吉唎字あり、變じて八葉蓮華と成りて法界に遍く、蓮華上に於て、阿字あり、變じて五峯八柱の寶樓閣と成り、高廣にして中邊なく、諸の大微妙の寶玉をもて、種種に莊嚴し、六十恒河沙、[一五]俱胝如來、及び諸の天龍八部、內外の諸の供養の菩薩、此の法界宮殿を圍遶す。中に又吉唎字門あり、變じて大蓮華葉と成り、上に曼荼羅あり、曼荼羅の上に師子座あり、師子座の上に蓮華王あり、上に淨滿月輪あり、滿月輪の上に吉唎字あり、變じて妙月大蓮華と成る。上に[一六]鍐字あり、大光明を放て、普く法界を照し、有ゆる三界六道、[一七]四生[一八]八難、受苦有情は、光に遇ふて照觸すれば、解脫を得、此の鍐字變じて窣都婆と成る。方・圓・三角・半月・團形なり。地・水・火・風・空の五大所成の故に。此の[一九]窣都婆は變じて、摩訶毘盧遮那如來と成る。身色は月の如く、首に[二〇]五佛の冠を戴き、妙紗穀を以て天衣とし、瓔珞をもて其の身を莊嚴し、光明は普く十方法界を照し、皆月輪に倚る、四佛・四波羅蜜・十六大菩薩・八供・四攝・賢劫の千佛・二十天・無量無邊の菩薩を以て眷屬とす。

四佛とは、金剛堅固の自性身阿閦佛・福德莊嚴身の寶生佛、受用智慧身の阿彌陀佛、作變化身の釋迦牟尼佛なり。四菩薩とは、金剛波羅蜜菩薩、寶波羅蜜菩薩、法波羅蜜菩薩、羯磨波羅蜜菩薩なり。十六菩薩とは、金剛薩埵菩薩、金剛王菩薩、金剛愛菩薩、金剛喜菩薩、金剛寶菩薩、金剛光菩薩、金剛幢菩薩、金剛笑菩薩、金剛法菩薩、金剛利菩薩、金剛因菩薩、金剛語菩薩・金剛業菩薩、金剛護菩薩、金剛牙菩薩、金剛拳菩薩なり。八供養菩薩とは、金剛嬉戲菩薩、金剛鬘菩薩、金剛歌菩

【九】鉢羅字

【一〇】素字

【一一】劍字

【一二】七金山。須彌山の外輪山に七つあり、之を七金山と稱す。

【一三】八功德水。須彌山と七金山との間にあり、其の水は澄淨・淸冷・甘美・輕輭・潤澤等の八功德を具ふ。

【一四】吉唎字

【一五】俱胝(koṭi)。億。

【一六】鍐字

【一七】四生。體・卵・濕・化。

【一八】八難。地獄・餓鬼・畜生・鬱單越・長壽天・聾盲瘖啞・世智辯聰・佛前佛後、これ等に見佛聞法の障あるが故に八難と云ふ。

【一九】窣都婆(stūpa)。塔婆。

【二〇】五佛。阿閦・寶生・彌陀・釋迦・大日。

長壽を攝養し、鼓上に是の五字の題字を書し、鼓を擊てば、遠近其の聲を聞き、熾盛千里に布き、苗稼洪潤、人に災疫なし。これは此れ如來の體性、無生の觀なり。

右の五部眞言は、是れ一切如來の無生甘露の珍漿醍醐にして、佛性の妙藥なり。一字、五臓に入れば、萬病生ぜず。況んや日觀と月觀とを修するをや。卽時に佛身の空寂を證せん。

これ阿・鑁・覽・唅・欠の五字法身の眞言なり。若し日に一遍、或は七遍、或は二十一遍、或は四十遍を誦ずる者の、功德を挍量すれば、一遍の福は、一切經を一百萬遍を轉讀するが如し。何に況んや禪寂に坐して、定門に入るをや。阿字觀に從へば、諦審分明なること、日の空を照すが如し。卽ち是れ佛性を了見し、獲る所の福は、比量有ること無し。祕密藏の文句は、實に思議す可らず。只恐る聲聞の法師、小乘持律者は、疑を生じて信ぜず、反て其の罪を益さんことは、譬へは王に稚子あり、偏に最も憐念し、庫藏の珍寶、傾け竭くして惜しまざるも、唯干將と鏌耶とを與へず。運用を解せざるが故に。其の體を傷けんことを恐るるが如し。是の故に如來は大菩薩に祕傳して、聲聞の劣慧に與へざるなり。

阿は金剛地部一　阿字にて地觀と金剛座觀とを作す。形は四角、色は黃、大圓鏡智なり、又は金剛智と名く。

鑁は金剛水部二　鑁字にて、水觀と蓮華觀とを作す。形は滿月の如く、色は白、妙觀察智、又蓮華智亦は轉法輪智と名く。

覽は金剛火部三　覽字にて日觀を作す。形は三角、色は赤、平等性智なり、亦灌頂智と名く。

唅は金剛風部四　唅字にて月觀を作す、形は半月の如くにして、色は黑、成所作智なり。亦羯磨智と名くるなり。

欠は金剛空部五　欠字にて空觀を作す。形は滿月の如く、色は種種、法界性智なり。

地・水・火・風・空の五輪の種子は、阿・鑁・覽・唅・欠の五字なり。地輪あり、地輪の上に水輪あり、水輪の上に火輪あり、火輪の上に風輪あり、風輪の上に空輪あり、空輪の上に憾字を想ふ。其は深

【八】干將・鏌耶。支那古代の名刀。

佛頂尊勝心破地獄轉業障出三界祕密三身佛果三種悉地眞言儀軌　一卷

中天竺國三藏善無畏　奉詔譯

[1]摩訶毘盧遮那如來、金鼓の說、口を開き舌を擧ぐれば、法界宮殿を震はし、蓮華臺藏世界は、諸の如來出定の所なり。卽ち以て地獄を摧破し、七遍の殃の起るを滅し、菩薩をして五字の祕密を說かしむ。この五字は[2]阿・鑁・覽・唅・欠なり。

阿字は金剛部にして、肝を主り、鑁字は蓮華部にして、肺を主り、覽字は寶部にして、心を主り、唅字は羯磨部にして、腎を主り、欠字は虛空部にして、脾を主り。山海大地は阿字より出で、江河萬流は鑁字より出で、金玉珍寶、日月星辰、火珠光明は、覽字より成り、五穀五果、衆花の開敷は、唅字に因て結するなり。秀香美薰人、天長養、顏色滋味、端正相貌、福德富貴は、欠字より莊嚴せらる。

阿字は是れ東方[3]阿閦如來、鑁字は西方[4]阿彌陀如來、覽字は是れ南方寶生如來、唅字は北方不空成就如來、欠字は是れ上方毘盧遮那大日如來なり。阿字は意甚だ深く、空寂の體、之を取らんとするも、取る可らず、之を捨てんとするも、捨つ可らず。萬法の母、大灌頂の王は、阿字是れなり。難信の法にして、小乘の律師には、特に此の本を見せしむる勿れ。[5]五部の梵本、四十萬言より出で、[6]毘盧遮那經、[7]金剛頂經の要妙を採集せる最上の福田は、唯此の五字眞言なり。誦する者の獲る所の功德は、比量す可らず、思議す可らず、說く可らざるなり。

理性を觀照すれば、人をして福を獲せしめ、骨體堅健にして、永く災障と諸の病苦とを無くして、

【一】摩訶毘盧遮那 (Mahāvairocana) 大日。

【二】阿鑁覽唅欠

【三】阿閦(Akṣobhya)。無動又は不動。

【四】阿彌陀(Amita)。無量。具梵には Amitābha or Amitāyus 無量光又は無量壽。

【五】五部。佛部・蓮華部・金剛部・寶部・業部なり。

【六】毘盧遮那經。卽ち大日經七卷、善無畏三藏譯。

【七】金剛頂經。三卷不空三藏譯。

知二空等二虛空一(空)如實相智生。

とあるのが、謂ゆる大日經の五大說の根據である。

次に金剛頂經の五大說は、金剛頂經瑜伽修習三摩地法に勸發二大願一然後、結二三摩地印一入二法界體性三昧一修二習五字旋陀羅尼一

諸法本不生(地)、自性離二言說一(水)、清淨無二垢染一(火)、因業(風)等二虛空一(空)、旋復諦思惟、字字悟二眞實一。

これ等の意味をअवरहखの本義と爲し、弘法大師は之を六大法性の義に解して居れる。兩部の經、倶に諸法本不生不可得の理を詮示することに成つてあるが、その不生不滅常住の眞諦を阿字と稱し、眞諦の理を諦觀する人を理法身大日如來と呼び、この理を諦觀して後に、未來應度の衆生に對して、生佛一如の理を闡布しやうとする三昧に住する人を、智法身大日如來と稱して居る。

第二にअवरहखの五字の中で、無點の字は、本有を表し、有點のव以下は、修生修顯を意味する。此の點を空點と稱し、無染無著の意を表する。修生修顯ではあるが、凡夫迷情の心から生起したものではなく、法爾法然の生起を指し示す爲に、殊更に點を付してवरहखと言つて居る。

第三にअは所詮でありव以下は能詮である。

अは諸法の不生不滅の實體を詮示するものであり、其を他の四の方面からその眞實義を詮表するのがव以下の四字である。隨てव以下の四字は、自らの意味を表示するのではなく、अ字共のものゝ深義の一方面を詮表して居ることに成る。

第四、अは理法身の種子、वは智法身の種子である。

अ字は胎藏界曼荼羅中臺の理法身の種子であり、व字は金剛界曼荼羅中臺の智法身の種子である。智法身の內證の德としてरहखの三字を包有して居る。

第五、अは體、व以下は用である。

अは諸法の本體にして、व以下の四字は、此の實體の上に起る妙用を宣示するもので、その妙用の發現に依て、本體の實相が表現されることに成る。隨て體と用とは本來不二無別のものであらねばならない。

大日經は阿字を詮顯することが主要と成つて居り、金剛頂經は如來の眞實智卽ちव字を詮顯することが骨目である。而して是等の諸義を總括的に表現するものは、अवरहखの五字眞言であると見られて居る。

以上の說明は此の五字明の一端を披瀝したものに過ぎないが、之れに依て大體の意味を讀者に依て理解さるれば幸である。

昭和六年九月四日

譯者　神林隆淨　識

阿闍梨から傳へられた兩部而二の法と兩部不二の法とを傳へられたのである。玄超阿闍梨から傳つた此の兩部不二の法とは、卽ち三種悉地法中の上品悉地眞言、阿鑁藍唅欠を意味して居るのである。

この上品悉地眞言を蘇悉地とも稱せられてあるが、台密に於て極めて重要視せられて居る。台密一家で兩部は異なる思想の二の流れと見做し、此の兩部の外に不二の法あり、其は蘇悉地法であると言つて居るが、その謂ゆる蘇悉地法とは、上品悉地眞言を明してある三種悉地法を指して居ることが窺はれる。

次に東密に於ては、宗叡僧正が、法全阿闍梨から、此の法を傳へて居られる關係上、三井の智證大師と、同法流と成つて居る。般若寺觀賢僧正の弟子一定阿闍梨は、小島流の開祖である。小島一流の中に理智冥合灌頂最祕重重密印と稱する一包があつて、此は般若寺よりの相傳と成つてあるが、此の一包の中には七種の大事が示されてある。その中の第四にअवंरंहंखं智拳印と書してある印信があつて、此は諸流中に甞て見當らない珍貴な印信である。今此の蘇悉地明の印の異說を擧ぐれば

眞如親王・慈覺大師・般若寺觀賢・石山淳祐・寬平法皇等の次第には、普印卽ち金剛合掌を用ゆることに成つてあり、小野の流祖延命院元杲の次第には、五輪印、東寺の長慶公は、禪念律師の傳を受けて、惠塔印を用ひ、醍醐三寶院では、開塔不二の印と五古印との二傳が存して居る。これ等の諸說の中で、智拳印を結ぶ說は、小島流に於て之を見出すのみである。その小島流には般若寺の相傳としてあるから、若し此の相傳說が眞實であれば、觀賢僧正には、金剛合掌の傳と智拳印の傳との二傳あつたのに相違ない。この智拳印を結んで阿鑁覽唅欠を口に誦じ、五輪成佛身の觀に入るが、卽身成佛の祕觀と成るのであるが、小島流の此の印信から考ふるに、覺वं上人が五輪九字明祕釋に於て、弘法大師が五藏の三摩地觀に入つて、成佛の相を示されたと云ふ說は、法流血脈の上からは、相當に根據のある說と成るのである。

七、阿鑁覽唅欠の五字に就て

次に阿鑁覽唅欠の五字明が、何故に兩部不二の意味を宣示して居るかと云ふに、之れに關して解釋を試むれば

第一にअवंरंहंखंは、五大の種子と見做されて居ることは、既に述べた通りである。而も其の謂ゆる五大とは、單に地水火風空を意味するのではなく、大日經第二に時佛入二於一切如來一體速疾力三昧一(略中)

我覺本不生(地)　出二過語言道一(水)

諸過得二解脫一(火)　遠二離於因緣一(風)

本書の上品悉地眞言の阿鑁藍唅欠の五字の明を意味して居る。上人は此の五臓の三摩地を修することに依て、十地の中の初位の三昧を發得したと自ら明言して居られる。初位の三昧とは、自心の實相である淨菩提心の眞の姿を見證されたことである。上人は五輪九輪明秘密釋に尚ほ左の如く說て居られる。

嵯峨天皇仰云、眞言宗即身成佛、其證何在、謹惶弟子（空海）、入二五藏三摩地觀一、忽然於二出家頭上一現二五佛寶冠一、於二肉身五體一放二五色光明一、當二爾之時一、一人起レ席、萬民作レ禮、諸宗瞻レ旗、皇后送レ衣、故五藏三摩地、秘之中秘、不レ起二于座一三摩地現前之說、唯彌よ應二仰信一而已。

と記してあるが、此は弘法大師が、清涼殿中に於て、八宗の學者と宗義の優劣を論ぜられた際に、大師は五臓に阿鑁藍唅欠の五字を布觀し、手には智拳印を結んで、生佛一如の觀に入つて、即身成佛の宗義を顯宣せられたと云ふ事實の記載である。清涼殿の宗論の有無に關しても、史家が種種に論じて居る所で、事實あつた事柄であるか否やに就ては、今尚未決定のまゝに成つて居るが、假に此の事實が有つたとしても、大師が果して五藏三摩地觀を修せられたか否や、疑はしいだけでなく、大師が今の書を請來せられたか否やも、大師の御請來錄には記載されてはないから疑しいのである。然るに覺

一三

鑁上人の說に依れば、善無畏三藏は、此の法を金剛智三藏から傳へられたと云ふことに成つて居るが、此の說は研究を要することゝ信ずる。この三種悉地法は、善無畏三藏に發して居ることは疑ひなき事實である。而して此の法が日本に傳へられたのは、傳教大師が始めである。其の後に慈覺大師も智證大師も相承して居られ、其の相承は左の圖に依て明かである。

三種悉地の血脈

惠果和上に二の法流があつて、其の一は不空三藏から傳へられた兩部不二の法である。和上は此の法脈を弘法大師に傳へられ、義操・法潤等には、和上が玄超

の妙法を傳教大師に付法せられた付法の文である。これに依れば、善無畏・義林・順曉・傳教と法脈が傳つて來て居る。傳教大師は延暦二十四年九月二十一日に、高雄山に於て都會壇を開き、傳法されたのであるが、此の時の受法者は、道澄、修圓(室生山の第二世)・勤操・正能・正秀・廣緣・豊安(大安寺)・靈福等、皆な南部の學者であつた。此の時、日本に於て初て、毘盧遮那都會壇に於て、三種悉地法を傳受せられたのである。その他の會場に於て、廣知並に圓仁に此の三種悉地法を傳へられた。廣知は德圓に、德圓は圓珍に此の法を傳へた。圓珍は入唐して更に法全に隨て此の法を重て受けた。かくの如く台密に於ては、此の三種悉地法は盛んに重んぜられて居つたにも拘はらず、東密では全く顧みない狀態で、一流などには全く見えて居ない。

覺鑁上人の五輪九字明秘密釋は、一に頓悟往生祕觀とも名けられて、上人の作中最も貴重なものとして目されて居るものである。此の中に上品悉地の眞言を五藏に觀ずることを擧げ、その次に、

三藏云、余依二金剛智三藏一、傳二此五字一、起レ信修レ之、及二千日一、於二秋夜滿月一、忽然而得二除蓋障三昧一云云、因レ玆、弟子(覺鑁)得レ聞二此秘訣一、深信多年修レ之、既得二初位昧一、有信禪徒、勿レ生二疑惑一、若鑁虛言、修レ之自知、唯願、勿レ令二一生空過一

と明記して居られる。玆に三藏とあるは、善無畏三藏を指すのである。此は台密相承說の金善互授說、即ち金剛智三藏と善無畏三藏とが相互に法を授け、金剛智三藏は、金剛界法を善無畏三藏に授け、善無畏三藏は、胎藏法を金剛智三藏に授けたと云ふ海雲阿闍梨の兩部大法相承師資付法記の說に起因して居るのである。慈覺・智證・宗叡等の後入唐の諸阿闍梨は、台東兩部の別なく、皆此の說を眞實として認容して居る。宗叡僧正(809—884 A.D.)の法脈中には、此の思想が充分に表はれて居るのであるから、同僧正から受法して居る益信・源仁に、既に此の考は吹き込まれてあつた。然るに源仁と益信とには、正統の法流として眞雅僧正の血脈が傳つて居る。眞雅僧正は弘法大師の直弟子であることは、玆に改て言ふまでも無い。源仁と益信とには、二つ法脈が傳つて居る。而して大師相傳の法流には、金善互授說は無いのであるが、宗叡僧正の法脈に於て、金善互授說が含まつてあり、此等兩大德の法流中に、此の思想が入り込んで居るのである。覺鑁上人は遠く廣澤の益信僧正の法脈を受け傳へて居られるから、上人には弘法大師の正統の法脈と、宗叡僧正の法脈とが傳へられて居る。此の理由に依て覺鑁上人には金善互授說の思想が植付けられて有つた。覺鑁上人の五臓の三摩地とは、即ち

曾て殊異なく、萬法は一阿に歸し、五部は一遮那に同ずるなり。」とあるは、金胎兩部の教主の同體なるを明示したものである。

これ等五項に依りて、本書の上に、金剛頂經の思想系統と、大日經宗の思想系統とが、交錯して擧げられてある計りでなく、更に一歩を進めて、理智を標榜する金胎の兩部は、本來不二にして相離る可きものでない意味も、此の所に明に示されてある。

本書が善無畏三藏の譯でないとしても、三藏の手に依て作られたことだけは、事實と見ることが出來やう。その書に於て金胎不二の思想が、既に明に現はれて居ると云ふは、兩部不二思想の淵源する所甚だ遠いものであることが、何人にも想象し得られると信ずる。尙又本書(II)に、「此の本、五部の梵本は、四十萬言にして、毘盧遮那經と金剛頂經とに出づ、要妙最上の福田を採取するに、唯此の五字の眞言なり。」と說いてあるから、本書の作者の考としては、金胎兩部の祕要肝心の妙呪は、唯此の阿鑁藍唅欠の五字明にして、之れに依つて、金胎兩部は統一付けられるものと思惟して居たことが窺ひ知られる。

六、三種悉地法の日本傳來

本書を最初に日本に請來されたのは傳教大師である。根本大和尙眞跡策子等目錄の中に

破地獄眞言一通
右一帖、外題云、梵字眞言云云然而多有二漢語等一

と記してある。又天台沙門安然集の諸阿闍梨眞言密教部類總錄に

尊勝破地獄陀羅尼儀軌一卷 是三種悉地法
三種悉地付法一卷
順曉出、澄和上、顯戒論緣起三卷中

とあり、これに依て傳教大師が、順曉阿闍梨から、此の法を傳へて來られたことが窺はれる。又顯戒論緣起卷上に

大唐泰嶽靈巖寺順曉阿闍梨付法文一首
毗盧遮那如來三十七尊曼茶羅所
阿鑁藍唅欠　上品悉地
阿尾羅吽欠　中品悉地
阿羅波者那　下品悉地

灌頂傳授、三部三昧耶阿闍梨、沙門順曉、圖樣契印法、大唐貞元二十一年四月十八日、泰嶽靈巖寺、鎭國道場、大德內供奉、沙門順曉、於二越府峯山頂道場一付二三部三昧耶一、牒二弟子最澄一、

大唐國開元朝、大三藏、婆羅門國王子、法號善無畏、從二佛國大那蘭陀寺一、轉二大法輪一、至二大唐國一、轉付二囑傳法弟子僧義林一、亦是國師大阿闍梨、一百三歲、今在二新羅國一、轉二大法輪一、又付二唐弟子僧順曉一、是鎭國道場大德阿闍梨、又付二日本國弟子僧最澄一、轉二大法輪一、僧最澄是第四付囑傳授。

唐貞元二十一年四月十九日書記

令二佛法永永不一レ絕、

阿闍梨沙門順曉、錄付二最澄一

とある。これ順曉阿闍梨が、三種悉地

のが常規と成つてある。然るに本書に於ては五部を建てゝ居るから、單に之れだけで見れば、金剛頂經の所屬であるやうに思はれる。

2　五佛の名稱

五佛の名稱は、金剛界と胎藏界に於て異て居る。

(金剛界の五佛名)	(胎藏界の五佛名)
中方毗盧遮那佛	毗盧遮那佛
東方阿閦佛	寶幢佛
南方寶生佛	開敷華天佛
西方阿彌陀佛	無量壽佛
北方釋迦牟尼佛	天鼓雷音佛

本書に現はれて居る五佛名は、金剛界の五佛名に近い。釋迦牟尼佛の代りに不空成就佛の名が擧げられてある。

3　五　阿

五阿、卽ち𑖀𑖁𑖀𑖽𑖀𑖾の種子は胎藏曼荼羅の五佛の種子である。且つ大日經に於ては、經全體に渡りて阿字本不生際不可得の理を詮表することに成つてある。因に云ふ五阿の體字は𑖀字であることに依ても、胎藏曼荼羅中臺の五尊は、一佛身の三昧の異りであることが窺はれる。(I)に「五智の如來は阿字の中より出生し、無量の身を化す。」とある文に依りて、五佛は元と一佛の五相の顯はれであることが分る。(II)に「阿鑁藍唅欠の中の鑁以下の四字は、初の阿字の轉釋なり」と言はれて居る所は、大日經に於て𑖀𑖪𑖨𑖮𑖏の五字の中で、𑖪字以下は𑖀字を釋するものであると言つて居ると同一の意味である。

4　四維の菩薩

本書の(II)に「東南方は普賢にして、是れ菩提心の妙因なり。次に西南方は文殊にして、是れ大智慧なり。次に東北方は彌勒にして、是れ大慈なり。次に西北方は觀音にして、卽ち是れ證なり。謂く行願成就して、此の華臺の三昧に入るなり。」とあるは、正に是れ胎藏曼荼羅中臺の四維の菩薩を擧げてあることが明かである。

以上1、2の二項は、金剛頂宗の思想を明し、3、4の二項は、大日經宗の宗義を示して居る。此は本書が兩部の中の何れにも偏しない證據と成ると同時に、兩部を二派の異なる思想の流れと見做して居ないことが窺はれる。

5　理智の二法身

胎藏界曼荼羅の中臺大日は、法界定印を結んで居られる所から理法身と稱せられ、金剛界曼荼羅の中臺大日は、智拳印を結んで居られる所から、智法身と稱せられて居る。然るに本書の(II)に「智法身の佛は、實相の理に住し、自受用の故に、三十七尊を現じ、一切をして不二の道に入らしむ。理法身の佛は、如如寂照に住し、法然常住不動にして、八葉を現じ、自他受用の爲に、三重曼荼羅を示し、十界をして大空を證せしむ。この理智の殊、廣略の異有りと雖、本來一法にして、

遂げやうとして居るかを、かゝる作物の上に見て喜ぶ一人である。

以上の如き五部・五佛・五智・九識等と今の阿鑁藍唅欠とが、如何にして結合し得るかと云ふ一事が、最後に解決されなければならない問題である。[illegible]の五字の祕密禪は、後節に讓ることゝし、此の眞言の體字は[illegible]となる。此の五字は次の如く、地水火風空の五大を出生する種子と見做されて居る。隨て阿鑁藍唅欠の五字眞言と、五大との關係も自ら明かとなる。次に五大と五方とは、前に於て既に其の關係を明してあるが、五大と五佛との關係は、五方と五佛との關係が明かになれば、自ら瞭解されることに成る。五佛は眞言密教の場合に於ては、歷史的若しくは想象上の作物ではなく、一佛身の觀行の五階段を示したもので、これ等五佛は各個獨自の存在ではなく、觀行の相違に依て、其の位置や三昧相が異つて居るのである。而して佛身の本體に至ては、常に同一無二の身で、而も其は眞言行者其の者であることを忘れてはならない。本書(II)に「諸尊の形色相好、各ゝ差別あり、宛然として自身の中に具足し、猶ほし親しく佛尊に入るが如し。而して自身都て曼荼羅と成る。卽ち是れ普門の法界身なり。」と說かれてある。眞言行者は本尊を客觀界の崇拜の對象とは見ずに、自心實相の德の表現であると見做すことに成つてある。而して其の觀行の進展の順序を、太陽の移り行きに順じて、其の位置と行相の異りとを示すことに成つてある。かくして眞言行者の初發淨菩提心の眞實の光明に初て接したる位を東方とし、此の位に居する行者を阿閦佛と名け。次に六度萬行を圓修して、福德圓滿の妙相を身に體現した所の行者は、正に福智の總てを發揮し、その勢の盛大なること、恰も太陽の天に中するが如き觀があるから、之を南方の位となし、其の行者を寶生佛と稱して居る。餘は之れに例して知るべきであるが、兎に角、五方と五佛とは、斯の如き意味に於て、密接不離の關係あるものとされてある。かく五佛と五方との關係が明かになり、五方と五大との關係が明かである以上、五佛と五大との關係も、自ら明かになるであらう。

五、兩部不二思想

本書の(I)と(II)とに通じて一貫して表はれて居る思想は、金胎兩部を併合し、二者相離るゝことの出來ないものであると云ふ傾向が充分明かに成つてある。その實例としては

1 三部と五部

胎藏界は佛部・蓮華部・金剛部の三部を明し、金剛界は此の三部の外に羯磨部と寶部との二部を加へて五部を立てゝ居る

も宜い位であるから、敢て牽强附會の說を爲す必要はあるまい。五臟・五行・四期の配釋は、支那の陰陽家の說を取り入れたまでのもので、眞言密敎には元來此の如き思想は無いのである。五行と五大とは、土と地、火と火の如きは、全く同一の樣にも思はれ、金と水、水と風、木と空の如きには、相和の關係あることが認められる。支那と印度と、思想の起原を異にするだけの相異は、其の間に確に認められるのであるから、强ち之れを同一思想と見ることは出來ない。此は單に物質の元素であり、而して其を五と見定めた所が兩者とも一致する位の程度のものと見る時は、誤解を招くことが少いであらう。五行と五臟とは、其の間に密接な關係があると陰陽師は考へて居るであらう。又五行と四期との關係も同樣であるが、其は吾人の知る範圍外のものであるから、說明を避けることゝする。兎に角、五行・五臟・四期を五部・五佛等に配釋したことは、之を學的立場から見れば、單に之れを配當したと云ふに止まり、其所に何等の意味も無いやうに見えるが、之を觀行の立場から見れば、其所に甚深の意味が存することに成る。

眞言密敎の觀行者の立場からは、行者自己自身を、小宇宙と考へ、かくして宇宙間の有ゆる諸現象は、皆悉く餘さず洩さず行者自身の中に包有してあるものとして考へなければ滿足が出來ないのである。何んとなれば、行者若し妄想邪念を去れば、宇宙法界の萬德を、自身の中に觀照し、之れに依て宇宙法界に遍在し給ふ遍法界の大日如來と同一人格を自己に於て認めることに成ると云ふ暗示を與へられて居るからである。かくの如き觀行上の必要に迫られて、世の有ゆる元素や、其の他の有ゆる德相を、行者自身の中に見出さうとして居る。斯の如き必要上から、理論的には何等關係の無いものまでも、捉へ來つて、自己の身心に關係付けやうとして居る。かゝる要求と傾向とを持つて居る眞言行者が、支那に來り、その思想文物に接し、自己の觀行に多少なり裨益するものありと認めたならば、其等を自己の敎系中に織り込み、且つ之れに依つて、其の思想を異邦殊俗の支那人に宣布しやうとするのは、決して無理からぬ要求である。此の要求に依りて作製されたものが本書であると、吾人には考へられるのである。但し(I)は此の要求が甚だ漠然として居るが、(II)に至つては、此の要求が極めて赤裸々に現はれて居ることは、否定の出來ない事實である。吾人は或る一部の學者の如く、之を僞作として、排斥しやうとするものでは無い。寧、佛敎が時代と土地とに應じて、如何に其の態度を改め、其の本生命を殺すことなく、更に一段の進步發達を

佛は、金剛部の部主であり、阿彌陀佛は、蓮華部の部主であり、大日如來は佛部の部主であるから、五部と五佛とは、密接の關係あることが解る。次に九識と五智とは、菩薩の因位に於ては、九識の作用が勝れ、果位に於ては、五智の作用が著しくなり、殊に菩薩は、十地の位に於て轉識得智することに成つてあるが、轉識得智の場合には、阿賴耶識を轉じて、大圓鏡智を得、乃至阿摩羅識を轉じて、法界性智を得ることに成つてある。又五佛と五智とも、密接の關係があつて、阿閦佛の內證の德は、大圓鏡智であり、阿彌陀佛の內證の德は、妙觀察智であるなど、その必然的の關係が存して居るのである。

次に五大と五色と五形と五方とは、其の間に於て密接な關係あることが認められる。先づ五大と五形とに付て見れば、水を圓形と見做して居る。水は方圓の器に隨て、その形を改めて行くものとされてあるが、露滴や、雨滴の如き、自然の形狀は圓形である所から、水を圓形と見做すことに成つてある。火は其の燃燒の形を見るに、圓錐形を爲して居る。此の圓錐形は、三角形の集合體と見做される所から、火の形は三角であると見られて居る。地の方形なること、風の半月形なること、空の團形なることも略ゝ同樣の說明方法に依て居るのである。次に五大と五色との關係に付て述ぶれば、水は一般に無色透明であると言はれて居るが、眞言密敎では、水は白色であると說くのである。若し水が無色であれば、白も無色である。白は有ゆる色を取り入れ得る可能性があること、水と殆んど同一である。此の意味から、水を白色と見做して居る。次に火を赤色と見做して居ることに關しては、何人も異論は無からうと思ふ。地の青色、風の黑色、空の黃色等に關しては異說もあり、種ゝの議論も起り得るであらうが、大體水の白色、火の赤色なることゝ同一の論法で、斯く決定されて居るのである。次に五色と五方との關係に付ては、太陽の位置に依り、その色を異にする所から由來して居ると思はれるが、太陽が東方に將に登らんとする所を青色とし、南方に在りて、日正に天に中する時には、太陽は熱本來の色を發揮して赤色に見え、太陽が西海に沒する時には、其光力は弱くなりて白色に見え、北方には太陽の位する場合が無い所から之を黑色と見定めたものである。かくの如き見解から四方と上方若しくは中方に色ありと見られて居るのである。次に五觀は五大と相比較する時に、其の關係は自ら明かになると思はれる。又五陰は五大に比較する時に、一應の理由は立つやうに思はれるが、五陰を五大等に配釋する場合は、他に其の類例が殆んど無いと言つて

一	五字	阿	鑁	藍	唅	欠
二	五部	金剛部	蓮華部	寶部	羯磨部	虛空部（佛部）
三	五佛	阿閦（寶幢）	彌陀（無量壽）	寶生（華開敷）	不空成就（天鼓音）釋迦	大日
四	五智	大圓鏡智（金剛智）	妙觀察智 蓮華智（轉法輪智）	平等性智（灌頂智）	成所作智（羯磨智）	法界性智
五	九識	阿賴耶識（第八識）	波陀耶識（第六識）	阿陀那識（第七識）	前五識	阿摩羅識（第九識）
六	五大	地	水	火	風	空
七	五形	方	圓	三角	半月	團
八	五方	東	西	南	北	上
九	五色	青	白	赤	黑	黃
十	五觀	地（金剛經座）	水（蓮華觀）	日	月	空
十一	五陰	色	想	受	行	識
十二	五臟	肝	肺	心	腎	脾
十三	五行	土	金	火	水	木
十四	四期	春	秋	夏	冬	

兩遍誦すれば、億劫生死の重罪を除滅す。文殊・普賢は四衆に隨逐して圍遶し加被す。此の慈無畏・護法善神は、その人の前にあり、若し四遍誦すれば、總持して忘れず。若し五遍誦すれば、速に無上菩提を成するなり。」と說き、以下中品と上品との眞言誦持の功德が說き明かされてある。但し此の所に三種の眞言に對する印契が明記されて無いのは、元來此の眞言に印契が無いのではなく、他處に於て此等の眞言の印契が明されてあるから、此の場合には故意に印契を省きて、阿闍梨の指授を必要とする意を示したものと見るべきである。眞言行殊に純密教に於ては、眞言と印契と觀想との三者が一致相應して運び行く所に、三密行の妙趣が現はれ、其所に如來の加持神力が顯現するものと見做されてあるから、單に眞言讀誦だけでは、效驗は現はれて來ないと云ふのが、密教正統者の主張する所である。本書の題號に破地獄とあるが、其は(II)に於て前揭の文に、「下品の眞言を兩遍誦すれば、億劫生死の重罪を除滅す。」とある、これ正に破地獄の意味に當るのである。

次に(I)の題號に佛頂尊勝心とあるが、之れに關し、同本に、「三種悉地の眞言は、佛頂尊勝の心眞言にして、皆是れ大日如來三身の眞言なり。これに依て當に知るべし、尊勝佛頂とは、則ち是れ毘盧遮那の身、卽ち是れ三部佛頂の身なり。」と記してある。

佛頂尊勝とは、三世諸佛が尊重し、之を髻中に祕し給ふ妙呪と云ふ意味である。(II)に、「この五字門は、是れ五智の髻珠、五佛の肝心なり。十方三世諸佛・能寂の智母、一切衆生養育の父母、十方法界の庫藏なり。能く三世の惡魔怨と戰て、三世の勝利を獲得するが故に。」と說てあるのは、佛頂尊勝の意味を明して居るものと見ることが出來る。

四、上品悉地の眞言と五佛等との關係

本書中に於て最も注意すべきは、上品の悉地を出生するものと信ぜられて居る阿鑁藍唅欠の五字と、五部・五佛・五智・九識・五大・五形・五方・五色・五觀・五陰・五臟・五行・四期との配釋である（次頁入別表參照）。此の思想は(II)に於て、殊に綿密に說かれてあるが、その配釋すべき理由は更に說明されて無い。思ふに此は眞言行者が觀想の上にて、此等の諸點に五字を關係せしめ、見聞觸知の有ゆる境界に於て、此の五字を觀念する所から、かく配釋されたもので、數理的に若しくは論理的に、五部・五佛等が順序に五字眞言と關係あることを示して居るものでは無い。

但し五部と五佛と、五智と九識とは、其の間に於て必然的の關係がある。阿閦

れる。而して此の思想傾向は、無善畏(716—730A.D.翻譯從事)金剛智(746—774A.D.翻譯從事)に先立つこと甚だ遠からざる時代であらう。この思想を本書の如く明確に說示してある所は、他に殆んど其の類例を見ない程であるから、本書は學的に價値ありと吾人が見て居るのも、此の所に存する。又此の心識思想が(I)に於て存在し、(II)に於て缺けて居る所も注意に値ひする。此は印度思想としては、重大の意義を有て居るが、支那思想としては、何等關係付け得る所が無いから、(II)に於て省かれたものであらう。

然るに「一字五臓に入れば、萬病生ぜず。」と云ふ詞は、支那人の耳に入り易き語句であるが、此の語句が(I)に記されてある所から見れば、此の(I)も、或は原文の譯ではなく、無畏三藏の作ではあるまいかと思はれる點が無いでもない。

三、本書題號の意味

三種悉地とは(I)と(II)とに共通して示されてあつて本書の眼目である。阿鑁藍唅欠の五字明を唱ふることに依つて、上品の悉地成就を得て、法身を體得し、大千界に遊化することが出來、阿尾羅吽欠の五字明を唱ふることに依つて、中品の悉地成就を得て、勝應身を體得し中千界に遊化することが出來、阿羅波左那の五字明を誦することに依て、下品の悉地成就を得て、化身文殊菩薩の身を體得し、小千界に遊化することが出來ると明されてある。

三種の眞言に依つて、各々異つた上中下の三品の結果を得ると言ふは、眞言其のものに不思議靈妙な力が包含して居る。そは大日如來の三昧中に於て說かれたのであるが、其の三昧の異りに隨て、說かるゝ眞言の功力に相違があると言はれて居る。傳法の阿闍梨は、弟子の志念する所が、上中下三品の中で何れであるかを見定めて、弟子の求めに應じて、眞言を授くることに成つてある。

本書の(I)に、「此の三種の眞言は、密中の密、祕中の祕にして、二乘の人、破戒不信の衆は、此の門に入り難し、菩薩信心の衆は、晝夜に誦念すべし。將に定んで阿耨多羅三藐三菩提心を得て、無量無數劫中に、六道中の一切受苦の衆生を救度して、皆悉く是の阿字の中に入れ、無量無數劫の一切の諸の煩惱惑業を斷じて、無上菩提心を發さしめ、皆悉く佛果を證せしめん云云」とあり、又(II)に、「下品の悉地は阿羅波左那、これを出悉地と名く、能く根莖を生じて、遍く四方に滿つ。誦すること一遍すれば、藏經を一百遍轉讀するが如し。即ち如來の一切法平等に入り、一切の文字亦皆平等にして、速に摩訶般若を成就することを得、

實世相の本源を阿賴耶識と爲し、此の識には淨法と不淨法との二の要素を包有して居るが、我ゝの現實生活には、不淨法の要素が力強く働き、淨法の部分は殆んど有名無實の狀態であることが、我ゝ各個人が具へて居る阿賴耶識の常態である。唯識思想系統の學者としては、其れより更に一步を推進めて說かうとはしない。此の現實の世相の起源を、精神的に說明し終れば、此の派の學者としては、其の目的を充分に達し得たと信じて居るのである。然るに中觀思想の側に於ては、我等の現實の精神生活は、無明煩惱の結晶の表はれではあるが、修行訓練に依て、此の無明煩惱の結晶を破壞し去り、此の結晶を打碎いた所に現はれて來るのが、我ゝ各個人の眞實心の常態で、これが卽ち自性清淨心であると主張して居る。

此の中觀思想と唯識思想とは更に何等かの方法に於て統一付けられなくてはならない。唯識哲學にては、安心緣起の側を殆んど說き盡して居るとしても、佛菩薩の歷展を說くことに至つて、殆んど全く行きつまりの狀態に於てある。之れに反して中觀思想は、自性清淨心を說く側は可なり力强いが、此の自性清淨心の歷展を說くことに於て、未だ甚だ充分でない。此の自性清淨心を起點として、現實生活の上に表現する爲めに、世間凡夫に順應する保護色を帶して表はれて來るのが、佛陀法身の慈悲の示現たる菩薩の化現であると考ふることに成つた。菩薩の內面生活を見れば、自性清淨心を起點とし、更に幾分の妄想の雲に覆はれた姿に於て、此の世に來現し、娑婆世界の人々に接することに成るが、其の妄想の雲に覆はれた心の狀態が、卽ち阿賴耶識と見做されることに成る。この阿賴耶識は菩薩假面の狀態、卽ち凡夫を救濟するが爲に、彼等に應同した側であつて、其の本心に至ては自性清淨心を、其の儘の狀態に於て保有して居るのである。而して阿賴耶識は、この本心の上に現はれた假相で、大悲の爲めの働きと見做し得る。此の假想に對して有りのままの相（すがた）の心がある。此の心が謂ゆる自性清淨心である。阿賴耶識を第八識と呼ぶのに對して、自性清淨心を第九無垢識と呼ぶことに成つた。本書（I）に於て、「無垢識を體、阿賴耶識を用」と言つて居るのは、此の意味である。而して斯く阿賴耶識を用、無垢識を體と考へて居るのは、唯識思想でも、中觀思想でも無く、其等兩者を更に綜合統一して、新に生れて來た大乘思想の一の流れであつて、之を祕密佛敎と稱する。無垢淨識は、眞諦（548—569 A.D. 飜譯從事）譯の諸論藏に見えてあるから、可なり古いものではあるが、此の無垢淨識を以て、淨法歷展の起源と見做さうとする傾きは、隨分後世の樣に思は

「如法に人主の頂に布字して、冠中に戴けば、萬國清泰なり。節度觀察は旗旌の上に、眞言を書寫すれば、四方安靜にして、專城の大守は、鎭遏して戒を總べ、鼓角上に梵字を題せば、嚴警の鼓音、遠く聞えて、妖氣を淸め、熾盛は千里に布き、苗稼洪潤にして、人に災疫なく、地土神祇、風恬雨順なり、念誦加持して戰鼓の上に書すれば、賊軍自ら降り、一人名を損せず、金剛の鼓となる。」とは、三種悉地の眞言中の何れにても、國の君主之を信じて使用する場合には、之れに依て天下國家を平定し得ると云ふのである。智證大師入唐せられた時、寺寺の門を見るに、恰も門札の如くに、此等三種悉地の眞言が、門戶若しくは門柱に張付られてあつたのを見られたと云ふことである。我國にても、[illegible]の文殊の心呪が、門口に張付けられてあるのも、今の記事に依るのである。

國家の安寧、風雨時順ならんことは、支那戰國時代から、代々の帝王の要望し來つた所であつて、之れに合致する意味に於て、本書が作製されたことが想像されるのであるから、本書が支那に於て始て善無畏三藏に依て作製されたものであることは、蓋し何人も否定し得ない所であらう。

二、(I)と(II)との差違

本書は(I)と(II)との二本ある中で、(I)が前に作られ、(II)は其の後に作られたものと思はれる。その理由は(I)よりも(II)の方が支那思想に合致する點が明了に示されてあるからである。若し梵本の原文を譯したものであるとすれば、其は(I)の方であらねばならない。然るに(I)の方にも可なり新しい思想が見えて居り、殊に第九の無垢識の如きは、假りに印度に於て事實有つた思想としても、第六世紀後半頃のものではあるまいと想像される。護法時代に於て、既に此の思想は現はれては居つたが、阿摩羅識を體、阿賴耶識を用と見ると云ふまでには、進んで居ないやうに思はれる。阿摩羅識即ち無垢淨識を體と見ることは、自性清淨心を各人の心の實相であると見做す考から由來して居るのであるが、此の自性清淨心を以て、各人に具はるものと見る學者は、印度に於ても、大乘佛教中の般若思想の系統を受けて居る者の共通せる傾向である。然るに自性清淨心は、垢穢不淨の心に對するものであつて、第八識若しくは第九識と云ふが如き、組織立てられた考から、案出されたものでは無い。然るに無垢淨識は、阿賴耶識を更に精撰し淨化したもので、雜染の阿賴耶識に對して表はれた清淨心である。

　無著世親の唯識思想に對して、龍樹・提婆の中觀思想があり、唯識思想では現

破地獄三種悉地法解題

一、本書と支那思想

これに二本あり、(I)を佛頂尊勝心破地獄轉業障出三界祕密三身佛果三種悉地眞言儀軌、(II)を三種悉地破地獄轉業障出三界祕密陀羅尼法と稱し、その內容は大體に於て略ゝ同一であるが、而も其の中にも共通する思想と、然らざるものとがある。

本書は學術の側より見て、甚だ價値あるものと思はれる。而も其の重要點は密敎が支那思想を取り入れて居る所が、本書に於て殊に露骨に現はれて居る。卷頭に中天竺國三藏善無畏奉詔譯と明記されてあるが、本書は三藏が印度から請來されたものではなく、三藏が支那に來られ、支那思想と密敎思想とを融合し、之れに依て支那に密敎思想を普及するが爲めに作られたものであることは、支那に於て漢代以後行はれて居つた陰陽說を取り入れて、五字眞言と五臟說、若しくは五行說とを關係付け、五字眞言中の一字を、五臟中之れに該當せるものに賦字し、觀見することが出來るならば、之れに依て萬病が生じないと明言して居る所なぞは、正に眞言密敎の眞言念誦と、支那の長生不死の思想とを結び付けたものと見るべきである。尙又(II)に於て、「內は五臟にして、外は五行なり。又日月五星・十二宮・二十八宿は人の體と成る。山海大地は阿字より出で、江河流水は鑁字より出で、金玉珍寶・日月星辰・火珠光明は、藍子より成り、五穀萬果・衆花の開敷は唅字に因て結し、秀香美人・人畜の長養・顏色滋味・端正相貌・福德富貴は、欠字より莊嚴せらる」。とあるが、日月五星等と人類の肉體と、本來同質のものにして、人事は直に天象に表はれて來るものであるとは、陰陽師の思想である。而して阿鑁藍唅欠の五字は、宇宙一貫の大原理にして、物にも心にも、人類にも將た天地間の諸現象にも遍通し一貫せる靈力の表號として見做されてある。隨て五字眞言が形態を具へて表現して居るものが、宇宙間の森羅萬象であると見做されて居ると思はれる。此は本來印度の思想であるが、偶ゝ此の思想は、天地間の諸現象と人類とは、密接不離の關係を有して居るものであると云ふを理解して居る支那人には、納得し易い考方である。先づ支那思想を說き、次に印度特有の思想へ導き入れやうとする所なぞは、巧妙を極めて居ることが窺はれる。

次に眞言讀誦の功力に關しては(II)に

時に釋迦牟尼佛、及び五大菩薩は、毘盧遮那佛を頂禮し已て、辭退して而して閻浮提菩提樹下に至りて、衆の爲に說法す。此の後、(如來)滅度の時に、[七九]五大菩薩に付して、世に流傳す。爲に諸の聲聞は、佛說を聞かず、又諸の菩薩衆の此の經を流布するを見て、深く心に驚疑して、信ぜず受けず。
時に觀世音菩薩の言く、汝等、聲聞、此の經は汝の境界に非ず、汝の所知にあらず。是れ毘盧遮那佛が、千百億化身の釋迦、及び大菩薩の與に、說き給へり。是の故に汝の知る所にあらず。と、
時に諸の大衆、同じく聞き、聞き已りて悲泣して而も涙を流し、未曾有なりと歎ず。
その時、衆會歡喜信受して、作禮奉行す。

毘盧遮那佛別行經 一卷 (畢)

【七九】五大菩薩。文殊・普賢・觀音・彌勒・金剛藏。

あれば、卽ち而も防護を爲す。卽ち呪を說て曰く、

（七五）怛姪他、唵跋折羅娑婆耶娑婆（二合引）訶（引）

若し持呪の人、不安有るを覺ゆれば、當に知るべし、卽ち是れ諸の毘那夜迦等の惱亂なり。卽ち急に此の呪を誦ぜよ。我れ十方藏王及び諸の眷屬と與に、彼に至りて護を作す。一切の諸の毘那夜迦、魔鬼衆、忙怕して自ら死す。若し蘇息を得れば、遠く他方に走り、敢て此に住せず。

八、流通文

その時に、釋迦牟尼佛の言く、善哉、善哉、汝等諸の菩薩等、能く一切衆生の爲に、是の諸事を問ひ、及び神呪を說て、諸の有情をして、普く安樂を受けしむ。又言く普く當に知るべし。此の心地法門甚深の經典は、是れ無量無數無邊（七六）恒河沙の諸佛の所說にして、見ることを得べきこと難し、聞くことを得べきこと難し。若し人曾て過去無量劫（七七）中に於て、諸佛を供養し、深く佛法を樂ひ、世間生死の往返を厭離し、曾て諸佛所說の深法を聞き、是の義を以ての故に、今始て此の心地經典、及び陀羅尼を聞くことを得。又更に精懃して一心に讀誦せよ。是の如くの人等は、眞に是れ佛子なり。何を以ての故に、此の人は久しからずして、無上正覺菩提を得ればなり。當に知るべし、此の經は是れ諸經中の王なり。此の呪は、是れ諸呪中の王なり。汝等諸の菩薩摩訶薩、當に須らく閻（七八）浮提に流布して、諸の衆生の與に、大利樂を作し、持呪者をして、速に悉地を成ぜしむべし。

その時に、毘盧遮那佛の言く、此の經を流布するに、先づ根性を觀じて、然して後に付囑せよ。何を以ての故に、智惠の人は、之を聞て深く信じ、無智の人は、必ず驚怖を生ぜん。復疑心あれば、彼の衆生をして、返て其の罪を招き、死して地獄に入らしめん。此の經及び諸佛等を謗るが爲に、是の如くの報を獲ん。此の經を說くに當り、衆會は聞かず、爲に淸淨法界中に在りて說く。と、

【七五】Tadyathā oṁ vajra-svaye svāhā.

【七六】恒河沙。恒河(Gaṅgā)印度の東北に流るる大河の名。恒河沙とは此の大河の沙の數程多數の意なり。

【七七】劫。具には劫簸(kalpa)最大長時期の名。

【七八】閻浮提(Jambudvīpa)須彌山の南方に位する大洲の名。印度等此の中にありと信ぜらる。

にありて、呪法を持誦して、未だ成就を得ず、又糧食に乏少す。是の義を以ての故に、菩提心を退せしむ。我れ今此等の善男子の爲に、諸天廚神の呪を說かん。卽ち呪を說て曰く。

南牟喝羅怛那多羅耶夜、闍羅、摩訶闍羅、逗遛、摩訶逗遛吽、急速訶尼攝、唵急速訶尼攝速。

先づ淨水を以て鉢を洗ひ、[七〇]鉢を淨巾の上に置け、復淨灰を以て、巾の下にす。灰上に鋪巾あり、水を含んで鉢を噀き、閉目して誦呪すること一百八遍す。心に上妙の天廚を念ず。時に諸天は天童を遣はし、上妙の食を奉送し、鉢の中に於て滿つ、卽ち起て、彌勒世尊を頂禮し、次に觀世音菩薩を禮して、卽ち當に之を食すべし。餘は一切衆多の生に散施せよ。若し人同食して、飽き足らざれば、彼に此の食を喫せしむることを得。これに依て自然に悉地を證するなり。[七一]此の呪を將て、人間の食飲を呪すること二十一遍し、[七二]餓鬼に施與すれば、鬼は是の食を得て、餓鬼の苦を免れ、[七三]彌勒天宮に生ずることを得、若し飢荒の年至れば、此の呪を以て、人間の飲食を呪すること、千八遍すれば、衆人之を食するも、尙ほ盡くること無けん。飢荒の年の十五日、白月圓滿なるに、香を燒きて、面を仰むけ、天に向て月を觀、此の呪を誦じて、月を呪すること千八遍して、當に念言すべし。月光の照す所の衆生は、普く飽足を得て、飢渴の想なからん。と、十五日の午時に、日を呪することも亦得、前の發願に准じて、每月常に此の呪を誦すること、千八遍し、發願して言ふべし。諸天王等、願くば餘食を以て、諸の天神、十方界の所有の餓鬼に遣はし、普く與へて之を食せしめ、食し已らば、便ち彼は苦を離れん。若し人能く三年に於て、一日たりとも此の法を作すことを闕かざれば、其の利廣多なり。此の身を捨て已て、[七四]西方淨土に生ずるを得、現世の生中には、益を增し、福を得、諸の餘の呪を持すれば、悉く成就するを得るなり。

その時、金剛藏王菩薩の言く、諸の有情、三部の呪を持して、未だ成就を得ざるも、少しく功効

【七〇】 鉢。具には鉢多羅(pātra)食物の容器。

【七一】 此の呪。廚神呪。

【七二】 餓鬼(Pretāḥ)、地下五百由旬を本位處とす。常に饑餓に苦しむを、その特性とす。

【七三】 彌勒天宮。都率(Tuṣita)天を指す。都率とは知足の意。

【七四】 西方淨土。阿彌陀佛所化の國土にして極樂と稱す。

普賢菩薩、又言く、世尊、云何んが、陀羅尼[六八]を聞けば、能く重罪を滅するや、又能く地獄の苦を救ふや。其の義、云何ん。

毘盧遮那の言く、此れに二義あり、一には眞聞、二には耳聞なり。眞聞とは、深く法性に達し、法の如幻を知り、罪體も亦爾く。了に得可らず(と爲す)。是の如き人は、是れ眞の悉地にして、能く地獄を救ふ。何を以てか之を怪まんや。耳聞とは、假りに諸の因縁合和するものを聞く(意)なり、諸佛は此の方便を以て、此の聞者をして、漸漸に自識の本性に薫修せしむ。是の因縁を以て、衆罪消滅す。諸佛の力を承くるも亦然り、地獄の苦を救ふなり。

毘盧遮那佛の言く、若し人能く三種の悉地を成就する能はざる者は、但能く[六九]心地の神呪一百萬遍を誦せよ。所持の呪、當に大驗を得べし。諸呪を持するの人、若し如法ならざれば、本呪神の嗔を被る。若し心地を誦ずれば、自ら皆歡喜す。

その時、文殊菩薩、觀世音菩薩、普賢菩薩、金剛藏王菩薩、彌勒菩薩、同聲に偈を說て、毘盧遮那佛を讃して曰く、

諸佛は思議し難し、　甚深の法も亦爾り、　我今之を聞くことを得、　亦復深義を知る、　法身は不說の身なり、　報應身亦爾り。　三身倶に不說なり、　是を無說の義と名く。　說と不說と皆空なり、　一にあらず亦二に非ず。　說者と及び聽聞と、　此れ皆幻の如き義、　幻の如く不可得なり、　佛の方便も是の如し。

この諸の菩薩、此の偈を說き已て、坐して而して法を聽けり。

七、厨神呪

時に、觀世音菩薩、法身に白して言く、世尊、我れ悉地の人を求めんが爲に、或は深山曠野の中

【六八】陀羅尼(dhāraṇī) 總持と譯す。一字一音に多義を含ずるが故に、爾か云ふ。

【六九】心地の神呪。Oṁ antiṭat hu-vajra.

衆魔を降伏して、佛道に入らしむ。汝等、應に知るべし、此は亦是れ方便なり。持呪の人、此の事あるを見れば、卽ち心に忿怒を生じ、鬼神を降伏し、未だ悉地を得ざれば、驗を成することを得ざるなり。又諸佛の方便所說を知らずして、(呪の、功力を)知らんと欲する者は、(先づ)自心の妄想を降伏すべし。(不知者は)種種に顚倒妄想し、攀緣して、諸の不善を作し、或は餓鬼の心を生じ、或は[六四]外道の心を生じ、或は修羅の心を生じ、或は諸の惡鬼神の心と、羅刹の心とを生ぜん。是の義を以ての故に、念念相生じて、諸の惡鬼神の害と、天阿[六五]修羅障及び諸の外道と羅刹鬼の惡とは、是れ皆妄心より生ず。卽ち(不知者に)、(此の如き心は)生ぜずと雖、是の如くの(種種の)報を受けん。諸經に說く所の鬼神を摧伏すとは、是の呪力を以て、能く心中の是の如くの惡念を滅す。此の惡念無ければ、惡身を受けず。故に當に降伏(の眞意)を知るべきなり。若し能く先に自心の諸の惡鬼神を降す者は、一切の天魔・外道の天・阿修羅・[六六]藥叉・[六七]羅刹・諸の惡鬼神、自然に歸伏して、敢て違逆するなし。若し自ら惡心を降伏せずして、能く諸餘の天鬼神を降伏すると云ふ考あらば是の處り有ることなし。と

普賢菩薩、又白して言く、云何んが、法中に病を治し、衆生の苦を救ふと說くや。云何んか、餘部の經中に於て、卽ち病を持するを許さずと說て、(而も此の經に於て)湯藥を合和する(を說く)はその義、云何ん。

毘盧遮那佛の言く、病を治することも亦爾く。前と異ならず。自らの心病を治するなり。既にして能く諸病を治すべし。若し自ら病ありて、能く他人の病を治すと云はゞ、是の處り有ることなし。病を持するを許さずと說くは、自らに病あるが爲めの故なり。許すこと有りと說くは、斯の呪力の爲めなり。他人をして解脫せしむとは、その人の心に有る病を無くする(義)なり。病有るものをば、解脫と名けず。持呪の人、自ら心に病あらば、終に能く諸病を治する能はず。縱ひ治せんとするも、亦得可らざるなり。

【六四】外道の心。邪見の意、邪見とは因果の理を認めざる見解なり。

【六五】修羅。具には阿修羅(asura)非天の義。

【六六】藥叉(Yaksa)速疾鬼と云ふ。飛行の速疾なる一種の惡鬼を指す。

【六七】羅刹(Rākṣasa)食人鬼と云ふ。

とを欲す。弟子某乙貧窮の爲に、諸の供養なし、唯願くは大聖、弟子の爲に此の鋪に於て、大曼荼羅の法壇を設け、一一經中に依て、缺少せしむる無れ。と、是の語を發し已て、閉目して而して坐し、金剛を想觀せよ。前鋪に於て、大曼荼羅法壇を設け、上妙の物を以て供養を爲し、此の壇を想ひ已て、次に四壁及び地は、皆是れ[六三]七寶合成なりと想へ、卽ち手印を結べ。諸の本呪の神、道場に降趣し、弟子の供養を受け、持する所の呪百八遍を誦じ訖りて、自ら心願を發す。是の如く日夜六時に、一一に次第して、本呪明を誦じ、都て二七日にして、下の悉地を成ずるなり。

想へ、此の道場及び壇を了了分明にして、錯觀することを得ざれ。

毘盧遮那佛、千百億化身の釋迦牟尼佛、及び五大菩薩等に告て曰く、此の三種悉地成就の相は、若し人、三部の神呪を持して、此の三悉地を得る者は、當に知るべし。是の人の成佛は久しからず。何を以ての故に、此は是れ諸佛に大方便ありて、總持門、最要の法、甚深の境界は解し難く入り難き不可思議を說く。又之れに告て言く、悉地を得る者は、有ゆる功能の德、具に說く可らず。證者は乃ち知る。何を以ての故に、若し我具に此の法門を說けば、或は人有りて聞けば、心則ち狂亂し、孤疑して信ぜず。何を以ての故に、諸佛の境界は、等覺地の位にして、尙ほ知る能はず、何に況んや、凡夫にして而して驚怖せざらんや。

六、邪心妄念の降伏

その時、普賢菩薩は、坐より起て、法身に白して言く、世尊、諸佛如來は、大慈を以て本と爲す。云何んが諸の陀羅尼に操惡威德ありて、自在に鬼神及び諸の外道の天、阿修羅を傷害すと說くや。

毘盧遮那の言く、汝今諦聽せよ、吾れ汝の爲に說かん。これに二義あり、應に善く之を知るべし。云何んが二と爲す。一には諸佛方便して說法し、衆生を導引す。二には此の猛烈操惡の身を顯して、

【六三】七寶。金・銀・瑠璃・硨磲・碼碯・珊瑚・琥珀。

呪の神を供養すべし。卽ち大誓願を發して悔過し、先世の罪、及び今時所造の罪を、深心に住して悔過し、三寶を頂禮し訖已りて、卽ち結跏趺坐し、手に念珠を把り、閉目定想し、本尊神等は、目前に在り、對面して而して立つと思念し、此の想觀を作して、必ず須らく分明ならしむべし。想觀成じ已て、所持の呪を八百遍を誦じ、唯心に念じて、口舌等をして動かしむる勿れ。遍遍に口中より白光有りて出で、本呪神の口中に入り、光は斷絶することなしと想へ。呪を持誦すること已に滿じて、必ず須らく分明ならしむべし。呪神の口中の光、間斷せずと想觀せよ。呪を誦じ畢已りて、又更に發願せよ。香華の印を作し、供養し都て了し、卽ち起て禮拜す。法の如く神を發遣せよ。是の如く一日三時、夜三時せよ。時別は此れに准ぜよ。都て七日を滿じて、中悉地を成するなり。若し人、三部の神呪を持して、此の中悉地を得る者は、廣大不可思議なり。本經上の所說の功能に依て、皆成就を得るなり。佛部の中成者は、三部の總成なり。菩薩部の中成者は、諸菩薩呪の總成なり、及び金剛部中已下の諸天・夜叉・鬼神等の呪は、自ら成ぜざるなきなり。金剛部の中成者は、但本法のみにあらず、諸の金剛已下、天龍・鬼神呪の總成なり。(金剛部の中成者は)佛部の呪と、菩薩部の呪とを成ぜず。何を以ての故に、心より頂に至るまでを上と爲し、臍より心に至るまでを中と爲し、足より臍に至るまでを下と爲す。是の故に諸法は逆行す可らず。呪を持する人は、善く須らく上中下の呪を分明にすべし。此は是れ三部の都てにして、中悉地の軌則を說くものと知るべし。

その時、觀世音菩薩、法身に白して言く、世尊、中悉地は已に知る。下悉地は云何ん。

毘盧遮那佛、告げて言く、汝等、當に知るべし。若し人、三部の神呪を持して、下悉地を得んと欲せば、先づ遍數を誦じ、及び心地呪を誦ぜよ。神呪は前に准じて之を說く、遍數の滿を誦じ已て、靜處に於て坐し、安悉香を燒て供養し、大輪金剛印呪二十一遍を誦じ、稽首して告て言く、唯願くは金剛よ、速に此に垂降せよ。弟子爲に其の呪を持せん。其の願を求めて、大驗を成就するを得んこ

ること無きなり。何を以ての故に、此の凡夫の(行者の)心を將て、菩薩の運度、及び呪力莊嚴の種種の方便を以て、此の凡夫をして菩薩の心と共なる一種を得せしむればなり。菩薩に萬行ありて、衆生を饒益し、及び神通大自在あり、此の持呪の人は、悉く是の如くなるを得ん。當に知るべし、(行)者は即ち是れ菩薩の一種にして、異り有ること無く、佛法を護持し、諸魔を降伏せん。若し金剛(部)の呪を持して、上悉地を得る者は、亦本說の法の如く、金剛の一種なり。何を以ての故に、金剛は不壞の身なり。持呪の人は、身心不壞にして、得る所の神力は、共に本說呪の金剛と異りあることなきなり。能く佛法を護持し、諸魔を降伏して、正道に入らしめん。持呪の者は、悉く能く是の如きを得ん。更に諸事あり、具說すべからず。

その時、普賢菩薩、法身に白して言さく、世尊、三部の呪を持して悉地を成ずる者は、各〻本尊の如き一種の身を得ん。何を以て、凡夫の(行者)にして能く是の如くの佛・菩薩・金剛の身を以て、凡俗の類(中)に在ることを得んや。と、毘盧遮那佛は、普賢に告げて言く、汝等は當に知るべし。諸佛は凡夫に化作するも、眞に是れ凡夫なる可きや。持呪の人にして悉地を得る者は、亦復是の如く、(凡夫に見ゆるも、實は諸尊と同なり)。その時に、文殊菩薩は、法身に白して言く、世尊、其の上悉地は已に知る。中悉地は云何ん。唯願くは之を說き、普く衆生をして而して安樂を得せしめ玉へ。と

毘盧遮那佛は、文殊に告げて言く、中悉地は、三部の呪を持するに隨て、各本尊畫像の法あり、一一復本經の所說に依て、身分を莊嚴し、及び諸(部)洛眷屬等、一一分明に記し取つて、先づ遍數を誦じて滿足せよ。然るに又前に心地の神呪を誦ずるに准じて、亦遍數を滿足せよ。或は山間に於て、或は廣野に於て、或は城郭市肆の中に在りて、或は伽藍(屋)舍等の内に於て、閑靜處を須ひ、或は空地に於て、或は房中に在りて、唯須らく靜坐して、衆名香を燒きて、諸佛・菩薩・金剛・諸天等、及び本

訖りて、心に所持の呪を二十一遍を誦じ、一遍誦する毎に、自身の口中に文理の光りありて、口中より出でて諸神の口中に入る。想へ、一切の諸神、復總て(自身の)口中に入り、心王の中に至りて安置す。是の如く一日三時に、觀想を作せば、必ず須らく明了ならん。都て三七日を滿じ、毎日次第に依て之を作せ、必ず上悉地を成就することを得るなり。後に於て、但本經の上の說事のみにあらず、意に種種難思議の事を作さんと欲せば、皆な成就を得。所作の事、意の擧動運爲、皆共に本說神呪の一種にして、大自在を得、具說す可らず。學者之を知れ。

凡そ事を爲さんと欲せば、毎に思惟し心念せよ。我は是れ大聖自在の身なり。今且らく化して凡夫の人と作る。俗衆の中に於て、苦の衆生を度し、人をして識らしめずと。若し諸神を驅使する者は、想へ、自の心王より、百億萬の衆を化作し、前後に圍遶して、勅所に住して、種種の無礙を爲す。これ是の人の自力にあらず、是れ心地神呪の力なり。能く一切の諸神と自在の神識と合して一體と爲るが故に、是の如くなるを知る。若し佛部の呪及び菩薩(部の呪)を持すれば、上悉地を取らん。若し金剛(部)已下の呪を持すれば、上悉地を取ることなし。何を以ての故に、金剛諸天、藥叉神呪の性は猛烈操惡なればなり。若し(金剛部に於て)能く上悉地を成就する者は、自在を得るが爲めに、慈悲を生ぜず、一切の鬼神を傷くるが故に。若し能く大悲を起して、普く一切を愍れみ、害心を生ぜず、亦嗔怒せざる者は、亦上悉地を取るに任せよ。若し是の如くなる能はざる者にして、佛語に違流すれば。當に大罪を得べしと知れ。若し[六一]佛頂の呪を持して、上悉地を得るものは、即ち諸佛の一種と共なり。何を以ての故に、身は是れ凡夫なりと雖、心は自在辯才無礙を得、智慧滯りなく、能く一切天人世間の與に師と爲り、一切種智と一切神通とを具して、說き盡すべからず。是の故に應に知るべし、佛と異ることなく、更に思議し難き事あり、具に說く可らず。證者は乃ち知る。若し菩薩部の呪を持する者、上悉地を得たる者、[六二]本呪を持するに隨て、本說呪の菩薩の一種と異りあ

【六一】佛頂。之れに五種あり、金輪佛頂、光聚佛頂、白傘蓋佛頂、高佛頂、勝佛頂。

【六二】本呪。心地神呪を指す。

五、三種悉地の相

その時、觀世音菩薩は、[五三]法身に白して言さく、世尊、其の持呪の人は、三種悉地の相を求むる者、云何んが上悉地の相、云何んが中悉地の相、云何んが下悉地の相なりや。唯願くは世尊、我等の爲に說て、一切菩薩摩訶薩、及び諸の人天をして、普く成就を得、不退轉地の大三摩地を得、菩提道を證し、等正覺を成じ、天人衆を度して[五四]涅槃に入りて、永く生死を離れて、諸苦を受けざらしめよ。と

爾の時、毘盧遮那佛は告て言く、汝三種悉地を知らんと欲せば、吾れ汝の爲に說かん。汝等當に知るべし。三部共同に、上中下悉地の相あり、三部に各〻三種の悉地あり。若し善男子等ありて、上悉地を得んと欲せば、當に須らく內外を清淨に護淨すべし、[五五]身三・口四・意三の煩惱業を清淨にする者は、先づ所持の呪を誦じ、本經の上に依て、遍數を滿足す。乃ち[五六]心地の呪を誦するも、亦遍數を滿足せよ。閑靜の所に於て、淨草座具の上に、結跏趺坐に坐し、上妙香を燒きて供養し、廣く大誓願を發し、十方の諸佛・諸大菩薩・諸大金剛・一切諸天・冥官衆聖に啓告し、普く證明を願ふべし。

弟子某甲、其の呪を受持せんと欲するが爲に、唯願くは世尊・菩薩・金剛天等、證明を爲して、速に成就を得せしめ玉へ。三たび是の願を發し已て、即ち閉目して而して坐す。先づ[五七]所持の呪を八百遍誦じ、自ら想へ、[五八]本身は是れ本呪の神身なり、一一の身分の莊嚴相好、及び身上に光有るも光無きも、坐立形勢、嗔喜擧動、一一本經上の畫像莊嚴に依り、是の如き觀を作せ、自身を想ふこと、極めて須らく了了分明ならしめ訖んぬ。次に想へ、無量の諸神、[五九]部落の使者、前後に圍遶し恭敬し陪侍す。一一[六〇]本土の所說に依る。此の想觀を作し、大に須らく分明ならしめ、是の如くし

【五三】法身。大日如來を指す。

【五四】涅槃(nirvāṇa)滅盡の義。煩惱妄執の滅盡を意味す。

【五五】身三(殺生・偸盜・邪婬)口四(妄語・惡口・綺語・兩舌)意三(瞋恚・慳貪・邪見)

【五六】心地の呪。Oṃ sutiṣṭha-vajra.

【五七】所持呪。三部中の一眞言を指す。

【五八】本身。行者自身を意味す。

【五九】部落。部屬と同意。

【六〇】本土。本尊の本土を指す。

無明熾盛にして、忽に退轉の心を生じ、諸の非法を造し、[五〇]五欲に貪著し、持する所の呪に於て、而も間斷せしめ、或は多時を經、後に於て忽然として自發して[五一]菩提心を開悟し、重て本呪を持せん。我は此等の爲に緒勳の心神呪を說きて、諸の衆生をして、間斷の性なく、本呪と共に一種の(呪)をも退せざらしめん。即ち緒勳の呪を說て曰く、

[五二]曩牟波伽伐帝、烏瑟尼沙、唵部林盤陀曳、娑婆訶、怛他揭都、娑婆曳、娑婆訶、鉢頭摩摩尼、娑婆曳、娑婆訶、跋折羅、摩尼、娑婆曳、娑婆訶、摩尼、摩尼、俱羅曳、娑婆訶、怛姪他、許吽、叭吒、摩尼、達哩、許、叭吒、唵許許、歌歌、叭吒、摩尼伐折哩、許叭吒、

これ是の緒勳神呪を、亦心地根本神呪と名く、能く重罪を滅す。此の呪を誦すれば、悉く能く一切の罪業を滅し。亦能く一切の(他の)諸呪の功能を破し。復諸呪の功能を成ず。具に論ずることを用ゐず。俱に言持あれば、驗の無量を獲、若し人呪を持し、中間に斷絕しなば、力に隨て先づ本持の呪を言ぜよ、少多の遍數訖りて、發願し、毘盧遮那佛に稽首して、(曰く)弟子某甲、先づ某呪若干遍數を誦じ、中間に廢闕し、今又誦じて若干遍を得、諸佛に請し、我が前緒に誦する所の功課と、及び今時誦する所の者と、通洞して間斷なく、即ち諸功德の神呪一千八遍を誦じ、又重て前の發願に準すれば、即ち共に本來不退なると異りあること無からしめ玉へ。と

毘盧遮那の言く、守持して、此の呪を無智の人に流轉する莫れ、此の無智の人は、是の諸佛方便の所說を見れば、便ち貪著懈怠を生じ、懃に精進せず、五欲の想を生じて、菩提の意を退せん。何を以ての故に、此の人の根性は堅牢ならざるが爲めの故に、少智慧の故に、生死の流に入りて、復更に修學するも、終に益あることなけん。若し本來不退者にして、此の呪を誦ずれば、法を助けて速に成ず。

[五〇] 五欲。色・聲・香・味・觸の五境に對して・愛著欲念を懷くを云ふ。

[五一] 菩提心。菩提(bodhi)とは覺智の義。

[五二] Namo bhagavate uṣṇīṣa oṁ bhrū ṇ bandhaye svāhā tathāgato svaye svāhā padma-maṇi svaye svāhā vajra-maṇi svaye svāhā maṇi maṇi-kulaye svāhā tadyathā hūṁ hāṁ phaṭ maṇi-dharma phaṭ oṁ hūṁ hūṁ ha ha phaṭ maṇi-vajri hūṁ phaṭ.

じ、是の觀を作し已て、乃ち此の心地の呪二十一遍を誦じ、卽ち自然に、無量の三昧に入ることを得て、無生法忍を得ん。是の如くの境界を證する者は、乃ち不可說を知るなり。當に此の呪を誦じて、口舌咽喉等をして動ぜしめず、心をして之を念ぜしむべし。仍て須らく無念の念に入るべし。これを眞念と名く。告て言く、汝等は當に知るべし。大乘を樂ふの人、禪定智慧を修學する者、若し宿世[四六]無因の鈍根の輩、前の次第に依て、安心する能はざる者は、但能く(心を)空ふして心地の神呪を誦じて、百萬遍を滿せよ。自性智慧の性開け、速に無生法忍を證せん。若し先世に曾て修學せば、暫時に宿智慧を廢忘せしが故に、更に多誦を煩はさず、但し前法に依て心地を安置し、二十一遍を誦すれば、卽ち禪定智慧を得、此の人、能く諸の[四七]境界に入りて、怖畏あることなけん。[四八]般若波羅蜜多は、自然に圓滿せん。是の如くの境界を證する者は、乃ち知らんのみ。又言く、汝等若し人ありて、[四九]三部の神呪を持し、此の心地の神呪を得て、法成を助けんと欲する者は、我今汝の爲に、之を分別し解說せん。

佛部の呪を持する者は、當に先づ心地の呪百萬遍を誦ずべし。若し菩薩の呪を持する者は、當に心地の呪を二百萬遍を誦ずべし。若し金剛部の呪を持する者は、當に心地の呪を三百萬遍を誦ずべし。若し人但し此の遍數を滿する者は、本呪を持するに隨て、皆な成就することを得ん。何を以ての故に、此の心呪は是れ一切諸呪の母なり。是の故に諸の呪神等は、敢て違逆することなし。若し所作者にして、心願を遂げざる者は、但し心に心地の呪を念ずること二十一遍せよ。當に大驗を得べし、一切の諸の呪神は(電のごとく)奔り、星のごとく走り來るべし。敢て違して勅に順ぜざるなく、驅使せられん。

四、緒勳の呪

又言く、汝等當に知るべし。若し人三部の呪を持して、未だ悉地を得ざる者は、是を凡夫と爲す。

【四六】 無因。佛性を具へざる意。宿世に善根を積んで佛因を結ばざる者を指す。

【四七】 境界。禪定中の境界を指す。

【四八】 般若波羅蜜多(prajñā-pāramitā) 智慧到彼岸と譯す。智慧完成の義。

【四九】 三部。佛部、蓮華部、金剛部。佛部とは諸佛の一團、蓮華部とは觀音菩薩の一團、金剛部とは武器を有する菩薩の一團を指す。

時に[三七]佛は說法すと雖、衆會中には聞者と不聞者との別あり、何を以ての故に、心に解脫を得る者[三八]三空を悟る者、法眼を得る者、諸佛の境界に入りて、怖畏なき者、心地の法に於て、障礙なき者は、並に之を聞くことを得、善く諸佛の方便所說を知り、一切の法は、幻相の如くなるを了する者も、亦之を聞くことを得、如上の智を具せざる者は並に之を聞かず。由ほし人の酒に醉え、臥して覺めず、知らざるが如し。

爾の時に毘盧遮那佛は、此の呪を說き已て、忽然として現はれず。淸淨法界の同一身に入り、十方[三九]剎に遍じて、大虛空の等しく異あること無きが如く、一切の衆會皆悉く見ず。

時に釋迦牟尼佛は、亦毘盧遮那佛に隨て、法界同一の眞體に入り、一切の衆會、亦復釋迦牟尼佛を見ず。

時に文殊、普賢、觀音、彌勒、金剛藏等、五大菩薩は、總じて釋迦に隨侍して深法界に入りて、毘盧遮那佛の心地法要門の甚深の境界を說くを聽けり。時に一切衆生は皆悉く、我が本師釋迦牟尼佛、及び大菩薩は今何處にありや。と怪しめり。

爾の時に毘盧遮那佛は、かの淸淨法界に在りて、無處所に入り、惟五大菩薩と與に、心地神呪の法門を持する軌則威儀と、悉地の相とを說き玉へり。

三、心地神呪を持する法則威儀

[四〇]佛告て言く[四一]汝等當に知るべし。若し此の心地の神呪を持して、禪定と智慧とを學し、一切の三昧に入り、[四二]無生法忍を證せんと欲する者は、當に知るべし。先づ心地の呪、百萬遍を誦じ訖りて、然して後に[四三]結跏趺坐し、左手にて右手を押へ、眼を閉ぢて、無處所を觀じ、一切の念を斷じて、亦念を離れざれ、一切の諸緣を斷じて、亦、緣を離れざるべし。先づ[四四]四大[四五]五陰は所有なしと觀

【三七】佛。大日如來を指す。
【三八】三空。空・無相・無願の三解脫を云ふ。
【三九】剎。具には剎羅(Kṣetra)國土の義。
【四〇】佛。大日如來を指す。
【四一】汝等。釋迦牟尼佛並に五大菩薩を指す。
【四二】無生法忍。眞實智慧即ち道種智に當る。
【四三】結跏趺坐。左足を先づ右の髀の上に著け、次に右足を左の髀の上に著くる、之を蓮華坐若しくは如來坐と稱す。禪家は此の坐法と異りて、之を反對にす。
【四四】四大。地・水・火・風。
【四五】五陰。色・受・想・行識。

薩、汝今諦聽せよ、汝の爲に魔を去るの法を說かん。大神呪あり、心地呪法と名く。之を誦持する者は、速に一切種智を得、諸[三三]魔の爲に、其の便を得られざるなり。と、時に諸の化佛、卽ち我が爲に說く、我れ之を聞くことを得て、憶持して忘れず、卽時に諸魔を退散せしむ。我れ此の時に於て、便ち[三四]無生法忍を得、菩提の大道、自然に圓滿せり。汝等當に知るべし。此の心地の神呪は、一切諸神、心地の法を修して、此の呪を誦せずして、而して成ずるを得ると云ふ者あらば、是の處有ることなし。道場に坐する時、此の呪を誦せずして、諸魔の難を離るゝと云ふ者あらば、亦是の處有ることなし。諸佛此の呪を誦せずして、一切智を具せりと云ふ者あらば、此の處有ることなし。若し此の呪を誦せずして、諸法に自在を得と云ふ者あらば、此の處有ることなし。若し諸の人天、諸の餘の呪を將て、若し先に此の呪を誦せずして、悉地を得ると云ふものあらば、此の處あることなし。若し先に此の呪を誦じ、後に諸呪を將て、驗を成ぜず云ふものあらば、此の處あることなし。此の呪を誦する者にして、毘那夜迦に惱亂せらるゝと云ふ者あらば、此の處あることなし。何を以ての故に、此の呪は是れ一切諸佛の心地法要なればなり。但し世間出世間の法は、心地よりして而して生ぜざれば、何に從りて而も度せんや、是の故に、若し心地法門に依らざれば、諸佛甚深の境界に入ること能はざるなり。

その時、釋迦牟尼佛、及び諸の大衆、稽首して[三五]世尊に白して言く、世尊、唯願くは之を說き玉へ。と

爾の時に、毘盧遮那、卽ち釋迦の與に心地の神呪を說く、卽ち呪を說て曰く。

[三六]唵蘇底瑟吒縛折羅

此の呪を說き已て、天は寶華を雨らし、十方世界、所有の上妙香華、及び諸の音樂、悉く皆雲集して、而して供養を爲す。諸天伎樂、空中に滿ち、一切の天龍は皆未曾有なりと曰ふ。

【三三】魔。具には魔羅(māra)能奪命卽ち佛性の命根を奪はんとするものを指す。障碍若しくは破壞は魔の所爲を認めらる。

【三四】無生法忍。無生法とは生滅變異を遠離せる眞如實相を指す。忍とは智なり。眞如を認知する智慧を云ふ。菩薩は十地の中の第八地に至て此の眞智を證得するなり。

【三五】世尊。大日如來を指す。

【三六】Oṁ sutiṣṭha-vajra.

て供養を、當に云何んが、爲すべきや。當に[19]摩訶悉地を得べきや。と
時に執金剛は忿怒軍荼利に言ふには、こは[20]佛に問ふべきなり。我は答ふる能はず。と
時に[21]二金剛は同聲に佛に白して言く、世尊、佛は總持法門を說き玉へり。衆生は云何んが修學せん。と一一具に上の如く問ふ。

その時に、佛は二金剛に告げて言く、此は毘盧遮那佛に問を致しつべし。能く此の事を知らん。時に佛は卽ち[22]三昧に入り、神通力を作して、諸の大衆、若しは天、若しは龍、若しは鬼、若しは神、一切の衆會をして、倶に蓮華藏世界に到り、稽首し作禮して、[23]法身に白して言く、世尊、我れ今は衆生なり。[24]總持法要は、多く成ぜざる所、縱ひ少功あるも、卽ち[25]毘那夜迦、種種の障難を作して成ぜざらしむ。復其の人をして、卽ち厭離の心を生じて、意を退して棄捨せしめん。斯等の衆生は、卽ち心地の妙法、諸佛の境界を知らず、是を以て、[26]三種の悉地を成せずして、返て鬼神の惑亂を被らん。唯願くは世尊、衆生を憐愍して、乃し我等の爲に、法要淸淨の軌則を持するを說き玉へ。云何んが、當に三種の悉地を得べきや。云何んが、身心を安置して念誦し、諸の惡鬼神の與に[27]留難を作されざるや。と

時に毘盧遮那佛の言く、汝等當に知るべし。我れ念ふに往昔、初て道意を發し、[28]阿蘭若處に在りて、端坐思惟し、心地の法門を修し、智慧無きが爲の故に、心は安定せず、諸法は現前せず、旣に安定せずして、種種の妄想をもて、諸の[29]攀緣を起し是の義を以ての故に、卽ち鬼神に惑亂せられ、錯りて魔境に入る。謂く是の佛法は、貪にして愛心を生じ、將に究竟を作さんとして、覺せず知せず。[30]無數劫を經て、魔の爲に害せられ、後に忽にして、是は魔魅の法にして、佛法に非ずと知るなり。然りと雖、復方計なく、當に大に發聲して、諸佛に告げて言く、佛に[31]慧眼あり、何んぞ我が魔の爲に惱まさるゝを見ざるや。と、當時、空中に無數の[32]化佛ありて、我に告げて言く、善哉、善

【一九】摩訶悉地(mahā-siddhi)大成就。
【二〇】佛。釋迦佛を指す。
【二一】二金剛。金剛手祕密主と大忿怒金剛となり。
【二二】三昧。具には三摩地(samādhi)等至の義、行者の心意が所觀の法に全く一致し相應するを云ふ。
【二三】法身。大日如來を指す。
【二四】總持。眞言陀羅尼を指す。
【二五】毘那夜迦(Vināyaka)常隨魔と稱し、常に行者の隙を窺ひ、障碍を與へんとする魔神なり。
【二六】三種悉地。上中下三品の成就を意味す。
【二七】留難。妨害。
【二八】阿蘭若(araṇya)寂靜處又は寺院の意。
【二九】攀緣。妄境界に心意を引き寄せらるる意。又、妄分別を指す。
【三〇】無數劫　久遠長時の意。
【三一】慧眼。眞實智慧。
【三二】化佛。法身佛の神力所現の佛身を意味す。

毒を受けて、出づる期あることなし。此の如き人を、佛は深く愍念す。

汝等、當に知るべし。此の人正しく惡を造るの時、汝等須らく[一〇]調伏の時を知るべし。時時に與に重病を作れ、世間の方法にては、能く救ふ者なし。此の如くの衆生は、苦の爲に逼られなば、必ず道意を發さん。乃し[一一]引攝して佛道に入れしむべきなりと。時に釋迦、是の説を聞き已て、心に慚愧を懷き、頂禮して辭退し。本源の世界に至て、道場處に坐し、是の思惟を作す。諸佛の境界は解し難し入り難し、不可思議の種種の[一二]方便をもて、衆生を教導せん、凡夫は無知にして、調伏すべきこと難し。と

又大衆に告ぐ、汝等當に知るべし、心地尸羅淨行の法門は、聞を得べきこと難し、見るを得べきこと難し、汝等、一切[一三]菩薩摩訶薩、及び諸の聲聞、若しは天、若しは龍、若しは鬼神等、應當に修學すべし、一心に精懃して、憶持して忘れざれば、當に[一四]作佛することを得べし。

二、心地神呪の起原並に功能

その時、[一五]大忿怒金剛に、座よりして起て、大相好を現じ、雜思の光を放て、十萬刹を照らし、稽首し作禮して、[一六]金剛手に白して言く、大士、我れ聞く、諸佛は[一七]道處に坐し、皆悉く陀羅尼門の總持法要を稱讃し、無量難思の不可思議を建立す。惟念ふ、衆生は薄福の者多く、設ひ受持する者あるも、成就することを得ず。惟願くば、大士、此等の人の爲に、大方便を設けて、成就を得せしめ玉へ。云何んが當に三種の悉地を得べきや。云何んが、九種の壇を造するや。云何んが、身心を安置して、神呪を誦念するや。云何んが、初念誦より、何の相を見ることを得て、自ら當に[一八]悉地を得べしと知るや。云何んが所居の處を擇ばん。云何んが、喫食を擇ばん。云何んが諸の供養を作さん。云何んが、諸の威儀を具して、行住坐臥に、當に思念を懷くべきや。貧窮の衆生は、物無くし

【一〇】調伏。惡心を征服して、善心を呼び起る行動を指す。

【一一】引攝。誘導攝取の義。

【一二】方便。手段方法。

【一三】菩薩摩訶薩具には菩提薩埵摩訶薩埵(Bodhi-sattva-mahā-sattva) 覺有情、大有情の義にして、大士又は大丈夫士の意。

【一四】作佛。成佛の義。

【一五】大忿怒金剛。軍荼利明王を指す。

【一六】金剛手。金剛藏菩薩。

【一七】道處。菩提樹下。

【一八】悉地 (siddhi) 願望成就の意。

清淨法身毘盧遮那心地法門成就一切陀羅尼三種悉地

一、先づ調伏して善導せよ

その時、毘盧遮那佛[一]、蓮華藏世界にありて、百千億の化身[二]釋迦牟尼佛と與に、心地[三]尸羅[四]淨行品を說きて、菩薩の法を敎へ、菩提の道を證せしむ。その時に、千百億の釋迦は、異口同音に白して言く、法身世尊、一切衆生は心地法門を得と雖、而も專精に修學する能はず、設ひ暫時の存念ありとも、便卽ち放捨し、縱に身心を逸し、恣に不善を行ず。或は諸佛深妙の法門を得んと思惟すること有るも、精進する能はず。豈に退轉して重て道意を發し、日夜に精懃して、一心に修學し、無上道を求めしめんや。或は退する者ありて、更に惡業を造り、生死の流に入りて、復心地の妙法を思惟せず、惡趣に輪廻して、出期あること無し。是の如くの衆生は云何んが調伏せんや。その時、毘盧遮那佛は、千百億の釋迦牟尼佛に告げて言く。汝今諦聽せよ、吾れ汝の爲に調伏の法を說て、一切衆生をして、普く安樂を得せしめん。一切衆生は心地の法に於て、聞者あり不聞者あり、倶に調伏するを得ん。聞者は懃に精進[五]を加へしめ、若し不聞者なれば、道意を發さしめよ。汝等は當に知るべし。一切衆生は、心地の法門を得るも、懃に精進せず、樂んで諸惡を造り、好む處に隨て、與に留難[六]を作し、身をして安からざらしむ。此等の衆生は、苦の爲に逼られなば、必ず思惟して、重て道意[七]を發し、日夜に精懃して一切修學せん。何を以ての故に、譬へば野馬の如く、不調なれば、惟楚撻を加へ、然して禁制すべし。

或は衆生ありて、未だ佛法を聞かず、前生の少福を承けて、今人身を得、薄く衣食あり、樂んで世間の種種の惡業を造りて、解脫[八]出世の因を求めず。此等の衆生は、無明[九]熾盛にして、此の身は幻の如く、化の如く、卽ち生じ卽ち死することを知らず。唯諸惡を造りて、死して地獄に入り、諸の苦

【一】毘盧遮那(Vairocana)遍照、卽ち大日如來。

【二】化身。化度すべき衆生に應じて、身相を變化して現はるる佛身の意。

【三】心地。本性の義。

【四】尸羅(Śila)淸凉の義、戒法又は善事を身に行ふ時、身心に淸爽を覺ゆ、これ淸凉の意にして、戒法を指して尸羅と云ふ。

【五】精進。奮發努力の意。

【六】留難。稽留障難の意。稽留とは、物事意のままに進まず停滯する義。

【七】道意。道心の義。

【八】解脫。煩惱妄想より生ずる厄縛を離るる意。

【九】無明。理知の明なき意にして、煩惱妄想を指す。

て、支那以東の東洋人の妄作であると見做すことには同意し兼ぬるのである。

最後に本經と兩部大經の思想との關係に付て述ぶれば、本經中には金胎兩部の思想が、完全に一つのものとして表はれて居ると思はれる。かの軍荼利明王は、金剛頂經に重に現はれて來る尊身である。而して文殊、普賢、彌勒、觀音は胎藏法中に常に現はれて來る尊身である。金剛手は金剛頂經に重に用ひられる名稱で、大日經に於ては祕密主の名を以て呼ばれてある。而して雜部密經に於ては、金剛藏菩薩と呼ばれてあるから、金剛手祕密主、金剛手菩薩、並に金剛藏菩薩は同體異名の尊身と見るべきである。此等尊身の名稱から考ても、金剛界と胎藏界との兩部の思想が入り交つて居ることが分る。殊に此の經中に於て極めて重きを爲して居る心地神呪の唵蘇底瑟吒縛折羅（Oṁ sutiṣṭha vajra）の明呪は「安住金剛」の意であるから、金剛頂經の五相成身觀中の一を擧げて居ることが明かである。かれ此れ本經に現はれてある思想を綜合して考ふるに、此の經は兩部の思想を混成し一括して居るものと見ることが出來る。思想の上からのみ考ふる時は、寧ろ金胎兩部と言ふが如く未だ明かに分れない以前のものでは有るまいかと思はるる程である。若し兩部大經成立後に作成されたものであれば、眞言と同時に必ず印契が明されてなくてはならないが、印契が示されて無い所から考ふるに、兩部大經が未だ作製されない以前に作られたものと外考へられないのである。尙又金剛手若しくは執金剛の名稱は。兩部の大經が世に公にされてから出來たものとすれば、金剛手菩薩若しくは金剛手祕密主と言ふ名稱を使用すべきである。此等の名稱を用ひず、單に金剛手と呼んで居る所は、謂ゆる雜部の密教諸經と異ならない所である。

此の如き點から考て、本經は雜部密教が可なりに發達して、而も尙未だ兩部の純密教の大經が作製されて無い時代の作物であるとしか考へられない。此の想像が眞であれば、本經の作製並に飜譯は隋末唐初のものであらねばならないことに成る。果して然りとせばかくも思想的に可なり價値あるものが、何の故に讀書界から不問に附されて居つたであらうと云ふことが、次に疑問として殘ることに成るが、此は他日の研究に讓ることとする。

昭和六年九月六日

譯者　神林隆淨　識

く、手を加へて整頓すべき點が多多あるにも拘はらず、手が加へられて無いのである。

本經の構想は歷史的の釋尊を中心人物に樹て、釋尊の眷屬として文殊・普賢・彌勒・觀音並に金剛藏の五大菩薩を擧げてある。先づ初めに末法澆季の世に眞言行を精進して修し得ない眞言行者あることを豫想し、而も斯の如き怠慢なる行者が悉地を成就するには、如何にせば可ならんかと云ふを軍荼利明王が金剛手に對して質問を發し、金剛手は之れに明答を與ふることが出來ない所から、明王と共に釋尊に對して此の疑問を尋ねた。そこで釋尊は三昧に入り蓮華藏世界に至り、毘盧遮那佛に對して教示を請ひ、同時に五大菩薩も亦三昧に入りて、倶に此の蓮華藏世界に至り、毘盧遮那佛の說法の會坐にあつて、種種の質問を各自に起して、其の一一に付て毘盧遮那佛が明答を與へることに成るが、毘盧遮那佛は說法を爲し、質疑に對して答へ終るや、直に其の迹を消して法界に歸入することに成り、次で釋尊並に五大菩薩は、三昧から出づることに成つてある。釋尊が三昧から出で終つて、先きに問を發した軍荼利明王並に金剛手に答へられたか否や、その邊は記述されて無い。毘盧遮那法身の說法をば、凡夫は聽聞する資格が無いとされてある。「時に佛は說法すと雖、衆會中には聞者と不聞者との別あり。何を以ての故に、心に解脫を得る者、三空を悟る者、法眼を得る者、諸佛の境界に入りて、怖畏なき者、心地の法に於て、障礙なき者は、並に之を聞くことを得、善く諸佛の方便所說を知り、一切の法は幻相の如くなるを了する者も、亦之を聞くことを得、如上の智を具せざる者は、並に之を聞かず、なほし人の酒に醉ひ、臥して覺めず知らざるが如し。」と言つてあるのは、本經が如來の祕密教たる所以を明したものである。軍荼利明王も密教の場合には、單に護法善神と云ふだけでなく、矢張大日如來の化身と見られて居るのであるから、自ら無知の爲めに此の問を起したのではなく、未來の衆生に成り代つて、此の問を起したことに成る。隨つて軍荼利明王は祕密教を聞くことの出來ない凡夫では無いのであるから、經には明に記述されては無いが、大五菩薩を共に三昧に入り蓮華藏世界に到りて、毘盧遮那の說法を聞き、均しく法樂を得たることと解釋すべきである。斯くの如き構想は、常に三昧を經驗して居る印度人に取りては、何等の疑ひも無く考に浮んで來、而して其れに對して何等の疑問をも起さないのであるが、三昧には全く何等の經驗も知識も無い支那、朝鮮、日本等の人人の間には、決して斯の如き考は興つて來ないと思はれる。故に吾人は此の經を以

ずして、呪の功力を知らんと欲する者は、先づ自心の妄想を降伏すべし。不知者は、種種に顚倒妄想し、攀緣して諸の不善を作し、或は餓鬼の心を生じ、或は外道の心を生じ、或は修羅の心を生じ、或は諸の惡鬼神の心と羅刹の心とを生ぜん。是の義を以ての故に、念念相生じて、諸の惡鬼神の害と、天阿修羅の障と、及び諸の外道と羅刹鬼の惡とは、是れ皆な妄心より生ず。（中略）諸經に說く所の鬼神を摧伏すとは、是の呪力を以て、能く心中の是の如くの惡念を滅す。此の惡念無ければ、惡身を受けず。故に當に降伏の眞意を知るべきなり。」諸有の魔障は自心より生ずとは、眞言密敎の通說と成つてある。隨つて降伏の法を修するのは、魔物其のものを客觀的の存在であると見做して之れを行ふのではなく、自心の迷妄の相であるとして、此の迷妄の心を降伏することが、卽ち眞言密敎の降伏法であることが、上記の說に明に現はれてある。此の眞意を知つて、彼の降伏法なるものを見れば、降伏法其のものは、妄心を鎭撫する一の方便であることが眞に理解されるであらう。と云ふのが、この一節の大意である。第七節の厨神呪は、一種の法食を示したもので、是れ亦饑餓の爲めに懊惱する人に對しては、一時の苦痛を除く一服の妙藥であることは疑なき所であらう。

二、批判

本書は、思想史上甚だ價値のあるものと思はれるが、その飜譯者並に飜譯時代の明かでないこと、殊に日本には何時將來されたものであるかも明かにすることが出來ないことは、吾人の甚だ遺憾とする所である。大正新修大藏經勘同目錄には、本經の別名を毘盧遮那別行經とし、別行經鈔二卷慈圓の撰としてあるが、不幸にして此の鈔を披見する機會を得ない本書の藏經中に編入されたのは最近であつて。縮刷藏經にも缺けて居る。然るに卍藏經續に至て始て藏經中に入られ、次で大正藏經に出ることに成つた。且つ經錄は開元錄、貞元錄は勿論至元法寶勘同總錄にも、大明三藏聖教の南北兩目錄にも本經の名が擧げて無いことは、本經の歷史的價値を減殺して居るのであるが、その文體から見て日本人の作で無いことは明である。何れにしても本書の成立を決することは可なり興味のある問題であると思はれる。

次に思想の上から考ふる時には、構想は印度人ならでは起されさうにも思はれない點が、充分明かに現はれて居ると思ふ。又此の文は最初から漢文として書いたものではなく、或る原文の譯本で、而も未再治本であることが氣付かれるのである。本經は漢文として完全なものではな

は、是れ一切諸呪の母なり。是の故に、諸の呪神等は、敢て違逆することなし。若し所作者にして、心願を遂げざる者は、但し心に心地の呪を念ずること、二十一遍せよ。當に大驗を得べし。一切の諸の呪神は、電の如く奔り、星の如く走りて來るべし。敢て違して勅に順ぜざるなく、驅使せられん。」と明してあるが、此の中で呪神と云ふ語は、本尊の意であるが、眞言密教の原始思想を物語つて居るものの如く見える。

此の心地神呪の補充として、第四節に緒勵呪が明してある。此は懈怠の行者をして、其の懈怠罪を消滅する功能あるものとして示されてある。但し之を一般に知らすことを禁じられて居る。「守持して、此の呪を無智の人に流轉する莫れ。此の無智の人は、是の諸佛方便の所説を見れば、便ち貪著懈怠を生じ、懃に精進せず、五欲の想を生じて、菩提の意を退せん。何を以ての故に、此の人の根性は、堅牢ならざるが爲めの故に、少智慧の故に、生死の流れに入りて、復更に修學するも、終に益あること無けん。若し本來の不退者にして、此の呪を誦ずれば、法を助けて速に成ず。」とあるから、これ亦補助法であることは固よりである。

3. 三種悉地の補助法

第五節の三種悉地とは、佛・蓮・金三部の成就法を意味して居るものであることは勿論であるが、此の三部の各各に、上中下の三種の成就の別があると言はれて居る。此の一節が、本書の眼目と見らる可きものであるが、玆に取り立てて論ずるには、少しく細論に入り過ぎる恨みがあるから、之を省略することとする。

第六節の邪心妄念を降伏することが、降伏の眞意義であると説てある所は、思想としては、可なり進歩的な解釋であると考へられる。諸佛が降伏若しくは調伏を爲すと云ふは、佛の大慈悲心に矛盾するやうに思はれる。そこで本書の著者は、普賢菩薩をして、左の如き質問を起させて居る。「その時、普賢菩薩は、坐より起て、法身に白して言く、世尊、諸佛如來は、大慈を以て本と爲す、云何んが、諸の陀羅尼に、操惡威德ありて、自在に鬼神及び諸の外道の天、阿修羅を傷害すと說くや。

毘盧遮那の言く、汝今諦聽せよ、吾れ汝の爲に說かん。これに二義あり、應に善く之を知るべし。云何んが二と爲す。一には諸佛方便して說法し、衆生を導引す(第一節参照)。二には、此の猛烈操惡の身を顯し、衆魔を降伏して、佛道に入らしむ。汝等、應に知るべし、此は亦是れ方便なり。持呪の人、此の事あるを見れば、即ち心に忿怒を生じ、鬼神を降伏し、未だ悉地を得ざれは、驗を成すことを得ざるなり。又諸佛の方便所說を知ら

道修行の都てに於て、此の呪明を誦ずるにあらざれば、何事も成就するもので無いことを力强く說かれ、次で釋尊並に諸大菩薩の請に依つて、心地神呪を毘盧遮那佛が說かることに成つてある。

2. 心地神呪持誦の法則

本經第三節に心地神呪を誦する軌則威儀を明し、又毘盧遮那佛の說として「汝等、當に知るべし、若し此の心地の神呪を持して、禪定と智慧とを學し、一切の三昧に入り、無生法忍を證せんと欲する者は、當に知るべし、先づ心地の呪、百萬遍を誦じ訖りて、然して後に結跏趺坐し、左手にて右手を押へ、眼を閉ぢて、無處所を觀じ、一切の念を斷じて、亦念を離れざれ。一切の諸緣を斷じて、亦緣を離れざるべし。先づ四大五陰は、所有なしと觀じ、是の觀を作し已て、乃ち此の心地の呪、二十一遍を誦じ、卽ち自然に無量の三昧に入ることを得て、無生法忍を得ん。是の如くの境界を證する者は、乃し不可說を知るなし。當に此の呪を誦じて、口舌咽喉等をして動せしめず、心をして之を念ぜしむべし。仍て須らく無念の念に入るべし。これを眞念と名く。」と明してある。

此の經に說かれてある行法は、一般の眞言儀軌とは、多少異つて居る所もあるが、些少の事柄は今此で論ずる必要は無いが、兎に角、此の如き行法を、有ゆる修法に適用して、魔を擊退し、若しくは剛强難化の衆生を調伏することが主として明かされてある。

眞言密教、殊に胎藏法の側から見れば、諸佛・諸菩薩・諸天善神等、其の數は無量無邊であるけれども、之を佛・蓮・金の三部の中に該攝し得るものとされてある。而して此の三部の修法の場合に、心地神呪を誦じなければ、如何に持戒堅固なる明法の大阿闍梨でも、其の法を成就することが不可能であるとされて居る。而して三部の行法に於て、此の神呪を誦する遍數が異つて居る。「佛部の呪を持する者は、當に先づ心地の呪、百萬遍を誦すべし。若し菩薩の呪を持するものは、當に心地の呪を、二百萬遍を誦すべし。若し金剛部の呪を持する者は、當に心地の呪、三百萬遍を誦すべし。」云云とあるから、誦呪の遍數に依りて差違を認めて居る所に注意すべきである。殊に妙に感ぜられることは、佛部は百萬遍、金剛部は三百萬遍と爲し、下級の悉地を得ることを雜事と見做して居る所に、何か意味に潛んで居るらしく思はれる。然るに此の心呪を誦ずることは、他の本法を成就する助法と成るもので、此の心呪自身の目的を有して居ない所に、此の法の特徴が現はれてある。「若し人、但し此の遍數を滿する者は、本呪を持するに隨て、皆成就することを得ん。何を以ての故に、此の心呪

清淨法身毘盧遮那心地法門成就一切陀羅尼三種悉地解題

一、本經の内容

1. 心地神咒と調伏法

本書は經題に示してある如く、法身毘盧遮那佛の心地法門にして、有ゆる魔障を調伏し、之れに依て清淨法を成就する事柄が明かしてある。多くの經典に於ては、淨法を成就する爲には、先づ以て魔障を除去しなければならないことは明かされてあるが、魔障除去の方法が、詳かに示されて無い。本書には佛部、蓮華部、金剛部の三部の淨法を成就することが說かれてあるが、三部の淨法を詳說してあるのではなく、此等三部の淨法を成就する補助法として、諸魔を降伏する神咒の妙力を、說き示したものである。

本經說の起る順序は、軍荼利明王が、先づ十個の問を金剛手に對して發して居る。その文に曰く、「大士、我れ聞く、諸佛は道處に坐し、皆悉く陀羅尼門の總持法要を稱讚し、無量難思の不可思議を建立す。惟念ふ、衆生は、薄福の者多く、設ひ受持する者あるも、成就することを得ず。惟願くは大士、此等の人の爲に、大方便を設けて成就を得せしめ玉へ。」と說き、次に十個の問を擧げてあるが、其の十個の問が逐條答辯してあるのでは無いが、明王の發問の詞に依て、本經說示の要旨が、之れに依て略〻窺ひ知らるるのである。然るに金剛手は自ら之れに答ふることが出來ずに、釋尊に聞くことに成つた。釋尊は斯の如き問題は毘盧遮那佛に尋ぬべきであるとして、其れより三昧に入りて、文殊・普賢・彌勒・觀音・金剛藏等の五大菩薩と倶に蓮華藏世界に到り、毘盧遮那佛の說法を促すことに成つた。毘盧遮那佛は、因位の物語をなし、曾て修行して居られた時に、矢張、種〻の魔障の爲に妨げられて、淨法を意の如く行ずることが出來なかつた。その時、大聲を發して、十方三世の一切如來に對して、此の苦難を救濟されんことを訴へられた時に、空中に無數の化佛が現はれて、言ふには、「汝の爲に魔を去る法を說かん。大神咒あり、心地呪法と名く。之を誦持する者は、速に一切種智を得、諸魔の爲に、其の便を得られざるなり。」と、時に諸の化佛、卽ち我が爲に說く、我れ之を聞くことを得て、憶持して忘れず。卽時に、諸魔を退散せしむ。我れ此の時に於て、便ち無生法忍を得、菩提の大道、自然に圓滿せり。云云」と說き、尚ほ佛

既に塗拭し已て、燒香散花し、無動明王の眞言千遍誦じて、障者を辟除して、其の處を加護し、手に香爐を捧げて、至誠に啓告す。卽ち大日如來の觀に住して、菩提心を觀じて、分明に顯現し、心月輪の中に於て、阿字を觀じ、白色にして大光明を放て、無邊界を照し、便ち連りに阿字の眞言を誦し、一氣に力を盡して、是の如く連りに誦し、或は一息三息、乃至心に相應を得、一切の分別を離れて、清淨法界に入り、然して後に止むべし。卽ち金剛輪印を結び、及び眞言を誦じて、自身及以び壇上を加持す。此の印は淨法界の體より、是の如くの大曼荼羅を建立し、然して後に敎に依て、聖位を分布し、廣略は意に隨ふ。或は一位を置き、或は五位を安じ、或は九位或は十七位を安じ、乃至二十九、三十七等、無量無邊の種種の差別あり。一一皆本敎に從て建立す。凡そ分布せる聖位は、皆心より外に向ひ、展轉して相從ひ、三分して一を減ず。此れ卽ち都て建立曼荼羅法を説くこと、大綱此の如し、願くは例して知る可きなり。

四、結　文

或は有人は密に阿闍梨より祕法を傳受し、心より建立して、智火を以て一切の妄分別を燒除して、淨法界を成じ、法界の中に於て、次第に如法に一一安布し、乃し無量種種殊勝廣大の佛事に至るまで、此れ乃ち心契の祕傳なり。苟も其の人にあらざれば、道を虚しく授けず。豈に翰墨に形つて、悉す可んや。琳は不才なりと雖、小分の大意を陳べ、萬が一をも書せず。惟達學の通人、其の事を照見せよ。

建立壇法（終）

北の隅に於て、稍ゝ墊下せしむ。如法に平塗し、及び四邊の地、乾き已らば、卽ち五寶五藥等を壇中に安置す。五寶とは謂ゆる金・銀・眞珠・[五一]瑟瑟・[五二]頗梨、これを五種の寶と爲すなり。又五種藥を取る、謂ゆる娑賀揖囉娑賀禰縛建吒迦哩儗哩羯囉拏二合勿哩合二賀底、當に外國の估客の處に於て求覓むべし。若し此の藥無ければ、卽ち唐國に出す所の靈藥を以て、之れに替ふべし。謂ゆる[五三]赤箭・人參・伏苓・石昌蒲・天門冬なり。又五種の穀子を取る。謂ゆる稻穀・大麥・小麥・菉豆・胡麻なり。又五種香を取る。謂ゆる檀香・沈香・丁香・鬱金香・[五四]龍腦香なり。

已上の寶・穀・香・藥等、各ゝ小許を取つて共に一瓷合の中に置き、或は瓷瓶の中に、或は金銀器の中に之を盛る、地天の眞言を以て、加持すること一百八遍して、壇の中心に埋め、人をして知らしむる勿れ。曼荼羅の主位の下に當て、遲を平にし乾かすのみ。又土砂を塗ること前の如し、遍く塗て極めて細滑ならしむ。乾くを待て、卽ち香水を以て、瞿摩夷を調し、濾灑して淨からしめ、諸の香末を加持するに、無能勝明王の眞言を以てし、或は大輪金剛の眞言を以て、加持すること一百八遍す。無能勝の眞言に曰く、

[五五]那莫三滿多母馱引南、唵戶嚕戶嚕、戰拏哩摩蹬儗娑嚩二合引賀引。

先づ壇上を塗り、次に四邊を塗り、皆東北の角より右に旋りて、塗拭す。又卽ち塗地の眞言を以て加持して隨て塗る。塗地の眞言を誦じて曰く、

[五六]唵迦囉引黎、摩賀引迦羅引黎、娑嚩二合引賀引。

是の如く數數頻りに塗り、三五遍す。卽ち蓮子草を用て、揩摩す。或は蜀葵、葉を取つて、小許の[五七]墨汁を和し、幷に香茅草を擣きて相和し、如法に揩摩すること一兩邊し已つて、濕掃を承けて、光淨ならしめ、如法に正しく之を掃ふの時、掃地の眞言を誦じて曰く、

唵賀羅賀羅羅祖佗羅二合賀羅拏野娑嚩引二合賀引。

【五一】瑟瑟。一説に帝青珠と云ふ。
【五二】頗梨。水精なり。
【五三】赤箭。一に天麻と云ふ。
【五四】龍腦。一説に楠の古木より出ろ膠(ヤニ)なりと。
【五五】Namaḥ samanta-buddhānāṁ huru huru caṇḍari matoṅgi svāhā
【五六】Oṁ karāli mahā-karāli svāhā
【五七】墨汁。皮膠を交へざるものを指す。

修行者は前の如く、其の境界、及び土の虚實、色味の善惡を觀じ已り、若し前說の如く、皆悉く相應して建立するに堪ゆれば、卽ち不動尊の[四七]母捺羅二合の眞言一百八遍を以て、其の地を加護し、然して後に總掘せよ。不動尊の眞言に曰く、

[四八]南麼三曼多伐折囉赧、戰拏摩路灑儜、娑破吒野、吽怛囉二合吒、悍怛囉二合吒。

地を掘る意は、地中に穢物有るを恐るればなり。前の所說の如く、灰炭・髑髏・蟲窠・樹根・毒螫の類なり。或は古墓にして伏屍あり、若しくは惡物にして苦多きは、建立に堪えず。應當捨棄して更に勝處を求むべし。若し此の過なければ、但し掘ること深さ一肘二肘或は深さ三肘にせよ。其の土を運び出し、細く打つて揀擇せよ。若し穿て地床に至り、未だ曾て掘らざる所は、地必ず淨しと知れ、心復疑はず、深淺を論ぜず、卽ち須らく掘るべからず。若し土の色、雜て相似ざるものあらば、亦須らく除去して、別に河岸の淨土を取りて、之れに替ふべし。如法に塡治し、土を塡める一重毎に、卽ち加持香水を以て一灑し、乃至塡滿せよ。皆是の如く作して、土を塡め滿ち已て、築て堅實ならしめ、平かなること鏡面の如くし、其の屋舍或は多年を經、曾て烟熏を被りて、清淨ならざる者は、應當に泥を拭ふて、極て清淨ならしむべし。或は香水を以て土を淨め、遍く屋舍と及以び牆壁とに塗り、極めて屋を清淨にし、若しくは新淨ならしめよ。但し香水の眞言を以て、加持して遍く灑げば、卽ち清淨と成る。若し壇を起さんと欲せば、築土を用て之を爲るべからず、乾き已らば必ず當に破裂すべし、卽ち不吉祥なり。應に先づ一月兩月已前に清淨處に於て、好淨の土を取り、加持香水を以て、泥に和して墼を作り、[四九]塼坏の如くに[五〇]曬曝し、乾かさしめて、鷄犬人畜をして、履踐せしむる勿れ。汚穢を曝らし、極めて乾き已らば、卽ち此の墼にて、平布を用て壇を作り、事を求むる人の肘指の量を取りて、方壇を製作し、大小は敎に準じ、六肘已下は、壇の高さ四指、十二肘已下の量は、高さ八指、十二肘已上は、此れに準じて增加す。但し一重は平正にして、更に層級なく、皆東

【四七】母捺羅(mudrā)印の義、劍印慈救の呪を指す。

【四八】Namaḥ samanta-vajrāṇāṃ caṇḍa-mahā-roṣaṇa-sphaṭaya hūṃ traṭa hāṃ traṭa.

【四九】塼坏。燒かざる瓦なり。

【五〇】曬曝。サラス意、

於て、[四五]右脇にし面を東にし、首を南にし、擧身は師子王の如く、寂靜安眠して、其の境界を取れ、若し先來の寢息處、清淨ならば、自の意樂に隨て、亦通ず。必要ずしも此の處を須ゆるにはあらず。但し一心に專注して、菩提心月輪を了了分明に觀ずべし。

又菩提心中に於て、一如意寶珠は內外分明なりと觀じ、心に徹して異想なくして、便即ち睡眠す。若し先に禪寂を學びし人なれば、必ず須らく但臆し、但寂にして、其の心は前の入觀の如く、如意寶を觀ずべし。所有る成不成の相は、悉く心鏡の中に於て現ぜん。若し先相不善なれば、建立す可らず。若し强て作せば、恐らくは自損を招かん。若し先相善なれば、方に建立すべし。

明日、即ち置く所の壇處に於て、中に當て之を掘れ、須らく方[四六]一肘、深さ亦一肘なるべし。瓦石を簡去して、却て土を塡め築きて、平正ならしめて、其の虛實を驗すべし。若し却塡して纔に滿ち、土に餘賸なければ、其の地を中と爲す。事を求めて小しく成り、廣大の力なし。若し却塡して滿たず、土少しく不足なれば、其の地を下と爲す。虛怯にして(事に)堪へず、事を求むるに成し難し。若し塡滿して、土餘なれば、其の地は吉祥なり。事を求むるに速に成じ、大力の用あり。又、須らく其の地味を嘗めて、其の善惡を辨ずべし。土味苦澁、及以臭穢なれば、其地は(事に)堪えず。其の味、酸醎或は辛辣ならば、當に知るべし、只金剛部中の摧壞の曼荼羅を建立するに堪えて、吉祥等の法を成就するに堪えず。其の味淡薄にして、諸の惡味無ければ、此の處は善性に和し、縱慢を兼ぬ、久ふして乃ち成就す。若し土味甘美にして、及び香氣あらば、最も殊勝と爲す。能く一切最上悉地の大曼荼羅を成ず。

又須らく其の土色と所求の事と相應して、方に建立すべし。其の土白色なれば、息災の成就と相應し、土若し黃色ならば、增益を爲すに堪え、土若し青黑ならば、唯降伏に堪え、土若し赤色ならば、即ち鉤召と敬愛とに相應す。餘は蘇悉地の中に廣說するが如し。

【四五】右脇。眠臥の法則を示す。

【四六】一肘。肘の長さと手の長さとの和の中にて、指を伸ばすと云ふ說と、指を握ると云ふ說との二義あり。行者の肘を標準とす。

薩の如く、一切如來の前に於て、清淨の三業を以て、至誠に禮敬す。と、此の禮を作し已て、便即雙膝を長跪し、[三八]定手を以て金剛杵を執り、心に當てゝ直く竪て、[三九]慧手を以て、[四〇]五輪を舒べ、平掌に地を按じて、前經中の警發地神の偈七遍を誦じ、一遍を誦する每に、一たび地を按じ、又地天の眞言百八遍を誦ず。眞言に曰く、

[四一]南麼三曼多勃馱引喃毗梨地毗曳莎嚩二合引訶引。

心に想へ地神は猶ほし天女の如く、衆寶もて莊嚴し、無量の眷屬と與に、各ゝ寶瓶を捧げ、及び香花を持し、地より涌出し、本誓願を憶して、敢て佛の敎命に違せず、此に來りて證明す。と。

又如來慈護の眞言一百八遍を誦じて、地神を饒益せよ。慈護の眞言に曰く、

[四二]唵沒馱每引怛哩二合嚩日羅二合羅乞灑二合憾娑嚩二合引訶引。

修行者は、至誠に香を焚き、賢聖及び地神に啓告して言く、仰ぎ啓す、一切如來、諸大菩薩、緣覺、聲聞・[四三]五類諸天・堅牢地神、及び此の處の[四四]靈祇等、我某甲、持明藏敎に依て、某尊の眞言を受持し、無上菩提を求めんが爲に（若し別事を求めなば一一具陳すべし。）此の地に於て、最茶羅を建立し、精修念誦せんと欲す。我が求むる所の事を、願くは速に成就せしめ玉へ。唯願くは地神、本所願を憶して、我れに曼茶羅を建立することを許して、我を護助し、天魔及び惡鬼神をして、諸の障難を作さしむる勿れ。本師釋迦牟尼如來、菩提樹下に坐し、衆魔を降伏したるが如く、我今亦爾り。若し障難あらば、願くば諸佛菩薩、其の先相を示して、我をして自ら善惡の肇を辨せしめよ。唯願くは本尊及び諸の明王、我を護念して、鬼神をして乍に其の相を現じて我を誑惑せしむる勿れ。若し障難無ければ、願くは吉祥殊勝の境界を見ん。と。是の如く啓告し已て、便ち壇處の西邊に居し、如法に護身して、靜然として安坐し、本所持の眞言一千八遍を誦ぜよ。若し眞言の文廣ければ、應に身力に隨て、或は一百八遍を誦じ、乃至三七、五七遍を誦ぜよ。諸の思想を離れて、一心に正念し、即ち其の處に

【三八】　定手。左手なり。
【三九】　慧手。右手なり。
【四〇】　五輪。五指なり。

【四一】　Namaḥ samanta-buddhānāṃ pṛthivyai svāhā.

【四二】　Oṃ buddha-maitri-vajra-rakṣahaṃ svāhā.

【四三】　五類諸天。
1. 上界天（色界と無色界との諸天）
2. 虛空天（欲界の六天中、夜摩天以上の四天を云ふ）
3. 地居天（四天王、忉利天）
4. 遊虛空天（日月星宿）
5. 地下天（阿修羅、閻魔王、諸龍王）

【四四】　靈祇。地神を指す。

今修行者は、師受相傳して、委細を盡すべし。凡そ曼荼羅を建立せんと欲せば、先づ其の地を擇び、自ら本所求の願を量り、相應の處を擇び取り、先づ須らく師に從て加持の法を稟受し、心に疑滯なく、然して後に善く其の時を擇び、良日の吉辰を取り、方に建立すべし。七日已前に掃灑塗拭し、前の眞言を以て、加持香水し、遍く灑ぎて淨からしめ、日暮の時に至て、燒香散花して、新淨物を敷き、或は荷藥を布け、其の力分に隨へ。所有の香花・飲食・燈明・閼伽[三六]等を、賢聖と及以び地神とに供じて、請地の法を作せ。修行者は、新淨衣を着し、餘人を屛去して、獨り曼荼羅を置く處に入れ、若し是れ露地ならば、應に縵幕を以て圍遶すべし。或は隨時に遮閉し、各ゝ本部修行の眞言の次第に依て、密に自身を加持し、面を東方に向け、手に香爐を執り、啓請の偈を誦じて曰く、

[三七]毘盧遮那經の文に出づ。

諸佛慈悲者は　我等を存念するが故に　明日地を受持し　並に佛子當に降るべし。

經文は爾りと雖、言は約にして、義は隱れ、地神に請ふ句を闕く、今後の偈を以て相傳するに、前意と異ならず、文は備はり、義は顯はる。一偈總通して、取捨は意に隨ふ。偈に曰く、

諸佛慈悲有情者　唯願くは我等を存念せよ、　我今諸の賢聖　堅牢地神幷に眷屬

一切如來及び佛子に請白す。悲願を捨てずして悉く降臨し、我れ此の地を受けて成就を求む、爲に證明を爲して、我を加護し玉へ。

誦すること三遍或は七遍す。若し能く梵本を誦じ得れば、最善なり。

梵云云と是の如く慇懃に奉請し已て、心に聖衆悉く皆な雲集すと想へ、卽ち觀せよ、大日如來・自性清淨身は、法界に周遍し、十方三世の一切如來も、亦復是の如し。と、想へ、自身は金剛薩埵菩

【三六】閼伽(argha) 客の接待に供する水。

【三七】毘盧遮那經第一、具緣眞言品第二。

沒時に於て、用て其の地に灑ぎ、右の手を以て地を按じ、曼荼羅の主眞言を持誦し、此を受持するを以て、受持地法と名くるなり。

已上蘇悉地中の說なり。

又[三〇]毗盧遮那經中に云く、祕密主よ、彼は地を揀擇し、礫石・碎瓦・破器・髑髏・毛髮・糠糟・灰炭・刺骨・朽木等、及び蟲蟻・蜣蜋・毒螫の類、是の如くの諸過を離れ、偶よ[三一]良日晨定日の時分、宿諸執、皆悉く相應し、食前時に於て、吉祥相に値はゞ、先づ一切如來の爲に作禮し、是の如くの偈を以て、地神を驚發せよ。偈に曰く、

汝天親護者は、　諸佛の導師の　修行殊勝の行に於て　[三二]地波羅蜜を淨め　魔軍の衆を破すること　[三三]釋師子救世の如く、　我亦魔を降伏して、　我れ曼荼羅を畫かん。

阿闍梨は應に梵本を誦ずべし。彼れ應に長跪して、右手を舒べ、地を按じて、此の偈を誦ぜよ。塗香花等を以て、諸佛・菩薩・及以び地神に供養し、是の如く供養し已て、修行者は須らく應に一切如來に歸命して、然して後に地を治すべし。其の次第の如く、當に衆德を具すべし。

又云く、祕密主、是の如くの所說の處所の中に、一地あるに隨て、治して堅固ならしめ、未だ(地に)至らざる瞿摩夷及び[三四]瞿模怛羅を取りて、和合して之を塗れ、次に香水の眞言を以て、灑淨せよ、即ち眞言を說て曰く、

[三五]南麼三曼多勃馱喃、阿鉢囉二合底三迷、伽伽那三迷、三麼多奴揭帝、鉢囉二合吃栗二合底、微輸睇達摩馱睹微戍達儞、莎訶二合引訶引。

此の眞言をもて、香水を加持して、始終用ふ。

諸の經說の次第を按ずるに上の如し。

【三〇】毗盧遮那經即ち大日經具緣眞言品第二。

【三一】良日。白月の一日、三日、五日、七日、十三日を吉祥とす。又八日、十四日、十五日を最勝とす。

【三二】地波羅蜜。單に曼荼羅建立の地處を指す。此の地處は、行者自身に當る。

【三三】釋師子。釋尊成道の時に先づ降魔せられたるを指す。

【三四】瞿模怛羅(gomūtra)牛尿より。

【三五】Namaḥ samanta-buddhānām apratisame gaganasame samantânugate prakṛti viśuddhe dharma-dhātu viśodhani svāhā.

[二一]玉呬耶經に云く、巖崛の中、及び山の頂上にて先に淨むる所の地に於て、及び窟上に於て、或は檻上と並に石上とに於て、或は[二二]制底の邊、佛塔の中、及び河潭の上り、近河の洲渚に於て、是の如くの處に、曼荼羅を作る者は、地を掘ると及以治打とを須ゐざれ、高下不平等の過を疑ふ勿れ。其の地勢に隨て拂治し灑水して、手を其の地に按し、及び眞言を誦じて、卽ち清淨を成ず。或は曼荼羅を作る處に於て、其の[二三]地過を除くことを得ざる者あらば、但し眞言加持を以て、而も清淨と作し、亦通じて持誦せよ。若し急速の事の爲に曼荼羅を作り、及び辟除鬼魅を作し、所著と並に自身との灌頂に、曼荼羅を作る者は、其の地を細揀することを須ゐされ、宜しきに隨て而も作せ、都て枳里[二四]枳羅忿怒無對の眞言を以て、香水を持誦し、先づ其の地を灑ぎ、及び手に灑ぎ、五たび淨めて以て淨地を爲すなり。

又云く、其の地處、下は濕にして水有らば、卽ち其の上に於て、密布にて板を淨め、如法に加持塗拭し、清淨にして曼荼羅を作るも、亦成就を得ん。

又云く、淨地の法は、七日已前に其處に往き、如法に身を護り、及び弟子を護り、地神を供養し、及び其の地を護り、方に起て穿掘して、地過を除去せよ。若し其の地過を去らずして而して法を作す者は、必ず成就し難し。是の故に當に須らく、其の地中の骨石・灰炭・樹根・蟲窠・髑髏・毛髮及び瓦礫等を除き、盡く去て淨からしむべし。當に細擣して掘る所の土を、還て其の處に塡め打て堅實ならしむべし。復牛液と及び諸の香水とを以て散灑して、潤澤ならしめ已て、還て打ち極めて平正ならしめ、猶ほし平掌の如くならしむべし。卽ち香水を以て、[二五]瞿摩夷を調し、東北の角より、右旋して塗るべし。復曼荼羅の中心に於て、一小坑を穿ち、[二六]五種の穀、及び[二七]五種寶・[二八]五種香・[二九]五種藥を持誦し、坑中に安じ、築て平正ならしむ。是の如くして寶を置き、及び地を淨め已んぬ。

次に當に地を受持する法を作すべし。三日已前に各〻本部辨事の眞言を用て、香水を持誦し、日

伽藍摩(saṁghārāma)にして、衆園又は僧房と云ふ。

【二〇】 阿修羅(Asura)非天。

【二一】 玉呬耶(guhya)祕密の義。揀擇地相品第三。

【二二】 制底(Caitya)塔又は廟なり。

【二三】 地過。地中に骨毛其他汚物の埋沒せるを指す。

【二四】 枳里枳羅(Kelikila)觸

【二五】 瞿摩夷(Gomati or. go=maya) 牛糞、此は牛の身より出でて未だ地に落ちざる中に、器にて受け入れたるものを用ふ。但し其の牛は雪山中に住して香草を食するものに限る。

【二六】 五穀。稻穀・大麥・小麥・菉豆・白芥子本文の終りを見よ。今說と稍異れり。

【二七】 五種寶。金・銀・眞珠・珊瑚・琥珀。

【二八】 五種香。沈香・檀香・丁香・欝金香・龍腦香。

【二九】 五種藥。赤箭・人參・茯苓・菖蒲・天門冬。

諸說を纂集して、以て諸の[一二]未悟に傳ふ。惟し博學の通人は、更に爲に詳定せよ。

二、造曼荼羅の經證

[一三]蘇婆呼經に云く、行者若し眞言を持誦して、速に成就せんと欲せば、應に諸佛の曾て住する所の處に於て、或は菩薩・緣覺・聲聞の所住の處に於て、[一四]曼荼羅を作るべし。速に成就するを得ん。

[一五]蘇悉地經に云く、若し上品の悉地を求めなば、應に如來の[一六]八大塔の處、菩薩の生處、苦行を修するの處、高山頂上、海島名山、大海岸上、深山谷中、舍利塔の前、形勢ある處、自ら愛樂する處、花菓多き處、大林藪中の大龍池の邊、大河潭の上、淸淨泉池、憒閙なき處、大湫岸の邊、深山の[一七]蘭若、香木多き處、迥獨の大樹の影を移さゞる處、聖跡多き處、是の如く等の處を名て最勝と爲す。力能く上等の[一八]悉地を成就せん。

若し大蓮華池、大河洲渚、深巖窟中、花園林中の乳木の足る處、往昔菩薩の遊履する所の處、淸淨蘭若、泉池の多き處、苦寒無き處、苦熱なき處、迥獨の高臺、諸の猛獸無く、麋鹿の多き處、山腹に水有りて、無人到の處、吉祥軟草の遍く地に布く處、大河岸上、淸淨[一九]伽藍、大佛殿中、或は林木茂盛にして花果多き處、周匝に水有りて、土餘蹟の處、國土人盛にして、慈悲多き處、城邑聚落、多人信敬して、佛敎を奉する處、往昔曾て佛が法輪を轉ぜし處、或は自ら居る所の宅舍の淸淨の處、是の如く等の處を名て殊勝と爲す。力能く吉祥增福・息災・敬愛等の中品の悉地を成就す。若しは曠野に於ける神靈の所居、大塚墓間、尸陀林中、最高山中、諸大靈山の執金剛の前、大龍池邊の諸天祠の中、大神廟中、祠大祓の處、[二〇]阿修羅窟、諸仙洞中、大陂大澤、十字大路、大衢道の邊、山巖の龍窟、大盤石上佛塔の處、土地に靈あり、聖跡多き處、是の如く等の處には、力能く金剛部法を成就し、鬼魅を辟除し、怨敵を損壞し、天龍を摧伏する諸の曼荼羅等は、速に成就を得ん。

【一二】 未悟。密教を知らざる人。

【一三】 蘇婆呼(subāhu):妙臂と譯す。分別處所分品第二。

【一四】 曼荼羅(maṇḍala)壇又は道場。

【一五】 蘇悉地(susiddhi)妙成就と譯す。揀擇處品第六。

【一六】 八大塔。又八大寶塔、とも云ふ。
1. 拘娑羅國の淨飯王宮に於ける生處の寶塔。
2. 摩伽陀國伽耶城邊の菩提樹下成佛の寶塔。
3. 波羅奈國鹿野苑中、初轉法輪、度人の寶塔。
4. 舍衞國中給孤獨園にて、諸の外道を降伏せる所の寶塔。
5. 安達羅國曲女城邊にて忉利天に昇り、母の爲に說法する時の寶塔。
6. 摩竭陀國王舍城邊耆闍崛山にて、大般若・法華・一乘心地觀經を說きし處の寶塔。
7. 毘舍離國菴羅林にて維摩長者發病處の寶塔。
8. 拘尸那國跋提何邊、娑羅林中の圓寂寶塔あり、是等八塔は阿育天の建つる所なり。

【一七】 蘭若。具梵には阿蘭若(araṇya)寂靜處、寺又は淹等と云ふ。

【一八】 悉地(siddhi)成就と譯す。

【一九】 伽藍。梵語の具音は僧

建立曼荼羅及揀地法

上都大興寺沙門慧琳依諸大乘經集

一、眞言行と入曼荼羅

謹んで【一】蘇悉地、蘇婆呼、玉呬耶、大毘盧遮那成佛等の經を案じ、略して地を揀擇し、曼荼羅を建立する法を集めん。眞言を修する者にして祕密教に依り、諸尊の眞言を持誦し、世間出世間の二種の成就を求むる者は、先づ不退の大菩提心を發し、諸佛【二】海會の大曼荼羅に入ることを求む。阿闍梨より菩提心戒を受け、【三】灌頂を得已て、三密相應の修行儀軌を稟學し、晝夜時に依り、法の如く念誦し、身語意業は常に法と倶なり、【四】攀緣妄情散亂を遠離して、常に諸法の實相、清淨の內明を觀じ、深く【五】瑜伽の妙三摩地に入り、善く理事に通じて、相修行を離れ、灌頂阿闍梨より新に法要を受け、明に教中の開遮方便を閑はん。是の如くの人方に諸の曼荼羅を建立して、自他を利益し、一切の悉地を求むるに、決定して成就すべし。若し上の如き諸緣を具せず、明師に從て、親しく其の法を受けず、教意を閑はざれば、【六】造次にも輙く然も建立す可らず。但に【七】惣動して、【八】靈祇安からざるのみにあらず、抑ゝ亦自ら其の咎を招かん。此の教は乃ち是れ一切如來瑜伽の祕要にして、三摩地門・祕密供養の儀なり。內心に自ら甚深方便の【九】普賢行願を修するなり。意趣簡妙、近して而して知り難し、事相に約すと雖、而も明に運ぶに【一〇】瑜伽の妙觀を以てす。凡そ施爲する所は、佛事にあらざるなし、明智の君子、善く師とする所を擇べ、我慢の流は、師に從て學ばず、文を尋て臆斷す。相を取り。名に滯らしむる勿れ。殊に瑜伽の深旨を知らざれば、迷惑甚しきなり。

此の法の大教は卽ち【一一】具明なりと雖、修行は卒に尋檢し難く、又先後の次第明かならず。故に今

【一】蘇悉地經。蘇悉地羯羅經三卷。蘇婆呼童子請問經三卷。大日經七卷。玉呬耶經（蕤呬耶經又は瞿醯壇跢羅經）三卷。前三部は善無畏譯、後一部は不空譯。

【二】海會。海は百川衆流の集まる所なるが故に、海會とは集會の意。

【三】灌頂。立太子の時に四大海の水を頂上に注ぎ、之れに依りて一天四海統御の位を得るが如く、密教に於ては如來の五智の法水を頂に灑ぎ、之に依て如來家に生在する意を示す式が卽ち灌頂なり。

【四】攀緣。心念が外境にからまり、迷着する義。

【五】瑜伽(Yoga)能觀の心と所觀の法と一致相應する意。

【六】造次。わづかの間。

【七】惣。粗なり。

【八】靈祇　地の神。

【九】普賢行願。普賢菩薩に十大願あり。

【一〇】瑜伽（Yoga）相應と譯す。能觀の心と所觀の法と一致相應する意。

【一一】具明。賢明才智の人を指す。

水壇は不空三藏の當時から支那に於ては行はれて居つたと思はれるのであるが、尙ほ當時としては、印度に於て行はれて居つたと同樣に淨地を揀擇して、前後七日間を費して、曼荼羅を建立することに成つて居つたやうに見える。

第四節に結文が掲げてあるが、心外の曼荼羅は、心内の智曼荼羅を建立するに至る前行にして、實は行者の眞の智見を開くのが、造曼荼羅の主眼である意味を暗に示して居るだけであるから詳說することを避けることゝする。

昭和六年八月三十日

譯者　神林隆淨　識

る要件としては

(1) 不退の大菩提心を發すこと
(2) 諸佛海會の大曼荼羅に入りて、生生世世、佛性(菩提心)戒を嚴守するを盟誓すること
(3) 阿闍梨耶より灌頂を受けて、佛家に生在すること
(4) 三密瑜伽妙行の修行儀軌を稟學すること
(5) 阿闍梨耶は曼荼羅（maṇḍala 壇又は道場）を淨地に建立して、弟子を引入し、授戒し灌頂し授法すべきこと
(6) 眞言行者は、普賢行願を修すること
(7) 常時に三密瑜伽の妙行を修すること

以上七項を數へることが出來る。而して此等七項が此の一節に洩れなく說示せられてある。

二、造曼荼羅の經證

經證として列擧されて居るものは、蘇婆呼童子請問經と蘇悉地羯羅經と玉呬耶經と大日經との順に成つてあるが、此の順序は經の權威の順位を示したものでは無く、言はば手當り次第に列記したに過ぎないのである。而して各經共に曼荼羅を建立すべき、適當なる地域と地質とに關して、如何なる場所で、如何なる地質の地を撰定す可きであるかを明した部分に限られて居る。不空三藏在世時には盛んに灌頂授法されたのであるから、その直接の必要に迫られて本書が作られたものであらう。

三、造曼荼羅作法

造曼荼羅作法に關しては、前揭の諸經に明示されてあるが、尙一層細密に亙りては大日經具緣眞言品の疏に明してある。今本節に記載されてある要目を擧ぐれば、

(1) 曼荼羅を建立すべき地處を撰定すること。
(2) 造曼荼羅の吉日と着手の時間。
(3) 曼荼羅會中の諸尊への諸供物のこと。
(4) 阿闍梨自身の用心。
(5) 先づ地神を警發し次に借地を啓請すること。
(6) 阿闍梨は曼荼羅建立の地を相し終りて、當夜はその地の側に安眠し、夢相に依りて吉凶を判すること。
(7) 地質の善惡を驗すること。
(8) 五寶・五藥・五穀・五香を地に埋むること。
(9) 壇を淨むる爲に瞿摩夷を用ふ。
(10) 聖尊位を案配すること。

以上の內容が此の節に於て說示されてある。此の說明に於て大日經疏の說と異なる點は、第六項である。疏の說に依れば、造曼荼羅は七日間を要することに成て居るが、その第六日に至つて、曼荼羅壇場を略ゞ完成し、翌第七日の早朝に起床し、諸聖尊を畫く準備を悉く整て、その第六日の夜は壇の側に臥すことに成つてあるが、今の說は地を相しただけで、未だ造壇には着手して無いのに、其處に臥すことに成つてあるから、此の點が兩說異つて居る。

壇に土壇と水壇との二種あつて、上に述べて來た壇卽ち曼荼羅は、之を土壇と稱し、現に日本に行はれて居るが如く、寺院の內道場に於て構へらるゝ壇を水壇と稱する。水壇とは運轉し得ることを意味し、一般には木製のものを指す。此の

建立曼荼羅及揀地法解題

本書は一切經音義の著者として有名である西京の西明寺慧琳（716—799 A.D.）の作である。慧琳は疎勒（Kaśgar）の產にして、來唐したのは何時であるか明かでない。音義の著に著手したのは、貞元四年（788 A.D.）にして、其を完成したのは元和五年（810 A.D.）であるから、琳師は六十三歲から八十四歲まで廿有餘年間、此の業に沒頭し、琳師の滅後に、玄應等が其の志を續ぎ、十有餘年の後に始て此の大業が成就したのである。琳師は不空三藏に師事して居られたのであるが何時からであるか、その點は明かでない。不空三藏が五天を周遊して歸られたのは天寶五年（746 A.D.）であり、其の後太曆九年（774 A.D.）入滅に至るまで、約三十年間が、三藏の活動時代にして、朝野の歸信を一身に集めて居られたのである。天寶五年に琳師は三十一歲であり、太曆九年には五十九歲であつた。其の間に不空三藏に師事せられたのである。

宋高僧傳第五に依れば、琳師は不空三藏に事へ、印度の聲明に通じ、支那の詁訓に達して居つたとあるから、支那には可なり永く居住して居られたものと見做さなければならない。之れに依て見れば、琳師が不空三藏に事へて居られたのは、少くも十年から廿年以上であらねばならないから、琳師が早くて三十一歲以後、遲くも三十五六歲の頃からであらうと思はれる。印度の謂ゆる聲明とは、日本で現に使用されて居る意味とは全然異つて、梵語の文法（V. ākaraṇa）の意味である。隨て琳師は音韻に關して趣味を有し、梵語を不空三藏に就て學ばれたことが明であるが、同時に密教の秘義をも受學され、而して其の一端が本書として現はれて來たのである。

本題に建立曼荼羅及び揀地法とあるが、書中に劃然と此の如く二章に區分されてあるのでは無く、混入して明されてある。故に譯者は本書を

一、眞言行と入曼荼羅
二、造曼荼羅と經證
三、造曼荼羅作法
四、結　文

以上の四節に分けて見ることが便利であると思つて居る。

一、眞言行と入曼荼羅

この一節は初心の眞言行者の必讀のもので、眞言密宗では、事實上此の通りに行つて居るのであるが、その典據は何れに有りやと言へば、卽ち此の一節が正に其れである。眞言行者が、初めて眞言門に入

と成る。金剛嬉戲菩薩の加持に由るが故に、受用の法に於て、圓滿快樂し、受用智の自在を得。金剛鬘菩薩の加持に由るが故に、[四六]菩提分法の法花鬘を得て、以て莊嚴と爲すなり。金剛歌菩薩の加持に由るが故に、如來微妙の音聲を得て、聞者は厭ふことなく、聖德の解脫に於て、諸法を了覺すること、猶ほし呼響の如し。金剛舞菩薩の加持に由るが故に、刹那迅速に分身して、頓に無邊の世界に至ることを得。金剛焚香菩薩の加持に由るが故に、如來悅意の無礙智の香を得。金剛花菩薩の加持に由るが故に、能く衆生煩惱の淤泥に、覺意の妙花を開く。金剛燈明菩薩の加持に由るが故に、五眼の清淨を獲得して、自利利他、法を照すこと自在なり。金剛塗香菩薩の加持に由るが故に、佛の五種の無漏淨身を得。金剛鉤菩薩の加持に由るが故に、一切の聖衆を召集する速疾三昧を得。金剛羂索菩薩の加持に由るが故に、虛空の如く、障礙なき善巧智を得。金剛鎖菩薩の加持に由るが故に、佛の堅固無染、觀察大悲の解脫を得。金剛鈴菩薩の加持に由るが故に、如來の般若波羅蜜の音聲を得て、聞く者は能く[四七]藏識中の諸の惡種子を摧く。

この三十七內證無上・金剛界分智威力の加持を以て、頓に毘盧遮那の身を證し、無見頂相より、無量の佛頂法身を流出して、空中に雲集して、以て法會を成す。光明遍く覆ふこと、塔の相輪の如く、十地を滿足せるものすら、能く覩見するなし。冥に有情の身心に加(持)して、罪障を悉く殄滅せしむれども、能く知る者なし。覺知する能はずと雖ども、能く諸苦を息めて、而も善趣に生ず。光明より十六菩薩及び八方等の內外大護を流出し、展轉して光を出して、惡趣を照觸し、以て窣覩波の階級と成り、諸佛の窣堵波法界宮殿を衞護し、相輪と成り爲りて、身をして金剛界如來毘盧遮那遍照の身を現證せしむ。

略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門(畢)

【四六】菩提分法。三十七菩提分法は、無上覺を得る必修の法なり。之を又は三十七道品とも云ふ。四念處・四正勤・四如意定・五根・五力・七覺支・八正道支なり。

【四七】藏識。阿賴耶識を指す。

圓滿周法界、遍虛空の大圓鏡智を證得す。寶波羅蜜の加持に由るが故に、無邊の衆生世間、及び無邊の[三六]器世間に於て、平等性智を證得す。法波羅蜜の加持[三七]に由るが故に、無量の三昧、陀羅尼門の諸の解脫法に於て、妙觀察智を得。[三八]羯磨波羅蜜の加持に由るが故に、無量安立の雜染世界と清淨世界とに於て、成所作智を證得す。金剛薩埵菩薩の加持に由るが故に、諸の有情利樂門の中に於て、[三九]剎那猛利の心に、頓に無上菩提を證す。金剛王菩薩の加持に由るが故に、具に[四〇]四攝の法門を被る。金剛愛菩薩の加持に由るが故に、無邊の有情に於て、無緣の大悲、曾て間斷なし。金剛善哉菩薩の加持に由るが故に、諸の善法に於て、渴仰して厭ふことなく、微少の善を見れば、便ち稱美を爲す。金剛寶菩薩の加持に由るが故に、無染智を證し、猶ほし虛空の廣大圓滿なるが如し。金剛光明菩薩の加持に由るが故に、慧光を證得し、喩へば日輪の照曜せざること無きが若し。金剛幢菩薩の加持に由るが故に、能く有情の世出世間の所有の希願を滿すること、[四一]眞多摩尼寶幢の心に分別なくして、皆滿足せしむるが如し。金剛笑菩薩の加持に由るが故に、一切の有情、若しは見、若しは聞、心に踊躍を生じ、法の決定に於て、法の利樂を受けん。金剛法菩薩の加持に由るが故に、法の本性清淨を證得し、悉く能く微妙の法門を演說して、一切の法は皆[四二]筏喩の如しと知る。金剛利菩薩の加持に由るが故に、般若波羅蜜の劍を以て、能く自他無量の雜染結使の諸苦を斷つ。金剛因菩薩の加持に由るが故に、無量の諸佛の世界に於て、一切如來に妙法輪を轉ぜんことを請ふ。金剛語菩薩の加持に由るが故に、六十四種の法音を以て、遍く十方に至り、衆生類に隨て、皆法益を成ず。金剛業菩薩の加持に由るが故に、無邊の[四三]佛剎海會に於て、大供養の儀を成ず。金剛護菩薩の加持に由るが故に、大誓願莊嚴の甲冑を被り、返りて生死に入り、廣く菩薩と作りて、有情を引育して、佛法に置く。金剛[四四]藥叉菩薩の加持に由るが故に、能く天魔と一切の外道とを摧き、能く無始煩惱の怨敵に贏つ。金剛拳菩薩の加持に由るが故に、[四五]三密門の無量眞言・三昧・印契に於て、合して一體

【三六】器世間とは。山河大地等。
【三七】加持。感應道交の意。
【三八】羯磨(karma) 業。
【三九】剎那(kanna) 瞬間。
【四〇】四攝。鉤・索・鏁鈴にして次の如く布施・愛語・利行・同事に當る。
【四一】眞多摩尼(cintāmaṇi) 如意寶珠。
【四二】筏喩。筏は彼岸に渡る具にして、敎法も亦是の如く、涅槃常樂の彼岸に渡行すべき手段方法に過ぎず。既に涅槃に入れば法は必要なきに至る。
【四三】佛剎。佛陀剎羅(Buddha-kṣetra)一佛化度の國土。
【四四】藥叉(yakṣa) 迅速鬼、又は秘密の意。
【四五】三密門。身口意三密相應一致することを要件とする法門にして眞言敎を指す。

に入るものをして、大悲の誓を以て、緊縛して而も住せしめ、及び一切衆生の外道の諸見を摧きて、無上菩提の不退堅固の無礙の大城に住せしめ、還り來りて、一體に收まり、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしむるが爲の故に、金剛鎖械菩薩の形と成りて、智慧の戶を守りて、西門の月輪に住し玉へり。

毘盧遮那佛は、內心に於て、般若波羅蜜金剛鈴の三摩地智を證得し玉へり。自受用の故に、般若波羅蜜金剛鈴の三摩地智より、金剛鈴の光明を流出し、遍く十方世界を照して、一切如來海會の聖衆の金剛界道場に住し玉へる者を歡喜せしめ、及び一切衆生の二乘の異見を破して、般若波羅蜜宮に安置せしめ、還り來りて一體に收まり、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしめざるが爲の故に、金剛鈴菩薩の形と成りて、精進の戶を守りて、北門の月輪に住し玉へり。

若し次第に依て說かば、前後に差支あり。報身佛に據らば、頓に身口意三種の淨業を證し、法界に遍周して、一一の法門、一一の理趣、一一の毛孔、身分相好に於て、虛空界を盡して相障礙せず、各〻本位に居して、以て遍照光明・毘盧遮那・自受用身・他受用身と成る。若し二乘に依て、次第して說かば、若し具に三十七菩提分法を修せずして、道果を證得すといはゞ、この處り有ることなし。若し自受用身の佛を證するには、必ず三十七の三摩地智を須ゐて、以て佛果を成ずべし。

[三三]梵本入楞伽の偈頌品に云く、自性及び受用、變化並に等流、佛德三十六、皆自性身に同じ、法界身を併せて、總じて三十七と成るなり。

最初に無上乘に於て、菩提心を發し、阿閦佛の加持に由るが故に、圓滿の菩提心を證得す。寶生佛の加持に由るが故に、內に菩提を證し、外は空中に寶生佛の灌頂を感じ、三界法王の位を受く、[三四]觀自在王佛の加持に由て、語輪もて、能く無量[三五]修多羅の法門を說く。不空成就佛の加持に由て、諸佛の事、及び有情の事に於て、行する所の利樂皆悉く成就す。金剛波羅蜜の加持に由るが故に、

【三三】梵本入楞伽の現在の經には此の文なし。

【三四】觀自在王佛。阿彌陀佛なり。

【三五】修多羅（sūtra）貫線攝持の義にして經を意味す。經には佛法の教義を統攝するが故に爾く名く。

生の無明住地を破し、如來の〔二九〕五眼、清淨なるを獲得せしめ、還り來りて、一體に收まり、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしめんが爲の故に、金剛燈明・侍女菩薩の形と成りて、西北角の金剛寶樓閣に住し玉へり。

毘盧遮那佛は、內心に於て、金剛塗香雲海の三摩地智を證得し玉へり。自受用の故に、金剛塗香雲海の三摩地智より、金剛塗香の光明を流出し、遍く十方世界を照して、一切如來を供養し、及び一切衆生の身口意業の非律儀の過を破して、〔三〇〕五分無漏の法身を獲得せしめ、還り來りて一體に收まり、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしめんが爲の故に、金剛塗香・侍女菩薩の形と成りて、東北角の金剛寶樓閣に住し玉へり。

毘盧遮那佛は、內心に於て、請召金剛鉤・三摩地智を證得し玉へり。自受用の故に、請召金剛鉤・三摩地智より、金剛鉤の光明を流出して、遍く十方世界を照し、一切如來を金剛界道場に請召し、及び一切衆生の惡趣を拔き、〔三一〕無住涅槃の城に安ぜしめ、還り來りて、一體に收まり、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしめんが爲の故に、守菩提心戶・金剛鉤菩薩の形と成りて、東門の月輪に住し玉へり。

毘盧遮那佛は、內心に於て、金剛引入・方便羂索の三摩地智を證得し玉へり。自受用の故に、引入方便・羂索三摩地智より、金剛〔三二〕羂索の光明を流出し、遍く十方世界を照して、一切如來の聖衆を引入し、及び一切衆生を羂索して、二乘實際の三摩地智の淤泥を脫して、覺王法界宮殿に安置せしめ、還り來りて、一體に收まり、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしむるが爲の故に、衞護功德戶金剛羂索菩薩の形と成りて、南門の月輪に住し玉へり。

毘盧遮那佛は、內心に於て、堅固金剛の鏁械三摩地智を證得し玉へり、自受用の故に、堅固金剛の鏁械三摩地智より、金剛鏁械の光明を流出し、遍く十方世界を照し、已に一切如來聖衆の金剛界道場

〔二九〕五眼。肉眼・天眼・法眼・慧眼・佛眼。

〔三〇〕五分。戒・定・慧・解脫・解脫知見。

〔三一〕無住涅槃。四種涅槃の一、四種とは本來自性清淨涅槃、有餘依涅槃・無餘依涅槃・無住處涅槃なり。無住涅槃とは涅槃の寂靜境に住せずして、娑婆世界に往來して、衆生濟度の願力を成就する意。

〔三二〕羂索。攝取不捨の意にして、大慈悲心の發動なり。

し、能く衆生をして、語業の戲論を破除して、六十四種の梵音具足を獲得せしめ、還り來りて、一體に收り、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしむるが爲の故に、金剛歌詠天女形の菩薩と成りて、毘盧遮那佛の西南偶の月輪に住し玉へり。

毘盧遮那佛は、內心に於て、金剛法舞・神通游戲の三摩地智を證得し玉へり。自受用の故に、金剛法舞・神通游戲三摩地智より、金剛舞の光明を流出し、遍く十方世界を照して、一切如來を供養し、及び一切衆生の無智無明を破して、六通自在の遊戲を獲得せしめ、還り來りて一體に收まり、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしむるが爲めの故に、金剛法舞天女形の菩薩と成りて、毘盧遮那佛の東北隅の月輪に住し玉へり。

毘盧遮那佛は、內心に於て、金剛焚香・雲海三摩地智を證得し玉へり。自受用の故に、金剛焚香雲海の三摩地智より、金剛焚香を流出し、光明は遍く十方世界を照して、一切如來を供養し、及び一切衆生の臭穢の煩惱を破除して、適悅の無礙智香を獲得せしめ、還り來りて一體に收まり、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしむるが爲の故に、金剛焚香・侍女菩薩の形と成りて、東南角の金剛寶樓閣に住し玉へり。

毘盧遮那佛は、內心に於て、金剛覺花雲海の三摩地智を證得し玉へり。自受用の故に、金剛覺花雲海の三摩地智より、金剛覺花の光明を流出し、遍く十方世界を照して、一切如來を供養し、及び一切衆生の迷惑を破して、心花を開敷し、無染智を證せしめ、還り來りて一體に收まり、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしむるが爲の故に、金剛覺花・侍女菩薩の形と成りて、西南角の金剛寶樓閣に住し玉へり。

毘盧遮那佛は、內心に於て、金剛燈明・雲海三摩地智を證得し玉へり。自受用の故に、金剛燈明雲海三摩地智より、金剛燈明の光明を流出し、遍く十方世界を照し、一切如來を供養し、及び一切衆

【三七】六通。六神通即ち天眼通・天耳通・他心通・宿命通・神足通・漏盡通。

【三八】心花。淨菩提心の開發を意味す。

藥叉・方便恐怖の三摩地智より、金剛牙の光明を流出し、遍く十方世界を照して、剛强難化の衆生を降伏して、菩提道に安置せしめ、還へり來りて、一體に收り、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしむるが爲の故に、金剛藥叉菩薩の形と成りて、不空成就如來の左邊の月輪に住し玉へり。

毘盧遮那佛は、內心に於て、金剛拳印・威靈感應の三摩地智を證得し玉へり。自受用の故に、金剛拳・威靈感應の三摩地智より、金剛拳の光明を流出し、遍く十方世界を照して、一切衆生をして、其の業障を除き、速に世出世間の悉地圓滿を獲せしめ、還り來りて、一體に收り、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしむるが爲の故に、金剛拳菩薩の形と成りて、不空成就如來の後邊の月輪に住し玉へり。

毘盧遮那佛は、金剛嬉戲・法樂幖幟の三摩地智を證得し玉へり。自受用の故に、金剛嬉戲・法樂幖幟の三摩地智より、金剛嬉戲・幖幟の光明を流出し、遍く十方世界を照して、一切如來を供養し、及び凡夫貪染の世樂を破して、嬉戲法園の安樂を獲得せしめ、還り來りて一體に收り、一切菩薩をして三摩地智を受用せしむるが爲の故に、金剛嬉戲天女形の菩薩と成りて、毘盧遮那如來の東南偶の月輪に住し玉へり。

毘盧遮那佛は、內心に於て、〔二六〕金剛花鬘・菩提分法の三摩地智を證得し玉へり。自受用の故に、金剛花鬘菩提分法の三摩地智より、金剛花鬘の光明を流出し、遍く十方世界を照して、一切如來を供養し、諸の衆生醜陋の形を除き、三十二相八十種の隨形好身を獲得せしめ、還り來りて、一體に收り、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしむるが爲の故に、金剛花鬘・天女形の菩薩と成り、毘盧遮那佛の西南偶の月輪に住し玉へり。

毘盧遮那佛は、內心に於て、金剛歌詠・淨妙法音の三摩地智を證得し玉へり。自受用の故に、金剛歌詠・淨妙法輪の三摩地智より、金剛歌の光明を流出し、遍く十方世界を照して、一切如來を供養

〔二六〕金剛花鬘。三十七菩提分法を表す。三十七道品とも名く。即ち四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺分・八正道支なり。

[20]結使を[21]斷じて、諸の苦惱を離れしめ、還り來りて、一體に收り、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしむるが爲の故に、金剛劍菩薩の形と成りて、觀自在王如來の右邊の月輪に住し玉へり。

毘盧遮那佛は、內心に於て、金剛因・轉法輪の三摩地智を證得し玉へり。自受用の故に、金剛因・轉法輪三摩地智より、金剛輪の光明を流出し、遍く十方世界を照して、[22]四攝を以て、一切衆生を攝して、無上菩提に安ぜしめ、還り來りて一體に收まり、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしむるが爲の故に、金剛因菩薩の形と成りて、觀自在王如來の左邊の月輪に住し玉へり。

毘盧遮那佛は、內心に於て、金剛密語・離言說の三摩地智を證得し玉へり。自受用の故に、金剛密語の離言說三摩地智より、金剛舌相の光明を流出し、遍く十方世界を照して、能く十方一切衆生の惡慧を除き、[23]四無礙解・樂說辯才を得せしめ、還り來りて、一體に收り、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしむるが爲めの故に、金剛語菩薩の形と成りて、[24]觀自在王如來の後邊の月輪に住し玉へり。

毘盧遮那佛は、內心に於て、金剛業・虛空庫藏の三摩地智を證得し玉へり。自受用の故に、金剛業・虛空庫藏三摩地智より、金剛業の光明を流出し、遍く十方世界を照して、一切衆生をして、一切如來の諸の菩薩所に於て、廣大の供養を成さしめ、還り來りて、一體に收まり、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしむるが爲の故に、金剛業菩薩の形と成りて、不空成就如來の前月輪に住し玉へり。

毘盧遮那佛は、內心に於て、金剛護・大慈莊嚴甲冑の三摩地智を證得し玉へり。自受用の故に、金剛護・大慈莊嚴甲冑の三摩地智より、金剛甲冑の光明を流出し、遍く十方世界を照して、能く暴惡恚怒の衆生を除き、速に大慈心を獲せしめ、還り來りて一體に收まり、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしむるが爲の故に、金剛護菩薩の形と成りて、不空成就如來の右邊の月輪に住し玉へり。

毘盧遮那佛は、內心に於て、[25]金剛藥叉・方便恐怖の三摩地智を證得し玉へり。自受用の故に、金剛

【二〇】結使。無明煩惱の意。
【二一】斷。斷捨の義。
【二二】四攝。鉤・索・鏁・鈴の四菩薩は布施・愛語・利行・同事を、次の如く表示したる尊身なり。
【二三】四無礙。法・義・詞・辯。
【二四】觀自在王如來。阿彌陀如來なり。
【二五】金剛藥叉(yaksa)金剛手菩薩の降三世の三昧を表す。

爲の故に、金剛寶菩薩の形と成りて、寶生如來の前月輪に住し玉へり。

毘盧遮那佛は、內心に於て、金剛威光の三摩地智を證得し玉へり。自受用の故に、金剛威光の三摩地智より、金剛日の光明を流出し、遍く十方世界を照して、一切衆生の無明愚暗を破して、大智光を發し、還り來りて一體に收まり、一切菩薩をして三摩地智を受用せしむるが爲の故に、金剛威光菩薩の形と成りて、寶生如來の右邊の月輪に住し玉へり。

毘盧遮那佛は、內心に於て、[一四]金剛寶幢三摩地智を證得し玉へり。自受用の故に、金剛寶幢三摩地智より、金剛幢の光明を流出し、遍く十方世界を照し、一切衆生の意願を滿じ、還り來りて一體に收まり、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしむる爲めの故に、金剛幢菩薩の形と成りて、寶生如來の左邊の月輪に住し玉へり。

毘盧遮那佛は、內心に於て、金剛笑・印授記の三摩地智を證得し玉へり。自受用の故に、金剛笑印授記の三摩地智より、金剛笑印の光明を流出し、遍く十方世界を照し、[一五]不定性の衆生に、平等無上の菩提の記を授與し、還り來りて、一體に收まり、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしむるが爲めの故に、金剛笑金剛の形と成りて、寶生如來の後邊の月輪に住し玉へり。

毘盧遮那佛は、內心に於て、[一六]金剛法・清淨無染の三摩地智を證得し玉へり。自受用の故に、金剛法・清淨無染の三摩地智より、金剛法の光明を流出し、遍く十方世界を照し、一切衆生の[一七]五欲の身心を淨除して、清淨なること、猶ほし蓮花の塵垢に染まらさるが如くにして、還り來りて一體に收まり、一切菩薩をして三摩地智を受用せしむるが爲の故に、金剛法菩薩の形と成りて、[一八]觀自在王如來の前月輪に住し玉へり。

毘盧遮那佛は、內心に於て、[一九]金剛利劍・般若波羅蜜の三摩地智を證得し玉へり。自受用の故に、金剛利劍・波羅蜜の三摩地智より、金剛利劍の光明を流出し、遍く十方世界を照して　一切衆生の

【一四】金剛寶幢。淨菩提心を指す。

【一五】不定性。五性中の不定種性の人を指す。五性とは聲聞定性・緣覺定性・菩薩定性・不定種性・無性有情なり。無性とは佛性無き義なり。

【一六】金剛法清淨無染。觀世音菩薩の三昧なり。

【一七】五欲。色・聲・香・味・觸の五境に對する欲念。

【一八】觀自在王如來。西方阿彌陀佛なり。

【一九】金剛利劍。文殊菩薩の金剛名號なり。

[一]毘盧遮那佛は内心に於て、金剛薩埵の勇猛の菩提心の三摩地智を證得す。自受用の故に、金剛薩埵勇猛菩提心の三摩地智より、五峯金剛の光明を流出して、遍く十方世界を照し、一切衆生をして、頓に普賢の行を滿足せしめ、還り來つて、一體に收まり、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしめんが爲の故に、金剛薩埵の菩薩形と成りて、阿閦如來の前月輪に住し玉ふ。

[二]毘盧遮那佛は、内心に於て、金剛鉤の四攝三摩地智を證得し玉へり。自受用の故に、金剛鉤の四攝三摩地智より、金剛光明を流出して、遍く十方世界を照し、四攝の法を以て、一切衆生を[三]攝して、無上菩提に安じ、還り來りて、一體に收まり、一切菩薩をして三摩地智を受用せしむるが爲めの故に、金剛王菩薩の形と成りて、阿閦如來の右邊の月輪に住し玉ふ。

毘盧遮那佛は、内心に於て、金剛愛・大悲箭三摩地智を證得し玉へり。自受用の故に、金剛愛・大悲箭三摩地智より、金剛箭の光明を流出し、遍く十方世界を照して、一切衆生の無上菩提に於て、厭離する心の者を射害し、還り來りて一體に收まり、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしむるが爲の故に、金剛愛菩薩の形と成りて、阿閦如來の左邊月輪に住し玉ふ。

毘盧遮那佛は、内心に於て、金剛善哉・歡喜王の勇躍三摩地智を證得し玉へり。自受用の故に、金剛善哉歡喜勇躍三摩地智より、金剛善哉印の光明を流出し、遍く十方世界を照し、一切衆生憂慼して、普賢行に於て、劣意を生ずる者を照して、身心を以て勇躍を得せしめ、還り來つて一體に收まり、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしむるが爲めの故に、金剛善哉菩薩の形と成りて、阿閦如來の後月輪に住し玉へり。

毘盧遮那佛は、内心に於て、金剛寶灌頂の三摩地智を證得し玉へり。自受用の故に、金剛寶灌頂の三摩地智より、金剛寶光明を流出し、遍く十方世界を照して、一切衆生の頂に灌灑し、菩薩不退轉の職位を獲得せしめ、還り來つて一體に收まり、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしむるが

【一】如來因位の德の表現は即ち金剛薩埵にして、金剛薩埵の内證は、勇猛菩提心智なり。以下阿閦佛の周圍の薩・王・愛・喜の四菩薩を觀證す。

【二】慈悲・愛語・利行・同事の四攝の鉤にて、普く一切衆生を攝取して、捨てざる誓願を擴き玉ふ金剛王菩薩を出生す。

【三】攝。攝取して捨てざる義。即ち救の意。

然るに受用身に二種あり。一には自受用、二には他受用なり。

[五] 毘盧遮那佛は、內心に於て、自受用の四智、大圓鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智を證得し、外は十地滿足の菩薩の他をして、受用せしむるが故に、四智の中より、四佛を流出し、各々本方に住し、本座に坐し給へり。

[六] 毘盧遮那佛は、內心に於て、五峯金剛の菩提心三摩地智を證得して、自ら受用するが故に、五峯金剛の菩提心三摩地智の中より、金剛光明を流出して、遍く十方世界を照し、一切衆生の[七]大菩提心を淨め、還り來つて、一體に收まり、一切菩薩として、三摩地智を受用せしむるが爲めの故に、金剛波羅蜜形と成りて、毘盧遮那如來の前月輪に住し給へり。

[八] 毘盧遮那佛は、內心に於て虛空寶大摩尼功德の三摩地智を證得し、自受用の故に、虛空寶大摩尼功德の三摩地智より、虛空寶の光明を流出し、遍く十方世界を照し、一切衆生の功德をして圓滿ならしめ、還り來つて一體に收まり、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしむるが爲めの故に、金剛寶波羅蜜形と成りて、毘盧遮那如來の右邊の月輪に住し給へり。

[九] 毘盧遮那佛は、內心に於て羯磨金剛大精進の三摩地智を證得し、自受用の故に、羯磨金剛大精進の三摩地智より、羯磨光明を流出して、遍く十方世界を照して、一切衆生をして、一切の懈怠を除かしむ。大精進を成じ、還り來て一體に收まる。一切菩薩をして、三摩地智を受用せしむるが爲めの故に、羯磨波羅蜜形を成じて、毘盧遮那如來の左邊の月輪に住す。[一〇] 毘盧遮那佛は、內心に於て、大蓮華智慧の三摩地智を證得す。自受用の故に、大蓮華智慧の三摩地智より、蓮華の光明を流出して、遍く十方世界を照し、一切衆生の客塵煩惱を淨め、還り來つて、一體に收まり、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしむるが爲めの故に、法波羅蜜形と成りて、毘盧遮那如來の後邊の月輪に住し給へり。

【五】 毘盧遮那佛以下は、智法身が四智を證成し、四智より四佛を出生する意を明す。

【六】 智法身大日如來の菩提心より、金剛波羅蜜菩薩を出生する意。以下大日尊の周圍に在ます四波羅蜜菩薩を觀證す。

【七】 大菩提心 菩提(bodhi)は智義又は覺の義。

【八】 智法身大日如來の諸善萬行功德の寶藏より、金剛寶波羅蜜菩薩を出生す。

【九】 如來の大精進智より、業波羅蜜菩薩を出生す。

【一〇】 如來の自性清淨の蓮華智より、法波羅蜜菩薩を出生す。

世出世間の[一三]悉地成就を得せしめよ。と彼の諸の菩薩は、如來の教勅を受け已て、佛足を頂禮し、毘盧遮那佛を圍遶し已つて、各〻本方の本位に還へり、[一四]五輪と成り爲つて、[一五]本願幖幟を持せり。

若しは見、若しは聞、若し[一六]輪壇に入りぬれば、能く有情は[一七]五趣の輪轉、生死の業障を斷じ、[一八]五解脫の中に於て、一佛より一佛に至て、供養承事して、皆無上菩提を獲得し、決定の性を成ずること、猶ほし金剛の沮壞す可からざるが如くならしめん。こは卽ち毘盧遮那[一九]聖衆の集會なり。便ち現證[二〇]窣堵波塔と爲る。一一の菩薩、一一の金剛は、各〻本[二一]三昧に住し、自の解脫に住し給へり。皆大悲願力に住して、廣く有情を利す。若しは見、若しは聞、悉く三昧を證し、功德智慧、頓に集つて成就せり。

略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門

開府儀同三司特進試鴻臚卿肅國公食邑三千戶賜紫贈司空諡大鑒正號大廣智大興善寺三藏沙門不空[一]奉詔譯

その時、[二]金剛界毘盧遮那佛は、色界頂阿迦尼吒天宮に在りて、初め受用身をもて、等正覺を成じ、[三]一切如來の平等智を證得す。卽ち一切如來の金剛平等智印の三昧耶に入て、卽ち一切如來の法平等自性光明智藏を證し、等正覺を成じ已て、一切如來は、薩埵金剛より、虛空藏大摩尼寶を出し、以て其の頂に灌ぎ、觀自在法王智を發生せしめて、一切如來の毘首羯磨善巧智を安立し、須彌山頂金剛摩尼寶峯樓閣に往詣せしめ、聖衆を集め已んぬ。是に於て、毘盧遮那佛は、一切如來を加持して、[四]四方に師子座を施設す。

時に不動如來・寶生如來・觀自在王如來・不空成就如來は、復毘盧遮那佛を加持す。

【一三】悉地(siddhi)成就の義。

【一四】五輪。五解脫輪。

【一五】本願幖幟。三昧耶形とも稱し、諸尊の所持物を指す。

【一六】輪壇。曼荼羅道場の意。

【一七】五趣。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人天。

【一八】五解脫。五佛各の曼荼羅卽ち金界の五大月輪を指す。

【一九】聖衆。大日如來の功德身より遊離せる聖尊。

【二〇】窣堵波(stūpa)法界塔にして卽ち智法身なり。

【二一】三昧。三摩地(samādhi)の訛音にして正受又は靜慮の意。

【一】不空(705-774 A.D.)金剛智の弟子にして、惠果の師なり。唐の玄宗・肅宗・代宗の三代の帝師たり。

【二】金剛界以下は智法身大日如來が四佛身を現證することを明す。

【三】一切如來。十方三世の諸佛を指す。諸佛が曾て證得し玉ひたる四智を、今の智法身が證成する意にして、一切如來が智法身を加持して、四智を證成せしめ、四法身を體得せしむる義を明す。

【四】四方師子座。四方四佛の座にして、四佛は一切如來の代表的佛身なり。

略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門序

それ[二]眞言陀羅尼宗とは、これ一切如來の祕奥の教、自覺聖智、頓證の法門なり。亦是れ菩薩、具に淨戒無量の威儀を受け、一切如來[三]海會の壇に入り、[四]菩薩の職位を受け、三界を超過して、佛の教勅を受くる三摩地門なり。因緣を具足して、頓に功德廣大の智慧を集め、無上菩提に於て、皆退轉せず。諸の天魔と、一切の煩惱と、及び諸の罪障とを離れ、念々消融して、佛の四種身を證す。謂く自性身・受用身・變化身・等流身なり。五智三十七智等の[五]不共の佛法を滿足す。

然るに如來の變化身は、[六]閻浮提[七]摩竭陀國菩提道場の中に於て、等正覺を成じ、[八]地前の菩薩・聲聞・緣覺・凡夫の爲に、三乘教の法を說く。或は他意趣に依つて說き、或は自意趣にして說き玉ふ。種種の根器は、種種の方便をもて、法の如くに修行すれば、人・天の果報を得ん。或は三乘解脫の果を得ん。或は進み、或は退き、無上菩提に於ては、三無數大劫に修行勤苦して、方に佛と成るを得ん。(又)[九]王宮に生れ、[一〇]雙林に滅し給へる。遺身の舍利は、塔を起して供養すれば、人天勝妙の果報と、及び涅槃の因とを感受すべし。

(而も)報身毘盧遮那は、色界頂・第四禪・[一一]阿迦尼吒天宮に於て、雲のごとく集まれる盡虛空・遍法界の一切諸佛と、十地滿足の諸大菩薩とを證明として身心を警覺して、頓に無上菩提を證するには同ぜず。

自受用佛は、心より無量の菩薩を流出す、皆同一性なり、謂く金剛の性なり。遍照如來にて對し灌頂の職位を受く。彼等の菩薩は、各々[一二]三密門を說て、以て毘盧遮那及び一切如來に獻じて、便ち加持の敎勅を請ふ。毘盧遮那佛の言く、汝等は將來、無量の世界に於て、最上乘者の爲に、現生に

【一】聖位。金剛界三十七尊の尊位。
【二】眞言陀羅尼宗。眞言宗名の典據となる句。
【三】海會。雲海の水滴の如く無量無邊の集會の義。
【四】菩薩職位。近き將來に佛法王の位に卽き、一切有情を化度すべき補處の菩薩位を指す。
【五】不共。聲聞・緣覺・菩薩と共同せざる意。
【六】閻浮提(Jambu-dvīpa)印度を指す。
【七】摩竭陀(Magadha)。
【八】地前。十地前の菩薩、卽ち十住・十行・十四向の三十位に居する菩薩を意味す。
【九】王宮。迦毘羅衞(Kapila-vastu)城中の宮殿。
【一〇】雙林。拘尸那城の娑羅雙林は佛入滅の處。
【一一】阿迦尼吒(Akaniṣṭha)色究竟天。
【一二】三密門。身口意三平等句の法門。

ものであつて、佛知見を開照せる人に取りては、此の法界宮殿を至る所に觀見し得るのであるが、未だ佛知見を開發し得ない凡夫に有つては、自己自身即ち法界宮殿中に在りながらも、之を觀照し得ないで、三毒五欲の妄境界に心を引寄せられ、心外の妄境に依り自己の身心を惱亂せられ、自心内の眞佛の光りに攝收せられずに居るので我々迷人の常である。此の妄想無明の暗雲を取り除く手段方法として、五相三密の妙行を必要條件と見做して居るのである。

尚又今の三十七尊は、五相成身觀中の成金剛身と證金剛心とを觀照する上の廣觀と見做すべきであると思ふ。

昭和六年八月十日

譯者　神林隆淨　識

外ならず。加持身は智法身の加持感應の尊身にして、事實上の存在の身ではないから、三十六の尊身は、之を要するに智法身の三十六の法門を具體的に觀じ、且つ其の靈用顯現の狀態を說示したものである。此の三十六尊に本法身を加ふれば三十七尊と成る。通佛敎に於ては三十七道品を完全に修證して、佛果圓滿の位に入るのであるが、今の三十七尊は、智法身の金剛智體を三十七の各方面から觀見し、其を實證することに依つて、眞に金剛智體を體現し識得するのであるから、三十七法門の內容は固より異つて居るが、其の形式は略々同一である。三十七道品は、修行の德目を數へ擧げたものであり、三十七尊は、その德目を禪定中に於て具體的に觀見し、且つ其の具體的尊格の神變自在の靈用をも觀取する所に、宗敎的意味を深めて居ると見ることが出來やう。

此の三十七尊の思想は、金剛頂經の中に示されてある金剛界曼荼羅の基本思想と成つてあるが、此の思想は何から發達して來たものであるか、恐らく三十七の數は、三十七菩提分法の思想から由來して居るものと思はれるが、今は之を確證することを差控へるとしても、菩提分法と云ふ語の意味から考ふるに、一菩提心を三十七分して說くものが、四念處、八正道等の三十七道品であつて、此の三十七道品を眞に體解することに依つて、玆に菩提心の全體を體得することが出來ると云ふ意味であるから、此の菩提心に置き換ゆるに智法身を以てすれば、三十七尊は、一智法身を分析的に修證する側にして、三十七尊を完全に證見することに依りて、一智法身の眞の內容を證悟することに成るから、彼れ此れ相比較する時に、其處に密接せる思想系統の存することが思ひ出されるのである。併し八正道や七覺支の其れ其れが三十七尊中の何れに契當するやと言ふことを、明確に指摘し得ないのは、其の起原を異にし、且つ一方は逐次的に行の上に現して行かうとするのであり、他は禪定中に於て、總括的に禮讃的に觀照して行く所に相違點が存するのである。

この三十六尊に關して、梵本入楞伽の偈文にあると言はれて居るが、現に世に知られて居る南條博士が刊行された梵本には見えて居ないから、楞伽經の梵本が他に尙一本あることを許さなくてはならない。若しかゝる梵本が眞に存在したとすれば、楞伽經と金剛頂經とは少くとも此點に於て、共通思想の存することを認めずに居られなくなる譯である。

終りに金剛界曼荼羅を表示する三十七尊が、本法身に還元し、此の本法身は窣堵波法界として、十方法界に流遍すと云ふ思想が本經に見えてある。此の窣堵波法界は、謂ゆる金剛法界宮殿と稱せられる

略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門

解題

　本經に序の一段が別に設けられてあるが、此の序文は普通のものとは趣きを異にし、直に經の內容に說き及んであるから、序文と本文とを區別する必要が無いと思はれる。今經の序は梵文の譯であつて、譯者が書添へたもので無いことは、此の文體の上から見て斷定し得る。大師は序文を引用して直に聖位經の文と見做して居られるから、本經を序と本文とに分つたのは或は後世の誤りではあるまいかと思はれる。

　本書は略して分別聖位經と稱し、大師が眞言の宗名を此の經から得られた事、自性身・受用身・變化身・等流身なぞの法身の名稱も此の經から取つて使用して居られるのである。又金胎兩部の教主大日如來が、化身でも報身でもなく、法身佛であること、並に此の法身佛の說法は等覺十地の諸大菩薩でも、其の教益に預ることが出來ないと云ふ思想も、此の經に明示されてあるから、弘法大師の立教開宗の上から見て、本經は種々の點から價値のあるものと見做されてある。

　此の經に於て主として明されあるのは三十七尊出生の模樣である。三十七尊とは五佛・四波羅蜜・十六大菩薩・四攝・內外八供養である。この三十七尊の中には、通佛教中に知られてある諸佛菩薩が多數にあり、例せば文殊菩薩を金剛利、觀世音菩薩を金剛法と稱して居るが如き即ち其れである。如來の眞實智即ち金剛智體を體得したる尊をば眞言密教では金剛と稱することに成つてあるから、金剛界會の諸尊の多數を金剛と稱するのは此の理由に依る。

　尙ほ密教の諸佛諸尊に對する見方が通佛教と著しく異つて居ることも、此の經を通讀することに依りて、何人も觀察し得らるゝ事と思はれるが、眞言密教に於ては、客觀界に諸佛諸尊の實在して居ることを認めずに、如來の禪定中に於て、變現し給ふ持受用身と見做して居るのである。三十七尊は一智法身大日如來が、三昧に入り。五智若しくは三十七智を變現し、十方法界に流遍して、三世の諸佛諸尊を供養し承事すると倶に、其等の諸世界の衆生をして、皆な悉く法益を受けしめ、還り來つて、本法身に歸入することに成つてある。之れに依つて見れば、眞實に存在するものとしては、一智法身あるのみで、その他の三十六尊は、此の一智法身の禪定中に於て、變現し玉ふ所の一法門身に

り。道に至ては未だ證入せずと雖ども、是れ法より生じて、金剛名に膺ることを得て、已に菩薩の數に隨ふ。觸視者あれば、則ち菩提の因と爲るたり。

金剛頂瑜伽三十七尊出生義（畢）

暴惡可畏の身を現じ、大威の智を操て、以て[二七]難調を調伏す。叱吒すれば則ち大千（世界も）震盪し、指顧すれば則ち群魔慴竄す。この以に[二八]鬼母は恂懼して而して跡を收め、[二九]象頭は威に畏れて而して遠く引(退)せん。彼の大惑の主、[三〇]摩醯首羅も、亦其の害を蒙被りて、而して正覺を成ず。則ち知る向時の憑怒は、これ大悲に適る。此等の金剛に、[三一]河沙塵滴の數量あり、今十六位を擧ぐ。亦塵數の義、これに出でず。又その餘所に大士・天人あり、皆是れ隨類意見の身にして、邪山苦海に梯航するなり。亦大日如來の善巧業用の門より出づ、故に此れ[三二]窣堵婆なり。謂つべし一乘の祕旨を總領すと。何に況んや權實の道。是に於て全きをや。[三三]普現色身等の百千の三昧、及び[三四]四無量心、饒益方便六波羅蜜の運行次第、乃至座を起たずして、諸の佛刹に遊び、供養承事して、有情を利樂し、不可思議の熏を以て、而も密に衆生界を移すが如きに至ては、是の如き功用は、餘の[三五]修多羅には、或は但名目のみありて、而して其の法は無し。作用に至ては、儀軌に皆な備る。此の教門は旣に諸の大乘と異るが故に、易く授受し難し、傳法の[三六]阿闍梨は、縱に其の器を擇び得て、必ず授くるに菩提の性戒を以てす。大會の法壇に入りて、[三七]金剛界の賢聖を取り、金剛乘の甘露灌頂を攝持して、然して後に示すに佛心の閫閾に入るを以てす。或は此の如くならざれば、則ち修行者に利なく、傳度者は罪を獲、故に佛より已降、迭に相付囑す。釋師子は毘盧舍那如來の方授を得て、而して誓約して金剛薩埵に傳ふ。金剛薩埵は之を得て、數百年にして、龍猛菩薩に傳へ、龍猛菩薩は之を受けて、數百年にして龍智阿闍梨に傳ふ。又住持すること數百年にして、金剛智阿闍梨に傳ふ。金剛智阿闍梨は、悲願力を以て、將に中國に流演せんとし、遂に瓶を挈げ、錫を杖つきて、[三八]開元七載に上京に至る。十四載に遽に其の人を得、復以て誓約して不空金剛阿闍梨に傳ふ。然して後に其の枝條付囑、頗だ其の人あり、若し密家嫡々相承は此れに准するのみ。

本教を按ずるに、斯の灌頂を得る者は、金剛薩埵、恒に其の身心に住して、而して心王に藩屛た

【二七】難調。三界主の大自在天を指す。
【二八】鬼母。具には鬼子母と云ふ。
【二九】象頭。聖天なり。
【三〇】摩醯首羅(Maheśvara)大自在天。
【三一】河沙塵滴は數の無量無邊を明す。
【三二】窣堵婆(Stūpa)塔なり。
【三三】普現色身　大日如來の加持身なり。
【三四】四無量心。慈・悲・喜・捨。
【三五】修多羅(Sūtra)　經典。
【三六】阿闍梨(ācārya)　教授。
【三七】金剛界の賢聖。灌頂道場に入りて投華して得る本尊を指す。
【三八】開元七載。西暦七一九年。

一切如來、言說戲論を離るゝ智に就て、而して金剛密語を生ず。則ち西方大蓮華法藏界、無量壽如來の四親近菩薩なり。一切如來、三摩地大慧波羅蜜の成就する所なるを以て、一切如來善巧工藝門より、而して金剛業を生ず。一切如來の大慈鎧冑門よりして、而も金剛護を生ず。一切如來の無畏調伏門より、金剛牙を生ず。一切如來の住持成就門より、金剛拳を生ず。卽ち北方變化輪作用界に、不空成就如來四親近の菩薩あり。一切如來、衆生を捨てざる大精進波羅蜜の成就する所なるを以て、衆生界に遂て、六度門に入るが如きに至ては、則ち一切如來體性海四智の中より、金剛鉤・索・鎖・鈴この十六大士の手に持する所は、皆な本三摩地の[二三]幖幟なり。覩物義を求むるに、其れ何ぞ遠きや。等の[二四]四攝の菩薩を生ず。よく召請・引持・堅留・歡喜の事を以て、一切の道場に於て、諸の敎命を奉じ、人天は之を得て、解脫の衆を集め、聖賢は之を用て、迷倒の流に接す。則ち塔の四門の外に、其の業用を操るは、(攝化利生の)位に住するもの是れなり。四菩薩智の發起する所に由る。この諸の聖人は晏然たることを得ずして、本所の宮觀に於て、而も疾く甚だ覆掌し、以て群方の請に應ずるなり。眞言修行に住する者、若し能く是の[二五]三昧に入れば、便ち能く此の供養雲海を興して、而して自他の利行を成就す。則ち中方三十七尊の大義なり。此の如く、又頂生三昧に住して、而して頂生の身を現ずるのみ。今塔の上方に獨り五輪の王會有る所以は、蓋し諸の頂生の身を以て、皆此の無上[二六]五頂智に攝入するなり。方の際を得ざることを、而も究むるが如きに至ては、佛の頂相なり。この至勝の法も亦然り、其の際を得可らず、故に頂と稱す。その五頂王は又一切眞言尊、宰割の主なり、故に王と稱す。五頂輪に就ては、金輪を最と爲す。然らざれば孰れか勝絕の唯一法を知らんや。故に觀自在菩薩より已下は、怖を攝して歸命するなり。又下方に十六の執金剛神あり、蓋し一切如來、勇健菩提心の所生化なり。亦如來修行の時を明すに、塵數心障の煩惱あり、この金剛慧を以て、之を破し、大覺の後、塵數種類の智門と成る。是の金剛慧を以て、之を用ふ。故に復其の

【二三】 幖幟。表現の意。

【二四】 四攝。

召請――拘――布施
引持――索――愛語
堅留――鏁――利行
歡喜――鈴――同事

【二五】 三昧。三摩地(Samādhi)の訛、等持即ち平等に任持する意。能觀の心と所觀の法と一如一相と成る義。

【二六】 五頂。五佛頂尊、金輪・光聚・白傘蓋・高・勝、これなり。

を知りて、大菩提衆、會同せざるなし。外道は我執を隔て、二乘は空證に滯し、近情は取捨を失し、淺智は有無に惑ふ。この故に是れ自ら[14]舟梁を破し、不可得にして而して詣る。如に至れば、即ち爾の普賢の心、深く圓明の智に入る。乃ち是れ眞言行菩薩、瑜伽の大方に造るなり。然して後に能く心の菩提を堅固にし、心相を莊嚴して、現心の法藏を開き、心の神通を成就し、心の戲論を寂滅す。是に於て知見を發明して、衆生を成就し、相應の門に住して、諸の佛事を作す。是を以て大圓鏡智に由て、その金剛平等ありて、等覺身を現ず。則ち塔中方の東[15]阿閦如來なり。平等性智に由り、それに義平等ありて等覺の身を現ず、即ち塔中方の南の寶生如來なり。妙觀察智に由り、それに法平等あり、等覺の身を現ず、即ち塔中方の西の[16]阿彌陀如來なり。成所作智に由り、それに業平等ありて、等覺の身を現ず、即ち塔中方の北の不空成就如來なり。四如來の智に由て、四波羅蜜菩薩を出生す。蓋し三際の一切諸聖賢の生成養育の母なり。是に於て印成せる法界體性智の[17]自受用身は即の塔の正中の毘盧舍那如來なり。四親近の菩薩は、即ち彼の四波羅蜜印なり。無量大悲の體は、是に於て而して生じ、無量方便の擁護は、是に於て而して出づ。一切如來の[18]菩提堅牢の體に於て、而も金剛薩埵を生ず。一切如來の菩提[19]四攝の體に於て、而も金剛王を生ず。一切如來の菩提無染の淨體に於て、而も金剛愛を生ず。一切如來の隨所稱讃の體に於て、而も金剛善哉を生ず。則ち東方金剛威莊嚴界、不動如來四親近の菩薩なり。一切如來大戒忍辱波羅蜜の成就する所なるを以て、一切如來大莊嚴の義に由て、而して金剛寶を生ず。一切如來大威耀の義に由て、而して金剛日を生ず。一切如來大滿願の義に由て、而して金剛幢を生ず。一切如來大歡樂の義に由て、而して金剛笑を生ず。即ち南方寶光明功德界、寶生如來四親近の菩薩なり。一切如來無住[20]檀那波羅蜜の成就する所なるを以て、一切如來自在無染智に就て、而して[21]金剛法を生ず。一切如來永斷習氣智に就て、而して[22]金剛法を生ず、一切如來、大法輪を轉ずる智に就て、而して金剛因を生ず。

を起す原因となるものなり。

【一四】舟梁。彼岸に到る船材橋梁にして、即ち教を指す。然るに教に固着するは、是れ亦迷見なり。此の迷見を破却して不可得を得。

【一五】阿閦(Akṣobhya)不動・とも無動とも譯す。

【一六】阿彌陀(Amitāyus)無量壽と譯す。

【一七】自受用身。智法身大日如來なり。

【一八】菩提(bodhi)覺と翻す。

【一九】四攝。布施・愛語・利行・同事にして、曼荼羅會中の鉤・索・鏁・鈴の四菩薩は即ち之を表はす。

【二〇】檀那(dāna)布施。

【二一】金剛法。觀音の金剛名號。

【二二】金剛利。文殊菩薩の金剛名號。

金剛頂瑜伽三十七尊出生義

特進試鴻臚卿大興寺三藏沙門大廣智不空奉詔譯

我が[一]能仁如來は、[二]三有六趣の惑を憫み、常に[三]蘊・界・入等に由て、生死の妄執を受け、空華無くして而も虚計し、[四]衣珠有て而も知らず。是に於てか、跡を[五]都史天宮に收め、中印の土に下生し、[六]化城を起て以て、之れに接し、[七]糞除に由て以て之を誘ふ。大種姓の人、法緣已に熟し、三祕密教の說時方に至る。遂に却て自受用身に住し、色究竟天宮に據て、不空王三昧に入り、普く諸の聖賢を集め、地位の漸階を創り、等妙の頓旨を開く。

普賢金剛の性海より、塵數の加持の色身を出し、然して後に普賢金剛語業の密言を演べ、普賢金剛身業の密印を示し、普賢金剛意業の意慧を啓き、有情金剛三業の度門を成ず。不達者は以て、支節を運動するは、戲弄に殊ならず、[八]文身を持誦するは、更に計著を成ずと爲す。安んぞ知らん、それ此に入り、彼に出で、淺を用て、深を成ず。亦金剛手纔に狻猊に乘するに由て、忽に王趾を奮ひ、適ゝ丘陵を按ずるに已に平かなり。是れ不思議の源流、尙ほ[九]三賢・[一〇]四果の境界にあらざるなり。豈に區區たる常情の能く臆中する所ならんや。故に之を得る者は、[一一]五根に卽して而して正受に入り、萬有に就て而して大空を照し、佛界を引て而して普く衆生を淨め、群情を攝して、而して都て[一二]一智に會す。

この以に修行者は、先づ相似に住すれば、則ち加持力を受く。垢薄き者は、稍ゝ法明を見て、三昧の分を得、深入者は空色を雙了すれば、則ち遍淨の體あり。乃ち[一三]習氣の蓋障、廓然として餘無ければ、則ち寂照本源の業用皆辨じ。法王自在の義利平に施し、然して諸の正覺尊の本來常住なる

【一】能仁。釋迦牟尼(Śâkyamuni)譯して能仁寂默と云ふ。
【二】三有。欲・色・無色の三界にして、有とは實在の義。煩惱業の苦果を意味す。
【三】蘊・界・入。五蘊(色・受・想・行・識)十二入(六根・六境)十八界(六根・六境・六識)。
【四】衣珠。貪人の衣中に隱されたる寶珠の意にして、佛性を寶珠を喩ふ。
【五】都史。都史多(Tuṣita)又は兜率と云ひ、妙足又は知足と譯す。彌勒尊の淨土にして、釋尊は此の天より中印度に下生せらる。
【六】化城。聲聞若しくは緣覺の極果。
【七】除糞。法華經に於ける會三歸一の意を指す。
【八】文身。眞言陀羅尼。
【九】三賢。小乘にては五停心・總相念住・別相念住を修する人、大乘にては十住・十行・十廻向の三十心位の菩薩を指す。
【一〇】四果。預流・一來・不還・阿羅漢なり。
【一一】五根。眼根・耳根・鼻根・舌根・身根。
【一二】一智。金剛智。
【一三】習氣。無明煩惱の作用を終りて後に殘れる氣分にして、後に更に無明煩惱の作用

金剛法菩薩
金剛劍(利)菩薩
金剛因菩薩
金剛語菩薩
} 西方觀自在天佛四近親

金剛業菩薩
金剛護菩薩
金剛藥叉(牙)菩薩
金剛拳菩薩
} 北方不空成就佛四近親

} 十六大菩薩

金剛嬉戲菩薩
金剛花鬘菩薩
金剛歌詠菩薩
金剛法舞菩薩
} 內四供養

金剛焚香菩薩
金剛覺花菩薩
金剛燈明菩薩
金剛塗香菩薩
} 外四供養

金剛鉤菩薩
金剛羂索菩薩
金剛鎖械菩薩
金剛鈴菩薩
} 四攝

以上合して三十七尊となる。

昭和六年八月十五日

譯者 神林隆淨 識

經は大日經に近い思想であると言ふことは、古來から學者の常に言ふ所である。

而も此の如き關係は密教經典が盛んに譯出される唐時代に於て、愈ゝ此の意が明かに成て來て居る。中にも本書の如きは此等の關係を極めて明瞭に言ひ表してある。尙ほ本書は不空三藏譯と成つてはあるが、卷末に不空金剛阿闍梨云云とあるから、三藏自身の筆に成つたものとは思はれない。又此の付法の次第が不空三藏が常に言つて居られる說と異つて、大日・釋師子、金剛薩埵と次第されてあるが此は東密一家の相承說と稍ゝ相容れない所がある。弘法大師の御請來目錄に本書が記載されて無いのみか、開元錄にも貞元錄にもなく、運仁錄外に始て見てある位であるから、東密一家に於て之を輕視して居ることは無理からぬことである。思ふに大師入唐の當時尙本書は世に認められない計りでなく、當時眞に存在してあつたか否やすら疑はしいのである。靈巖寺の惠運律師の錄外の請來であるから歷史の立場から見て價値あるものでは無く、其の作者が果して何人であるかも、素より明かでないが、本書の內容中幾多の價値ある學說のあることは、これ又決して否定の出來ない事實である。本書が梵文の譯でもなく、又不空三藏の筆に成れるもので無いとしても、付法說以外のものは、大に學者を啓發するものがあり、密藏殊に金剛頂宗家の事相と教相との要義は、洩れなく殆んど網羅し盡されてあるから、初學者を益する所、甚だ大なるものがあると信ずる。

附記

大日如來
不動如來
寶生如來
觀自在王如來
不空成就如來
（以上）五如來

金剛波羅蜜
寶波羅蜜
業波羅蜜
法波羅蜜
（以上）四波羅蜜菩薩

金剛薩埵菩薩
金剛王菩薩
金剛愛菩薩
金剛善哉（喜）菩薩
（以上）東方阿閦佛四近親菩薩

金剛寶菩薩
金剛威光菩薩
金剛幢菩薩
金剛笑菩薩
（以上）南方寶生佛四近親菩薩

金剛頂瑜伽三十七尊出生義解題

本書は不空三藏譯としてあるが、其の文章の上から考ふるに、印度から將來した梵文から譯したものとは思はれない。よし原文が有つたにもせよ、其の飜譯は原文の大意を取り、寧ろ漢文を主として書かれたもので、原文から直接に譯したものとは見えない。且つ本書は法華經を通讀した後に筆を執つて、金剛頂經の思想を最も簡明に示さんと企てたものであることは、法華經を說かれて後に、釋尊が金剛頂經を說かれたのであると云ふ意味を明かに示して居る處に徴して明かである。又一方から見れば、獨り法華經だけでなく、普賢金剛性悔なぞと云ふ語が用ゐられてある所から考ふるに、華嚴經と金剛頂經との思想的關係あることも暗示されてある。何れから見るも、法華經並に華嚴經の上に、金剛頂經が位して居る意味が隱顯して居る所から見れば、これ明かに唐時代の支那佛教の一乘教全盛時代を思はせらるゝのであるから、此の點から考へても本書は支那に於て作られたものと言ふの外は無いと思はれる。

次に華嚴經中に於て最も大なる役目を演じて居るものは普賢菩薩である。而して金剛頂部の諸經に於ては、金剛手菩薩が大なる役割を受持つて居るのであるが、時には普賢金剛手菩薩と稱して、金剛手菩薩は全く普賢菩薩と同一の尊格と見做され、眞言行者の心内に入りて止住し、行者をして金剛薩埵の資格を圓滿成就せしむることに成つてある。

本書に謂ゆる普賢金剛の性海とは華嚴經で明す所の毘盧遮那佛の海印三昧王と見做し得るのであるが、この海印三昧王は、大日經の法界體性三昧と同一の三昧にして、此の三昧から普現色身を流遍し、十方世界に無量無邊の分身を現じて、普く法益を一切衆生に及ぼすことに成つてある。而して此の無量の分身の顯現する第一次の三昧が、金剛頂經で明す所の三十七尊出生の儀相と見做し得るのである。此の如き點に於て金剛頂經と華嚴經とは密接な關係を有つて居る。又曇無蜜多譯の觀普賢菩薩行法經には、法華經の見寶塔品、並に普賢菩薩勸發品の意味を述べ、又釋迦牟尼を華嚴經の說の如くに、毘盧遮那佛遍一切處と稱するなぞと明してある所から見れば、法華經と華嚴經と密接關係がある計りでなく、更に又此等の兩經の要旨眼目が、金胎兩部の大經とも不離の關係にあることが窺ひ知られるのである。而も其の間に於て親疎の別を見れば、華嚴經は金剛頂經に親しく、法華

四七 唵僧賀引囉嚩日囉

此の陀羅尼は、能く所觀をして廣からしめ、復復漸く略して故の如くならしむ。

是の如くの陀羅尼は、是れ四八婆伽梵、自證の法中、甚深の方便なり。諸の學人を開きて、速に證入せしめん。若し速に此の三摩地を求めんと欲する者は、四九四威儀に於て、常に此の陀羅尼を誦せよ。念を刻し功を用ゐて、暫くも虛廢することなければ、速に驗あらざるなし。汝等、定を習ふの人は、復須らく經行の法則を知るべし。一靜處に於て、淨地を平治し、面の長さ二十五肘、兩の頭に標を竪て、頭に通じて索を繫け、纔に胸と齊ふし、竹筒を以て索を盛り、長く手に執り、其の筒は、日(光)に隨て、右に轉じ、平直に來往せよ。融心普周して、前六尺を視よ。三昧の覺に乘じて、本心を任持し、諦了分明して、忘失せしむるなかれ。但一足を下して、便ち一眞言を誦せよ。是の如くの四眞言は、初より後に至り、終りて而して復始めよ。誦念住まること勿れ。稍ゝ疲懈を覺えば、卽ち所に隨て安坐せよ。行者は應に入道の方便を知りて、深く進修すべし。心は金剛の如く、遷らず易らされ。大精進の甲冑を被り、猛利の心を作し、誓願して成得を期と爲せば、終に退轉の異なからん。雜學を以て心を惑はし、一生をして空くし過さしむる無かれ。然も法は二相なし、心言兩忘せよ。若し方便して開示せざれば、悟入するに由なし。良に以れば梵漢殊に隔たり、譯にあらざれば通じ難し、聊か指陳を蒙りて、憶するに隨て、鈔錄し、以て未悟に傳ふ。京の西明寺の五〇慧警禪師、先に撰集するあり、今再び詳補す、頗る備れりと謂ふべし。

南無稽首す、十方佛、　眞如海藏の甘露門、　三賢・十聖・應眞僧よ、　願くば威神加念の力を賜へ、　希有なり、總持禪秘の要、　能く圓明廣大の心を發す、　我今分に隨て、　略して稱揚して、法界の諸の含識に廻施す。

無畏三藏受戒懺悔文、及禪門要法　一卷（畢）

【四七】Oṃ saṃhāra-vajra.

【四八】婆伽梵(Bhagavan)世尊の義。

【四九】四威儀。行・住・坐・臥。

【五〇】慧警。初め太原府の崇福寺に居り、後に長安に移り、則天武后の歸依あり、禪學に達せる人なり。

是れ諸佛菩薩の內證の道にして、諸の二乘外道の境界にあらず。是の觀を作し已て、一切佛法、恒沙の功德は、他に由て悟らず。一を以て之を貫き、自然に通達すれば、能く[四二]一字を開て、無量の法を演說し、[四三]刹那に諸法の中に悟入して、自在無礙なり。去來起滅なく、一切は平等なり。此を行じて漸く至らば、昇進の相、久ふして自ら證知すべし。今預め說て能く究竟する所にあらず。

輸波迦羅三藏の曰く、旣に能く修習して、一を觀じて成就せんのみ。汝等、今此の心中に於て、復五種の心義あり。行者は當に知べし。一には刹那の心、謂く初心に道を見、一念相應するも、速に還た忘失し、夜の電光の如く、暫く現はれて卽ち滅す。故に刹那と云ふ。二には流注心、謂く旣に道を見已つて、念念に功を加へ、相續して絕えざること、流の奔注するが如し、故に流注と云ふ。三には甜美心、謂く功を積んで已まず、乃し虛然朗徹、身心輕泰にして、道を翫味す、故に甜美と云ふ。四には摧散心、爲く卒に精懃を起し、或は復休廢す。二つ俱に道に違するが故に、摧散と云ふ。五には明鏡心、謂く旣に散亂の心を離れ、鑒達圓明にして、一切に著なし、故に明鏡と云ふ。若し五心を了達して、此に於て自ら驗すれば、三乘の凡夫と、聖位と、自ら分別すべし。汝等行人、初て定を學修せば、應に過去諸佛の秘密方便加持修定の法を行ずべし。一體にして一切の總持門と相應す。是の故に應に須らく、此の四陀羅尼を受くべし。陀羅尼に曰く、

[四四]唵速乞叉摩二合嚩日囉二合

此の陀羅尼は、能く所觀を成就せしむ。

[四五]唵底瑟吒二合嚩日囉二合

此の陀羅尼は、能く所觀をして失なからしむ。

[四六]唵娑頗囉二合嚩日囉二合

此の陀羅尼は、能く所觀をして漸く廣からしむ。

【四二】一字。阿字・唵字等の陀羅尼を指す。

【四三】刹那(kṣaṇa) 最短時間を意味す。

【四四】Oṁ sūkṣma-vajra.

【四五】Oṁ tiṣṭha-vajra.

【四六】Oṁ sphāra-vajra.

淨心なり。名けて大圓鏡智と爲す。上は諸佛より下は[三八]蠢動に至るまで、悉く皆同等にして、增減あるなし、但し無明妄想の[三九]客塵の爲に覆はる。是の故に生死に流轉して、作佛することを得ず。行者は應に安心し靜住すべし。一切の諸境を緣する莫れ。假りに一圓明の猶ほし淨月の如くなるを想へ、身を去ること四尺、前に當て面に對して高からず、下からず。量は[四〇]一肘に同じて圓滿具足す。其の色は明朗、內外光潔にして、世に方比する無し。初は見ずと雖ども、久久に精研せば尋で、當に徹見すべきのみ。卽ち更に觀察して、漸く引いて廣からしむべし。或は四尺、是の如く倍增して乃し三千大千世界に滿たし、極て分明ならしむるに至る。將に出觀せんと欲せば、是の如く漸く略して、還た本相に同ず。初觀の時、月の如く、遍周の後は、復方圓なし。是の觀を作し已て、卽ち解脫一切蓋障三昧を證得す。此の三昧を得る者をば名けて、[四一]地前三賢と爲す。此れに依りて漸進して法界に遍周する者は、經に說く所の如く、名けて初地と爲す。初地と名くる所以は、此の法を證して昔より未だ得ざる所を、今始て得て、大歡喜を生するを以てなり。是の故に初地を名けて歡喜と曰ふ。亦解了を作すこと莫れ。卽ち此の自性清淨心は、三義を以ての故に、猶ほし月の如し、一には自性清淨の義、貪欲の垢を離るるが故に、二には清涼の義、瞋の熱惱を離るるが故に、三には光明の義、愚痴の闇を離るるが故に。又月は是れ四大の成ずる所にして、究竟じて壞し去れども、是れ月は世人共に見るを以て、取て以て喩と爲して、其れに悟入せしむ。行者久久に此の觀を作して、觀習成就すれば、延促を須ひず、唯明朗を見て更に一物なし。亦身と心とを見ず。萬法不可得にして、猶し虛空の如し。亦空の解を作す莫れ、無念を以ての故に。虛空の如しと說けども、空の想と謂ふにあらず。久久に能く熟すれば、行住坐臥、一切時處に、作意と不作意と、任運に相應して罣礙する所無けん。一切の妄想、貪・瞋・癡等の一切の煩惱は、斷除を假らずして、自然に起らず。性常に清淨なり。此れに依りて修習して、乃至、成佛せよ。唯是れ一道にして、更に別の理なし。此れは

【三八】蠢動。蠢は小蟲の類のウゴメク貌、

【三九】客塵。外部より入り込める塵芥の意。人は本より清淨なるものなれども、客塵煩惱の爲めに穢され居ると云ふ義なり。

【四〇】肘。人に依り、肘の長さは一定せず、卽ち八寸又は一尺二寸等の異說あり。

【四一】地前三賢。十住・十行・十廻向の三十心の菩薩を指す。

具に陳べ難し、我今知て廣く懺悔唯す。一たび懺悔して已後は、永く相續を斷ちて、更に起作せざるべし。唯願くば諸佛菩薩、大慈悲の力を以て、加威護念して、我が懺悔を受け、我が罪障をして速に消滅を得せしめ玉へ。と、此の內心秘密の懺悔と名け、最も微妙なり。

次に應に弘誓の願を發すべし。我れ久しく〔三四〕有流にあり、或は過去に於て、曾て菩薩行を行じ、無邊の有情を利樂し、或は禪定を修し、勤行精進して〔三五〕三業を護持せしは、所有の〔三六〕恒沙の功德、乃至佛果(を得んが爲めなり)、唯願くば諸佛諸菩薩、慈願力を與して、加威護念して、我をして斯の功德に乘じて、速に一切の三昧門と相應し、速に一切の陀羅尼と相應し、速に一切の自性清淨を得せしめ玉へ。と、是の如く廣く誓願を發して、退失せざらしめば、速に成就を得ん。

次に應に調氣を學すべし。調氣とは先づ想へ、出入の息は、自身の中の一一の支節筋脈より亦皆流出す。然して後に口より徐徐に出づと。又想へ、此の氣は、色白くして雪の如く、潤澤にして乳の如し、仍て須らく其の至る所の遠近を知るべし。還て復徐徐に鼻よりして入り、還た身中に遍ねからしめ、乃至筋脈に悉く周遍ならしむ。是の如くの出入を各〻三に至らしめ、此の調氣を作し、身をして患無く、冷熱風等、悉く皆安適ならしめ、然して後に定を學すべし。

輸波迦羅三藏の曰く、汝初學の人は、多く起心動念を懼れて、進求を罷息て、一印して專ら無念を守りて、以て究竟と爲す者は、卽ち增長を覓めても得可からず。

それ念に二處あり、一には不善念、二には善念なり。不善念は一向に須らく除くべし。善法正念は復滅せしめざれ、眞正の修行者は、要ず先づ正念增修し、後方に究竟清淨に至らんこと、人の射を學ぶが如く、久しく習ふて純熟し、更に心想無くして行住恒に定と倶なり。起心を怕ず畏れざれ、進學を虧くを患と爲せよ。

次に應に三摩地を修すべし。言ふ所の〔三七〕三摩地とは更に別の法無し。直に是れ一切衆生の自性清

【三四】有流。有は實有にして欲・色・無色の三界の果報の實有を意味し、流とは流類の義にして、之れに見流と欲流と有流と無明流との別なり。
【三五】三業。身業・口業・意業。
【三六】恒沙。恒河の沙の數ほど無數の意。
【三七】三摩地(samādhi) 等持又は定と譯す、心一境に止住する意。

それ三昧に入らんと欲する者、初學の時、事は諸境を絶て、緣務を屛除し、獨一に靜處し、[29]半跏にして而して坐し已て、須らく先づ[30]手印を作して、護持せよ。檀慧を以て並べ合せ竪て、その戒・忍・方・願は、右にて左を押へ、正に相叉へて、二背の上に著け、其の進・力合せ竪てて、頭相拄へ曲げ、心中を開くこと少し許、其の禪智を並べ合せ竪てて卽ち成ず。此の印を作り已りて、先づ頂上を印し、次に額上を印し、卽ち下りて右の肩を印し、次に左の肩を印し、然して後に心を印し、次に下りて右の膝を印し、次に左の膝を印す。一一の印處に於て、各〻前の陀羅尼を誦すること七遍し、乃し七處に至り訖り、然して後に頂上に於て印を散し訖らば、卽ち數珠を執りて此の陀羅尼を念誦せよ。若し能く多く誦ずれば、一百三百遍乃至三千五千も亦得、坐する時每に、誦すること一[31]洛叉を滿すれば、最も成就し易し、旣に身を加持し訖りて、然して端身にして正しく住し、前の如く半跏坐にせよ。右を以て左を押せ、全跏を結ぶべからず。全跏すれば則ち痛多し、若し心に痛境を緣すれば、卽ち定を得難し、若し先きより全跏坐を得るものは、最も妙と爲すなり。然して頭を直くして平に望むべし。眼は過開を用ゐず。又全合を用ゐず。大に開けば則ち心散じ合すれば卽ち惛沈す。外境を緣する莫れ。安坐卽ち訖り、然して運心し供養し懺悔すべし。

先づ心を標して、十方一切の諸佛、人天の會中に於て、[32]四衆の爲に說法すと觀察し、然して後に自ら己身は一一の諸佛の前に於て、三業を以て、虔恭に禮拜し讃嘆すと觀ずべし。行者は此の觀を作す時に、了了分明ならしめて、目前に對するが如く、極めて明かに見せしめ、然して後に、[33]運心して、十方世界に於て、所有の一切天上人間の上妙香・華・幡蓋・飲食・珍寶と、種種の供具とをもて、盡虛空遍法界の一切諸佛、諸大菩薩、法・報・化身・教理・行果・及び大會の衆に供養し、行者此の供養を作し已て、然して後に運心して、一一の諸佛菩薩の前に於て、殷重至誠の心を起して、發露懺悔し、我等は無始より來た今日に至るまで、煩惱は心を覆ふて、久しく生死に流れ、身口意業、

【二九】半跏。片足組みて趺坐することにして、菩薩、とも稱す。右の趾を以て左の股を壓するを通則とす。

【三〇】手印

壇―(小指)
戒―(無名指)
忍―(中指)
進―(頭、指)
禪―(大指)
以上 禪(左手)

惠―(小指)
方―(無名指)
願―(中指)
力―(頭指)
智―(大指)
以上 智(右手)

【三一】洛叉(lakṣa) 數量の名にして十萬に當る。

【三二】四衆。比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷。

【三三】運心。觀想の意。

律儀を具足す。諸の大功德は、具に說くべからず。又發心の爲に、復一陀羅尼を授く、曰く

二四 唵日月地唧多母怛波二合娜野弭。

此の陀羅尼を復三遍誦ぜよ。卽ち菩提心を發して、乃し成佛に至るまで、堅固不退なり。

又證入の爲に、復一陀羅尼を受くべし、曰く、

二五 唵唧多鉢羅二合底吠引曇迦嚕迷。

此の陀羅尼を復三遍誦ずれば、卽ち一切甚深の戒藏を得、及び一切種智を具して、速に無上菩提を證し、一切の諸佛は同聲にして、共に說かん。

又菩薩行位に入る爲に、復一陀羅尼を授けん、曰く、

二六 唵嚩日囉滿吒藍鉢囉二合避捨迷。

此の陀羅尼、若し三遍誦ずれば、卽ち一切灌頂曼荼羅位を證し、諸の秘密に於て、聽くに障礙なし、既に菩薩灌頂の位に入れば、禪門を受くるに堪へたり。

已上無漏眞法戒を授け竟んぬ。

又先づ行人を擁護せんが爲に、一陀羅尼を授く、曰く、

二七 唵戍馱戍馱。

先づ十萬遍を誦じて一切の障を除く、三業清淨にして、罪垢消滅し、魔邪嬈さず。淨白素の染色を受け易きが如く、行人も亦爾り、罪障滅し已はれば、速に三昧を證せん。

又行者の爲に一陀羅尼を授く、曰く、

二八 唵薩婆尾提娑嚩引合賀引

持誦の法は、或は前後兩箇の陀羅尼を意に隨て、一箇を誦せよ、並ぶ可らず、恐くば心を興すに專らず。

【二四】 Oṃ bodhi-cittam utpādayāmi.

【二五】 Oṁ citta-prativedham karomi.

【二六】 Oṁ vajra-maṇḍale praveśame.

【二七】 Oṁ śudha śudha.

【二八】 Oṁ sarva-vidhi-svāhā.

二、密 敎 禪

次に應に觀智密要禪定法門の大乘妙旨を受くべし。夫れ法を受けんと欲せば、此の法は深奥にして、信する者は甚だ希れなり。衆に對すべからず、機を量りて密に授けよ。仍て須らく先づ爲に種種の方便を說て、聖敎を會通して、堅信を生ぜしめ、疑網を決除し、然して開曉すべし。

〔一〇〕輸波迦羅三藏の曰く、衆生の根機は不同なり。大聖は敎を設くること亦復一にあらず。一法を偏執して互に相是非すべからず。倘ほ人天の報をも得ず、況んや、無上道をや。或は單に布施を行じて成佛を得るあり、或は唯戒を修して、亦作佛を得るあり、忍・進・禪・慧乃至八萬四千の〔一一〕塵沙の法門、一一の門より入りて、悉く成佛を得。今は且らく金剛頂經に依りて、一方便を設く。斯の修行を作して乃し成佛に至るまでに、若し此の說を聞かば、當に自ら意を淨め寂然として安住すべし。是に於て三藏は衆會の中に居して、坐を起たず、寂然不動にして、禪定に入るが如く、經ること良久ふして、方に定より起て、遍く四衆を觀じ玉ふ。四衆は合掌して頭を扣き、珍重すること再三なるのみ。

三藏久ふして乃ち言を發して曰く、前に菩薩の淨戒を受くと雖、今須らく重て、諸佛の內證無漏淸淨の法戒を受くべし。方に今禪門に入るべし。禪門に入り已て、要ず須らく此の〔一二〕陀羅尼を誦すべし。陀羅尼とは究竟至極にして、諸佛に同じ、この法に乘ずれば、一切の智海に悟入せん。是と名くるなり。此の法は秘密にして、輙く聞かしめされ。若し聞かんと欲する者は、先づ一の陀羅を眞の法戒尼を受けよ、曰く

〔一三〕唵三昧耶薩怛鑁

この陀羅尼を三遍誦せしめて、卽ち戒と及び餘の秘法とを聞かしめよ。亦能く一切菩薩の淸淨

【一〇】輸波迦羅（Śubhakara-siṁha）淨師子卽ち善無畏三藏を指す。
【一一】塵沙。無量・無邊・無數の意。
【一二】陀羅尼（Dhāraṇī）總持と譯す。阿字唵字等の單音に衆多の義を含持する意。
【一三】Oṁ samaya sattvaṁ.

し、及び衆生を利益せんと欲するが爲めの故に、應に愛語を行ずべし。衆生を饒益し、及び本願を滿ぜんと欲するが爲の故に、應に利行を修すべし、大善知識に親近し、及び善心をして、間斷無からしめんと欲するが爲の故に、應に同事を行ずべし。是の如くの四法は此れ修行處なり。

第十一十重戒門

諸佛子、菩薩戒を受持せよ、謂ゆる十重戒とは、今當に宣說すべし。至心に諦聽せよ。

一には菩提心を退すべからず、成佛を妨ぐるが故に。二とは三寶を捨て、外道を歸依すべ可らず。これ邪法の故に。三には三寶及び[一八]三乘經典を毀謗すべからず。佛性に背くが故に。四には甚深の大乘經典に於て、通解せざる處に、應に疑惑を生ずべからず。凡夫の境にあらざるが故に。五には若し衆生有て、已に菩提心を發す者は、是の如くの法を說て、菩提心を退して、[一九]二乘に趣向せしむべからず、三寶の種を斷ずるが故に。六には未だ菩提心を發さざる者は、亦是の如くの法を說て、彼をして二乘の心を發さしむべからず、本願に違ふが故に。七には小乘の人に對し、及び邪見の人の前には、輙く深妙の大乘を說くべからず、恐らくは彼れ謗を生じて、大殃を獲るが故に。八には諸の邪見等の法を發起すべからず、善根を斷ぜしむるが故に。九には外道の前に於て、自ら我は無上菩提の妙戒を具せりと說くべからず、彼をして瞋恨の心を以て、是の如くの物を求めんに、辨得すること能はずんば、菩提心を退せしめて、二り俱に損あるが故に。十には但一切衆生に於て、損害する所あり及び利益無きをば、皆作さず、及び人をして作さしめざれ、作すを見て隨喜すべからず。利他の法及び慈悲心に於て、相違背するが故に。

已上にて是れ菩薩戒を授け竟んぬ。汝等應に是の如く淸淨に受持して、虧犯せしむる勿れ。

已に三聚淨戒を受け竟んぬ。

【一八】三乘。聲聞と緣覺と菩薩との三種の人に對する法教を意味す。

【一九】二乘。聲聞と緣覺との教法を奉する一團を指す。

第七　請師門

十方一切諸佛、及び諸の菩薩・觀世音菩薩・彌勒菩薩・虚空藏菩薩・普賢菩薩・執金剛菩薩・文殊師利菩薩・金剛藏菩薩・除蓋障菩薩、及び餘の一切大菩薩衆を請し奉る。昔の本願を憶念して、道場に來降し、我等を證明し玉へ、至心に頂禮す。

弟子某甲等、釋迦牟尼佛を請し奉りて、和上と爲し、文殊師利を請し奉りて、羯磨阿闍梨と爲し、十方諸佛を請し奉りて、證戒師と爲し、一切菩薩摩訶薩を請し奉りて、同學の法侶と爲す。唯願くば諸佛諸大菩薩、慈悲の故に、我が請を哀受し玉へ、至心に頂禮す。

第八　羯磨門

諸佛子、諦聽せよ、今汝等の爲に羯磨授戒せん。正に是れ得戒の時なり。至心に羯磨の文を諦聽せよ。

十方三世の一切の諸佛、諸大菩薩、慈悲憶念し玉へ。此の諸佛子は、始て今日より乃し菩提道場に坐するに至るまで、過去・現在・未來の一切諸佛菩薩の淨戒を受學す。謂ゆる攝律儀戒・攝善法戒・饒益有情戒なり。此の三淨戒を具足して、受持せよ。是の如くして三に至る至。心に頂禮す。

第九　結戒門

諸佛子等、始て今日より乃し無上菩提を證するに至るまで、當に具足して諸佛菩薩の淨戒を受持すべし。今淨戒を受け竟んぬ。是の事、是の如く持すべし。是の如くして三に至る、至心に頂禮す。

第十　修四攝門

諸佛子等、上の如く已に菩提心を發し、菩薩戒を具し已て、然して應に四攝の法、と及び十重戒とを修すべし、虧犯すべからず。其の四攝とは、謂ゆる布施・愛語・利行・同事なり。無始の慳貪を調伏し、及び衆生を饒益せんと欲するが爲めの故に、應に布施を行ずべし。瞋恚・憍慢の煩惱を調伏

【七】羯磨阿闍梨(Karmācārya)戒場にありて、作法等を受戒者に指南するものなり。

今發す所の心は、復當に[11]我法の二相を遠離し、本覺の眞如を顯明し、平等正智を現前して、[12]善巧智を得、普賢の心を具足圓滿す。惟願くは、十方一切の諸佛、諸大菩薩、我等を證智し玉へ、至心に懺悔す。

第六　問遮難門

先づ問ふ。若し[13]七逆罪を犯すこと有る者は、師應に戒を授與すべからず。應に懺悔せしむべし。須らく七日、二七日乃至七七日、復一年に至る。懇到に懺悔して、須らく好相を現ずべし。若し好相を見ざれば、戒を受くるも亦戒を得ず。諸佛子、汝等、生れてより已來、父を殺さゞるや

輕犯ある者も、應に須らく首罪すべし。必ず隱藏せざれ、大罪の報を得ん。乃至彼等犯者も亦爾り、無犯者は無しと答ふべし。

汝等母を殺さざるや、佛身より血を出さゞるや、阿羅漢を殺さゞるや、[14]和尚を殺さゞるや、[15]阿闍梨を殺さゞるや、和合僧を破せざるや。

汝等、若し如上の七逆罪を犯さば、應に須らく衆に對して、發露懺悔すべし。覆藏することを得ざれ、必ず無間地獄に墮して、無量の苦を受けん。若し佛教に依て發露懺悔する者は、必ず重罪を消滅して、清淨身を得、佛の智慧に入て、速に無上正等菩提を證せん。若し犯さざる者は、但自ら無しと答ふべし。諸の佛子等、汝今日より乃し菩提道場に坐するに至るまで、能く精勤して、一切諸佛、諸大菩薩の最勝最上の大律儀戒を受持するや否や。これを謂ゆる三聚淨戒と名く。攝律儀戒、攝善法戒、饒益有情戒なり。汝等、今身より乃し成佛に至るまで、其中間に於て、三聚淨戒と、四弘誓願とを捨離せざれ、能く持つや否や、能くすと答へよ。

旣に菩提心を發し、菩薩戒を受く。惟願くは十方一切の諸佛　諸大菩薩、我等を證明し、我等を[16]加持して、我等をして永く不退轉ならしめよ、至心に頂禮す。

【一一】我法。我とは五蘊假和合の肉體に對する洣著を指し、法とは五蘊等の法に對する妄執を意味す。
【一二】善巧智。攝化利生の心の働きにして、菩薩の主として有する智なり。
【一三】七逆罪。前揭の父母を殺し、阿羅漢を殺す等なり。
【一四】和尙。鄔波陀耶(Upidhyāya)の訛音、親敎師の意にして、受戒の時の師を指す。
【一五】阿闍梨。具には阿闍梨耶(Ācārya)敎授と譯す。
【一六】加持。佛所護念の義、又は感應道交の意。

大菩提心に供養す。我今發心してより盡未來際まで、至心に供養し、至心に頂禮す。

第三　懺悔門

弟子某甲等、過去の〔四〕無始より已來、乃し今日に至るまで、貪・瞋・癡等の一切の煩惱、及び忿恨等の諸の隨煩惱は、身心を惱亂して、廣く一切の諸罪、身業の不善、殺盜邪婬、口業の不善、妄言、綺語・惡口・兩舌・意業の不善・貪・瞋・邪見を造し、一切の煩惱は無始より相續して、身心を纒染し、身口意をして、罪の無量を造らしめ、或は父母を殺し、〔五〕阿羅漢を殺し、佛身より血を流し、和合僧を破り、〔六〕三寶を毀謗し、衆生を打縛し、齋を破り、戒を破り、酒を飲み、肉を食ふ。是の如く等の罪、無量無邊にして憶知すべからず。今日誠心に發露〔七〕懺悔す。一たび懺して已後は、永く相續を斷て、更に敢て作さず。唯願くは十方一切の諸佛、諸大菩薩、加持護念して、能く我等の罪障をして消滅せしめ玉へ、至心に頂禮す。

第四　歸依門

弟子某甲等、始て今身より、〔八〕菩提道場に坐するに至るまで、如來無上の〔九〕三身に歸依し、方廣大乘法藏に歸依し、一切不退の菩薩僧に歸依す。唯願くは、十方一切の諸佛、諸大菩薩、我等を證知し玉へ。至心に頂禮す。

第五　發菩提心門

弟子某甲等、始て今身より乃し菩提道場に坐するに至るまで、誓願して無上の大〔一〇〕菩提心を發すべし。

衆生は無邊なれども、度せんことを誓願し、福智は無邊なれども、集めんことを誓願し、
法門は無邊なれども、學せんことを誓願し、如來は無邊なれども、仕へんことを誓願し、
佛道は無上なれども、成せんことを誓願す。

【四】無始。有史前の太古、若しくは生生世世の大昔を指す。

【五】阿羅漢(Arhan)殺賊と譯す。煩惱の賊を殺し、無垢清淨と成れる身を指す、その德は十方の施主供養に相應するより應供とも稱す。

【六】三寶。佛・法・僧。

【七】懺悔とは梵漢交へ擧げたる名にして、梵には懺摩(ksama)之を悔過と譯す。此の悔と梵語の懺とを併せて懺悔と稱す。過去の罪惡を悔ゆる意なり。

【八】菩提道場(Bodhi-manda)釋尊成道の場所にして、中印度摩竭陀國尼連禪河の邊にある菩提樹下金剛寶座を指す。

【九】三身。法身、報身、應身なり。

【一〇】菩提心(Bodhi-citta)。覺心の義上は覺を開きて諸佛に同ぜんことを願ひ、下は一切の群迷を救濟しやうとする慈悲を示す菩薩心を意味す。

無畏三藏禪要

一、受戒懺悔

中天竺、摩伽陀國、王舍城、那爛陀、竹林寺の三藏沙門、諱は輸波迦羅、唐に善無畏と言ふ。刹利種にして高貴の族なり。嵩岳會善寺の大德禪師敬賢和上と共に、佛法を對論し、略ゝ大乘の旨要を叙し、頓に衆生の心地を開て、速に道を悟らしむ。及び菩薩戒を受くる羯磨儀軌あり、之を序すること左の如し。

それ大乘の法に入らんと欲する者は、先づ須らく、無上菩提心を發して、大菩薩の戒を受け、身器清淨にして、然して後に法を受くべし。略して十一門の分別を作す。

第一發心門、第二供養門、第三懺悔門、第四歸依門、第五發菩提心門、第六問遮難門、第七請師門、第八羯磨門、第九結戒門、第十修四攝門、第十一十重戒門

第一　發心門

弟子某甲等、十方一切の諸佛、諸大菩薩に歸命し、大菩提心を大導師と爲さん。能く我等をして、諸の惡趣を離れしめ、能く人天に大　涅槃の路を示さん。是の故に我今至心に頂禮す。

第二　供養門

次に應に(弟子に)敎て運心して、　遍く十方諸佛と、及び無邊の世界の微塵刹界の恒沙の諸佛菩薩を想はしめ、　(弟子)自身は一一の佛前に於て頂禮し、讃歎し供養すと想はしめよ。

弟子某甲等、十方世界の所有一切最勝上妙の香華・旛蓋・種種の勝事をもて、諸佛及び諸菩薩の

【一】無畏(637-735 A.D.)梵に戍婆揭羅僧訶(Śubhakarasiṃha)淨師子と譯し、義譯して善無畏と云ふ。唐の開元四年に支那長安に來り、開元二十三年に寂す。壽九十九歲。

【二】敬賢。傳明かならざるも普寂禪師等と同門の人にして北京禪に屬するならん。

【三】涅槃(nirvāṇa)寂滅又は圓寂と譯す。總じて煩惱なき意、之れに有餘と無餘との二類あり。有餘とは煩惱を斷盡したるも五蘊假和合の肉身の尙ほ生存する意、無餘とは灰身滅智と稱し、煩惱なきのみならず、身心悉く都滅する意なり。

歸信を受けた教界の一偉人で有つたと思はれる。この禪師の傳記が管見の吾人には明かで無いが、北宗禪の系統を引ける普寂禪師と同時代、若しくは同門の人ではなからうかと思はれる。之れに依て無畏三藏に、北宗禪との交渉が有つたことが窺ひ知られるのである。加之、一行禪師は普寂禪師を師と仰げる北宗禪の正著である。又本書の末尾に京の西明寺の慧警禪師が先に撰集すとあるから、本書が禪宗系の學者に依つて、先づ筆を下され、其れを後に補遺したものが本書である。その後に補遺した人が果して誰れで有らうかが、問題であるが、余は一行禪師が卽ち其人ではあるまいかと想像して居る。禪師は善無畏三藏に就て、大日經の講傳を受けられた計りでなく、金剛智三藏に就ても受法して居られ、不空三藏とは、殆んど同門の間柄であつたのであるから、禪師が金胎兩部に通曉して居られたことは、茲に贅言を費す必要は無い程である。禪師は天台の三大部に明かであつただけでなく、普寂禪師を師として北宗禪にも造詣の深い人であつたのである。此等の諸點から推して、本書を完成されたのは、一行禪師であらうと吾人は想像して居るのである。

昭和六年八月廿八日

譯者　神林隆淨　識

るのである。

而して其の本尊とは何ぞやと言はば、之を一面からは、十方國土の諸佛・諸菩薩・諸天善神と見做し得る側も充分に認め得られるのであるが、眞言密教の正統の解釋としては、かく客觀的の他方來の諸尊を以て眞實の本尊と認めては居ない。密教の正意からは、行者自心本具の淨菩提心の德相を以て本尊と見做して居る。眞言に多種多様あることは、一同の本尊に多様の誓願がある場合もあり、其の誓願の異るに依つて、各々の本尊の存在の意義を明にして居る場合もある。之を要する、に其の多種多様の本尊は、悉く行者本具の淨菩提心の諸德の具體的顯現と見做されるのである。隨て本尊の存在は、其の眞言と誓願と印契卽ち三昧耶形とに依て知り得るのであるが、而も其は自己淨菩提心の德の具體化に外らず、やがては自己の淨菩提心中に其の影を沒し去るものである。本尊と云ふも、つまりは淨菩提心の發現に外ならないと云ふことに歸着して來るから、客觀界に事實存在して居るものとは見做して居ないことが明かである。かく見來る時に、眞言の持戒・持明・發菩提心の三者は、密接不離の關係を有するものであることが、略ゝ讀者に瞭解され得ることゝ信ずる。

次に密教の禪觀は、大日經並に金剛頂經に明されてあるから、本書の特質とは言はれないのであるが、而も禪觀の用意に至つては、餘經に於て曾て示されて無い微細な注意が本書に於て始めて示されてゐることが明に見受けられるのである。想ふに此は密教獨特の禪法と云ふよりは、寧ろ密教禪が天台禪若しくは北宗禪に影響された部分と見做すのが、至當な見方ではあるまいかと思はれる。阿字觀は大日經に於て說き明かされ、唵字觀は守護國界主陀羅陀尼經に於て、五相成身觀は金剛頂經並に心地觀經等に於て示されてあるから、眞言行が單に眞言念誦だけでなく、禪觀を修することは、固より行はれて居る事實である。而して禪觀と持明とは、密教の別行ではなく、此の二者は常に平行して行ずることに成つてある、時に持明から禪觀に入る場合もあり、又之れに反して禪觀から持明に進み入ることもあるが、二者相俱ふことが必要條件と成つて居る。かくの如く禪觀は密行と密接な關係を持つて居るものであるから密教禪として確に一特定のものが存しては居るのであるが、本書に書されてある所密教本來のものとは稍ゝ異つた思想の要素が汲み取られて居る樣に思はれる。

次に本書の編輯者は何人であるか、今の所では明言し難いのであるが、無善畏三藏が嵩岳の會善寺の大德禪師敬賢と佛法を對論したと、本書に明記してあるから、敬賢禪師は當時に於て可なり朝野の

無畏三藏禪要解題

本書は一受戒懺悔と、二密教禪との二つの部分から成つてある。其の中、一受戒懺悔は、不空三藏譯の受菩提心戒儀と大差は無いと言つても宜いが、二密教禪に至ては、本書の特徴が充分に表はれて居ると見做すことが出來やう。

眞言密行と受戒とは、極て密接な關係を持つて居る。眞言密行に於て入壇灌頂が必要條件と成つて居ることは、玆に深く言ふまでも無い。入壇前に三昧耶戒を受くることに成つてある。此の三昧耶戒は、通佛教の受戒と、密教獨特の作法との加味されたもので、此の三昧耶戒作法に於て、密教の入壇受法が、如何に意味深甚のものであるかゞ想像し得らるゝのである。而して今の受戒懺悔は三昧耶戒の式文の基本と成つて居る。三昧耶戒の式文の標準となつて居るものは弘法大師の祕密三昧耶佛戒儀一卷であるが、そは今の受戒懺悔を敷衍したものと見ることが出來る。

眞言密行は、持戒と持明と發菩提心との三つは缺く可らざるものと成つて居る中にも持戒は佛性三昧耶戒であつて、行・住・坐・臥の些末の事柄に就いて、嚴重に說いて居るのではなく、佛性そのものゝ發動を主眼として居る。通佛教の謂ゆる佛性を、密教では淨菩提心と呼ぶことに成つて居り、淨菩提心を無視して眞言持誦を爲し、若しくは三密の妙行を修しても、其は眞言妙行とは成り得ない。苟も眞言妙行の條件に當て篏め得る爲めには、眞言の句義よりも印契よりも、行者自身が先づ以て淨菩提心に安住して居ることが、最大の要件と成つて居る。謂ゆる淨菩提心に安住するとは、佛性三昧耶戒を嚴守し、行者の起心動念は、佛性三昧耶戒から發現して來るまでに成らなくてはならない。此の佛性三昧耶戒を嚴守することに依り、本有の佛性である自性淸淨心、が自ら發動して來るのである。此の自性淸淨心の發動を眞言密教に於ては、發菩提心と稱して居る。

次に持明は眞言密行の極めて必要な部分に屬して居るのであるが、その明とは明呪若しくは眞言、又は陀羅尼と稱せられてある。而して其の眞言には常に必ず本尊を豫想し、本尊の眞實言を眞言と稱して居るのであつて、行者は其の本尊の眞言を口誦し、其の本尊の誓願を心に念じ、其の本尊の三昧耶形、卽ち印契を身に持することに依りて、始めて其の本尊の加持護念を得、凡夫の肉身のまゝで本尊の力用を發し得るものと信じられて居

り、僧に歸依し竟り、今より已後、更に二乘外道に歸依せず。唯願くは十方一切の諸佛、我等を證知し玉へ、至心に頂禮す。

弟子某甲等、始て今身より乃し菩提道場に坐するに至るまで、その中間に於て、誓て無上菩提心を發さん。

衆生は無邊なれども、度せんことを誓願し　福智は無邊なれども、集めんことを誓願し、

法門は無邊なれども、學せんことを誓願し、　如來は無邊なれども、事へんことを誓願し、

菩提は無上なれども、成ぜんことを誓願す。

今發す所の心は、復當に我法の二相を遠離して、本覺眞如を顯明し、平等鏡智に現前し、善巧智を得、普賢の心を具足圓滿すべし。唯願くは十方一切の諸佛、諸大菩薩、我等を證知し玉へ、至心に頂禮す。南無東方阿閦佛・南無南方寶生佛・南無西方阿彌陀佛・南無北方不空成就佛・南無清淨法身毘盧遮那佛。

受菩提心戒儀一卷（畢）

【三】二乘。聲聞乘と緣覺乘となり。これ等は自度自利を主とするが故に、大乘の菩薩は之を卑下するなり。

今發す所の[一七]覺心は、諸の性相と[一八]蘊と界と及び處等と、能取・所取の執とを遠離す。
諸法は悉く無我なり　平等にして虚空の如し、自心は本より不生なり、空性圓寂の故に、諸佛と菩薩の、大菩提心を發すが如く、我今是の如く發す。是の故に至心に禮す。

次に受菩提心戒の眞言を誦じて曰く、

[一九]唵冒地唧多母怛波二合那野引彌。

最上乘教にて、菩提心を發す戒の懺悔の文、

弟子某甲等、十方の一切諸佛、諸大菩薩に歸命し、大菩提心を大導師と爲して、能く我等をして、諸の惡趣を離れしめ、能く人天に大涅槃に入るを示す。是の故に我今至心に頂禮す。

弟子某甲等、十方世界の所有一切の最勝上妙の香・花・旛・蓋、種種の供養を、一切の諸佛菩薩に奉獻し、至心に頂禮す。

弟子某甲等、過去の無始より已來、乃し今日に至るまで、貪瞋癡等の種種の煩惱、及び忿恨等の諸の隨煩惱は、身心を惱亂して、廣く一切身業の不善、殺盜邪婬、口業の不善、妄言・綺語・惡口・兩舌・意業の不善、貪・瞋・邪見を作し、種種の煩惱、無始より相續して、其の心に纒染し、身口意をして罪の無量を造らしめ、或は父母を殺し、阿羅漢を殺し、佛身より血を出し、和合僧を破り、三寶を毀謗し、衆生を打縛し、齋を破り戒を破り、酒を飲み、肉を食ひ、及び[二〇]五辛を食す。是の如く等の罪、無量無邊にして、憶知すべからず。今日誠心もて、發露懺悔す。一たび懺悔して已後は、永く相續を斷て、更に敢て造らず。唯願くば十方一切の諸佛、諸大菩薩、加持護念して、能く我等の罪障をして銷滅せしめ玉へ。

弟子某甲等、今身より乃し菩提道場に坐するに至るまで、其の中間に於て、如來無上の三身に歸依し、方廣大乘の法藏に歸依し、一切不退の菩薩僧に歸依し、佛に歸依し竟り、法に歸依し竟

【一七】覺心。卽ち菩提心なり。本有佛性の發動を意味す。

【一八】蘊、界、處。五蘊(色・受・想・行・識)十二處とは六根(眼・耳・鼻・舌・身・意)六境(色・聲・香・味・觸・法)となり。十八界とは六根、六境、六識(眼・耳・鼻・舌・身・意)なり。

【一九】Om bodhi-cittam utpādayāmi.

【二〇】五辛。韮、薤、葱、蒜、薑。

す。自ら作し他をして作さしめ、見聞し及び隨喜す。

復[八]勝義諦に依る眞實微妙の理は、聖慧眼をもて觀察するに、前後中の三際に、彼れ皆な[九]無所得なり。自心に分別を造して虚妄不實の故に、[一〇]慧の方便を爲せば、平等にして虚空の如し、我悉く皆懺悔して、誓て敢て覆藏せず。今懺より已後、永く斷じて復作さず。乃し成正覺に至るまで、終に更に違犯せず。唯願くは十方の佛一切の菩薩衆我、を哀愍し加護して、我が罪障をして滅せしめよ。この故に至心に禮す。

懺悔滅罪の眞言に曰く、

[一一]唵薩嚩跛波捺引賀曩嚩日囉二引合野娑嚩二合引賀引。

次に當に三歸依を受くべし

弟子某甲等、今日より以往、諸の如來の[一二]五智[一三]三身佛に歸命す。金剛乘の自性眞如法に歸命す。[一四]不退轉の大悲菩薩僧に歸命す。三寶に歸命し竟りて、終に更に自利邪見の道に歸依せず。我今至心に禮す。

三歸依の眞言に曰く、

[一五]唵歩引欠。

弟子某甲等、一切の佛菩薩、今日より以往、乃し成正覺に至るまで、誓て菩提心を發さん。

[一六]有情は無邊なれども、度せんことを誓願し、福智は無邊なれども、集めんことを誓願し、佛法は無邊なれども、學せんことを誓願し、如來は無邊なれども、事へんことを誓願し、菩提は無上なれども、成ぜんことを誓願す。

【八】勝義諦。眞諦若しくは第一義諦なぞといふ。世俗諦に對するの稱なり。

【九】無所得　妄執戲着なき意。

【一〇】慧方便　智慧を種種に働かす意。

【一一】Oṁ sarva-pāpa-daha-naṃ vajrāya svāhā.

【一二】五智。大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智、法界體性智。

【一三】三身　法身、報身、應身。

【一四】不退轉。聖位より退轉せざる意にして、十地中の第八地以上の菩薩を指す。

【一五】Oṁ bhūḥ khaṃ.

【一六】有情以下。之を五大願と稱す。通佛教に於ては、此の中の福智の一願を除きたる四弘誓願を說く。

受菩提心戒儀

開府儀同特進試鴻臚卿肅國公食邑三千戸賜紫贈司空
謚大鑒正號大廣智大興善寺三藏沙門不空　奉詔譯

弟子某甲等、虚空法界に遍き十方の諸如來と、[一]瑜伽總持教と、諸大菩薩衆とに、稽首し歸命禮す。及び菩提心を禮し、能く福智聚を滿じて無上覺を得せし玉へ、是の故に稽首禮す。

禮佛の眞言に曰く、

[二]唵薩嚩怛他孽多引跛娜滿那喃迦嚧彌。

次に應に運心供養すべし。

弟子某甲等、十方一切[三]刹の所有る諸の供養、花鬘・燈・塗香・飲食・幢幡・蓋を、誠心もて我は諸佛大菩薩と及び諸の賢聖等に奉獻し、我今至心に禮す。

普供養虚空藏の眞言に曰く、

[四]唵誐誐曩引三婆嚩嚩日羅二合斛

次に應に懺悔すべし。

弟子某甲等、今一切佛と諸大菩薩衆に對して、過去世の無始流轉の中より、乃し今日に至るまで、愚にして[五]眞如性に迷ひ、虚妄分別を起して、貪瞋癡不善の三業の諸[六]煩惱と、及び隨煩惱とを以て、他勝の罪と、及び餘の罪愆等とを違犯し、佛法僧を毀謗し、三寶物を侵奪し、廣く[七]無間罪を作し、無量無邊劫に數を憶知すべから

【一】瑜伽總持　瑜伽(yoga)は金剛頂經、總持は大日經なり。

【二】Oṁ sarva-tathāgata-pāda-vandanaṃ karomi

【三】刹。具には刹多羅(kṣetra)國土の義にして、一佛所化の領分を指す。

【四】Oṁ gagana-saṃbhava-vajra hoḥ.

【五】眞如性。佛性若しくは淨菩提心を指す。

【六】隨煩惱。本煩惱に隨逐して起る煩惱の意。煩惱とは身心を惱亂する無明妄想を指す。

【七】無間罪。無間地獄に落在するに相當する罪過の意。

受菩提心戒儀解題

眞言密教に入門する者は、先づ以て菩提心戒を受くるのが常規と成つてある。而して入壇受法の前行として三昧耶戒を受くることに成つてあるが、此の三昧耶戒とは卽ち此の菩提心戒を受くることである。

今の受菩提心戒儀は普通一般に行はれて居る三昧耶戒壇に於て、大阿闍梨が受者に對して授くる式文の基本と成つて居るもので、眞言行者に取り、必修の聖典である。

弘法大師の祕密三昧耶佛戒儀は、廣說されたものであり、現に傳流に於て行はれて居る灌頂三卷式中の傳法灌頂三昧耶戒作法に於ても、今の文が引用されて、その重要の部分を占めて居る。

次に受菩提心戒儀は、金胎兩部中何れに屬するものであるかと云ふ疑問も起る可きであるが、東密に於ては、傳法灌頂の場合に、金胎兩部は初金後胎、若しくは初胎後金なぞの異りは有るけれども、相前後して授法することに成つて居るだけで、兩部各〻別に三昧耶戒壇に受者を引入することは無いのであるから、三昧耶戒としては、金剛界若しくは胎藏界の區別は無いのである。隨つて今の受菩提心戒儀には、金剛界若しくは胎藏法の特徵が顯著に表はれて居ない。

通佛教の戒文と異る所は、禮佛の眞言、普供養虛空藏眞言、懺悔滅罪の眞言、三歸依の眞言、受菩提心戒の眞言と及び五大願とが存在して居ることが殊に目立てあると思はれる。

傳教大師は、我が日本國に於て大乘圓頓戒を唱導せられた第一人者であるが、その著授菩薩儀には、此等の部分が悉く除かれてあることに徴しても、此等を以て密教的戒相の特色と見做し得ると思はれる。

昭和六年八月廿五日

譯者　神林隆淨　識

目次

密教部 三

神林隆淨譯

國譯一切經

大東出版社藏版